

福井県埋蔵文化財調査報告 第160集

鷺塚遺跡

— 県営かんがい排水事業河合春近用水東地区に伴う調査 —

2 0 1 6

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、県営かんがい排水事業河合春近用水東地区に伴い、平成24年度に発掘調査を実施した、福井市川合鷺塚町に所在する鷺塚遺跡の調査成果を取りまとめたものです。

九頭竜川下流域の平野部は、本県を代表する穀倉地帯であり、この事業は国営の九頭竜川下流土地改良事業と連動して、開水路をパイプライン化し、配水管理を再編することにより、農業用水の安定供給と、基盤整備に基づく農業経営の近代化と営農の合理化を図ることを目的としています。

今回の調査では、主に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落遺跡を検出しました。特に弥生時代中期では墓域を確認し、平野部における造墓活動の良好な例が確認できました。また、墓群を構成する方形周溝墓の一部では、埋葬施設も確認され、貴重な事例となりました。

今後、この度の発掘調査の成果が各方面で広く活用され、文化財に対する理解をより一層深めていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係機関をはじめ、多くの皆様から多大なご協力とご支援を賜りましたこと、深くお礼申し上げます。

平成28年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 工 藤 俊 樹

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、県営かんがい排水事業 河合春近用水東地区 に伴い、平成24年度に実施した^{おしづか}鷲塚遺跡(福井県福井市川合鷲塚町所在)の発掘調査報告書である。
- 2 鷲塚遺跡の調査は、福井農林総合事務所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、主任野路昌嗣、嘱託職員藤本康司(5・6月)、堀口悟史(7月～9月)が担当した。
- 3 発掘調査は、平成24年5月15日から同年9月28日まで実施した。出土遺物の整理作業は平成25年4月1日から平成28年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター花野谷分室にて実施した。
- 4 本書の編集は野路があたり、山本孝一、田中祐二が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。
野路 第1章～第5章1節・第6章 山本 第5章第1節縄文土器 田中 第5章第2節
- 5 第1～4章の挿図および遺構の図版作成は杉田曜、野路が行った。遺物の図化・図版作成は縄文土器を山本が、石器を田中が行い、それ以外を木村茉莉、野路が行った。遺構の写真撮影と図版作成は野路が、縄文土器の写真撮影・図版作成は山本が、それ以外の遺物写真撮影は野路が行ない、遺物写真図版作成は杉田、野路が行った。
- 6 石器・石製品の石質については、福井県立恐竜博物館 後藤道治氏および佐野晋一氏のご教示を得た。
- 7 鷲塚遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 8 本書に掲載した遺構図は、アジア航測株式会社^{アジヤコウソク}に委託し作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は、航空測量時に撮影したものである。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は世界測地系第VI系に基づく。
- 10 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 本書で用いた遺構の略記号は、次のとおりである。
方形周溝墓：ST、竪穴建物：SI、掘立柱建物：SB、土坑：SK、溝：SD、柱穴・小穴：SP、不明遺構：SX
- 12 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々および機関のご協力やご助言を頂いた(順不同、敬称略)。
赤沢徳明、川合鷲塚町内会、河合公民館
- 13 発掘調査には、地元の方々の参加、ご協力を得た。遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺跡の概要	7
第1節 層序	7
第2節 各調査区の概要	7
第4章 遺構	13
第1節 1区の遺構	13
第2節 2区の遺構	25
第3節 3区の遺構	32
第4節 4区の遺構	32
第5節 工事立会調査の遺構	37
第5章 遺物	41
第1節 土器	41
第2節 石器・石製品	77
第6章 まとめ	87
第1節 各調査区のとまとめ	87
第2節 弥生時代中期の土器について	88

写真図版目次

- 図版第1 遺跡 (1) 遺跡近景 (2) 遺跡近景
図版第2 遺構 (1) 1区全景 (2) 1区全景
(3) ST 1 (4) SK13 土器出土状況
(5) SK14
図版第3 遺構 (1) ST 2 (2) 土器出土状況
(3) SD22 (4) ST3
(5) SD23 出土土器
図版第4 遺構 (1) ST 4 (2) SK26
(3) SK26 土器出土状況 (4) SK25
(5) SK29
図版第5 遺構 (1) SK 1 (2) SK 2 (3) SK 5
(4) SK 5 出土土器 (5) SK 8
(6) SK 8 出土土器
図版第6 遺構 (1) SK 4
(2) SK18・SD24 土器出土状況
(3) SK11 (4) SK11 出土土器
(5) SK9 (6) SK20 (7) SK23
図版第7 遺構 (1) SK30 (2) SK38
(3) SK38 完掘状況 (4) SK32・33
(5) SK32 土器出土状況
(6) SK33 土器出土状況 (7) SK37
図版第8 遺構 (1) SD 4 (2) SD26
(3) SD26 土器出土状況 (4) SD29
(5) SD29 土器出土状況
(6) SD29 土器出土状況
図版第9 遺構 (1) SD30 (2) SD30 土器出土状況
(3) SD30 出土土器
(4) SD30 出土土器
(5) SD30 出土土器 (6) SP60
図版第10 遺構 (1) 2区全景 (2) SB 2 (3) SI 1
図版第11 遺構 (1) SB 1 (2) SK41・42 (3) SK46
(4) SK44 (5) SK47
図版第12 遺構 (1) SK48 (2) SK55 (3) SD45
(4) SD45 出土土器
(5) SD45 出土土器
(6) SD45 出土土器 (7) SD48
図版第13 遺構 (1) 3区全景 (2) SD57
(3) SD62・63 (4) SD60
(5) SD58・59 (6) SD64
図版第14 遺構 (1) 4区全景 (2) SD66 (3) SK75
(4) SK75 出土土器 (5) SK83
図版第15 遺構 (1) SK78 (2) SK79・SP114
(3) SK84 (4) SK76 (5) SD72
図版第16 遺構 (1) SK87・88 (2) SD109・110・111
(3) SP115 (4) SK91・92 (5) SK94
(6) 川跡
図版第17 遺物 土器
図版第18 遺物 土器
図版第19 遺物 土器
図版第20 遺物 土器
図版第21 遺物 土器
図版第22 遺物 土器
図版第23 遺物 土器
図版第24 遺物 土器
図版第25 遺物 土器
図版第26 遺物 土器
図版第27 遺物 土器
図版第28 遺物 縄文土器
図版第29 遺物 石器
図版第30 遺物 石器・玉製作関連遺物

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 …………… 1	第32図 ST 2 出土土器 …………… 43
第2図 グリッド配置図 …………… 2	第33図 SK17・SD22・ST 3 出土土器 …………… 44
第3図 遺跡周辺の地形図 …………… 3	第34図 ST 4・SK25・26 出土土器 …………… 45
第4図 周辺の遺跡分布図 …………… 5	第35図 SK 2・4・5・8・9・11・16 出土土器…………… 46
第5図 土層模式図 …………… 7	第36図 SK18・22・23・27・28・30 出土土器 …… 48
第6図 遺構配置図1 …………… 8	第37図 SK32 出土土器 …………… 49
第7図 遺構配置図2 …………… 9	第38図 SK33・34・37・38 出土土器…………… 50
第8図 遺構配置図3 …………… 10	第39図 SD 4・6・8・15・25・26・29 出土土器…………… 51
第9図 遺構配置図4 …………… 11	第40図 SD30 出土土器1 …………… 53
第10図 遺構配置図5 …………… 12	第41図 SD30 出土土器2 …………… 54
第11図 ST 1・SK14 …………… 14	第42図 SD30 出土土器3 …………… 55
第12図 ST 2・SD22 …………… 15	第43図 SD30 出土土器4 …………… 56
第13図 ST 3 …………… 16	第44図 SP60 出土土器 …………… 57
第14図 ST 4・SK25・SK26 …………… 17	第45図 1区遺構外出土土器 …………… 59
第15図 ST 4 西壁断面図 …………… 18	第46図 SI 1 出土土器 …………… 59
第16図 1区遺構図1 …………… 20	第47図 SK41・44・47・48・55・56・59・64 出土土器 …………… 60
第17図 1区遺構図2 …………… 21	第48図 SD45 出土土器 …………… 60
第18図 1区遺構図3 …………… 23	第49図 SD33・48・50・55 出土土器 …………… 61
第19図 1区遺構図4 …………… 24	第50図 2区川跡出土土器 …………… 61
第20図 1区遺構図5 …………… 26	第51図 2区遺構外出土土器 …………… 62
第21図 1区遺構図6 遺構外土器出土状況図…………… 27	第52図 3区出土土器 …………… 63
第22図 2区遺構図1 …………… 28	第53図 4区出土土器 …………… 63
第23図 2区遺構図2 …………… 30	第54図 工事立会調査区出土土器 …………… 64
第24図 2区遺構図3 …………… 31	第55図 縄文土器 …………… 66
第25図 3区遺構図 …………… 33	第56図 石器1 …………… 78
第26図 4区遺構図1 …………… 35	第57図 石器2 …………… 80
第27図 4区遺構図2 …………… 36	第58図 石器3・石製品 …………… 81
第28図 4区遺構図3 …………… 38	第59図 管玉製作関連遺物1 …………… 83
第29図 4区遺構図4 …………… 39	第60図 管玉製作関連遺物2 …………… 84
第30図 立会調査区 …………… 40	
第31図 ST 1・SK14 出土土器 …………… 41	

表 目 次

第 1 表	土器觀察表	67
第 2 表	縄文土器出土地点一覽表	76
第 3 表	石器・石製品遺構別出土数量表	85
第 4 表	石器・石製品觀察表	86

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

福井市北部から坂井市にかけて広がる平野は、県内有数の穀倉地帯であり、永平寺町鳴鹿大堰より取水された農業用水は、十郷用水をはじめとする水路網により各水田に供給されている。これら用水路は総じて老朽化し、維持管理費の増大など幾多の問題が顕在化した。そのため、福井農林総合事務所(以下、福井農林と略)では、北陸農政局による国営かんがい排水事業に併せ、用水路のパイプライン化など水路網の再構築を目的とした県営かんがい排水事業に着手することとなった。この事業に伴い福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、埋文センターと略)では、パイプライン埋設計画路線内に存在する遺跡の試掘調査を平成11年度から行い、平成16～18年度までに逐次発掘調査を行ってきた。

今回の調査地は福井市川合^{かわいわしづかちょう}鷺塚町に位置し、西方には川合鷺塚町集落が、東方には新興のつくし野町集落が位置する間の水田域に該当する。この地に、県営かんがい排水事業河合春近用水東地区として、パイプラインが埋設されることとなり、福井農林側より埋蔵文化財の試掘調査依頼が出された。そのため、埋文センターは平成23年7月4～6日に計画路線内で該当する鷺塚遺跡の試掘調査を実施し、その結果、遺構では溝や土坑などを、遺物では弥生時代中期の土器・石器を確認した。この結果をふまえ、2,690㎡について本格調査が必要である旨を農林側に回答し、協議の結果、平成24年5月から9月まで発掘調査を行うことで合意した(第1図)。



第1図 調査区位置図(縮尺1/6,000)

第2節 調査の経過

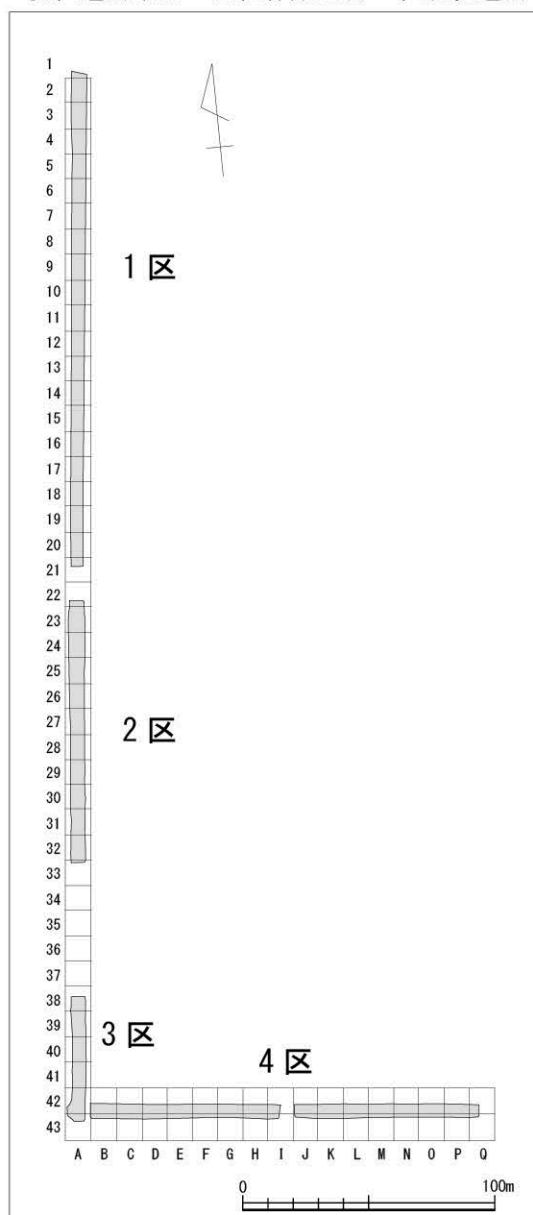
調査地の現況は農道であるが、一部、集落間を結ぶ市道と交差する箇所があり、また調査範囲外を挟み調査予定地の南端で東に折れている。そのため、調査はパイプライン埋設工事の工区と合わせ、市道から北側を1区、市道の南側から調査範囲外までを2区、南端部分を3区、南端から東側を4区と四分割し、全区が終了した後、市道部分を工事立会調査として対応した。調査にあたり、調査区内に10m×10mのグリッドを設定し、東西にA～Q列を、南北に1～43列を配した。試掘調査の結果から調査対象外となった部分もあるが、全体を通して数字を配した(第2図)。

作業準備段階としては、平成24(2012)年4月中旬から下旬に1区のアスファルトおよび表土剥ぎを行い、同年5月上旬に事務所の設置、器財の搬入を行い、5月15日から作業を開始した。作業は1区西壁際に排水溝を兼ねてトレンチを掘削し、遺構・遺物の状況を確認した。その結果、北側の遺構密度が低かったことから、1区は南側から掘削作業を開始した。5月中は主に18区から21区において包含層掘削の後、遺構掘削・図化作業を行い、畝状遺構の格子状の溝や土坑などを検出していった。6月はA17区

以北の作業を行い、方形周溝墓や土坑墓、溝などを検出していった。1区は7月5日に空中測量を行い、補足の図化作業を行い終了した。

Ⅱ区とⅢ区の表土剥ぎは6月末から随時行い、7月4日に終了した。その後、Ⅱ区から掘削作業を開始した。7月中旬から下旬は、Ⅱ区の湿地部分にトレンチを入れた他、住居址をはじめとする遺構の掘削・図化作業を行った。8月にはⅡ区の図化作業と遺構写真撮影を行った。また、調査面積の小さいⅢ区は、7月18日以降、Ⅱ区と随時並行して作業を行い、東西方向の溝を掘削し、7月25日にⅢ区の全景写真および遺構写真撮影を行った。Ⅱ区は8月6日に全景写真撮影を行い、同日にⅢ区と併せて空中測量を行った。

Ⅳ区の表土剥ぎは8月上旬から中旬にかけて行い、同月13日からⅣ区の作業を開始した。西側から順次掘削・図化作業を行い、川跡以西は遺構密度も低かったこともあり、比較的順調に作業が進み、川跡と東側の掘削に取り掛かることが出来た。東側(J区以東)でも、掘削深度の浅い遺構が多く、全景写真撮影の後、9月14日に空中測量を行った。空中測量後は、遺構写真撮影や川跡の下層確認のためトレンチを入れるなどの補足作業を行った。そして同26日から28日にかけて、器財の洗浄・搬出、プレハブの解体などを行い、現場作業を終了した後、10月25・26日に市道部分の南側半分を、11月16日に北側半分の工事立会調査を行った。



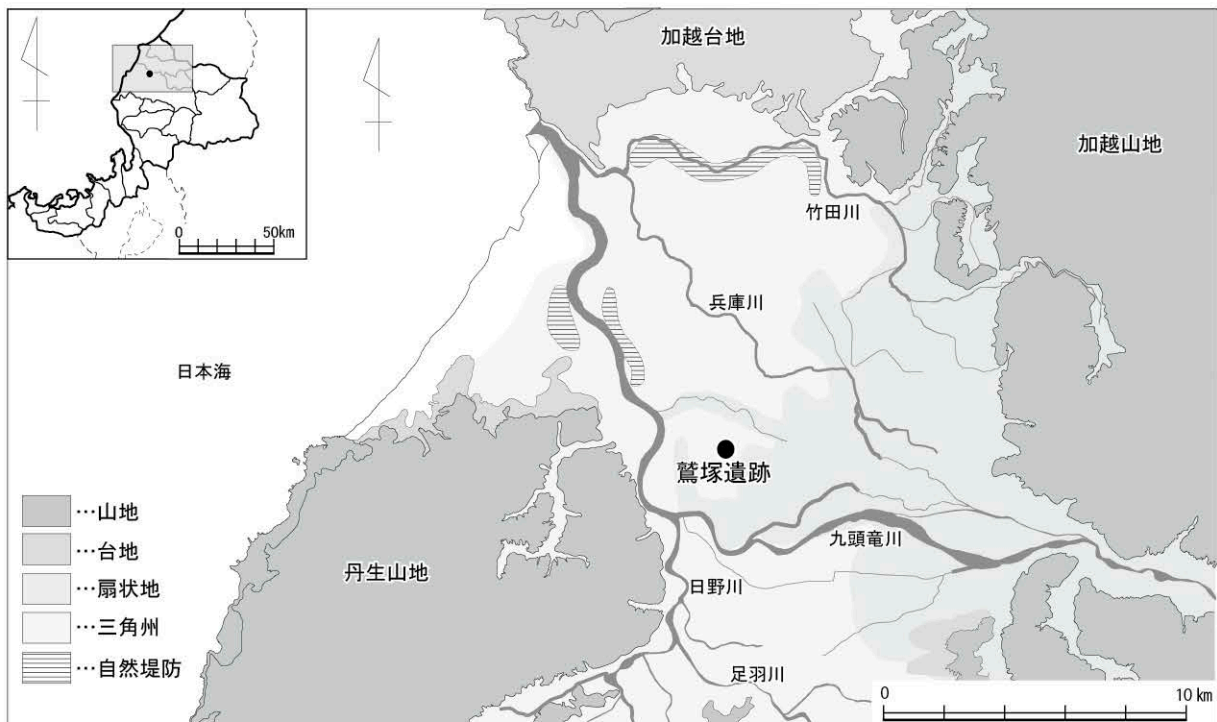
第2図 グリッド配置図 (1/3,000)

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境(第3図)

鷲塚遺跡は、福井県嶺北地方北部に広がる福井平野に位置し、標高は約5mを測る。行政区画では福井市の北端、坂井市春江町との市境近くにあたる。南方約1.8kmには、福井・岐阜県境を源とする県下最大の河川である九頭竜川が流れる。福井県の面積の約1/4を占める福井平野について概観すると、北部を加越台地、東部を加越山地と越前中央山地、南西部を丹生山地に囲まれ、南部は越前中央山地と丹生山地の間に位置する城山、経ヶ岳などの独立丘陵および文殊山により幅が狭められ、鯖江市、越前市が位置する南越盆地へと通じている。北西部は三里浜と呼ばれる砂丘を介し日本海を望む。福井平野は、もとは東西の山地間が陥没した地形であったものが、九頭竜川や日野川をはじめ、足羽川、竹田川など大小の河川が供給した河川堆積物により形成された平野である。中でも九頭竜川はその供給量が最も多く、加越山地と越前中央山地の間の志比地溝を西流した後、永平寺町鳴鹿を扇頂とする九頭竜扇状地を形成している。また、加越山地西麓には竹田川が、越前中央山地西麓には足羽川による扇状地が広がっている。九頭竜扇状地は、扇端部になると比較的傾斜が緩くなり、標高約10m以下からは低平な氾濫原を形成するようになる。その過程で九頭竜川をはじめとする諸河川は、流域に多くの自然堤防や後背湿地を形成していった。このような自然堤防上は、集落の立地には好適地であり、現集落や遺跡が多数存在している。そして平野北西部に目を向けると、九頭竜川が日野川と合流し、丹生山地にぶつかり流れを北方に変えた辺りからは、標高4～5m以下の三角州が広がる。

現在、福井平野は耕地整理や宅地化により土地の改変が著しく、旧地形の様子を窺うことは難しいが、特に九頭竜川以北の沖積地における遺跡の立地状況をみると、これまで調査されてきた集落遺跡は自然堤防上に立地するという共通要素が多く、鷲塚遺跡においても例外ではない。



第3図 遺跡周辺の地形図(縮尺1/40万・1/25万)

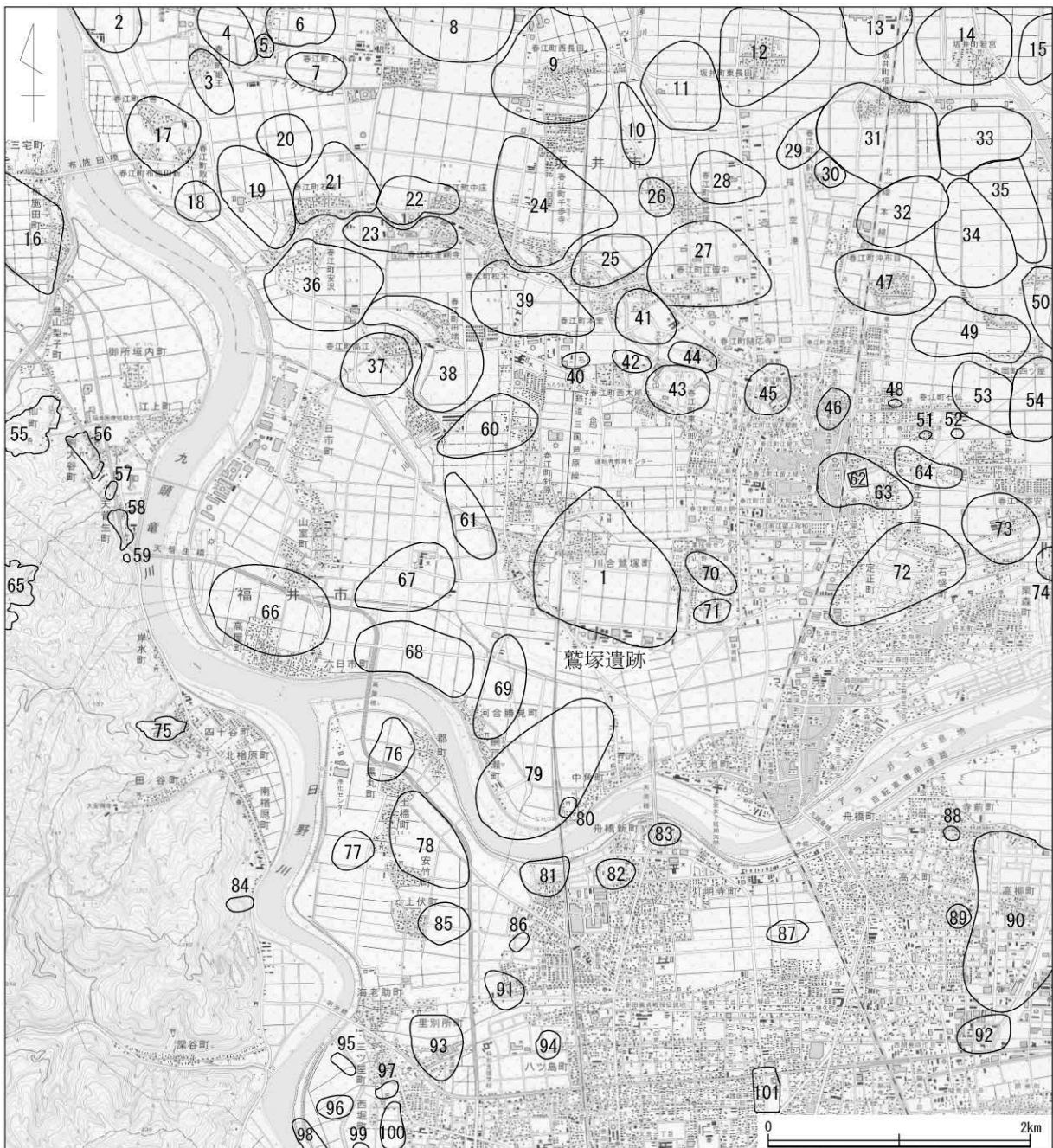
第2節 歴史的環境(第4図)

九頭竜川以北の福井平野においては、1996年以降の圃場整備に伴う農道や水路の改良工事、パイプライン敷設等に伴い、多くの遺跡が調査されてきたが、細長いトレンチ状の調査区がほとんどで、面的な調査は数少ない。ここでは鷺塚遺跡周辺の歴史的環境について概観する(第4図)。

縄文時代の遺跡は、今回の鷺塚遺跡の調査で少なからず出土した以外では、近辺においてあまり確認されていない。これは縄文海進時は浅海であったためと考えられるが、近年では地形的には高位三角州にあたる坂井市坂井町と丸岡町において、縄文中期以降の資料が増加しつつある。舟寄遺跡(34)は、比較的短期の縄文時代中期の集落である。遺構には石囲い炉を伴う竪穴住居、掘立柱建物、埋甕、捨て場遺構などがある。遺物には在地系、東海系など各系統の土器、未成品を含む多数の石鏃、異形石器の他、垂飾、管玉など石製装飾品が出土している。舟寄遺跡の北に位置する舟寄福島通遺跡(33)では晩期の埋設土器が十数基確認され、石冠、石棒、石刀のほか土版などの特殊な遺物が出土し、祭祀的な空間が存在したようである。後期以降では、春江町沖布目遺跡(47)で後期の土器が採集された。第4図の範囲外であるが、北西約10kmの九頭竜川左岸の低位三角州に位置する波寄三宅田遺跡からは、後期の土器が川跡から多く出土している。福井市高柳遺跡(90)は、平成9年度から平成18年度まで断続的に調査が行われており、東西方向の微高地上に営まれた集落である。微高地と微高地の間を縫うように川や低湿地が存在し、晩期を中心に土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、旧河川が形成した自然堤防上に立地する例が多く知られている。また中期から後期の遺跡においては玉作関連遺物を出土する遺跡が多い。若宮遺跡(14)は、縄文時代から室町時代にわたる複合遺跡である。弥生時代の遺構では中期の方形周溝墓1基、後期の平地式住居5棟の他、遺物には多量の後期の土器、玉作関係遺物が確認された。先述の舟寄福島通遺跡では後期の大型平地式住居、周溝墓の可能性もある円形の溝が確認され、玉作関係遺物から中期と後期にまたがる玉作集落であった可能性がある。鷺塚遺跡から東方約1.8kmに位置する石盛遺跡(72)は福井市と県埋文により調査され、弥生時代後期末から近世までの断続した集落跡が確認された。弥生時代末では水田跡が営まれていたようである。同じく南南西約2kmの九頭竜川右岸に位置する中角遺跡(79)は、上層に律令から中世の遺構面、下層に弥生時代の遺構面を有す複合遺跡で、平成7年度から平成16年度まで断続的に調査が行われた。弥生時代後期後半の玉作工房や、弥生時代中期および後期後半から古墳時代前期にかけて、土坑墓主体のⅠ区と周溝墓主体のⅡ区で構成される継続した墓域を確認している。菅谷烏帽子遺跡(98)は、足羽川が日野川に合流した地点から下流約300mの右岸に位置し、中期の土坑墓が確認されている。終末期の遺跡には、九頭竜川左岸の自然堤防上に位置する前述の高柳遺跡がある。高柳遺跡ではこれまでに円形周溝墓、方形周溝墓の他、四隅突出型墳丘墓などが確認されている。以上の例から、弥生時代の沖積平野における方形周溝墓の検出例は増加しつつある。

古墳時代では、東太郎丸遺跡(43)において前期の集落が確認された。舟寄福島通遺跡では前期の遺構・遺物に多量の焼土や羽口があり、鍛冶場遺構の存在が窺える。石盛遺跡では、前期と後期の集落が断続的に営まれていた。また、古墳について見てみると、平地においては先述した中角遺跡における前期前半の前方後方墳1基は、周辺集落をも含めた首長墓と考えられている。江留下遺跡(45)では前期に属する一辺約18mの方墳が1基確認されており、福井平野を東方に見晴らす位置に当たる丹生山地北東部の中腹には、剣大谷古墳群(56)、大安寺古墳(57)、法土寺遺跡(58)、漆谷遺跡(59)など、前期から後期の古墳および群集墳が築かれるようになる。



- | | | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|-----------|-------------|
| 1 鷺塚遺跡 | 18 取次遺跡 | 35 舟寄正堺遺跡 | 52 中筋高場遺跡 | 69 河合勝見遺跡 | 86 新田塚遺跡 |
| 2 定広遺跡 | 19 石塚源取遺跡 | 36 安沢遺跡 | 53 四ツ屋南遺跡 | 70 つくし野遺跡 | 87 高木砂里遺跡 |
| 3 姫王遺跡 | 20 石塚坪尻遺跡 | 37 高江遺跡 | 54 北横地石橋遺跡 | 71 天池遺跡 | 88 高柳中代遺跡 |
| 4 木部西方寺遺跡 | 21 石塚遺跡 | 38 田端遺跡 | 55 仙古墳群 | 72 石盛遺跡 | 89 高木長佐遺跡 |
| 5 上小森館 | 22 中庄遺跡 | 39 松木遺跡 | 56 剣大谷古墳群 | 73 寄安遺跡 | 90 高柳遺跡 |
| 6 下小森遺跡 | 23 金剛寺遺跡 | 40 本堂漆橋遺跡 | 57 大安寺古墳 | 74 河合寄安遺跡 | 91 新田塚三ツ屋遺跡 |
| 7 上小森遺跡 | 24 千歩寺遺跡 | 41 江留中鷺狩遺跡 | 58 法土寺遺跡 | 75 四十谷古墳群 | 92 開発遺跡 |
| 8 大牧遺跡 | 25 本堂遺跡 | 42 西太郎丸遺跡 | 59 漆谷遺跡 | 76 黒丸遺跡 | 93 里別所遺跡 |
| 9 西長田遺跡 | 26 藤鷺塚遺跡 | 43 東太郎丸遺跡 | 60 平柳遺跡 | 77 安竹遺跡 | 94 八ツ島遺跡 |
| 10 藤鷺塚古道遺跡 | 27 江留中遺跡 | 44 随応寺遺跡 | 61 針原阪塩遺跡 | 78 土橋遺跡 | 95 地藏堂遺跡 |
| 11 東長田島木遺跡 | 28 藤鷺塚東遺跡 | 45 江留下遺跡 | 62 正蓮華館 | 79 中角遺跡 | 96 三ツ屋古川遺跡 |
| 12 東長田遺跡 | 29 大針遺跡 | 46 为国遺跡 | 63 正蓮花北条路遺跡 | 80 中角館 | 97 三ツ屋遺跡 |
| 13 上新庄遺跡 | 30 福島小縄遺跡 | 47 沖布目遺跡 | 64 中筋遺跡 | 81 舟橋新遺跡 | 98 菅谷島帽子遺跡 |
| 14 若宮遺跡 | 31 福島遺跡 | 48 石仏遺跡 | 65 竜興寺跡 | 82 灯明寺遺跡 | 99 三郎丸遺跡 |
| 15 田島狐畑遺跡 | 32 沖布目北遺跡 | 49 四ツ屋舟寄遺跡 | 66 高屋遺跡 | 83 舟橋遺跡 | 100 西堀遺跡 |
| 16 西中野遺跡 | 33 舟寄福島通遺跡 | 50 北横地中才遺跡 | 67 山室遺跡 | 84 深谷古墳 | 101 大宮遺跡 |
| 17 正善遺跡 | 34 舟寄遺跡 | 51 中筋水久保遺跡 | 68 六日市遺跡 | 85 上伏遺跡 | |

第4図 周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

奈良時代および平安時代には、東大寺・興福寺をはじめとする寺院による荘園開発が行われ、坂井平野には、坂井市春江町・丸岡町域に鯖田国富荘、あわら市金津町域には桑原荘などが成立する。菅谷烏帽子遺跡一帯は東大寺領である嶋野荘の推定地であり、調査で確認された掘立柱建物は倉庫群など荘園に関連した施設の可能性がある。また、前述した江留下遺跡からは年代の確定はできないが、県下でも例の少ない嶋尾の破片が出土している。坂井市春江町域の磯部川周辺には随応寺・千歩寺・金剛寺など、「～寺」という地名はあるが、江留下遺跡の嶋尾片以外に寺院に関する資料は確認されていない。平安時代末、当地には仁和寺の荘園である河合荘が展開し、北は現在の川合鷲塚地籍から、西から南は九頭竜川まで、東は推定だが永平寺町栃原まで広がる荘園であった。

中世から近世にかけて見ると、江留下遺跡、西太郎丸遺跡(42)、東太郎丸遺跡などで多くの井戸を伴う農村集落が断続的に営まれ、中世城館である石丸城に比定される石盛遺跡では、堀や掘立柱建物、区画溝などを確認した他、城館以外にも広く集落が展開したことが判明している。中角館(80)は、もとは朝倉氏の家臣である乙部勘解由左衛門の居城であり、河合荘を統括する拠点であった。館比定地は中角遺跡Ⅰ区に近接しており、調査では館に直接関係する遺構は検出されなかったものの、中角館を中心に発展・衰退したと考えられる堀や区画溝を伴う集落が確認された。河合荘についてその後の概略を述べると、河合荘は嘉応三年(1171)に仁和寺領として成立し、南北朝期には越前国守護である斯波高経が治めたが、貞治五年(1366)に高経が失脚した後、室町幕府は天皇家領として寄進し、醍醐寺三宝院が支配した。その後、応安四年(1371)に仁和寺と醍醐寺三宝院が荘園を二分する形で治めるようになったが、応仁の乱をはじめとする争乱に乘じ、一乗谷に居を構えた朝倉氏の支配へと移っていく。しかし、天正元年(1573)に朝倉氏が滅ぶと、河合荘はその守護を失い消滅した。なお、鷲塚という地名は15世紀ごろにはすでに使われていることから、当時、農村集落が存在したことが窺われる。河合荘の名は川合、または河合として現在の地名に名残を留める。

引用・参考文献

- 福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図』
- 福井市 『福井市史通史編1 古代・中世』 1997
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999 『第14回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『第21回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『年報20』
- 坂井市 『新修坂井町史通史編』 2007
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『年報21』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『第23回福井県発掘調査報告会資料』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『年報22』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『江留下遺跡(境元町地区)』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『漆谷遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『中角遺跡1』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『年報23』

第3章 遺跡の概要

第1節 層序(第5図)

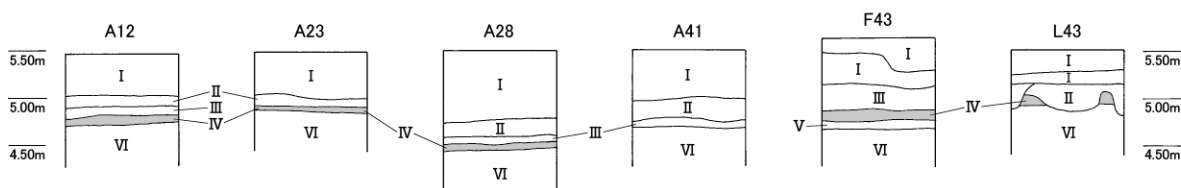
鷺塚遺跡は福井市北部の水田域に位置し、遺跡の標高は約5.5mを測る。周辺の水田面は圃場整備によってほぼ平坦に整地されているため、現状では旧地形の面影はない。調査区は幅約4～5mのL字状を呈する。以下に1区から4区の各調査区の層序および遺構・遺物の概略について述べる。

第I層は盛土および旧耕作土である。層厚は30～50cmを測る。第II層は、にぶい黄褐色～灰黄褐色土からなる鉄分を含んだやや赤みを帯びる層で、層厚は10～40cmを測る。中世以降の耕作および造成土であるが、場所によって層厚にばらつきがある。まれに断面にてII層が覆土となる幅狭い溝が散見されたが、耕作に伴うものと推定する。第III層は灰黄褐色～褐灰色土からなる層である。層厚は厚い所では20～30cmを測る。律令期の遺物を含む包含層だが、総じて遺物の出土量は極めて少なく、2区では部分的にしか残存しない。この層を覆土とする遺構は全て溝であったが、地点によっては第IV層を削平し、下層遺物が多く混入した溝もある。第IV層は暗褐色～黒褐色土からなる層である。層厚は約10cmを測る、弥生時代中期および後期の遺物を含む包含層である。3区の南側では削平のために部分的にしか残存していない。第V層は灰黄褐色～褐色土からなる層である。層厚は5～10cmを測る。第IV層と遺構確認面との漸移層である。第VI層はにぶい黄橙色からなる層で、遺構確認面である

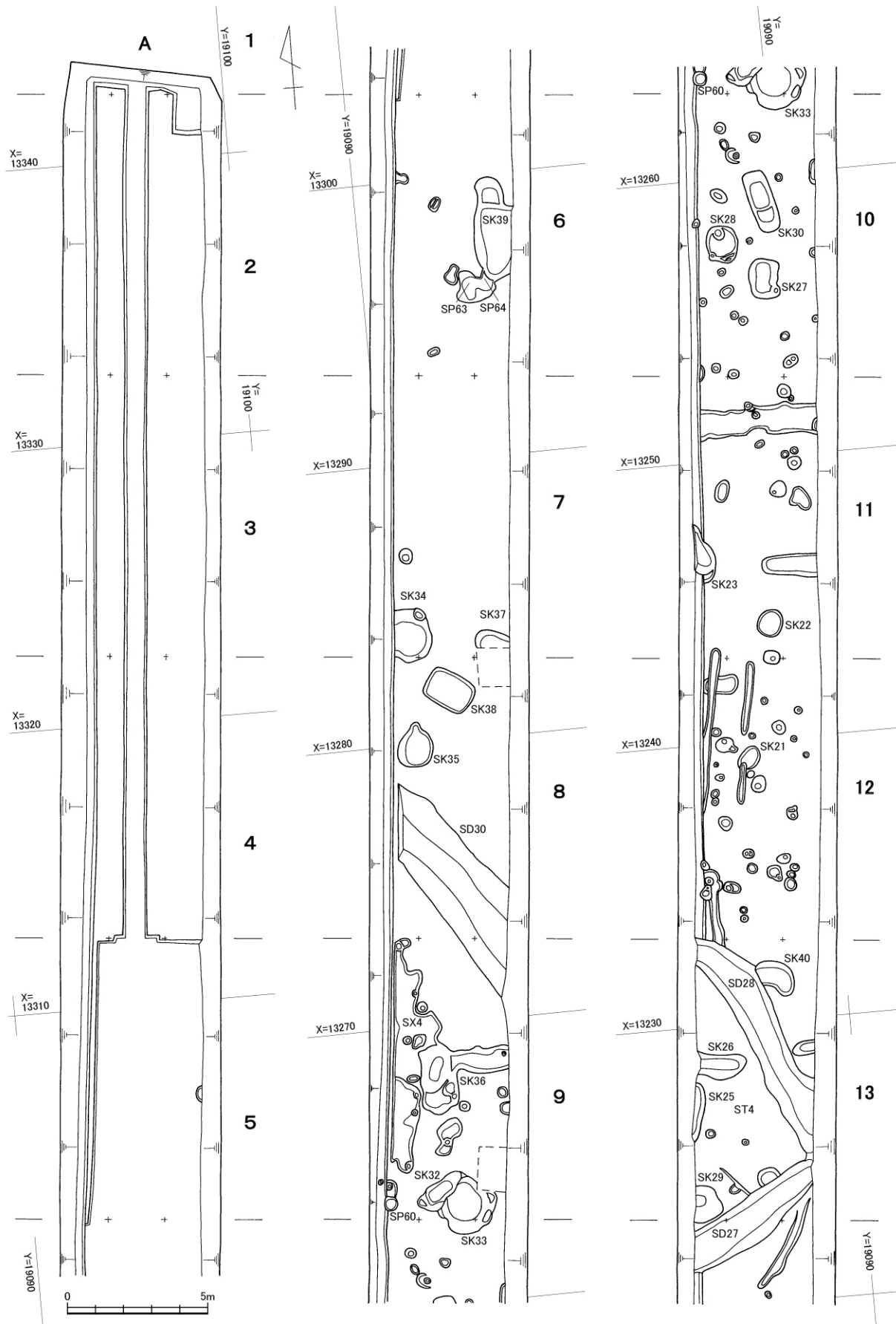
第2節 各調査区の概要

1 1区の概要

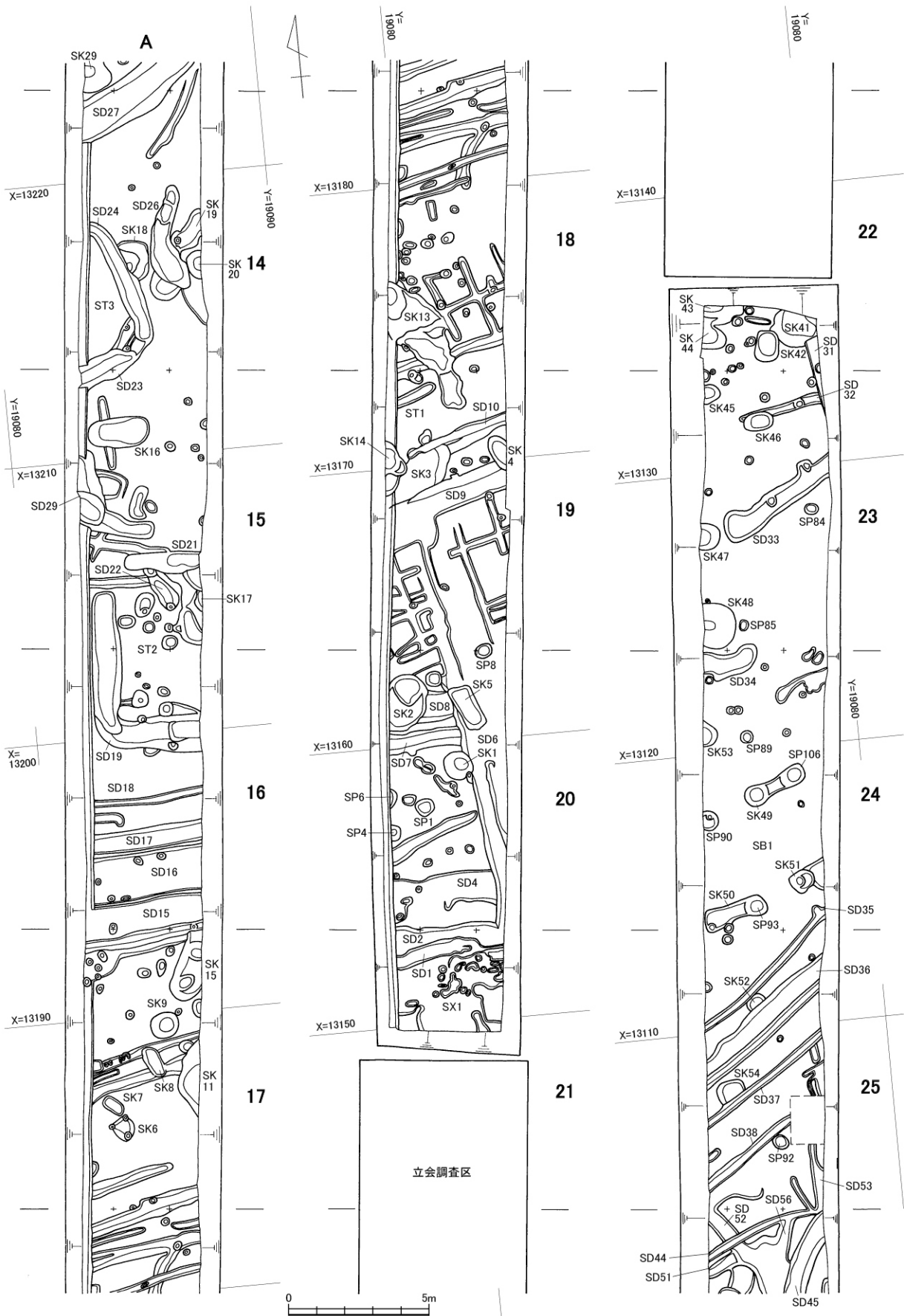
1区は東西方向に幅約4m、南北方向に長さ約200mを測る。遺構には方形周溝墓4基、土坑40基、溝30条、小穴75基、不明遺構4基がある。北側は遺構密度と調査期間の制限から、全ての範囲の掘削をしていないが、それ以外は多くの遺構を確認し得た。遺構は主に7区以南に分布する。これはSD30とした溝の南側と言え、このことから区画溝の性格を有するものと推定される。方形周溝墓は弥生時代中期に属し、調査範囲の制限から全体を把握できたものはないが、その内の1基からは埋葬施設と考える土坑を確認した。また、土坑には土坑墓と言えるものがあり、やはり弥生時代中期に属するものである。その他の時期の遺構には弥生後期の土坑や律令期の溝、時期不明の耕作痕があるが、これらは主に南側に位置する。遺物は包含層および遺構からまとまった量が出土し、多量の弥生中期の土器を中心に弥生後期から終末期の土器、および律令期の須恵器が極僅かに出土した。石器・石製品には石斧、磨石などの他に、施溝痕のある緑色凝灰岩片や玉鋸などの玉作関連遺物がある。また、遺物の分布は遺構と同様の分布状況を呈する。1区の性格としては、弥生時代中期の墓域に相当する。



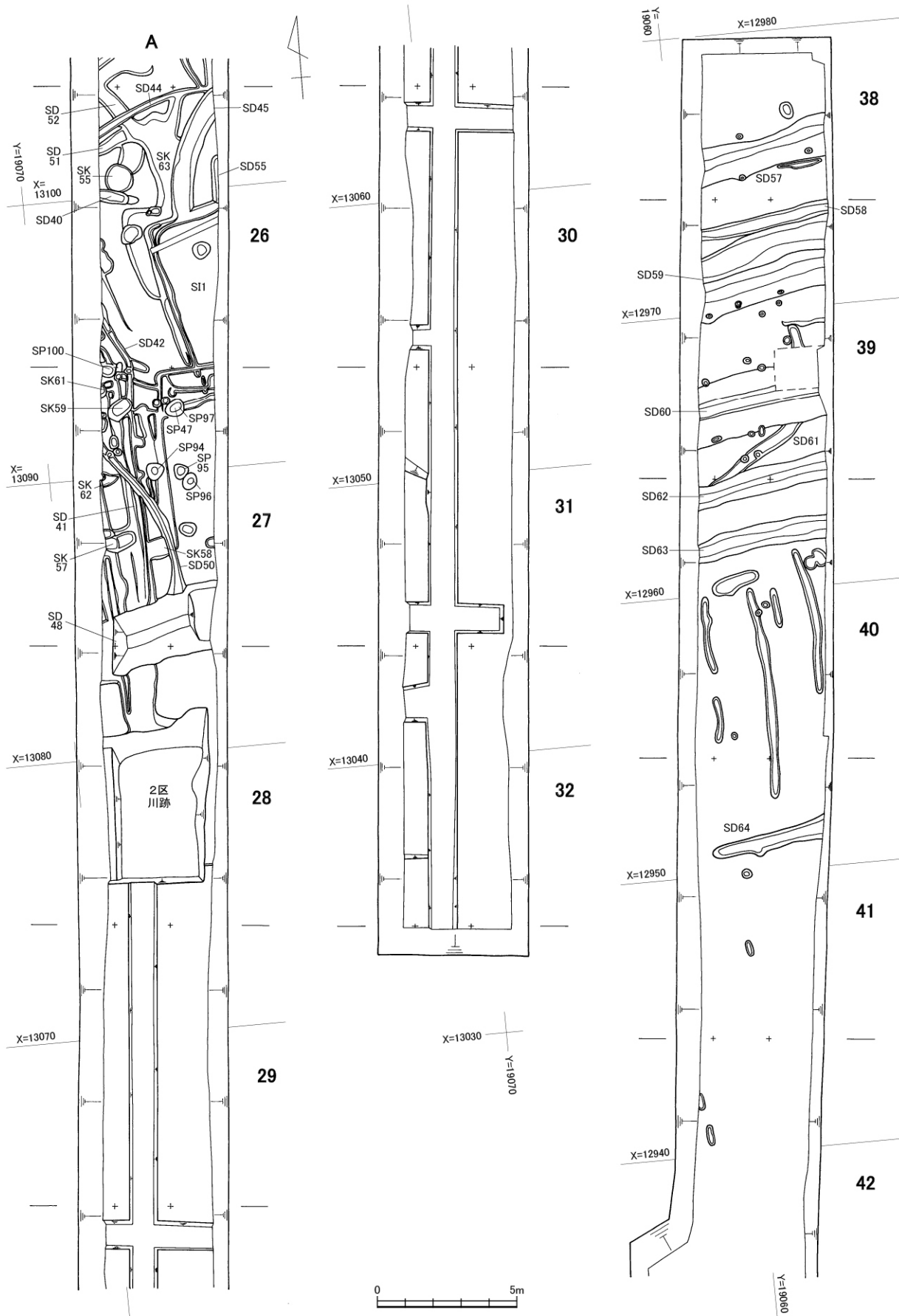
第5図 土層模式図



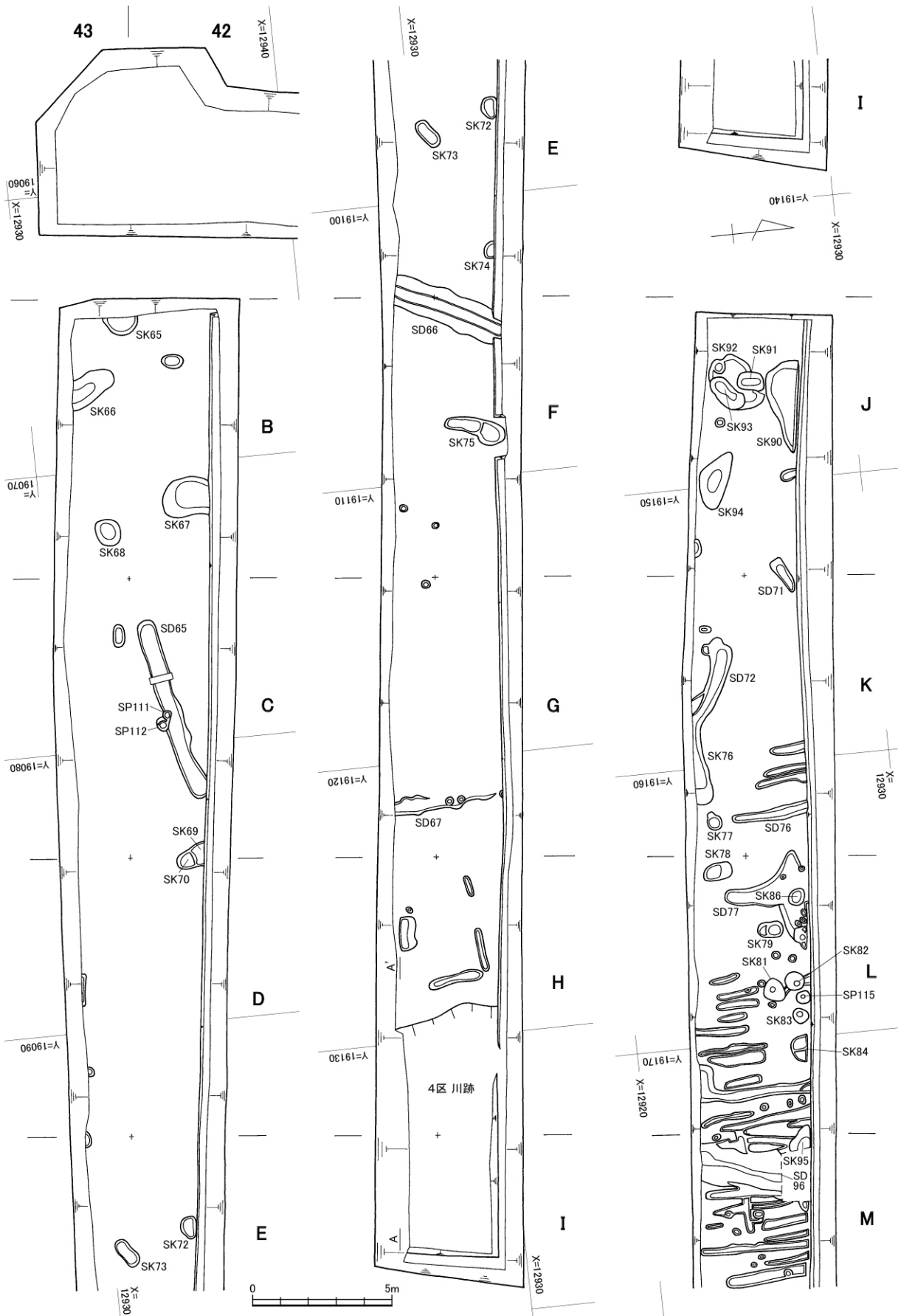
第6図 遺構配置図1 (縮尺1/200)



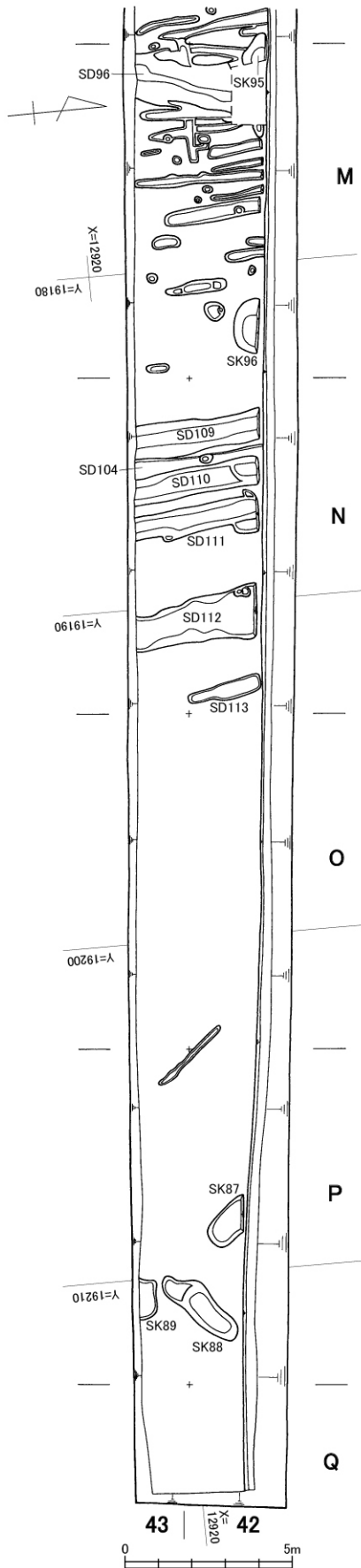
第7図 遺構配置図2 (縮尺 1/200)



第8図 遺構配置図3 (縮尺1/200)



第9図 遺構配置図4 (縮尺1/200)



第10図 遺構配置図5 (縮尺 1/200)

2 2区の概要

2区は東西方向に幅約4m、南北方向に長さ約100mを測る。遺構には竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟、柱穴列1基、土坑24基、溝26条、小穴33基があり、南側は川および湿地帯を呈しており、3区との間は調査範囲外となる。2区では部分的であるが建物を確認したことから、東西方向に広がる居住域であると考える。遺物には弥生土器、古墳時代の土師器のほか、律令期の土師器があり、石器・石製品には遺構外出土だが小型の勾玉がある。2区は、1区と主体となる時期および性格が異なり、弥生中期の土器は少なく、後期以降から古墳時代前期を中心とし、当該期の集落が展開したと推定する。

3 3区の概要

3区は東西方向に幅約4m、南北方向に長さ約40mを測る。遺構には溝8条、小穴2基があり、主に北側を中心に分布し、南側にはしみ状の耕作痕があるのみである。遺物は包含層・遺構とも、古墳時代前期の土師器が極少量出土した。これらの遺構・遺物から、当区域は集落域の中心ではないと言えよう。

4 4区の概要

4区は、中央に現代の水路を挟み、南北方向に幅約4m、東西方向に長さ約170mを測る。遺構には土坑32基、溝48条、小穴8基および川跡があり、川を境に東西で遺構密度が異なる。西側は遺構密度が小さく、浅い遺構の分布からは3区との連続性が窺えるが、東側は東端に行くにつれ密度は小さくなるものの、土坑や溝などが比較的多く存在している。遺構の中には時期不明の耕作に関わると考える浅い溝もある。遺構分布からは川跡に沿って南北に微高地状の地形が想定できる。遺物は、総量は少なく細片が多いものの、西側は古墳時代の土師器が主となり、東側は縄文時代から古墳時代前期の土器が出土している。4区東側からは他区と違い縄文土器が出土しており、当該時期の遺構の存在も想定できる。これらの遺構・遺物から、川跡東側は集落域に相当するといえる。

5 工事立会の概要

1区と2区の間で市道となっていた部分である。中央部は、既に工事による攪乱となっていた。遺構には2区から続く溝の他、柱穴列と推定できるものがある。遺物は弥生時代中期から後期、および終末期の土器を中心に出土した。

第4章 遺構

第1節 1区の遺構(図版第2～9、第11～21図)

1 方形周溝墓

方形周溝墓は4基を確認したが、調査区の制限から全形を確認し得たものはない。周溝墓に伴うと推測する、ないし墳丘上に位置する遺構と合わせて記述を行う。また、各周溝は調査時の番号を使用している。

ST1(第11図) A18・19区に位置する。西側の大部分が調査区外となることと、後世の溝に切られているため残存状況は良好ではなく、明確な形状・規模は判断し得ない。そのため、南東部において周溝が途切れている箇所があるが、本来途切れていたかは不明である。SK13とした東側の周溝は弧状に巡っており、残存幅180cm、深さは7～21cmを測り、SK3とした南側周溝は残存幅125cm、深さは16～24cmを測る。共に断面は不整な浅皿状を呈する。周溝墓に接する遺構にはSK14がある。遺物は、供献土器と言えるものではなく、弥生時代中期の土器が周溝内から主に小破片の状態で出土しており、5点を図示し得た(第31図1～5)。

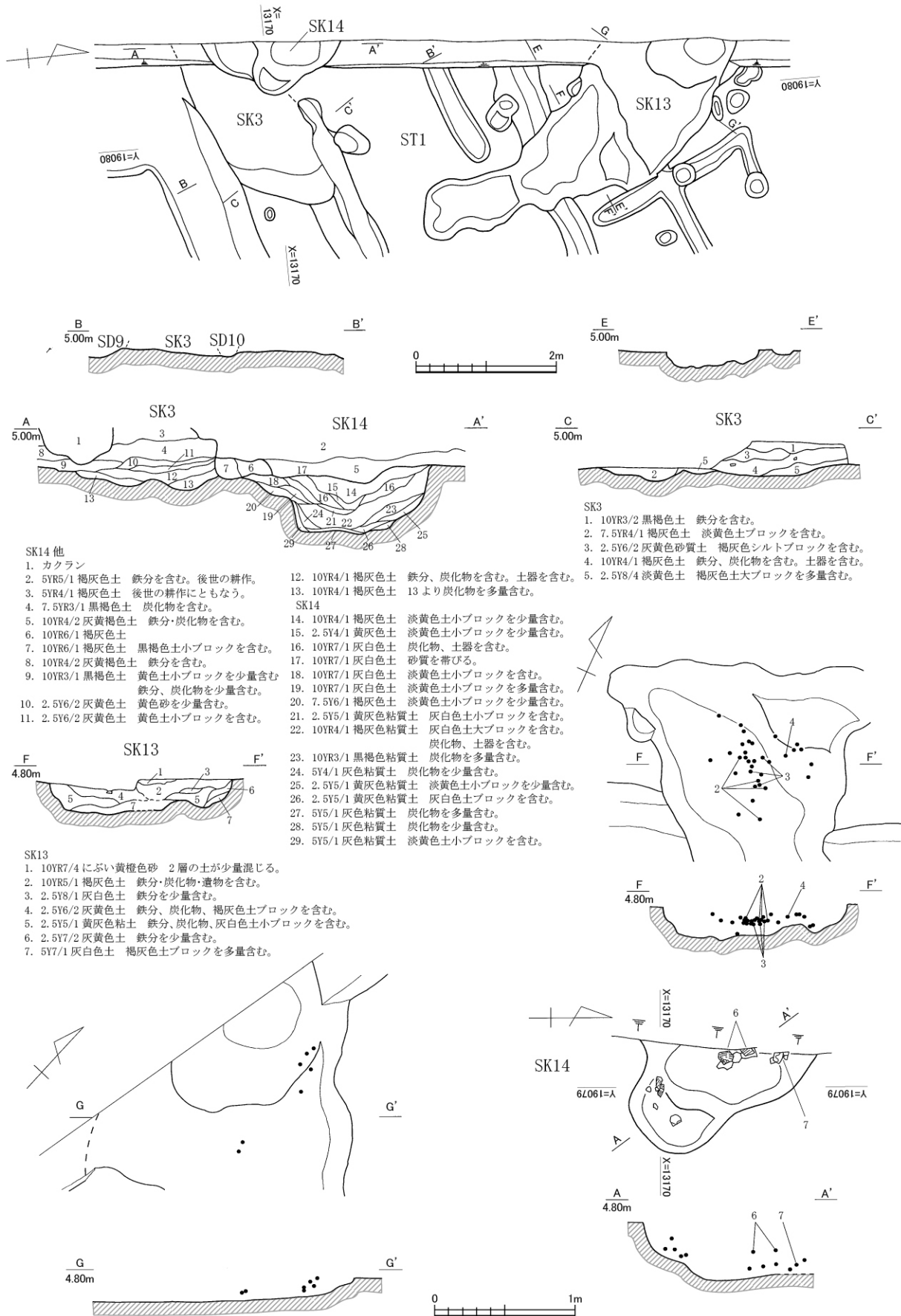
SK14(第11図) A19区、ST1の墳丘南部に位置する。北西部分は調査区外に延びており、平面形は判断し得ないが不整形ないし楕円形を呈すると推定する。周溝部との切り合いは断面では判断し得なかった。長軸100cm以上、短軸56cm以上、深さ41cmを測る。底面は平坦面を有し、断面は箱状を呈す。覆土は粘質土が主体である。遺物は底面近くから弥生時代中期の土器が出土した(第31図6～8)。

ST2(第12図) A15・16区に位置し、東側は調査区外に延びている。墳丘部の基底部で東西長556cmを測り、周溝部はSD19とした西～南溝とSD20とした北溝とは連続せず、陸橋部となる。北側周溝は幅82cm、深さは54cmを測る。西側周溝は幅106cm、深さは33cmを測る。南側周溝は幅137cm、深さは49cmを測る。南北の周溝は、中央付近で深度を増している。SD19からSD22までの南北土層図を見ると、南北の確認面の比高差は約18cmあり、北側が低くなっている。南側の確認面を検出していく過程で、大型の壺胴部片を検出した他、周溝内からは弥生時代中期の土器が小破片の状態で出土しており、明確に供献土器と言えるものはない(第32図)。

SK17(第12図) A15区、ST2の墳丘北東部に位置する。東部分は調査区外に延びており、平面形は判断し得ないが不整形を呈すると推定する。当初、周溝掘削時に遺構の存在を認識し得ず、掘削を進めてしまった。深さは32cmを測る。底面は階段状に段を有する。遺物は弥生時代中期の土器が出土した(第33図29～31)。

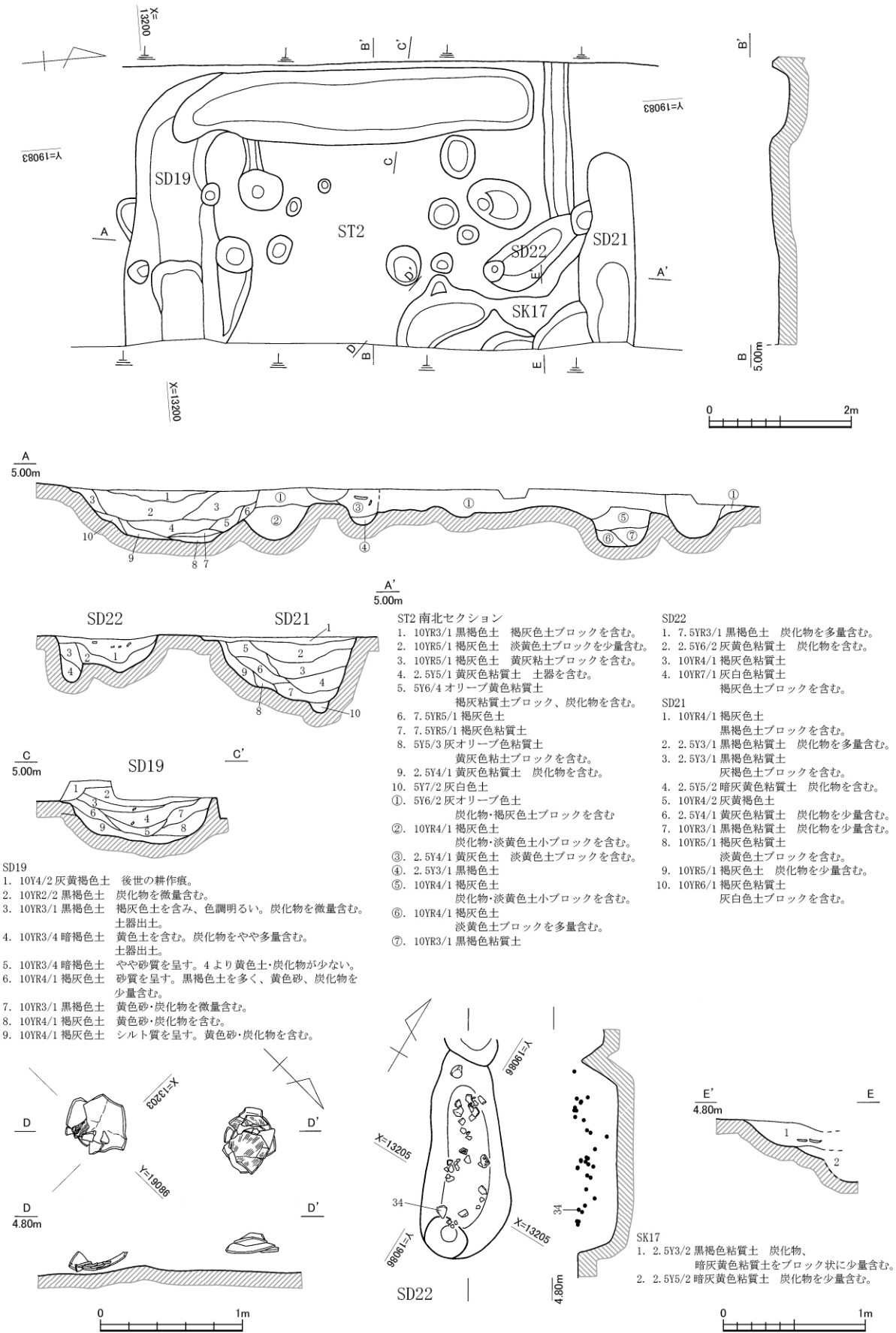
SD22(第12図) A15区、ST2の墳丘北部に位置する溝状土坑である。南北端に小穴と切り合う。北西～南東方向に延びる。幅は最大63cm、深さ28cmを測る。断面は箱状を呈し、覆土は大きく2層に分層できる。埋葬施設との判断は付かなかった。遺物は破片を中心とし、上層から上面付近にかけて散在する出土状況を呈する(第33図32～35)。

ST3(第13図) A14・15区に位置し、西側は調査区外に延びている。SD24とした東側周溝のみ全体を確認し得るため、墳丘基底部は400cm前後を測ると推定するのみである。SD23とした南側周溝との接合部は浅くなっており、明確ではないが周溝は連続していると考え。東側周溝は幅80cm、深さは32cmを測り、SK18に切られている。南側周溝は幅97cm、深さは46cmを測る。遺物は弥生時代中期の土器が周溝内から主に小破片の状態で出土した(第33図36～50)。

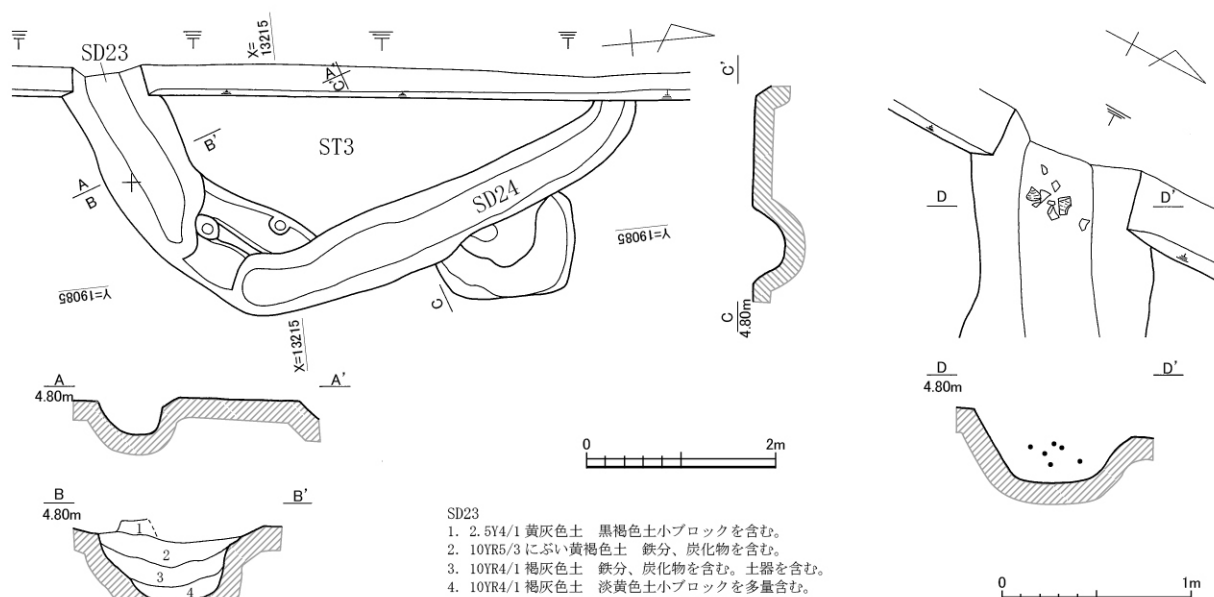


第11図 ST1・SK14 (縮尺 1/80・1/40)

第1節 1区の遺構



第12図 ST2・SD22 (縮尺 1/80・1/40・1/20)



第13図 ST3 (縮尺 1/80・1/40)

ST4(第14図) A13・14区に位置し、西側は調査区外に延びている。ST3と軸方向が同一と推定し得る。SD28とした東側周溝のみ全体を確認し得るため、墳丘基底部は900cm前後を測ると推定するのみである。周溝部はSD27とした南側周溝と東側周溝の間は調査区端部に当たるものの、連続している。東側周溝は幅150cm、深さは52cm前後を測る。南側周溝は幅157cm、深さは54cmを測る。墳丘上からは埋葬施設であるSK25・26を確認しているが、検出の過程で、埋葬施設周辺の地山面が周囲より低くなっており、周溝墓造営以前の遺構の影響の可能性がある。遺物は、弥生時代中期の土器が周溝内から主に小破片の状態で出土しており、調査範囲内では明確に供献土器と言えるものはない(第34図52～67)。

SK25(第14図) A13区、ST4の墳丘上に位置し、埋葬施設と考える。大部分が調査区外のため明確な規模・形状は不明であるが、平面形は長楕円形ないし隅丸方形を呈すると推定する。長軸200cm以上、確認した深さは43cm、方位は推定N12°Eを測る。底面は緩く曲面を有し、覆土には炭化物や暗褐色粘質土層がある。遺物は弥生時代中期の土器が出土した(第34図68～72)。

SK26(第14図) A13区、ST4の墳丘上に位置し、埋葬施設と考える。西側端部が調査区外となるが、平面形は長楕円形を呈すると推定する。長軸173cm以上、短軸87cm、深さ55cmを測る。方位はN85°Wを測り、SK25とは直行に近い位置関係となる。底面は平坦面を有し、断面は逆台形状を呈す。覆土には炭化物や地山の掘削土層がある。遺物は弥生時代中期の土器が出土した(第34図73～79)。

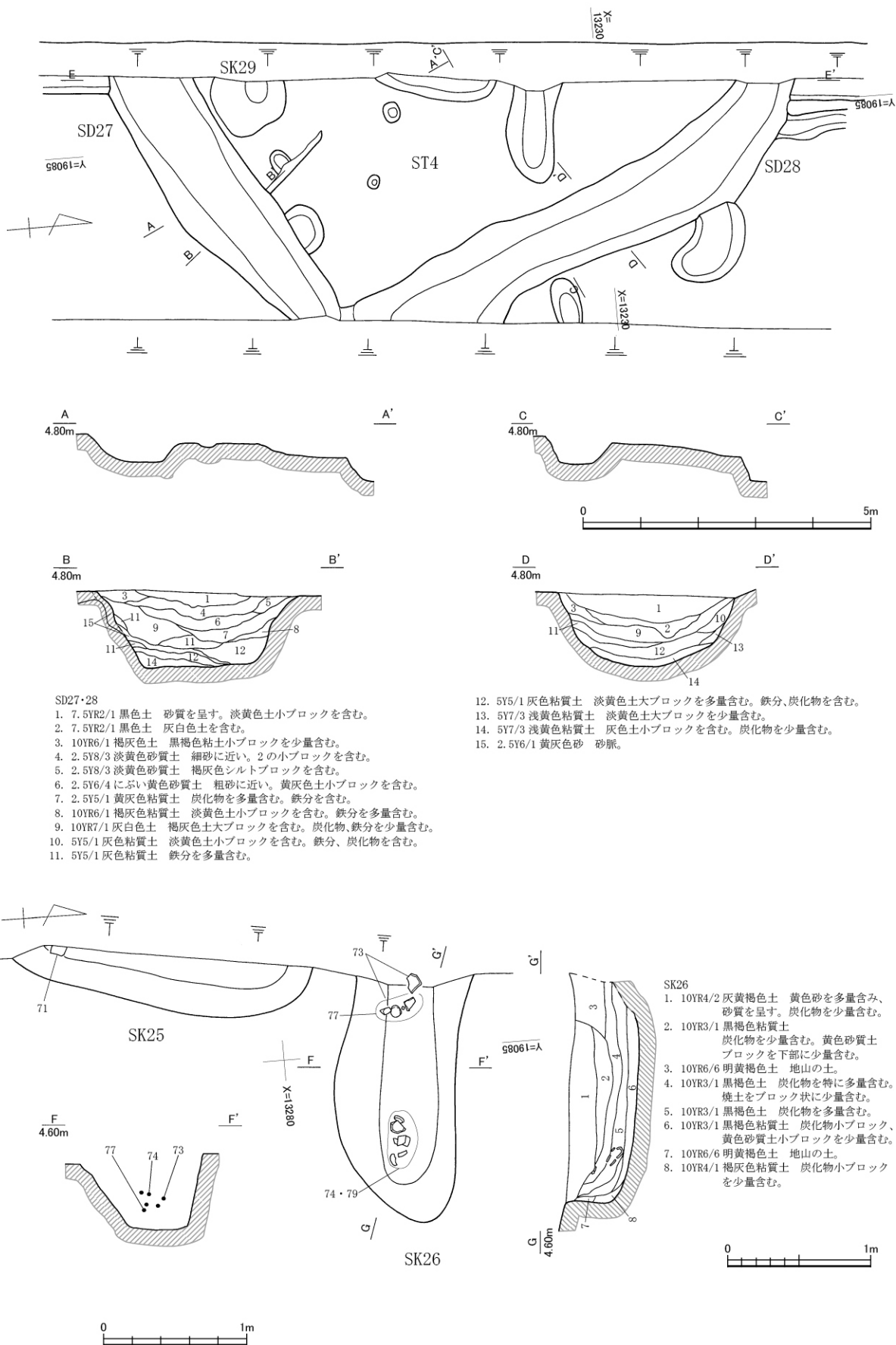
SK29(第14図) A13区、ST4の墳丘上に位置し、平面形は不整形と推定する。径は131cm、深さは19cmを測る。覆土には薄い炭化物層がある。遺物は出土していない。

2 土坑墓・土坑

SK1(第16図) A20区に位置し、SD6に切られる。平面形は円形を呈する。径106cm、深さは79cmを測る。底面は幅狭い平坦面となり、壁は直立気味に立ち上がる。断面は漏斗状を呈する。覆土は黒色粘質土が主体である。遺物は、下層から弥生時代後期の土器小片の他、石器(第57図8)が出土した。

SK2(第16図) A20区に位置し、SD8に切れ、西端は調査区外となる。平面形は楕円形を呈する。長軸216cm、短軸140cm、深さ27cmを測る。断面は浅皿状を呈する。遺物は弥生時代中期の土器小片が出土した(第35図80～82)。

第1節 1区の遺構



SD27・28

1. 7. 5YR2/1 黒色土 砂質を呈す。淡黄色土小ブロックを含む。
2. 7. 5YR2/1 黒色土 灰白色土を含む。
3. 10YR6/1 褐灰色土 黒褐色粘土小ブロックを少量含む。
4. 2. 5Y8/3 淡黄色砂質土 細砂に近い。2の小ブロックを含む。
5. 2. 5Y8/3 淡黄色砂質土 褐灰色シルトブロックを含む。
6. 2. 5Y6/4 にぶい黄色砂質土 粗砂に近い。黄灰色土小ブロックを含む。
7. 2. 5Y5/1 黄灰色粘質土 炭化物を多量含む。鉄分を含む。
8. 10YR6/1 褐灰色粘質土 淡黄色土小ブロックを含む。鉄分を多量含む。
9. 10YR7/1 灰白色土 褐灰色土大ブロックを含む。炭化物、鉄分を少量含む。
10. 5Y5/1 灰色粘質土 淡黄色土小ブロックを含む。鉄分、炭化物を含む。
11. 5Y5/1 灰色粘質土 鉄分を多量含む。

12. 5Y5/1 灰色粘質土 淡黄色土大ブロックを多量含む。鉄分、炭化物を含む。
13. 5Y7/3 浅黄色粘質土 淡黄色土大ブロックを少量含む。
14. 5Y7/3 浅黄色粘質土 灰色土小ブロックを含む。炭化物を少量含む。
15. 2. 5Y6/1 黄灰色砂 砂脈。

SK26

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 黄色砂を多量含み、砂質を呈す。炭化物を少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土 炭化物を少量含む。黄色砂質土ブロックを下部に少量含む。
3. 10YR6/6 明黄褐色土 地山の土。
4. 10YR3/1 黒褐色土 炭化物を特に多量含む。焼土をブロック状に少量含む。
5. 10YR3/1 黒褐色土 炭化物を多量含む。
6. 10YR3/1 黒褐色粘質土 炭化物小ブロック、黄色砂質土小ブロックを少量含む。
7. 10YR6/6 明黄褐色土 地山の土。
8. 10YR4/1 褐灰色粘質土 炭化物小ブロックを少量含む。

第14図 ST4・SK25・SK26 (縮尺 1/100・1/40)



第15図 ST4 西壁断面図 (縮尺 1/40)

SK4(第16図) A19区に位置し、東側は調査区外となるが、平面形は楕円形を呈すると考える。長軸100cm以上、短軸70cm前後、深さ41cmを測る。断面は逆台形状を呈する。覆土には炭化物層・粒を含む。弥生時代中期の土器小片が多く出土し、3点を図示し得た(第35図83～85)。

SK5(第16図) A20区に位置し、SD6に切られており、SD6の底面で遺構を確認した。平面形は長方形を呈する。長軸169cm、短軸71cm、深さ62cmを測る。短軸の断面は箱状を呈する。覆土は褐灰色土を主体とし、炭化物やブロック土を含む。形状から土坑墓と考える。遺物は、弥生時代中期の土器が確認面付近からまとめて出土した(第35図86～89)。

SK6(第16図) A17区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸94cm、短軸89cm、深さは15cmを測る。断面は浅皿状を呈する。遺物は弥生時代の土器小片が出土した。

SK7(第16図) A17区に位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸82cm、短軸45cm、深さは27cmを測る。断面は箱状を呈する。覆土は黒色土を主体とする。遺物は弥生時代の土器小片が出土した。

SK8(第17図) A17区に位置する。後世の耕作溝に切られるが、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸120cm、短軸53cm、深さは14cmを測る。断面は浅皿状を呈する。覆土は黒色ないし黒褐色土を主体とする。底面近くから、口縁部を欠いた弥生時代中期の壺が半分に割れた状態で出土した(第35図90)。

SK9(第17図) A17区に位置する。平面形は円形を呈し、長軸104cm、短軸88cm、深さは23cmを測る。断面はU字状を呈する。覆土は黒色ないし黒褐色土を主体とするも、焼土層および炭化物を含み、上層には灰と考える粒子が含まれる。弥生時代中期の土器が少量出土した(第35図91～94)。

SK11(第17図) A17区に位置する。東側の大部分が調査区外となるため、平面形は不明である。確認した深さは39cmを測る。覆土は灰黄褐色ないし褐灰色土を主体とし、全体に砂質を呈する。遺物は、弥生時代中期の土器が上層から出土した(第35図95～98)。

SK15(第17図) A17区に位置する。東側が調査区外となるが、平面形は楕円形を呈すると考える。推定長軸217cm以上、短軸124cm以上、深さは45cmを測る。覆土は黄褐色ないし暗灰黄色土を主体とする。長軸方向の断面は段を有す浅皿状を呈する。遺物は、弥生時代中期の土器小片が出土した。

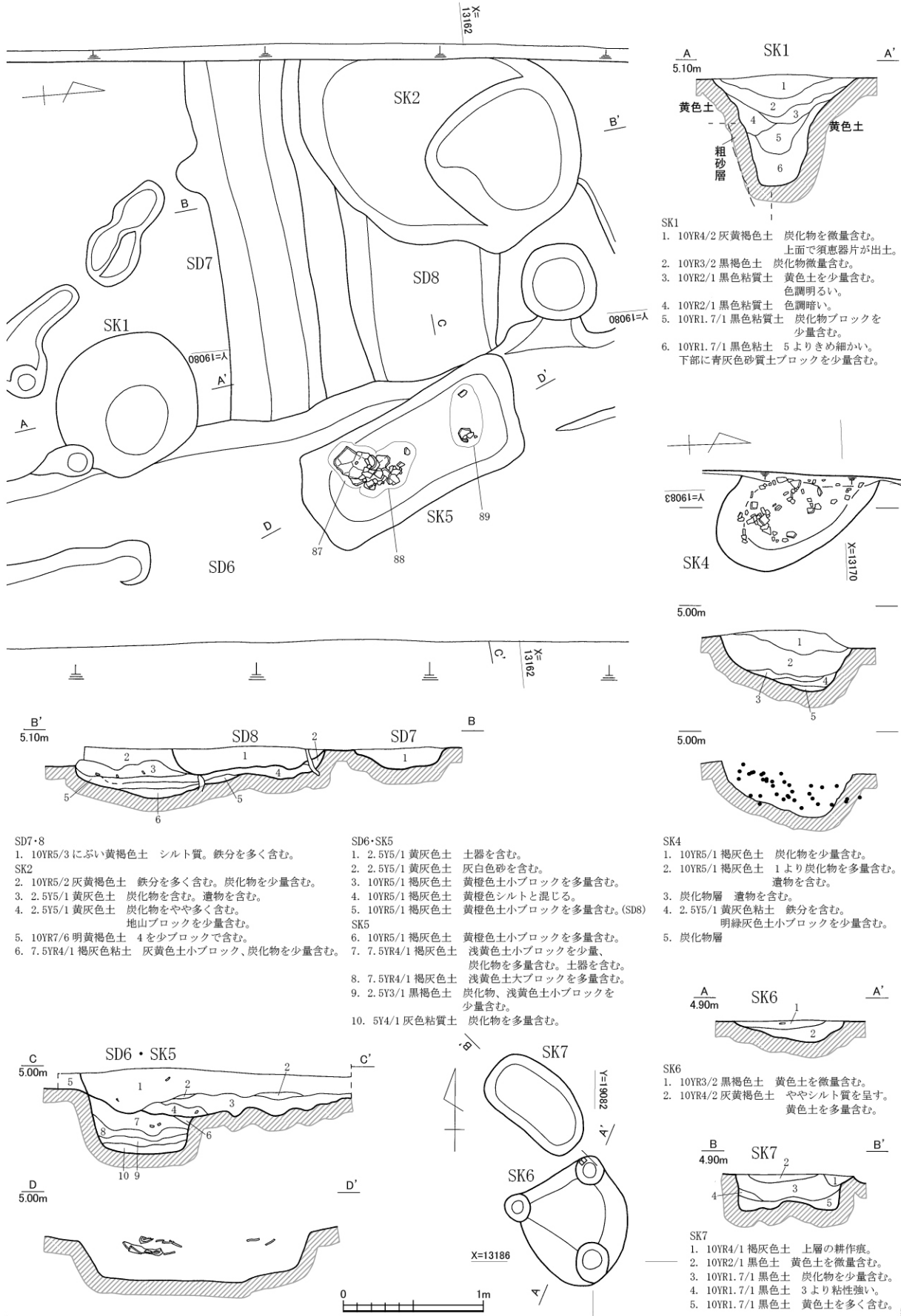
SK16(第17図) A15区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸221cm、短軸110cm、深さは26cmを測る。覆土は大きく2層に分層出来、ブロック土や炭化物を含んでいた。底面は平坦面を有し、断面は浅皿状を呈する。遺物は、弥生時代中期の土器片が出土した(第35図99)。

SK18(第18図) A14区に位置する。方形周溝墓の周溝を切っている。平面形は隅丸方形を呈する。長軸120cm、短軸80cm、深さは26cmを測る。覆土は大きく2層に分層出来、炭化物を含んでいた。断面は浅皿状を呈する。遺物は、弥生時代中期の土器・石器が北側を中心に出土した(第36図100～104・第56図16)。

SK20(第18図) A14区に位置し、東側部分が調査区外となり、平面形は不明確である。確認した深さは30cmを測る。覆土の下層には地山の土を主体とする層があり、さらに下層には焼土・炭化物を含む層が存在した。確認した断面は箱状を呈する。遺物は出土していない。

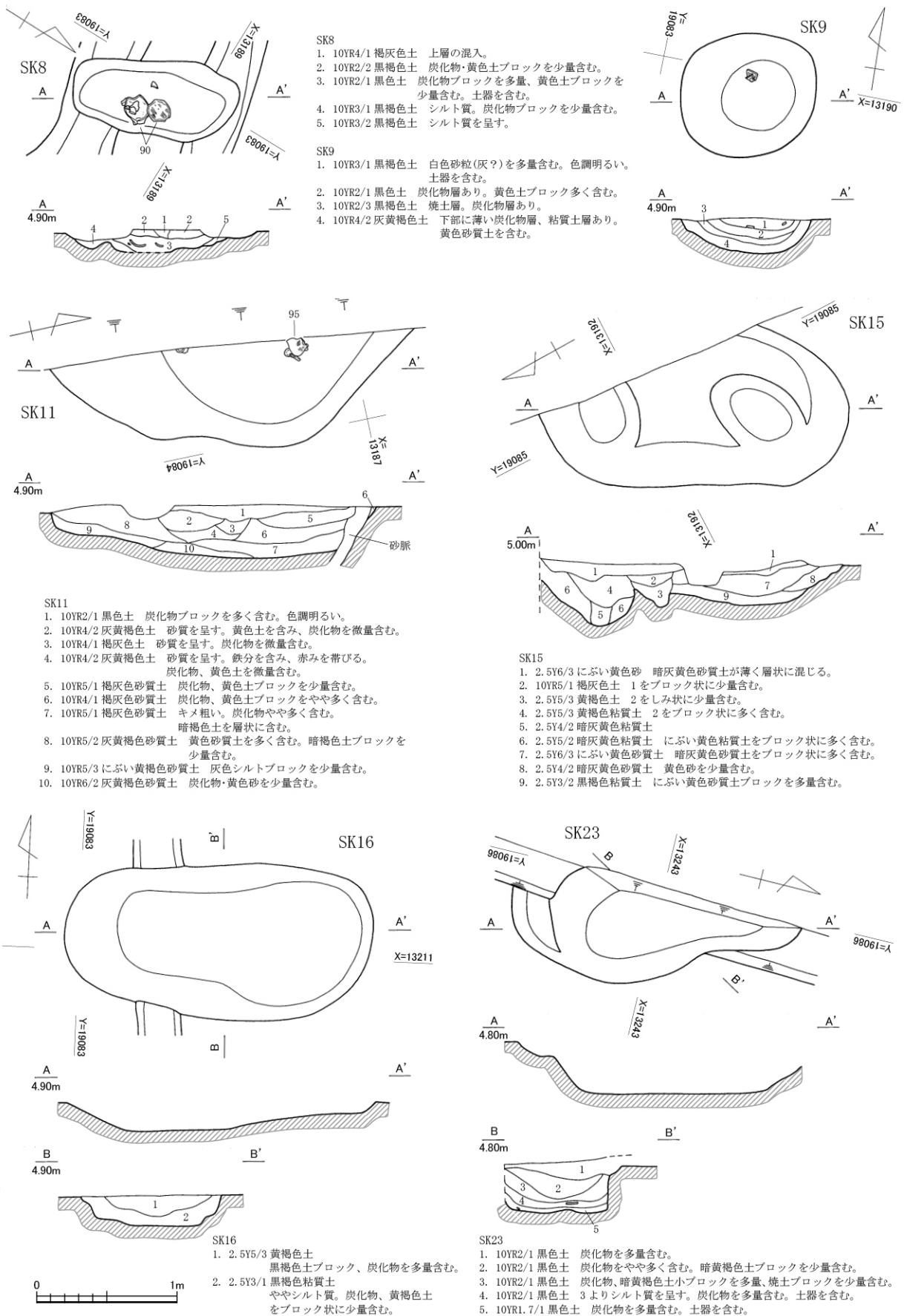
SK23(第17図) A11区に位置し、北西部が調査区外となる。平面形は隅丸長方形を呈すると想定する。長軸200cm以上、短軸66cm以上、確認した深さは31cmを測る。覆土は黒色土が主体となり、全体に炭化物を多く含んでいた。確認できた底面は平坦面を有し、断面は箱状を呈すると想定する。規模や形状から土坑墓と考える。遺物は、弥生時代中期の土器が下部から多く出土した(第36図106～110)。

SK28(第18図) A10区に位置する。平面形は円形を呈する。長軸140cm、短軸118cm、深さは34cmを測



第16図 1区遺構図1 (縮尺1/40)

第1節 1区の遺構



第17図 1区遺構図2 (縮尺1/40)

る。覆土は黒褐色土が主体となり、炭化物を多く含む層がある。断面は箱状を呈する。規模や形状から、土坑墓の可能性もある。遺物は、弥生時代中期の土器が出土した(第36図112～114)。

SK30(第18図) A10区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸221cm、短軸89cm、深さは49cmを測る。覆土は上層が暗オリーブ褐色ないし暗灰黄色粘質土が主体となり、炭化物を多く含む層がある。底面は平坦面を有するが、長軸方向には緩やかな段を形成し、短軸方向の断面は箱状を呈する。規模や形状から土坑墓と考える。遺物は、弥生時代中期の土器と石器が出土した(第36図115～117・第58図3)。

SK32(第19図) A9区に位置する。SK33を切り、平面形は歪な隅丸長方形を呈する。長軸194cm、短軸66cm、深さは64cmを測る。短軸方向の断面は、本来の東側は段状を呈し、西側は直線的に立ち上がる、逆台形状を呈する。覆土には焼土が堆積した層が存在する。規模や形状から土坑墓と考える。遺物は、底面近くから弥生時代中期の土器(第37図)がまとまって出土した他、石製品ではヒスイ片(第58図13)の他に、覆土の洗浄により管玉未成品(第60図16)を確認した。

SK33(第19図) A9・10区に位置する。SK32および試掘坑に切られる。平面形は不整円形を呈する。長軸205cm、短軸180cm、深さは45cmを測る。覆土には地山の土を利用して埋め戻した層が存在し、その下に炭化物を多く含む層がある。底面はやや平坦となり、断面は椀状を呈する。規模や形状から土坑墓と考える。遺物は、弥生時代中期の土器が南側底面付近を中心に出土した(第38図128～132)。

SK34(第19図) A7区に位置する。西側が調査区外となるが、平面形は円形を呈すると考える。長軸190cm、短軸130cm以上、深さは23cmを測る。覆土は黒褐色土を主体とし、炭化物・焼土を含む層がある。底面は平坦となり、断面は浅皿状を呈する。遺物は、弥生時代中期の土器が出土した(第38図133～135)。

SK37(第19図) A7区に位置する。東側は調査区外に延び、南側を試掘坑に切られるが、平面形は楕円形を呈すると想定する。規模は不明瞭であるが、確認し得る深さは30cmを測る。覆土は黒褐色土を主体とし、炭化物を少量含む。底面は平坦となり断面は浅皿状を呈する。遺物は、上層下部から弥生時代中期の土器が出土した(第38図139)。

SK38(第19図) A8区に位置する。平面形は方形を呈すると考える。長軸173cm、短軸125cm、深さは38cmを測る。覆土は灰色土を主体とし、全体にブロックを含んでいる。上面は、弥生時代中期の壺を意図的に細かく破碎し面的に配置した様相を呈していた。粗密はあるが、大きく2つのまとまりがあるようである。底面は平坦となり、断面は箱状を呈する。西方隅は浅くくぼむ。土器は口縁部を図示し得た(第38図136～137)。

3 溝

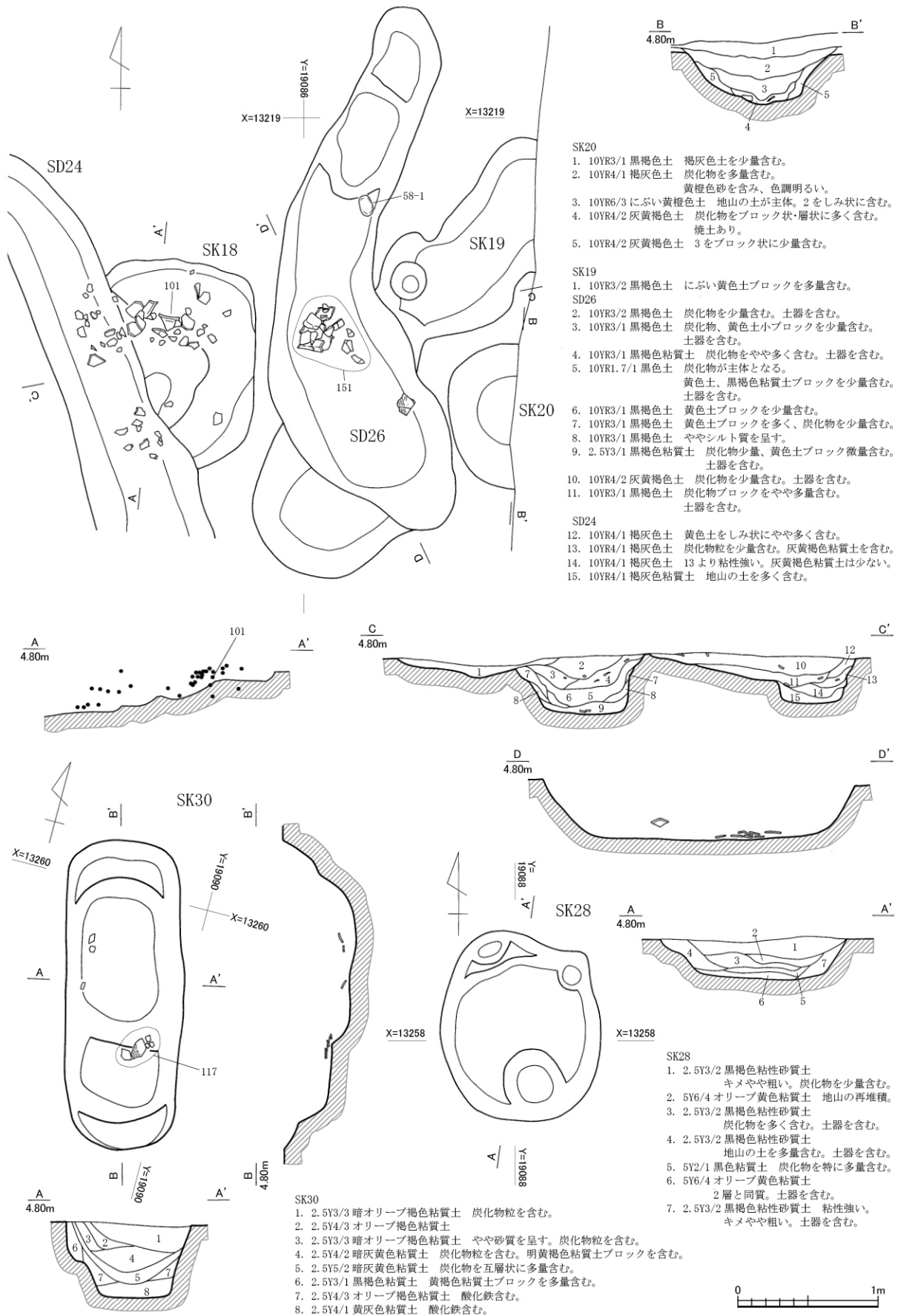
SD4(第20図) A20区に位置し、東西方向に延びる。北西部の立ち上りは不明瞭となるが、幅104～121cm、深さ10cm前後を測る。断面は浅皿状を呈するが、底面は平坦面にはならない。覆土は灰黄褐色土を主体とする。遺物は、弥生時代後期後半の土器小片が、例状に集中域を形成して出土した(第39図140～142)。

SD6(第20図) A20区に位置し、南北方向に延びる。東側は調査区外となり、北側は次第に浅くなり、耕作域となる。深さは最大で34cmを測る。遺物は弥生から古代の土器片が混在する(第39図143～145)。

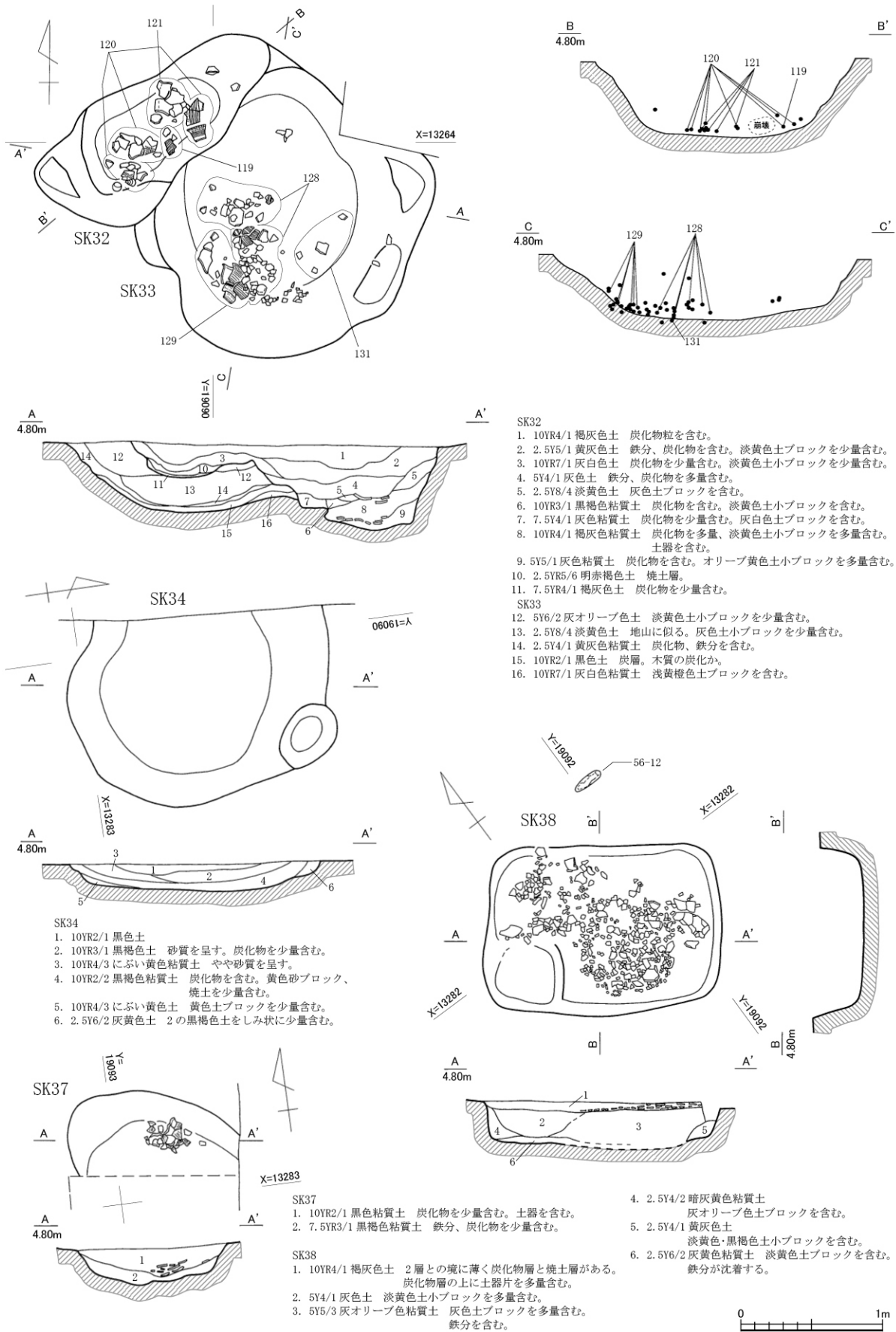
SD7(第20図) A20区に位置し、SD6に切られる。東西方向に延びる。幅70～82cm、深さ15cm前後を測る。断面は浅皿状を呈し、弥生時代中期の土器小片が出土した。

SD8(第20図) A20区に位置し、SK2を切り、SD6に切られる。東西方向に延びる。幅98～108cm、深さ9～17cmを測る。断面は浅皿状を呈し、遺物は弥生時代中期の土器小片が出土した(第39図147)。

第1節 1区の遺構



第18図 1区遺構図3 (縮尺1/40)



第19図 1区遺構図4 (縮尺1/40)

SD9(第20図) A19区に位置する。ほぼ東西方向に延びる。幅100~107cm、深さ10~23cmを測る。断面は浅皿状を呈し、弥生時代中期を含む後期以降の土器小片が出土した。

SD15・16・17・18(第20図) A16区に位置する。東西方向に並行して延びる4条の溝である。SD15は幅173~185cm、深さ30cm前後、SD16は幅151~157cm、深さ13cm前後、SD17は幅71~77cm、深さ12cm前後、SD18は幅22~31cm、深さ10cm前後を測る。断面は浅皿状およびU字状を呈する。遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期の土器小片が出土しており、SD15出土の1点のみ図示し得た(第39図146)。

SD26(第20図) A14区に位置し、浅く不整形な遺構であるSK19に切られる。弧状を呈する溝状遺構である。北東~南西方向および中間付近で北西~南東方向に延びる。幅47~103cm、深さ15~37cmを測る。断面は逆台形状を呈し、覆土は黒褐色土を主体とし、炭化物を多く含む層がある。遺物は比較的多く出土しており、底面からは弥生時代中期の甕が出土した(第39図149~151)。

SD29(第20図) A15区に位置し、西側は調査区外となるが、平面は弧状を呈する溝状遺構である。南北方向および中間付近で東西方向に延びる。幅58~80cm以上、深さは最大で35cmを測る。断面はU字状を呈し、覆土は全体にブロック土を含み、炭化物を多く含む層がある。遺物は比較的多く出土しており、底面からは弥生時代中期の土器が出土した(第39図157~166)。

SD30(第21図) A8・9区に位置し、北西~南東方向に延びる。幅214~254cm、深さ77~83cmを測る。底面は丸みを帯び、断面はU字状および逆台形状を呈する。覆土は灰白色粘質土を主体とし、大小のブロック土を含んでいる。この溝より北側は、遺構密度が低くなるため、区画溝の性格を有する可能性がある。遺物は多く出土しており、特に底面から15~20cm上からは、弥生時代中期の土器が個体ごとにまとまって出土した(第40~43図)。

4 小穴・その他

SP60(第21図) A9区に位置する。平面形は円形を呈する。長軸55cm、短軸50cm、深さは30cmを測る。底面は平坦となり、断面は箱状を呈する。遺物は弥生時代中期の壺胴部が出土した(第44図)。

A20区出土土器(第21図) A8区に位置する。掘り込みなどは確認できなかったが、まとまって出土しており、ここで扱う。確認面近くから甕の底部片が出土した(第45図240)。

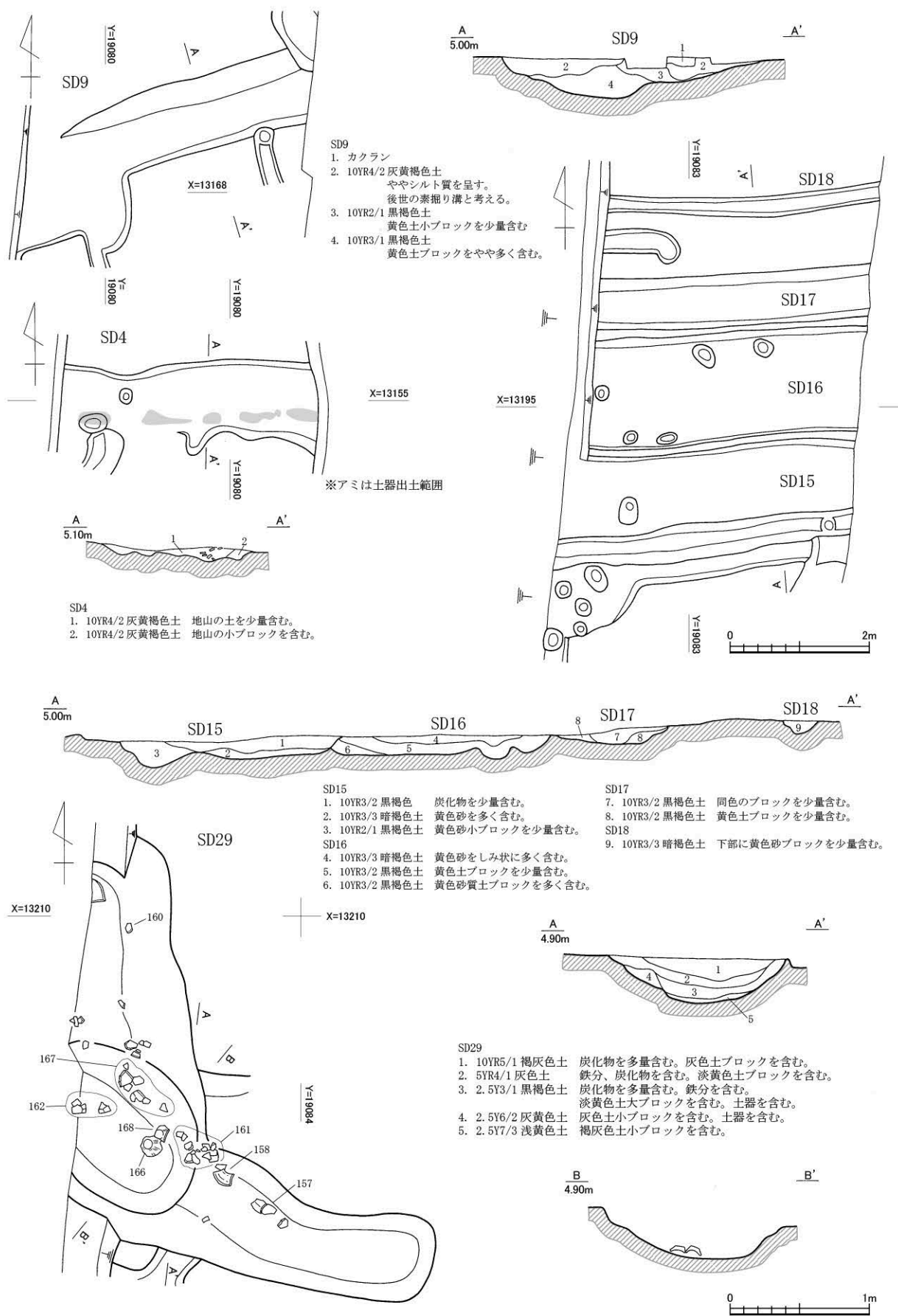
第2節 2区の遺構(図版第10~12、第22~24図)

1 建物

SI1(第22図) A26区に位置する。SD45を切っている。北西部分のみ確認し、平面形は方形を呈すると考える。南西部は明確ではないが、確認できる一辺は推定153cm、確認面から床面までの深さは16cmを測る。主柱穴は1基を確認し、径60cm、深さ50cmを測る。また、炭化物片が出土した。深さ約10cmの壁溝が北西隅から西側にかけて確認でき、その外側に幅10cm程度の平坦面がある。床面下から検出したSP108は浅く、柱穴となり得るか不明である。遺物は古墳時代前半の土師器が出土した(第46図)。

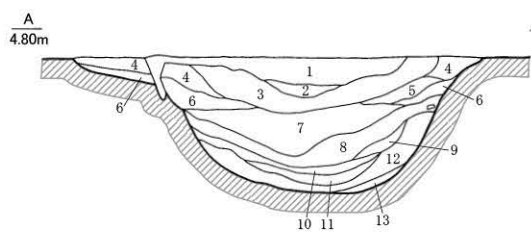
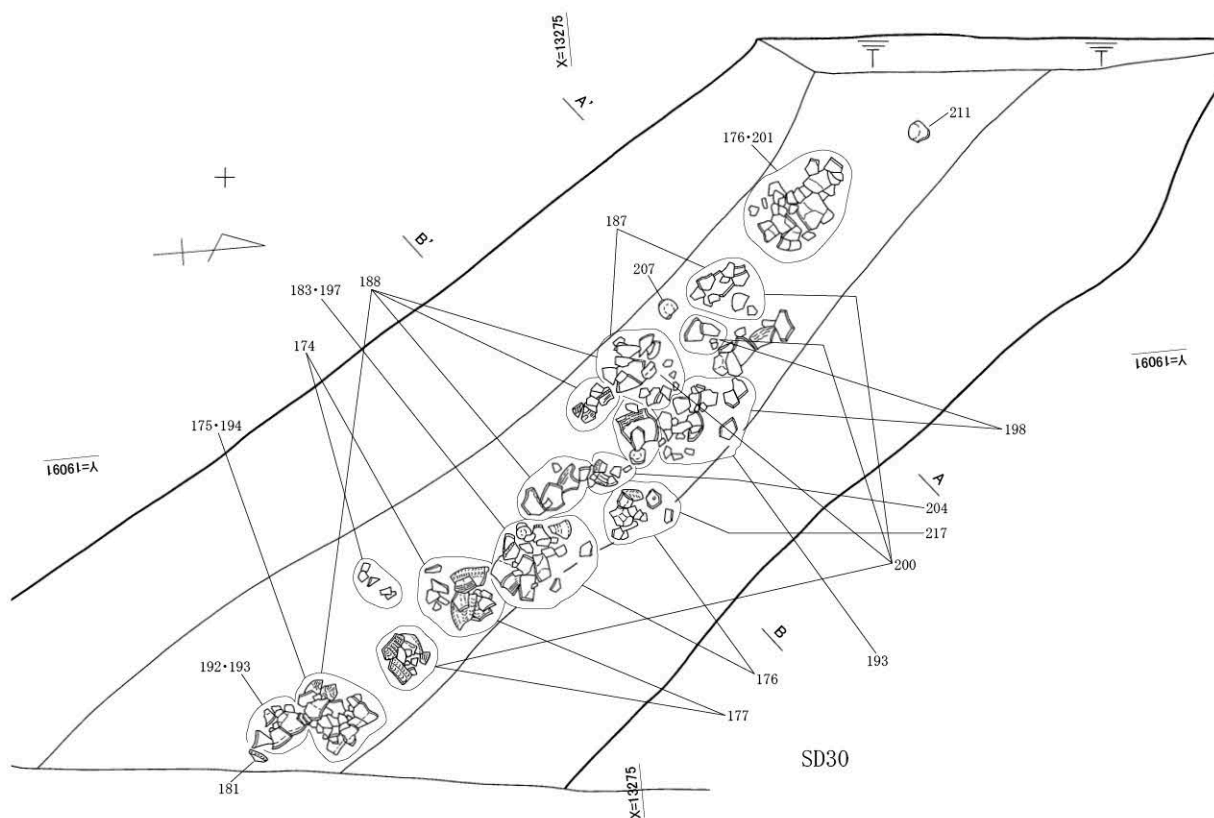
SB1(第22図) A24区に位置する布掘構造の掘立柱建物である。3間×1間と推定すると、推定桁行575cm、推定梁行410cm、方位は推定N64°Eを測る。各柱穴を溝底より深く掘り込み、一連の柱穴列を構成していたが、後世の耕作により一部掘り込み面が削平されたと考える。柱間寸法は桁行間154~186cm、柱穴の深さは45~74cmを測る。柱穴出土遺物には土師器片が少量ある。

柱穴列(第22図) A27区に位置する。おそらく、東側に対になる柱穴列が存在し、掘立柱建物を構成すると考える。両端の柱穴間は440cm、方位は推定N5°Wを測る。柱穴の平面形は楕円形ないし不整



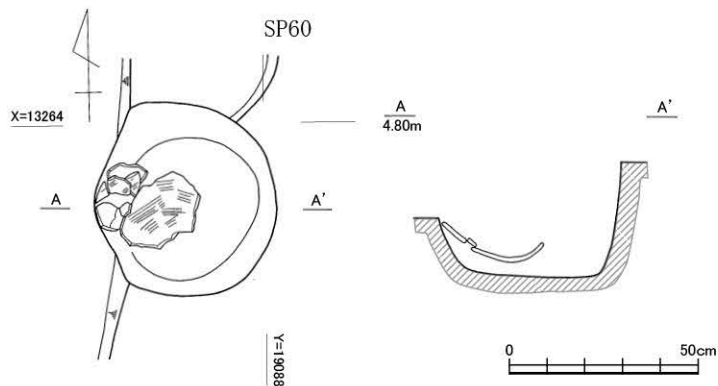
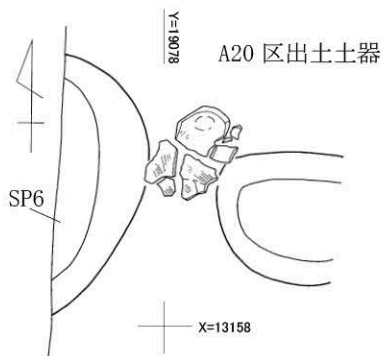
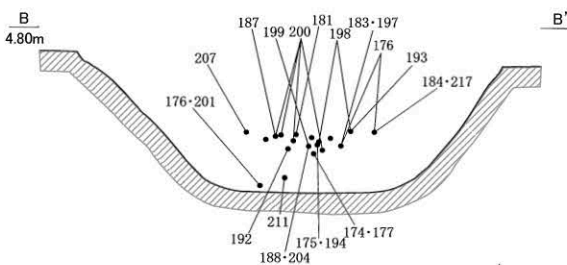
第20図 1区遺構図5 (縮尺1/80・1/40)

第1節 1区の遺構

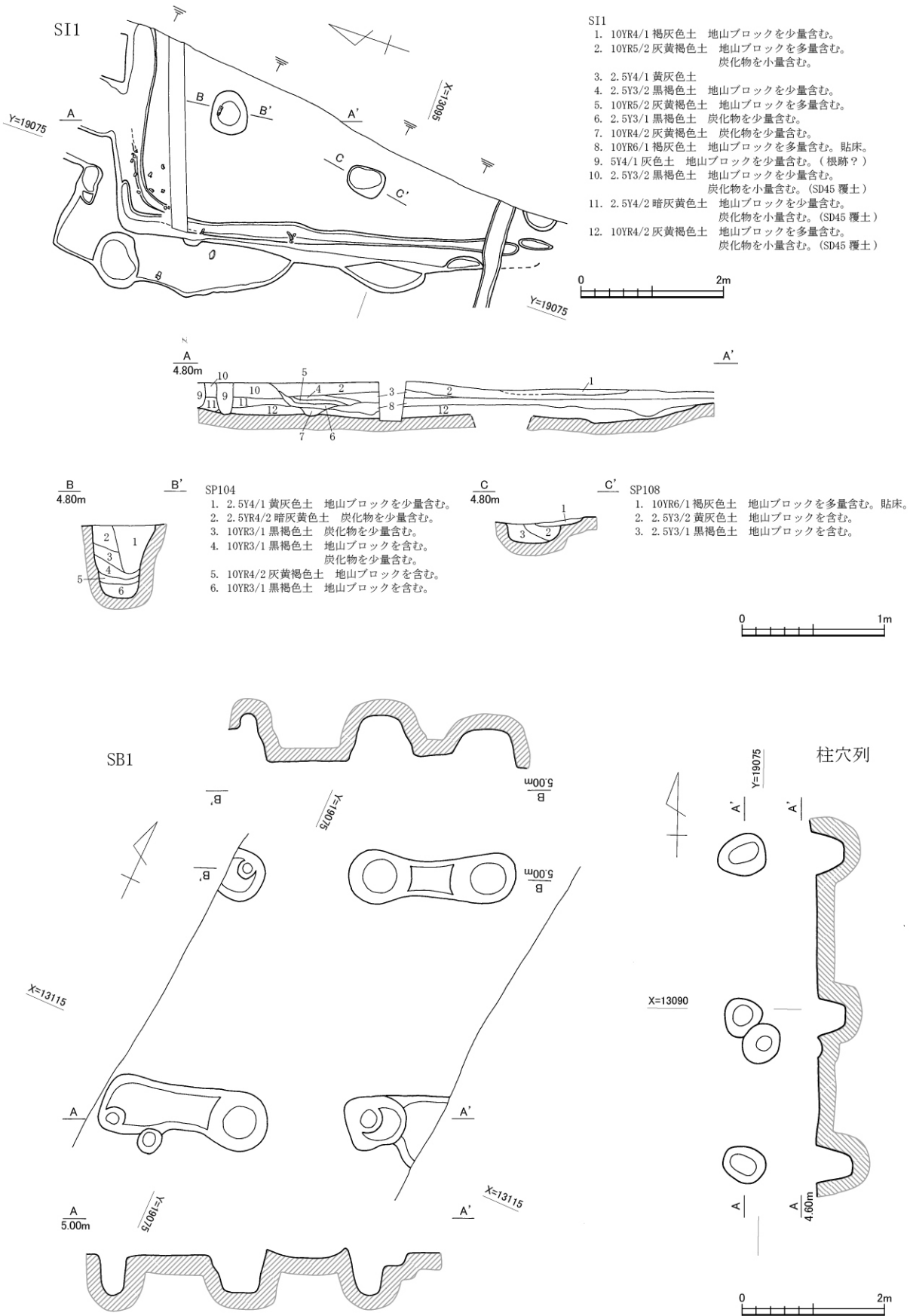


SD30

1. 10YR4/1 褐灰色土
2. 10YR4/1 褐灰色土 灰色粘土ブロックを含む。
3. 2.5Y2/1 黒色粘質土 炭化物少量含む。
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色土
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 鉄分・炭化物を多量含む。
6. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 淡黄色土小ブロックを含む。鉄分・炭化物を少量含む。
7. N5/0 灰色粘質土 8層を小ブロックで含む。炭化物、遺物を多量含む。
8. 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土 灰色土小ブロックを含む。炭化物を少量含む。
9. 5Y7/1 灰白色粘質土 明オリーブ色土小ブロックを含む。
10. N4/0 灰色粘質土 炭化物を含む。
11. 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘質土 灰色土小ブロックを多量含む。炭化物を少量含む。
12. 5Y6/1 灰色粘質土 明オリーブ色土小ブロックを含む。
13. 5Y6/1 灰色粘質土 炭化物を多量含む。



第21図 1区遺構図・遺構外土器出土状況図 (縮尺 1/40・1/20)



第22図 2区遺構図1 (縮尺 1/80・1/40)

円形を呈し、径56～70cm、深さ35～53cmを測る。遺物は土師器片が出土した。

2 土坑

SK41(第23図) A22区に位置する。SD31に切られる。北～東部は調査区外となるが、平面形は楕円形を呈すると考える。長軸155cm以上、短軸134cm以上、深さは32cmを測る。底面は平坦で壁は緩く段状に立ち上がり、断面は浅皿状を呈する。覆土下層は粘質土となる。覆土上層から古代および古墳時代前期の土器が出土した(第47図247～249)。

SK42(第23図) A22区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸112cm、短軸82cm、深さは26cmを測る。断面はU字状を呈する。遺物は弥生時代後期以降の土器片が出土した。

SK43・44(第23図) A22区に位置する。SK43の北～西側は調査区外に伸び、平面形は不明である。SK44は、西側は調査区外となるが平面は楕円形を呈すると推定する。長軸88cm以上、短軸90cm、深さは17cmを測る。断面はSK43・44とも浅皿状を呈する。SK43からは土師器小片が、SK44の上面に近くからは古墳時代初頭の甕が出土した(第47図251)。

SK46(第23図) A23区に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長軸102cm、短軸61cm、深さは27cmを測る。断面はU字状を呈する。2層は炭化物を多く含む。遺物には弥生時代後期以降の土器片がある。

SK47(第23図) A23区に位置する。西側は調査区外へ伸びるが、平面形は円形を呈すると考える。推定径は100cm、深さ21cmを測る。底面は平坦で、断面は浅皿状を呈する。遺物は弥生時代後期後半の土器が出土した。

SK48(第23図) A23区に位置する。西側は調査区外へ伸びるが、平面形は円形を呈すると考える。推定径は159cm、深さ37cmを測る。断面は、底面が浅く落ち込む浅皿状を呈する。遺物は弥生時代中期の土器が出土した(第47図255)。

SK52(第23図) A25区に位置する。南北を耕作溝に切られる。平面形は円形を呈する。推定径は74cm、深さ12cmを測る。断面は浅皿状を呈する。遺物は弥生時代後期以降の土器が出土した。

SK54(第23図) A25区に位置する。南側を耕作溝に切られる。平面形は不整形円形を呈する。長軸105cm、短軸100cm、深さは9cmを測る。断面は浅皿状を呈する。遺物には弥生時代後期以降の土器がある。

SK55(第24図) A26区に位置し、SD40を切っている。平面形は円形を呈する。径は99cm、深さ16cmを測る。底面は平坦で、壁は直線のおよび段状に立ち上がり、断面は逆台形状を呈する。覆土上層を中心に土器が出土し、古墳時代初頭の甕の他、弥生時代中期と考える土器がある(第47図256・257)。

SK57(第24図) A27区に位置する。西側は調査区外へ伸びるが、平面形は楕円形を呈すると考える。長軸110cm以上、短軸59cm、深さは18cmを測る。断面は浅皿状を呈する。遺物には土師器片がある。

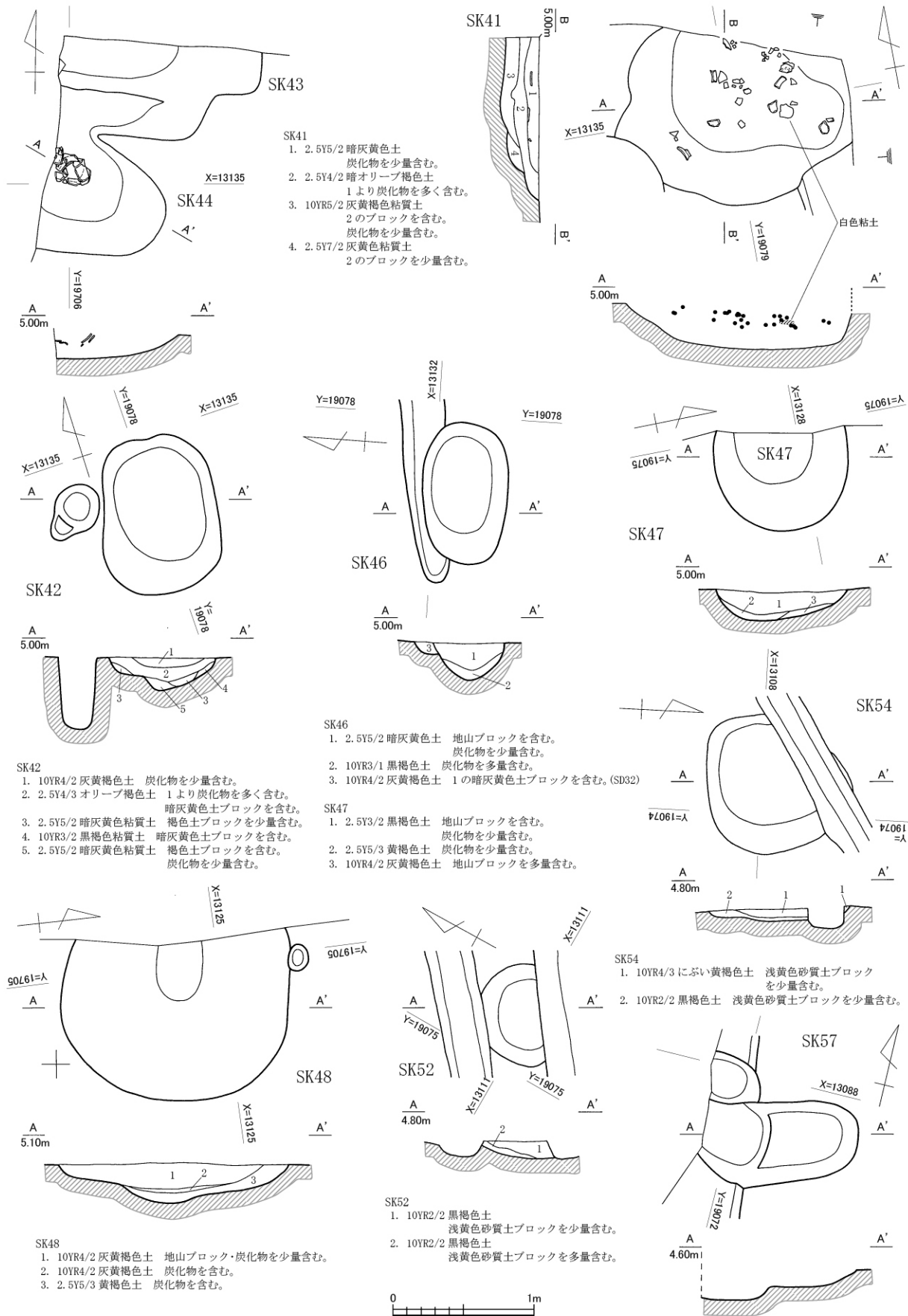
SK59(第24図) A27区に位置する。平面形は隅丸方形を呈する。長軸93cm、短軸58cm、深さは28cmを測る。断面はU字状を呈する。出土遺物には弥生時代後期後半と考えられる鉢がある(第47図259)。

3 溝

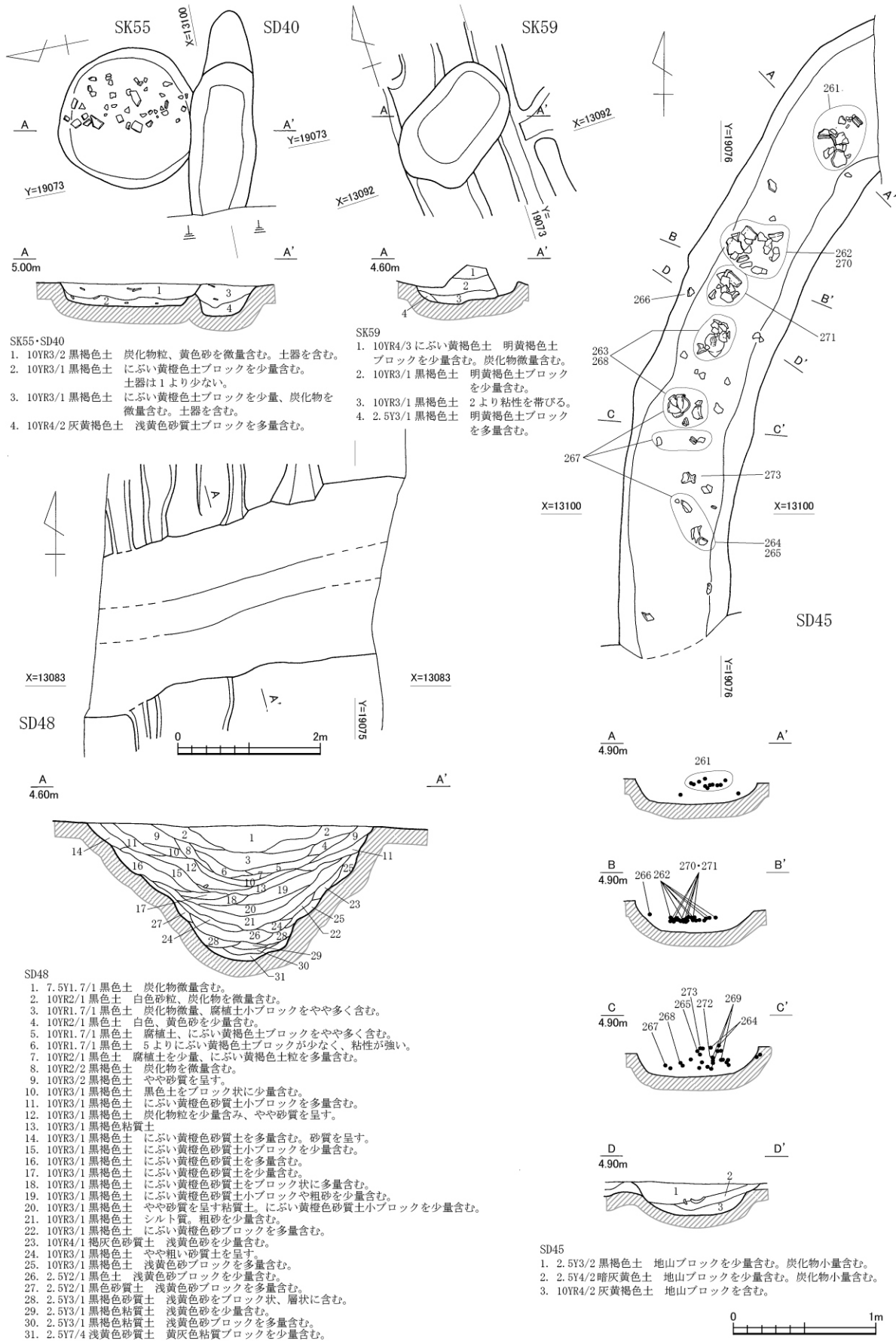
SD40(第24図) A26区に位置し、SK55に切られている。東端は先細り、西側は調査区外へ伸びる。最大幅は46cm、深さは21cmを測る。上層から土師器が少量出土した。

SD45(第24図) A26区に位置し、SI1に切られている。弧状を呈すると考えられ、北東～南方向に伸びる部分を確認した。幅76～89cm、深さ14～22cmを測る。底面は平坦面を有し、緩やかに壁が立ち上がり、断面は浅皿状を呈する。上面から上層にかけて、古墳時代初頭の土器が出土した(第48図)。

SD48(第24図) A27・28区に位置し、東西方向に伸びる。僅かではあるが、弧を描く様相を呈する。



第23図 2区遺構図2 (縮尺1/40)



第24図 2区遺構図3 (縮尺1/80・1/40)

東西の壁際は、法面の崩落防止のため掘削していない。幅205～245cm、深さ95cmを測る。底面に向かって幅が狭くなり、断面は漏斗状を呈する。覆土は黒色ないし黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積を呈する。上層から中層にかけて弥生時代終末から古墳時代初頭の土器が出土した(第49図275～288)。

川跡(第8図) A28区以西南に位置し、北側肩部一部を確認した。法面保護のため確認面から約2mで掘削を止めている。また、植物遺体を含む間層が厚く堆積し、調査期間を考慮し、すべての掘削は行わなかった。肩部は南側では確認できないことから、3区までの間の調査範囲外となるようである。上部層からは古墳時代前期の土器が出土した(第50図)。

第3節 3区の遺構(図版第13、第25図)

SD57(第25図) A38区に位置し、東西方向に延びる。北側の一部を削ってしまっている。幅107～148cm、深さ33～49cmを測る。底面はやや曲面を有し、壁は緩やかな段状部をもって立ち上がり、断面はU字状を呈する。覆土は黒色ないし黒褐色土を主体とし、レンズ状堆積を呈する。部分的に砂質土が含まれ、水路の可能性がある。遺物は、わずかに土師器の細片が出土した。

SD58(第25図) A39区に位置し、東西方向に延びる。SD59を切る。幅40～58cm、深さ7～18cmを測る。断面は浅皿状を呈し、覆土には黄褐色土ブロックを含む。遺物は出土していない。

SD59(第25図) A39区に位置し、東西方向に延びる。幅223～242cm、深さ32～43cmを測る。断面の観察から、2条の溝の重複と判断できる。先行する溝は断面が浅皿状を呈し、後行する溝は、断面はU字状を呈する。覆土は黒色ないし黒褐色土を主体とし、SD57と同様の性格を有すると考える。遺物は、古墳時代前期の土器が極少量出土した(第52図316・317)。

SD60(第25図) A39区に位置し、SD61に先行する。幅204～212cm、深さ37～42cmを測る。断面は浅皿状を呈し、覆土は黒色土を主体とする。遺物は、古墳時代前期の土器が出土した(第52図315)。

SD62・63(第25図) A39・40区に位置し、並行して東西方向に延びる。浅い溝であるSD61に先行する。SD62は幅77～98cm、深さ15～26cmを測り、SD63は幅65～86cm、深さ7～14cmを測る。断面はSD62が逆三角形、SD63が浅皿状を呈する。遺物は、SD62から土師器細片がわずかに出土した。

SD64(第25図) A41区に位置し、東西方向に延び、東側は調査区外へ続く。幅47～80cm、深さ5～9cmを測る。断面は浅皿状を呈する。遺物は出土していない。

第4節 4区の遺構(図版第14～16、第26～29図)

1 土坑

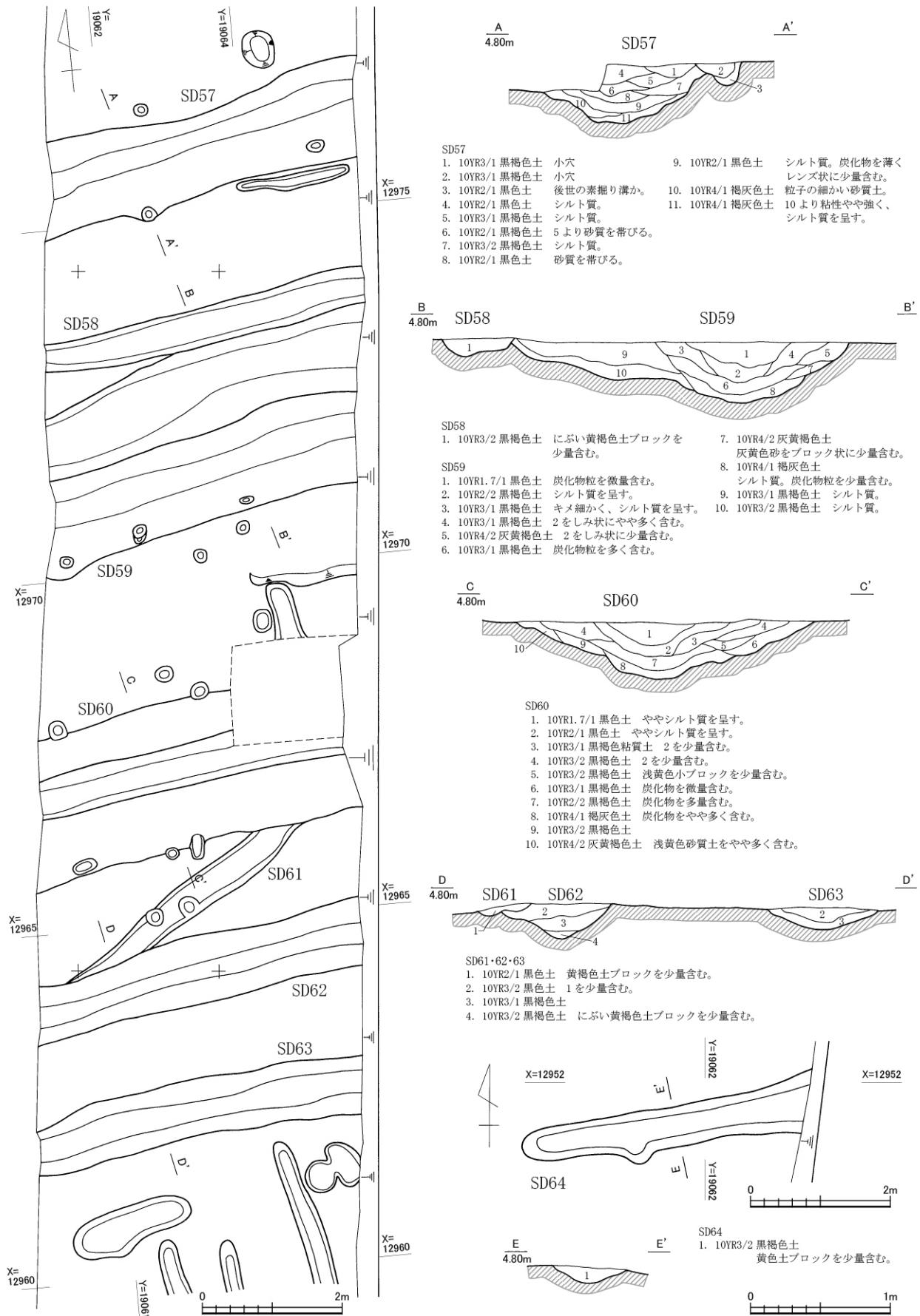
SK65(第26図) B42・43区に位置する。西側は農道側溝下に当たり調査区外となるが、平面形は円形ないし楕円形を呈すると考える。径117cm以上、深さは25cmを測る。底面は平坦で壁は緩く立ち上がり、断面は浅皿状を呈する。覆土は粘質土が主体となる。遺物は出土していない。

SK66(第26図) B43区に位置する。南側は調査区外となるが、平面形は不整長楕円形状を呈すると考える。長軸156cm以上、短軸100cm前後、深さは32cmを測る。断面はU字状を呈する。覆土は粘質土が主体となる。遺物は出土していない。

SK67(第26図) B42区に位置する。北側は調査区外となり、平面形は不整楕円形状と考える。長軸167cm以上、短軸135cm前後、深さは13cmを測る。断面は浅皿状を呈する。遺物は出土していない。

SK68(第26図) B43区に位置する。平面形は円形を呈する。長軸103cm、短軸90cm、深さ12cmを測る。

第3節 3区の遺構



第25図 3区遺構図 (縮尺 1/80・1/40)

断面は浅皿状を呈する。遺物は出土していない。

SK69(第26図) C・D42区に位置する。北側は調査区外に延び、南側は浅い土坑である SK70を切っている。平面形は南北方向に長軸を有す楕円形を呈すると考える。深さは17cmを測る。断面は浅皿状を呈し、覆土は黒色土と褐灰色土からなる。遺物は古墳時代前期の土師器が出土した(第53図319・320)。

SK75(第26図) F42区に位置する。平面形は溝状を呈する。長軸220cm、短軸59cm、深さは23cmを測る。底面は平坦で壁は緩く立ち上がり、断面は南北方向では浅皿状を、東西方向では2段掘り状を呈する。覆土は黒色粘質土が主体となり、遺物は覆土中位から古墳時代前期の甕が出土した(第53図321)。

SK76(第27図) K43区に位置し、SD72に後行する。南側は調査区外となり、規模は不明であるが平面形は溝状を呈すると推定し、深さは38cmを測る。底面は丸底となり、断面は推定逆台形状を呈する。覆土は炭化物を含む黒褐色土を主体とする。遺物は弥生時代中期の土器が出土した(第53図322)。

SK77(第27図) K43区に位置する。平面形は楕円形を呈する。長軸64cm、短軸48cm、深さは25cmを測る。底面は丸底で、断面はU字状を呈する。遺物は出土していない。

SK78(第26図) L43区に位置する。平面形は歪な隅丸方形を呈する。長軸104cm、短軸66cm、深さは27cmを測る。底面は幅狭い平坦面を有し、壁は北側が緩く、南側が直立気味に立ち上がる。断面は逆台形状を呈する。覆土は炭化物を多く含む暗オリーブ褐色～黄灰色を呈し、他の黒色土主体の遺構とは異なっている。遺物は覆土中位から弥生時代中期の土器が少量出土した(第53図323)。

SK79(第27図) L42区に位置する。平面形は楕円形を呈する。長軸88cm、短軸54cm、深さは28cmを測る。断面は段を有すU字状を呈する。確認面上で土師器小片がまとまって出土した。

SK81(第27図) L42区に位置する。平面形は三角形を呈する。長軸82cm、短軸74cm、深さは50cmを測る。覆土は粘質土を主体とし、炭化物を比較的多く含んでいた。底面は丸底を有し、断面は箱状を呈する。遺物は弥生時代中期および後期の土器片が混在している。

SK82(第27図) L42区に位置する。平面形は円形を呈する。径70cm、深さは35cmを測る。覆土は黒色粘質土となる。断面形は逆三角形を呈する。遺物は土師器と弥生土器が混在する。

SK83(第27図) L42区に位置する。平面形は円形を呈する。径は54cm前後、深さは29cmを測る。断面形はU字状を呈する。覆土は黒褐色粘質土となり、遺物は古墳時代前期の土器が出土した(第53図)。

SK84(第27図) L42区に位置する。北側は調査区外だが、平面形は円形ないし楕円形と推定する。確認できる深さは14cmを測る。平坦な底面を有し、断面形は浅皿状となる。遺物は土師器片が出土した。

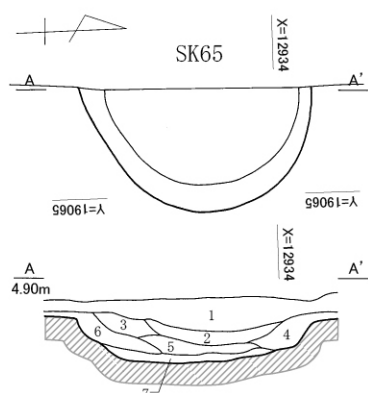
SK87(第27図) P42区に位置する。北側は調査区外となるが、平面形は隅丸方形を呈すると想定できる。長軸80cm以上、短軸46cm前後、深さは11cmを測る。底面は不整形で断面形は箱状を呈す。覆土は黒色～黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。

SK88(第28図) P42・43区に位置する。平面形は長楕円形状を呈する。長軸138cm、短軸43cm、深さは14cmを測る。平坦な底面を有し、断面形は逆台形状を呈する。覆土上層は黒褐色土が主体に、下層は褐灰色土が主体となる。遺物は弥生時代と考える土器片が出土した。

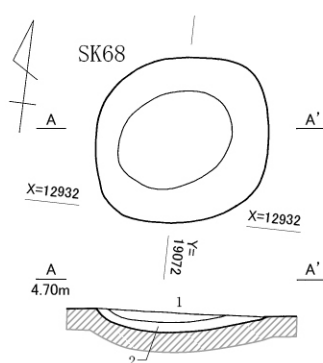
SK90(第28図) J42区に位置する。北側は調査区外となるが、平面形は長楕円形状ないし溝状を呈する想定できる。長軸155cm以上、短軸90cm以上、深さは6cmを測る。平坦な底面を有し、断面形は浅皿状を呈する。遺物は時期不明の土器片が出土した。

SK91・92・93(第28図) J43区に位置する。3基の楕円ないし不整形の土坑が重複している。断面の観察からはSK93が後行し、深さは14cmを測る。SK93の底面は丸底で、断面形は浅皿状を呈する。SK92・93

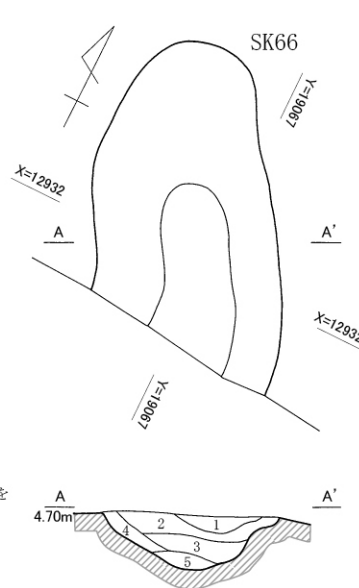
第4節 4区の遺構



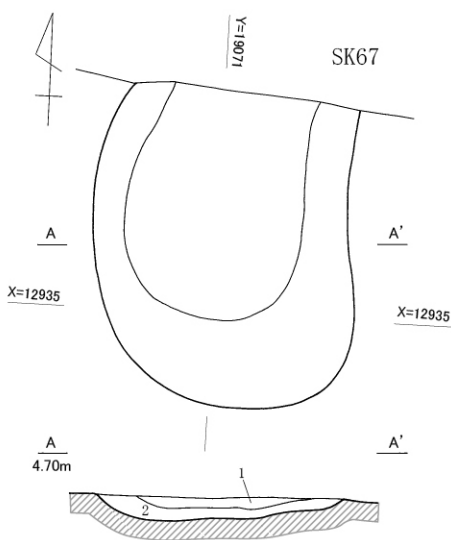
- SK65
- 10YR2/1 黒色土
 - 10YR2/2 黒褐色土 黄色砂粒を少量含む。
 - 10YR3/2 黒褐色粘質土
 - 10YR3/2 黒褐色粘質土 黒褐色粘土ブロックを少量含む。
 - 10YR2/3 黒褐色粘質土 灰黄褐色砂質土ブロックを含む。
 - 10YR4/1 褐灰色粘質土 灰黄褐色砂質土ブロックを少量含む。
 - 10YR5/1 褐灰色粘質土 灰黄褐色砂質土ブロックを多量含む。



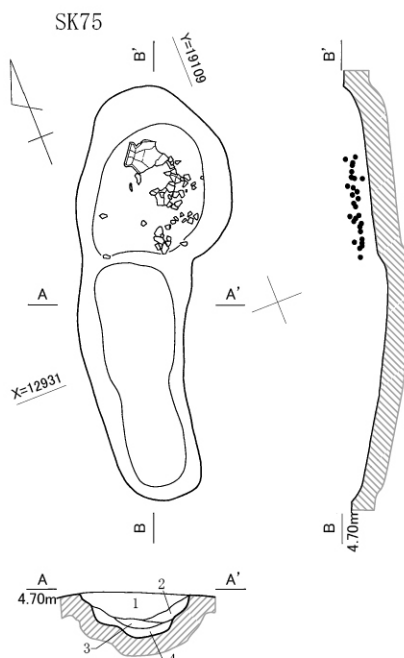
- SK68
- 10YR2/1 黒色粘質土
 - 10YR4/1 褐灰色砂質土 黒色土を多く含む。



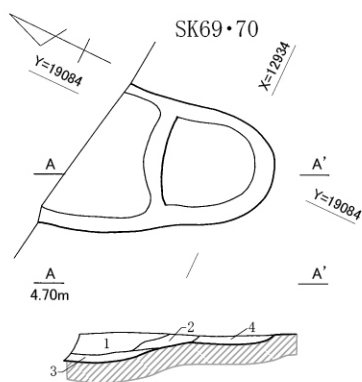
- SK66
- 10YR2/1 黒色粘質土
 - 10YR2/2 黒褐色土 やや砂質を呈す粘質土。炭化物を少量含む。
 - 10YR3/1 黒褐色粘質土 灰黄褐色砂質土ブロックを少量含む。
 - 10YR4/1 褐灰色粘質土
 - 10YR4/1 褐灰色土 砂質を帯びる。



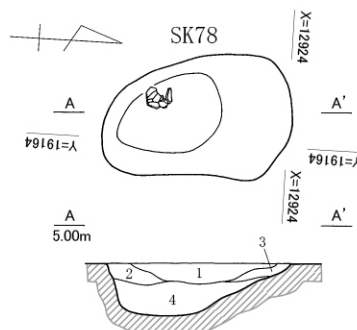
- SK67
- 10YR2/1 黒色粘質土 やや砂質を呈す。褐灰色砂ブロックを少量含む。
 - 10YR4/1 褐灰色砂質土 黒色土を多く含む。



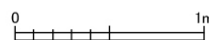
- SK75
- 10YR2/1 黒色粘質土 炭化物を微量含む。
 - 10YR2/1 黒色土 灰黄褐色土小ブロックを多量含む。
 - 10YR7/2 にぶい黄橙色土 シルト質。黒色土小ブロックを少量含む。
 - 10YR4/1 褐灰色粘質土 灰黄褐色土・にぶい黄橙色土をブロック状に少量含む。



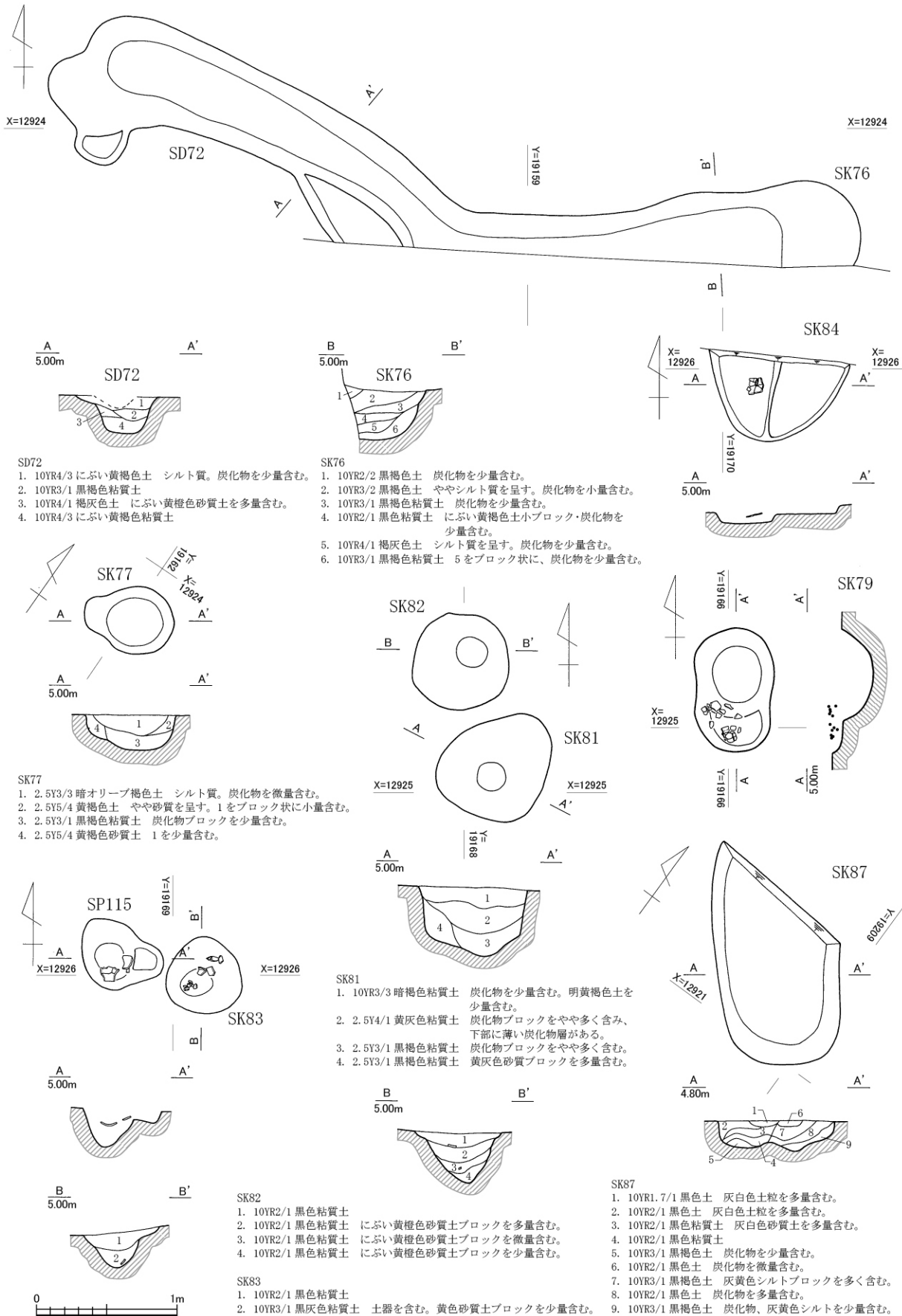
- SK69・70
- 10YR2/2 黒褐色粘質土 にぶい黄橙色土ブロック、炭化物を少量含む。
 - 10YR2/1 黒色土 にぶい黄橙色土ブロックを少量、炭化物を多量含む。
 - 10YR4/1 褐灰色粘質土 にぶい黄橙色土ブロックを少量含む。
 - 10YR4/1 褐灰色土 にぶい黄橙色土ブロックを多量含む。



- SK78
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 炭化物を少量含む。
 - 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 浅黄色土を多量含む。
 - 2.5Y7/3 浅黄色土 1をブロック状に少量含む。
 - 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 灰黄褐色砂質土を少量、炭化物をやや多く含む。



第26図 4区遺構図1 (縮尺1/40)



第27図 4区遺構図2 (縮尺1/40)

から出土した遺物には、縄文時代の土器がある(第55図)。

SK94(第28図) J43区に位置する。平面形は不整三角形を呈する。長軸107cm、短軸48cm、深さは13cmを測る。底面は幅狭く、断面は逆三角形を呈する。覆土は黒褐色土を主体とし、遺物は土器片が少量出土したのみである。

SK96(第28図) M42区に位置する。北側は調査区外となるが、平面形は円形ないし楕円形と推定する。推定長軸83cm、確認した深さは13cmを測る。平坦な底面を有し、壁は直立気味に立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。覆土は炭化物や焼土を含むが、土坑の性格は不明である。遺物は出土していない。

2 溝

SD66(第29図) E・F42・43区に位置し、北東～南西方向に延びる。幅111～122cm、深さ31～35cmを測る。底面には平坦面を、壁には段を有し、断面は下段が箱状、上段は浅皿状を呈する。覆土は黒色ないし黒褐色粘質土を主体とする。遺物は、古墳時代前期の土器がわずかに出土した(第53図330)。

SD72(第27図) K43区に位置し、北西～南東方向に延びるが、北東部分は切り合いおよび調査区外となる。幅55～78cm、深さ24～27cmを測る。底面は平坦面を有し、断面は逆台形状を呈する。覆土はにぶい黄褐色および褐灰色土を主体とする。遺物は、縄文時代の土器が少量出土した(第55図)。

SD109・110・111(第29図) N42・43区に位置し、南北方向に並行して延びる。SD109は浅い溝であるSD114に切られ、幅82～106cm、深さ13～18cmを測る。SD110はSD114を切り、幅77～85cm、深さ19～32cmを測る。SD111は幅66～112cm、深さ9～15cmを測る。断面は3条とも浅皿状を呈する。覆土は黒色ないし黒褐色粘質土を主体とし、遺物は、SD109・110から土器片がわずかに出土した。

3 小穴・その他

SP115(第27図) L42区に位置し、SK83に近接する。平面形は不整円形を呈す。長軸は59cm、短軸は45cm、深さは28cmを測る。断面形はU字状を呈する。覆土は黒～黒褐色粘質土となり、遺物は上層から古墳時代前期の土器が出土した。

川跡(第29図) H・I42・43区に位置し、一部を確認したのみである。法面保護のため確認面から約2mで掘削を止めている。西側の肩部は比較的緩やかに傾斜しているものの、東側では確認できないことから、東側肩部の立ち上りは急傾斜と考える。上層からは古墳時代の土器が出土し、確認面より50～100cm下では自然木が含まれていた。また下層部分からは縄文時代の土器が散漫に出土した(第55図)。

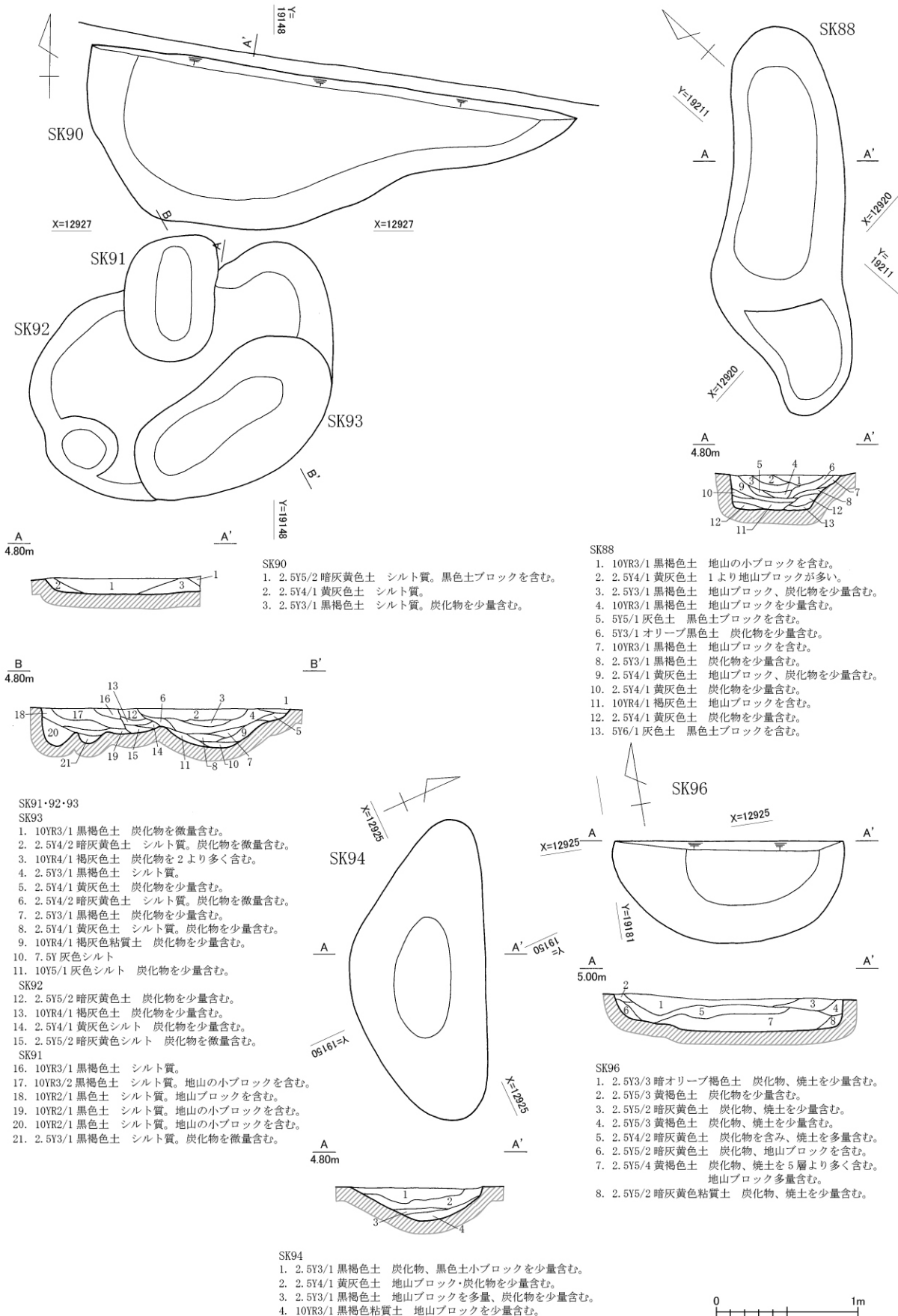
第5節 工事立会調査の遺構

柱穴列(第30図) A22区に位置する。両端の柱穴間は404cm、方位は推定N42°Wを測る。柱穴の平面形は不整円形を呈し、径38cm前後、深さ25～54cmを測る。遺物は時期不明の土器片が出土した。

SK97(第30図) A22区に位置する。西側は調査区外だが、平面形は楕円形と想定する。長軸125cm以上、短軸107cm前後、深さは25cmを測る。断面形は浅皿状を呈す。遺物は土師器小片が出土した。

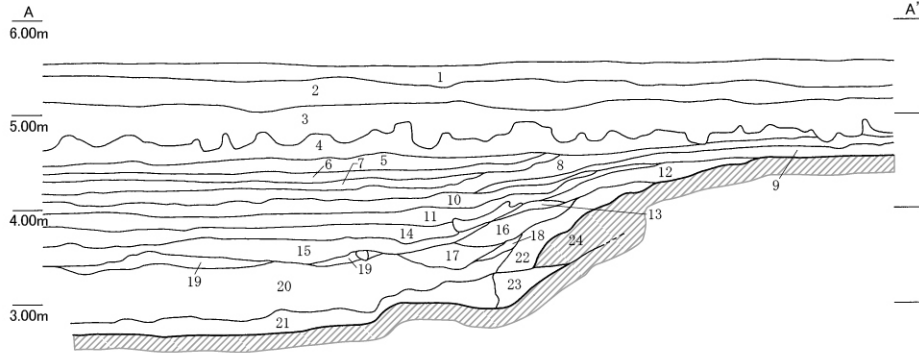
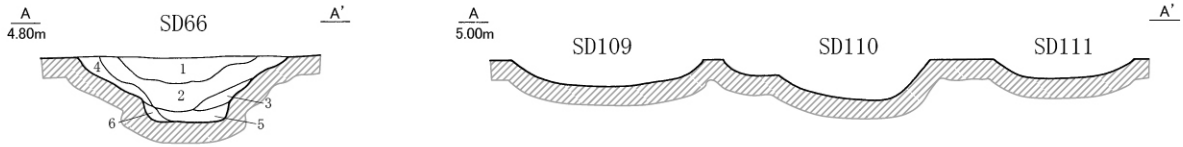
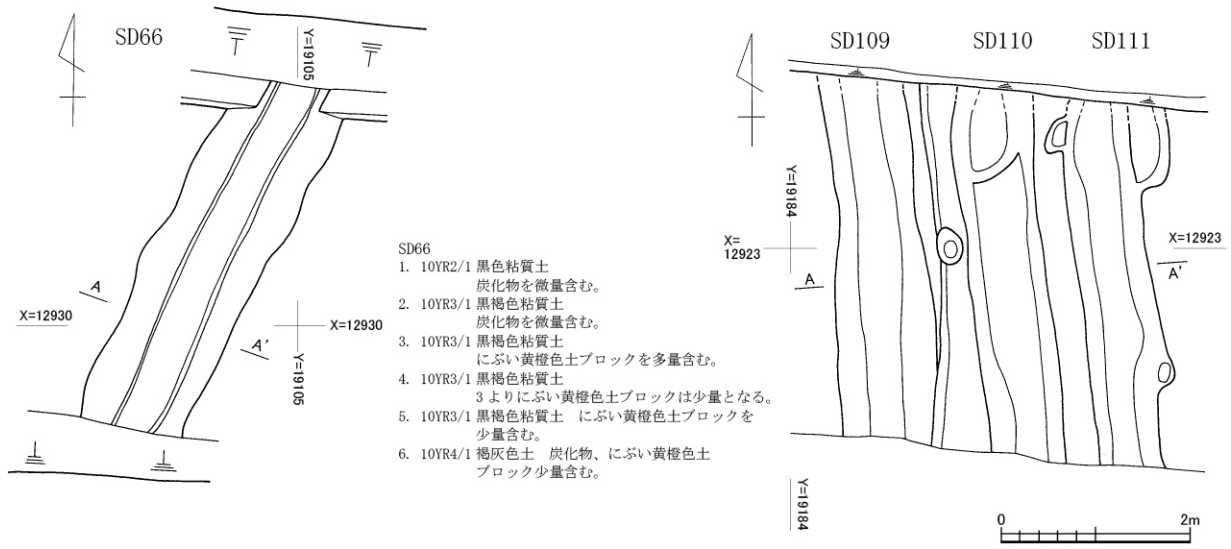
SD115(第30図) A22区に位置し、弧状に延びる一部を確認したのみである。遺物は、覆土上面および、底面近くからも出土し、弥生時代中期の土器の他、後期の土器が含まれていた(第54図)。

SD31(第30図) A21・22区に位置し、西側肩部を確認した。南北方向に延びる溝で、2区調査時に一部を確認しているため、同一の遺構番号とした。覆土から古代の遺構と考える。



第28図 4区遺構図3 (縮尺1/40)

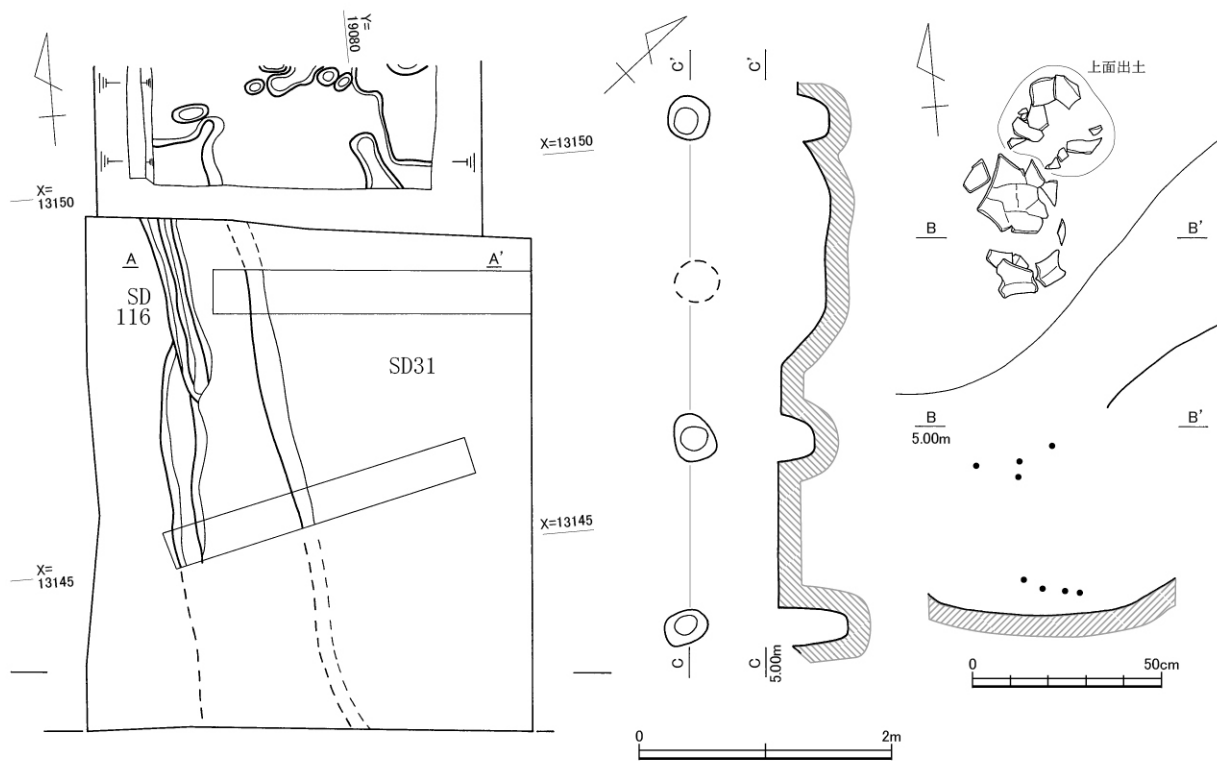
第4節 4区の遺構



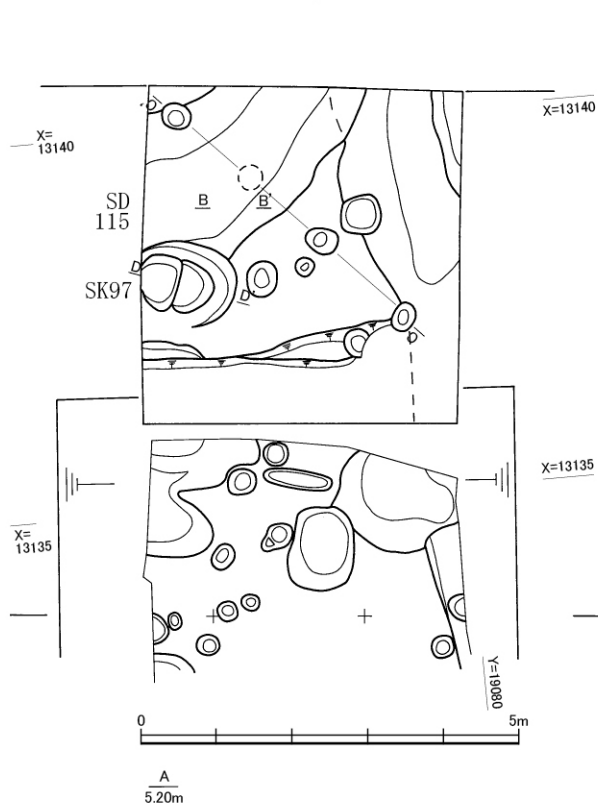
H・I43 区川南壁土層図

1. 表土・盛土
2. 5Y4/2 暗灰黄色土 鉄分を少量含む。
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色土 下部に黒褐色土ブロックを散漫に含む。耕作痕の溝状遺構あり。
4. 10YR3/2 黒褐色土
5. 10YR3/1 黒褐色土 シルト質。黒色土が主に上部に混じる。
6. 10YR2/1 黒色土 腐植土。
7. 10YR7/4 にぶい黄橙色土 腐植土と考えられる。
8. 10YR1.7/1 黒色粘質土 黒褐色粘質土を含む。
9. 10YR3/1 黒褐色粘質土 色調明るい。
10. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
11. 2.5Y2/1 黒色粘質土 炭化物を多量含む。色調暗い。
12. 10YR3/1 黒褐色粘質土 暗灰黄色砂質土をブロック状に炭化物を多量含む。
13. 10YR2/1 黒色粘質土 炭化物を多量含む。
14. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 炭化物を少量含む。土器が出土。
15. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 炭化物を少量、植物質をやや多く含む。土器が出土。
16. 5Y3/1 黒褐色砂質粘土 炭化物・植物質を少量含む。
17. 5Y3/1 黒褐色土 シルト質。やや砂質を呈す。植物質・木片をやや多く含む。
18. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 炭化物を少量含む。
19. 10YR3/2 黒褐色粘質土 植物質を多く含む。
20. 10YR2/1 黒色土 木片を含む腐植土。14・15層より少ないが土器が出土。
21. 10YR2/1 黒色土 20と同様に腐植土が主体。褐灰色砂を層状・ブロック状に多量含む。
22. 10YR5/1 褐灰色土 シルト質。灰白色シルトを多量含む。炭化物を少量含む。
23. 10YR5/2 灰黄褐色土 シルト質。灰白色砂・褐灰色土を少量含む。
24. 5Y5/2 灰オーリーブ色砂質粘土 上層は地山となる。

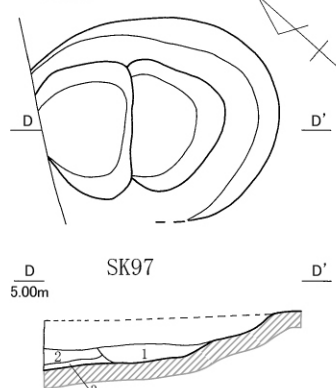
第29図 4区遺構図4 (縮尺1/80・1/40)



カクラン



SK97

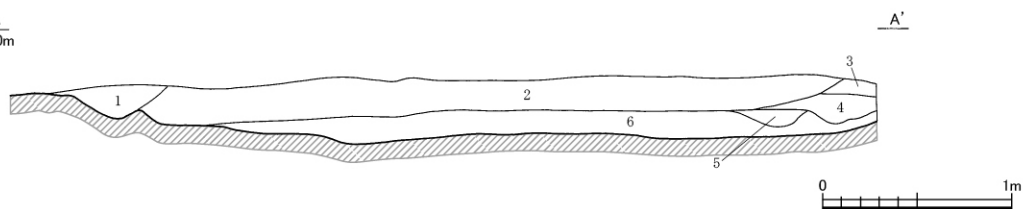


SK97

1. 2.5YR5/2 黒褐色土 地山の砂質土ブロックを含む。
2. 2.5Y3/2 黒褐色土 1より砂質ブロックが少ない。
3. 2.5Y3/2 黒褐色土 灰褐色砂質土を含む。

SD115

1. 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 固くしまる。土器片を含む。
2. 10YR4/1 褐色粘質土
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 固くしまる。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 4よりしまり強い。
5. 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘質土 固くしまる。
6. 5PB4/1 暗青灰色粘質土 砂質を呈す。しまり強い。遺物を若干含む。



第30図 立会調査区遺構図 (縮尺 1/100・1/60・1/40・1/20)

第5章 遺物

第1節 土器(図版第17~28、第31~55図、第1・2表)

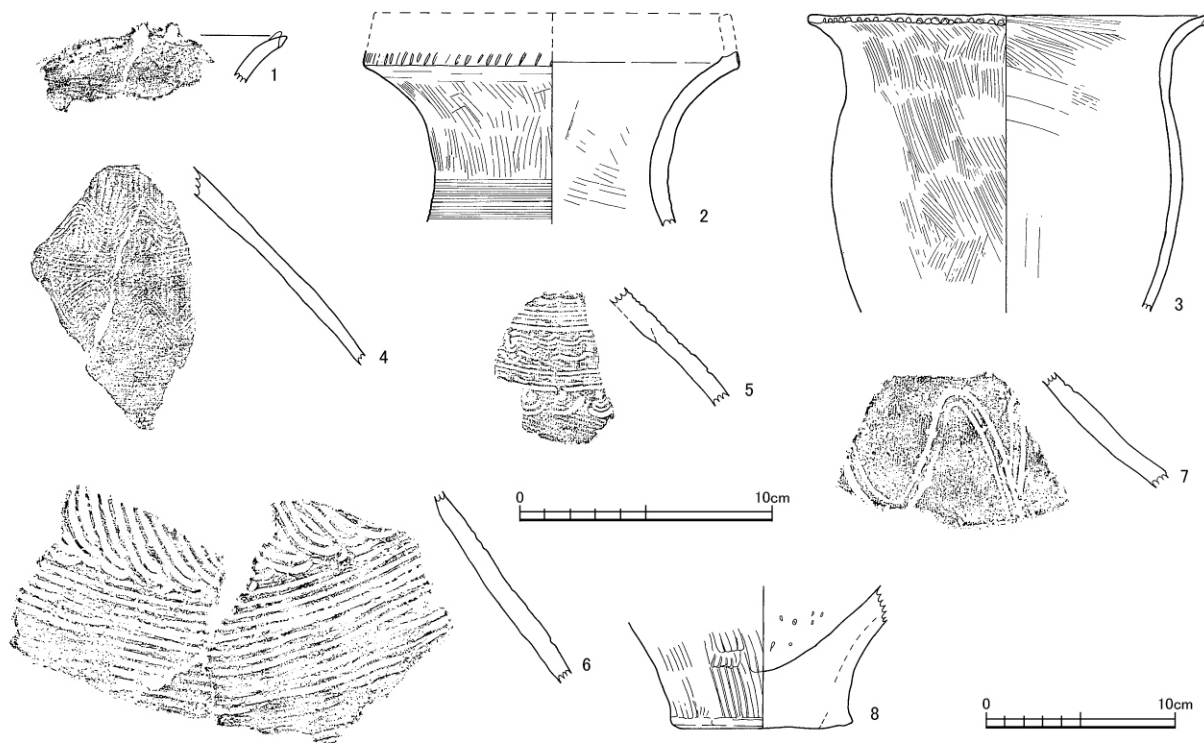
本節では、主に弥生時代中期と古墳時代前期の土器、および縄文土器については、別に項目を設けて記述する。前述した時期以外では律令期や中世の土器があるが、出土量が微量のため、遺構に関連する土器のみを取り上げた。また、全個体の詳述はしないため、詳細は実測図・観察表を参照されたい。

1 1区の土器

ST1出土土器(第31図1~5) 1・3は甕である。1は口縁端部に2個1対の押圧を施す。3の体部内面は、ハケ調整をナデで消している。2・4・5は壺である。2は口縁端部を欠くが連続した刻みを、頸部には櫛描直線文を複数帯施文する。4・5は外面をハケ調整の後、櫛描直線文・波状文を交互に施文し、5の直線文下には扇形文を施す。これらは弥生時代中期中葉に属す。

SK14出土土器(第31図6~8) 壺の体部・底部片である。6は横方向の条痕調整の後、跳ね上げ文を施文する。7は半裁竹管状の工具を使用し、波状文を施文する。

ST2出土土器(第32図9~28) 9~15は壺の口縁部で、9~13の口縁部は受口状ないし袋状を呈する。9の口縁部下の刺突間は無文とし、ミガキを施す。10は口縁下端の沈線施文後に、下方向から押圧を施す。11の口縁外面には、おそらく横方向の羽状となる櫛状条痕を施し、12はハケ工具により施文する。11・12は口縁端部に刻み目を施す。13は口縁端部を欠いている。櫛状施文具は外面と内面で異なる原体を使用している。14の内面にはハケ工具による斜位の刺突と三角形の刺突を交互に施すが、明瞭な羽状を呈してはいない。15はハケ調整のみと考える。壺の体部片には流水文と考える18や、3条1組の短線



第31図 ST1・SK14出土土器(縮尺1/4, 1・4~7は1/3)

文を弧状または方形区画状に施文する19がある。また、条痕文系の壺の体部では、縦方向の羽状を呈する16、櫛描直線文の後、跳ね上げ文と山形文を施文する20、波状文だけの21がある。22・23は甕の口縁部である。23の甕は頸部の屈曲が弱く、深鉢状を呈する。22は欠損のため不明瞭だが、口縁端部には押圧された箇所がある。26～28は周溝からではなく、墳丘上から出土したものである。26は23と同様頸部の屈曲が弱く、深鉢状を呈する。27・28は同一個体と考えられ、体部のハケ調整は縦方向の羽状を呈する可能性がある。これらは弥生時代中期中葉に属す。

SK17・SD22出土土器(第33図29～35) 29～31はSK17から、32～35はSD22から出土した。29は条痕文系の甕で、口縁端部に2個1組の押圧を施す。30は斜め方向のハケ調整の後、口縁端部を横ナデ調整する。31は櫛描による直線文と簾状文を施文した壺の頸部である。32は甕口縁部で内外面を横ナデ調整する。33・34は櫛描文系の壺体部片、35は条痕文系の壺体部片で、35には半裁竹管状の工具で垂線と弧線を施す。これらは弥生時代中期中葉に属す。

ST3出土土器(第33図36～51) 36は櫛描文系の壺で、内面に櫛状工具を使用した羽状文を施文する。37は口唇部に波状文を施す。櫛描文系の壺には他に、38の半円文を施文したと推定する体部片がある。櫛描文系の甕には口縁端部に刻み目を施す43・44があり、45の櫛描文は他より細い原体を使用する。46～48は条痕文系の甕体部片である。39～41・49～51は沈線文系と考える壺の体部片である。これらは弥生時代中期中葉に属す。

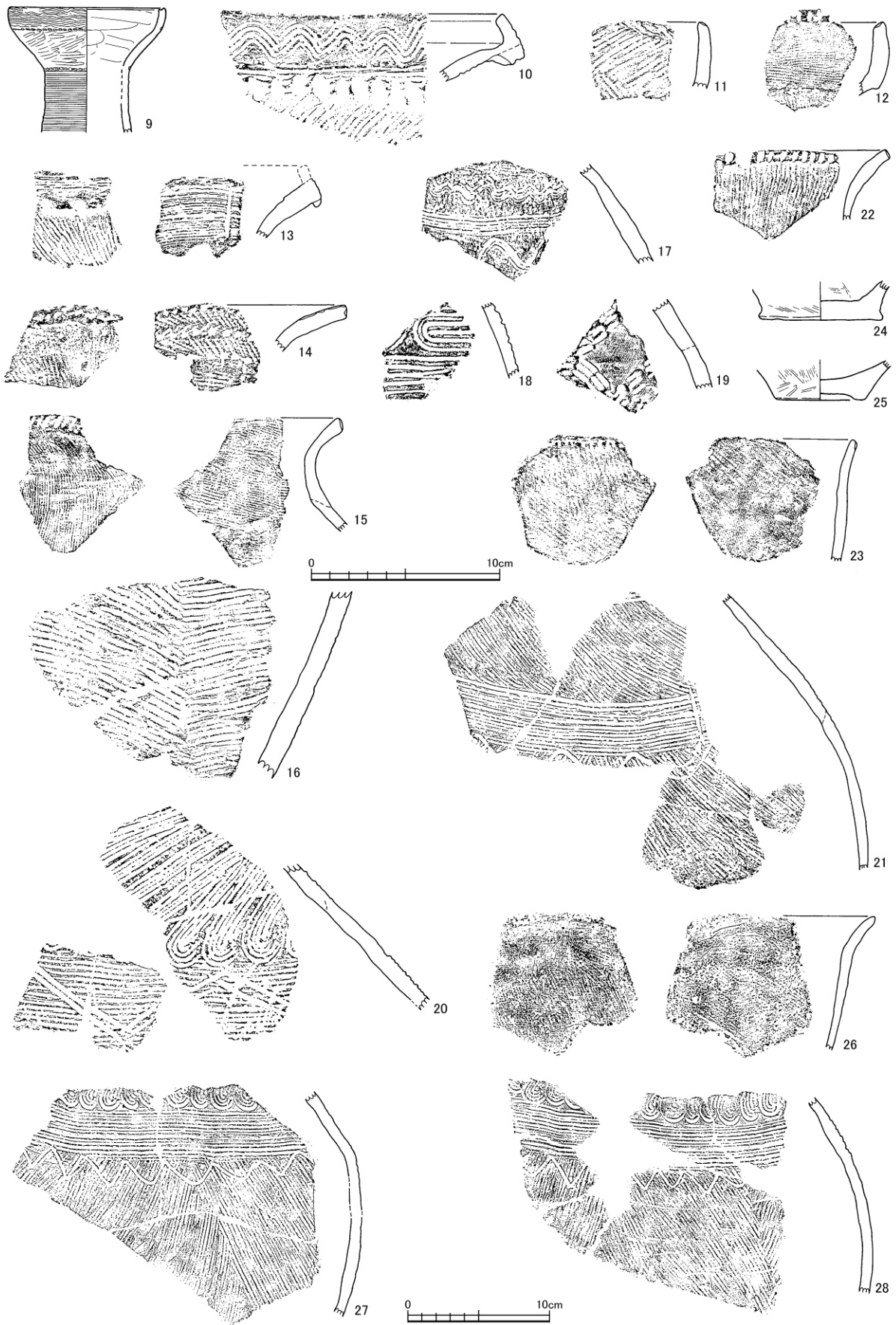
ST4出土土器(第34図52～67) 櫛描文系の壺には52～54・58・59がある。52と54には東海地方の細頸壺の影響が窺われる。甕には55・60～62がある。口縁内面はハケ調整およびハケ後にナデ調整を行う。条痕文系と考えるものには57・63・64がある。57はハケ条痕の後、底面付近を横ナデする。63は内外面を斜め方向にハケ調整し、口縁端部に押圧を施す深鉢型の器形となる。65～67は沈線文系と考える壺・鉢である。65は櫛状工具による弧線文を対に配置し、口縁端部に2列の押引きを施す受口状口縁壺と考える。66は袋状口縁を呈する鉢で、口縁端部には流水文の端部に合わせて突起を有す。赤彩が僅かに残る。67は65と文様構成に共通性がある。なお、56は無文の鉢である。これらは弥生時代中期中葉に属す。

SK25出土土器(第34図68～72) 68は無文の壺で、肩部には赤彩が僅かに残る。70は口縁が広口状に開く甕である。71は把手を有す鉢だが、器形に比して把手は小振りで形骸化したと推定する。被熱している。72は器形および文様構成から、沈線文系と考える壺の口縁部である。

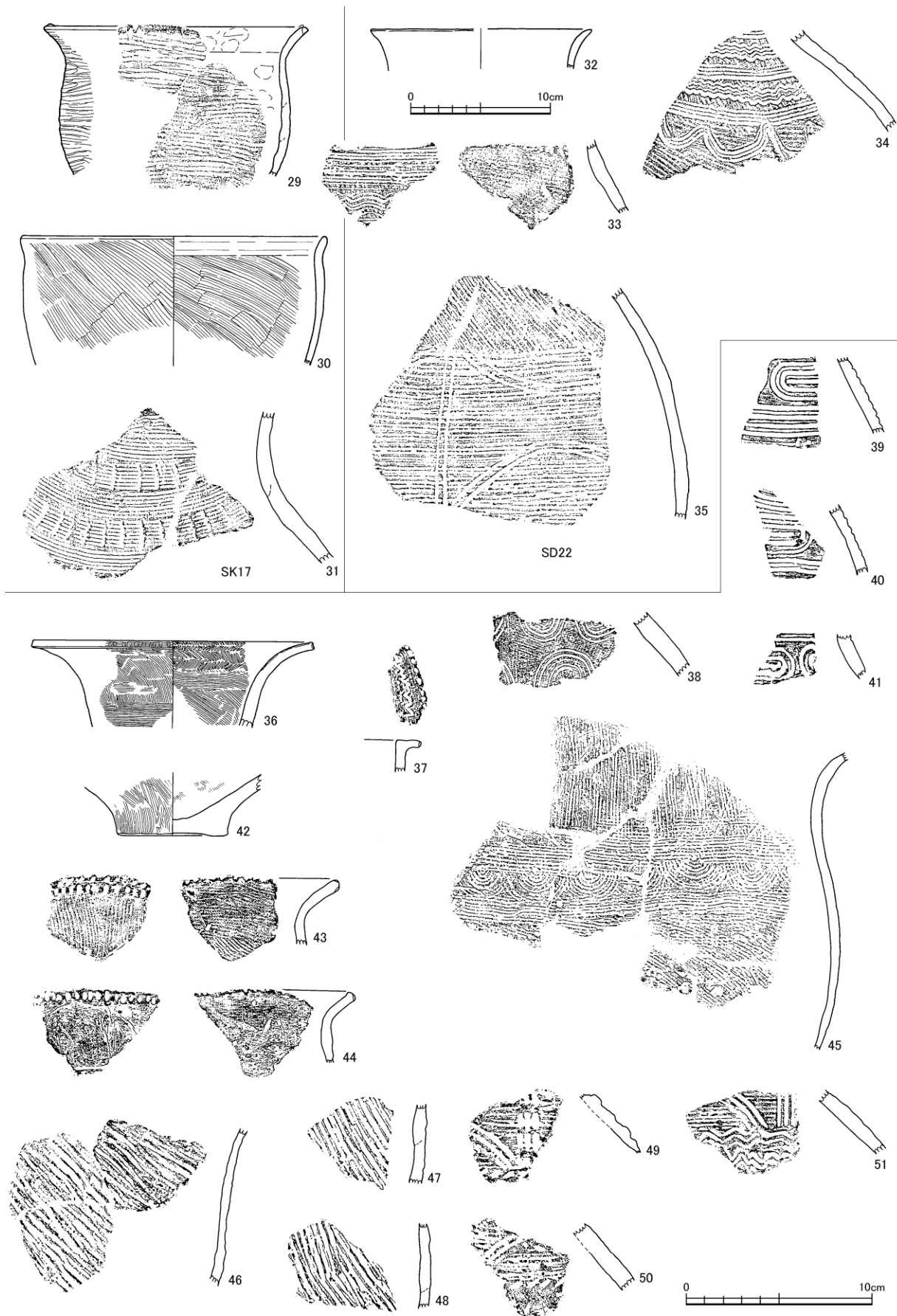
SK26出土土器(第34図73～79) 73は無文の壺で、口縁部を横ナデ調整の後、X状文を施す。74は54と共に東海地方に系譜を持つ細頸壺である。体部の櫛描直線文および縦方向の弧線は浅く細かな原体を使用し、底部は焼成後に穿孔される。75は無文の甕で、口縁部を横ナデ調整する。78・79の底面には木葉痕が残存する。

SK2・4・5・8・9・11・16出土土器(第35図) 80～82はSK2出土である。80の壺の口縁端部は、左下がりの刻みの後、より傾斜した右下がりの刻みで斜格子とする。81は甕の口縁部で、内面はハケの後ナデ調整する。82の壺の体部片には、櫛描直線文の上段にも施文痕がある。83～85はSK4出土である。83の壺には器面調整に条痕文系の影響がある。84の壺は焼成不良のため調整は不明である。85は口径に比して器壁が厚く、調整の粗い小型の鉢と考える。86～90はSK5出土である。86は受口状を呈する条痕文系の壺の口縁で、頸部に残る調整からは跳ね上げ文が崩れたような印象を受ける。87は緩く屈曲する口縁端部は残存不良のため、刻み目の有無などは不明である。底面には焼成後に穿孔される。SK5出土土器は弥生中期中葉でも86は古相、87は新相と考える。90はSK8出土である。内外面をハケ調整し、底面には焼

第1節 土器

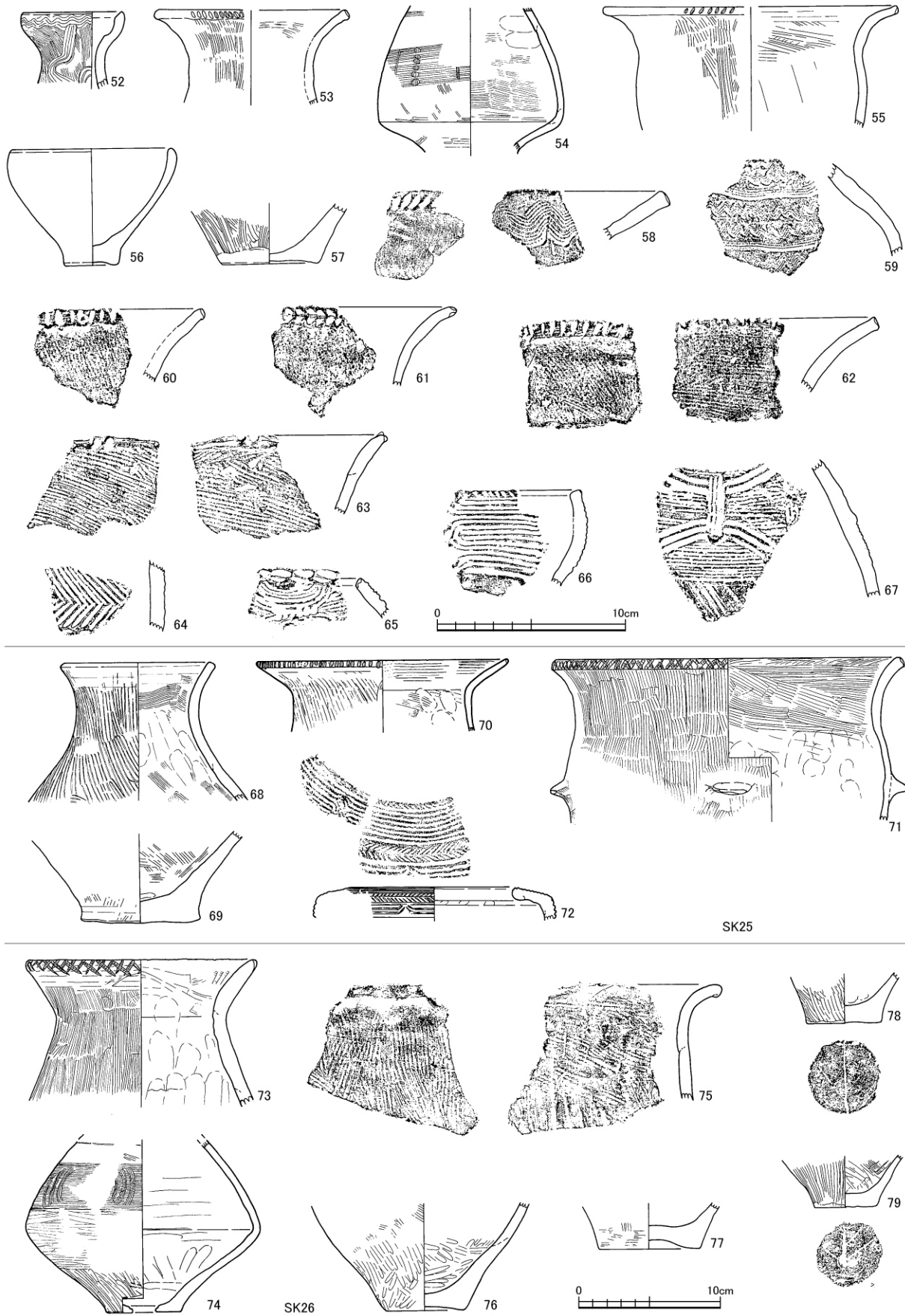


第32図 ST2出土土器（縮尺1/4, 10~20・22・23・26は1/3）

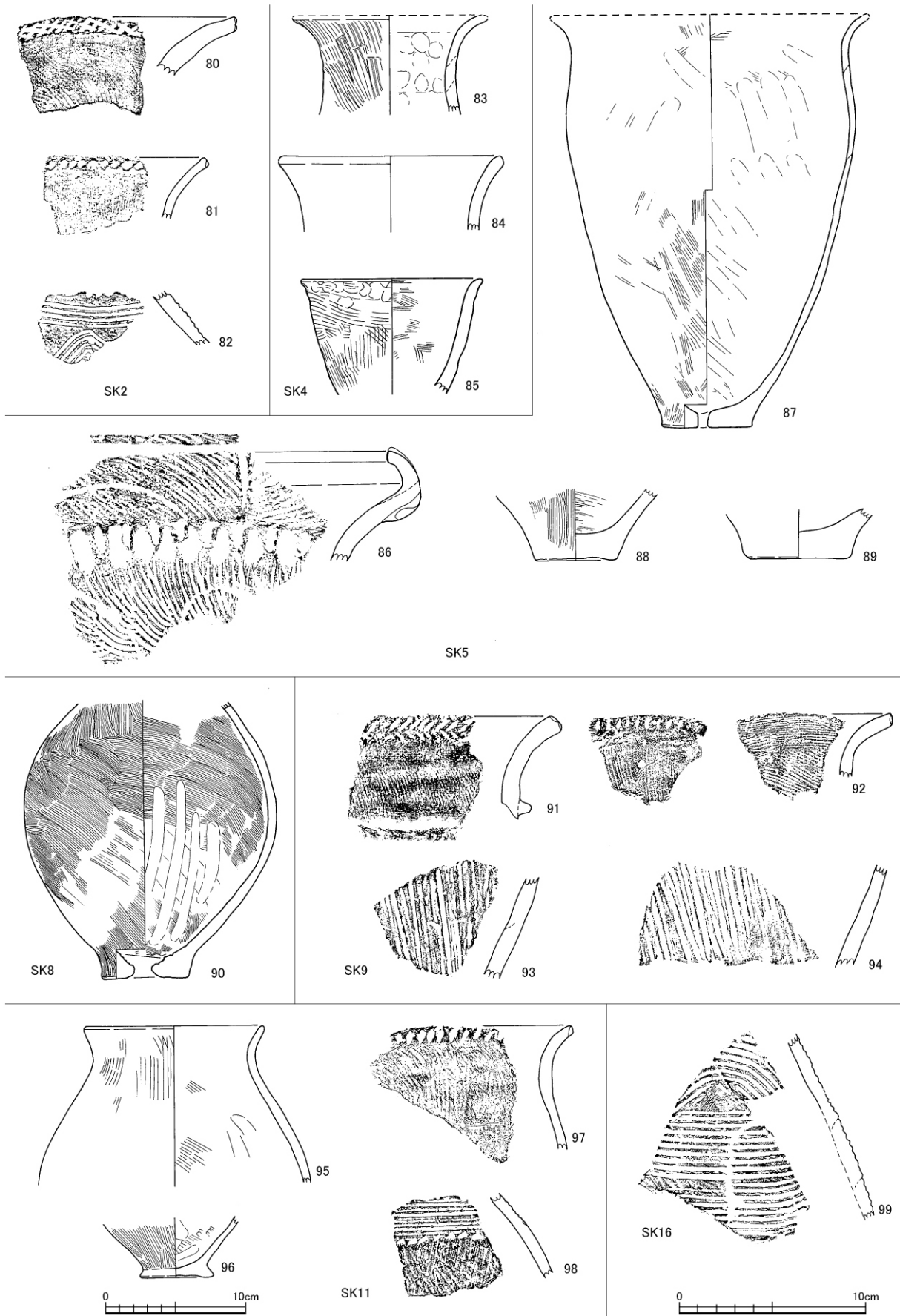


第33図 SK17・SD22・ST3 出土土器 (縮尺 1/3, 29・30・32・36・42は 1/4)

第1節 土器



第34図 ST4・SK25・26出土土器(縮尺1/4, 58~67・72・75は1/3)



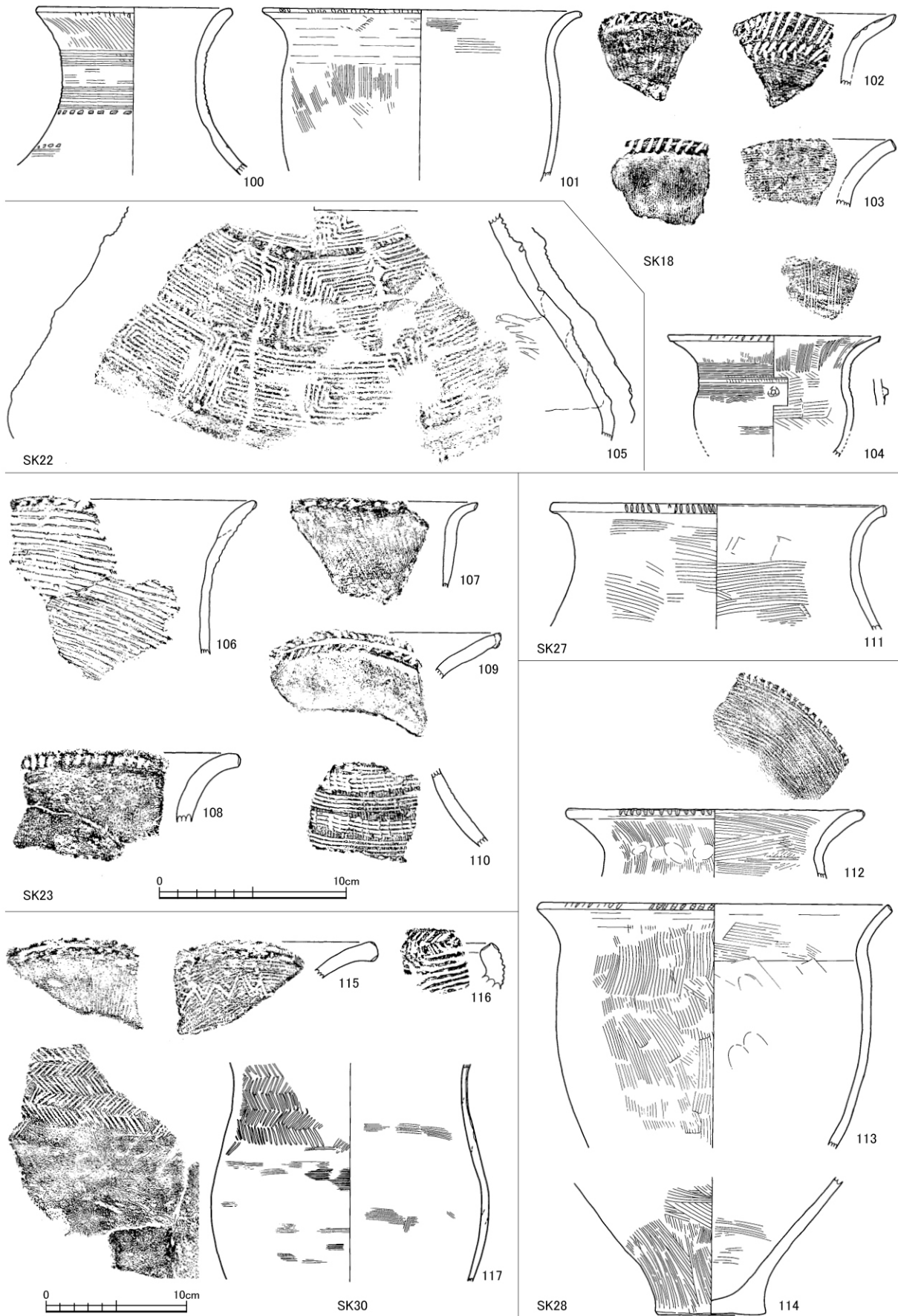
第35図 SK2・4・5・8・9・11・16出土土器 (縮尺1/4, 80~82・86・91~94・97~99は1/3)

成後に穿孔される。弥生中期後葉でも古相と考える。91～94はSK9出土である。91は広口となる壺で頸部に突帯を有す。93・94は条痕文を施す体部片である。95～98はSK11出土である。95は短頸壺である。98の壺体部には、櫛描直線文の下に三角形刺突を施す。96は壺の底部で底面が横に張り出す。99はSK16出土で条痕文系の壺の体部片である。

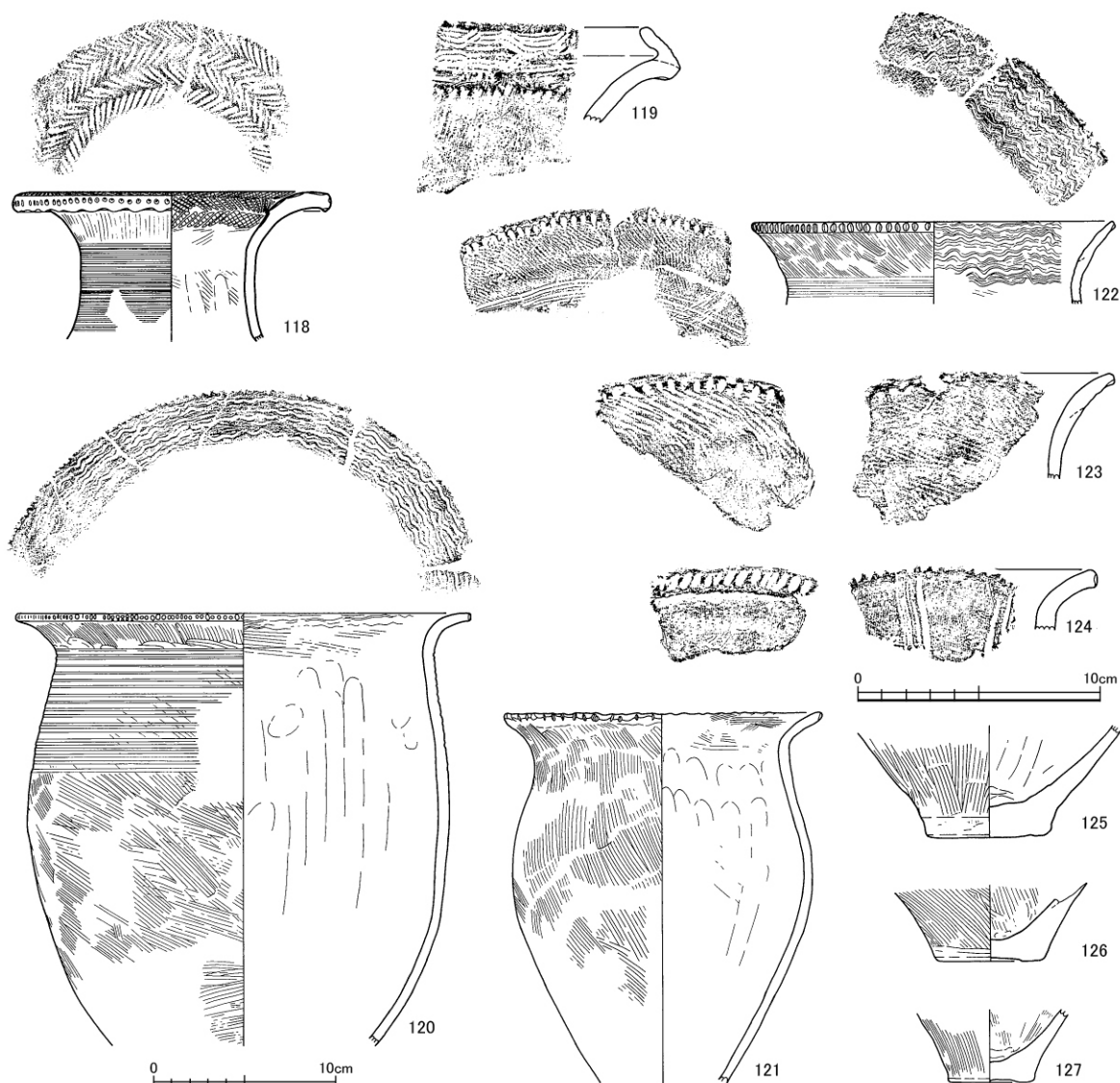
SK18・22・23・27・28・30出土土器 (第36図) 100～104はSK18出土である。100は幅の広い櫛描直線文と頸部に刺突を施す。斜め方向の櫛条痕と、刺突間の無文帯は東海地方の影響の可能性もある。101の甕は口頸部を横ナデ調整し、端部に刻み目を施す。102の口縁端部にはX状文、内面は崩れた羽状文が施文される。103の内面にはハケ調整が残る。104の鉢は外面が被熱により器面が荒れる。突起は1箇所残存し、口縁内面に垂線を施す。これらは弥生中期中葉でも新相となる。105はSK22出土であるが、破片の大部分は包含層出土の沈線文系の壺である。突帯内の沈線は上下で構成を違えて充填される。106～110はSK23出土である。106は条痕文系の甕で口縁端部に刻み目を施す。107の甕口縁部は短く屈曲する。109は壺口縁で沈線の後に上下から刻み目を、110は櫛描直線文と簾状文を交互に施す。111はSK27出土である。横および斜め方向のハケを主体とする甕である。112～114はSK28出土である。113は口縁端部に刻み目のみを施す無文の甕で、112の口縁下のナデの幅は狭い。115～117はSK30出土である。115・116は壺口縁部片で、115は磨滅のため不明瞭だが、内面に櫛描波状文を施す。116は沈線文系に通有の長楕円状の施文がなされる。117は被熱しており甕として使用されたと考えるが、ヘラ状工具による羽状文の施文箇所を頸部ととらえ、他の類例から器形を推定すると広口壺状を呈する可能性がある。弥生中期中葉に位置づけられる。

SK32出土土器 (第37図) 118は口縁部に円形刺突や押圧、羽状文を、頸部に櫛描直線文を密に複数帯施文するなど加飾された壺である。119は条痕文系の壺で、上下反転させた弧線の文様構成は多い。120は櫛描文系の甕で、体部外面は斜め方向のハケ調整だが、口縁外面は縦方向、口縁内面は横方向となる。頸部には弧状に条痕を施した後、肩部に沈線間が広めとなる施文具で櫛描直線文を施す。肩部の直線文は近江地方の影響が窺われる。122の口縁は緩く外傾し、口縁内面には頸部付近まで波状文を施す。124は内面を横ナデ調整の後、垂線を施す。121は口縁端部に刻み目を施すのみの無文の甕で、123も同様となろう。また、125～127の底部片には120・124に該当するものではなく、118とも胎土・器表面では該当すると判断しがたい。これらは弥生中期中葉でも新相を呈すると考える。

SK33・34・37・38出土土器 (第38図) 128～132はSK33出土である。128は条痕文系の壺で、図上で復元した。櫛描直線文と波状文を交互に下から上の順で施文しており、また波状文の振幅は小さく、崩れた印象を受ける。確認できる上段の波状文は各弧線の端部を重ねるように施文している。129は条痕文系の甕である。調整は粗い櫛状条痕だが、器形は櫛描文系に通有のものである。130は口縁端部に刻み目を施し、ハケ調整のみの無文の甕、131は櫛描直線文と波状文を、上から下の順で施文する甕の体部である。132は有孔円盤である。これらは弥生中期中葉でも新相に位置づけられる。133～135はSK34出土である。133は口縁を上下から押圧し、小波状とする壺である。壺・甕とも、小波状を呈するものは少ない。134は無文の甕で、器壁は厚手である。同じく厚手の135と同一個体となろう。弥生時代中期中葉に位置づけられる。136～138はSK38出土である。3点は口縁端部に1条の沈線を有す広口壺である。136は沈線のみで、頸～肩部は無文である。137は、ハケ工具による斜め方向の刻み目の後、同じ工具で横方向の刻み目を連続させて沈線状とする。138は上段の刻み目、沈線、下段刻み目の順で施文する。これらは口縁内外面の加飾が少なく、弥生中期後葉でも古相と考える。139はSK37出土である。頸部には櫛描直線文が施文さ



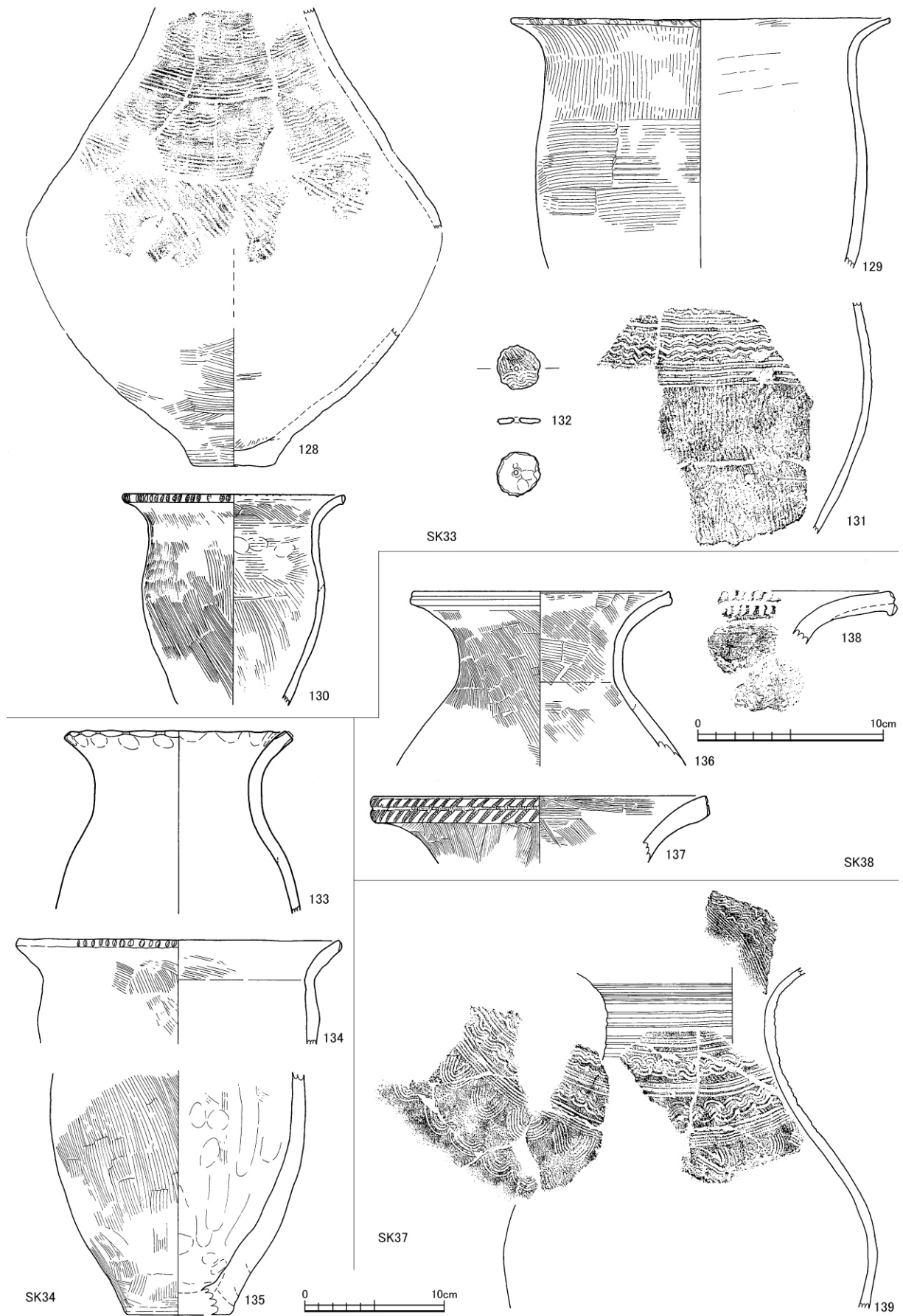
第36図 SK18・22・23・27・28・30 出土土器 (縮尺 1/4, 102・103・106~110・115・116は 1/3)



第37図 SK32出土土器（縮尺1/4, 119・123・124は1/3）

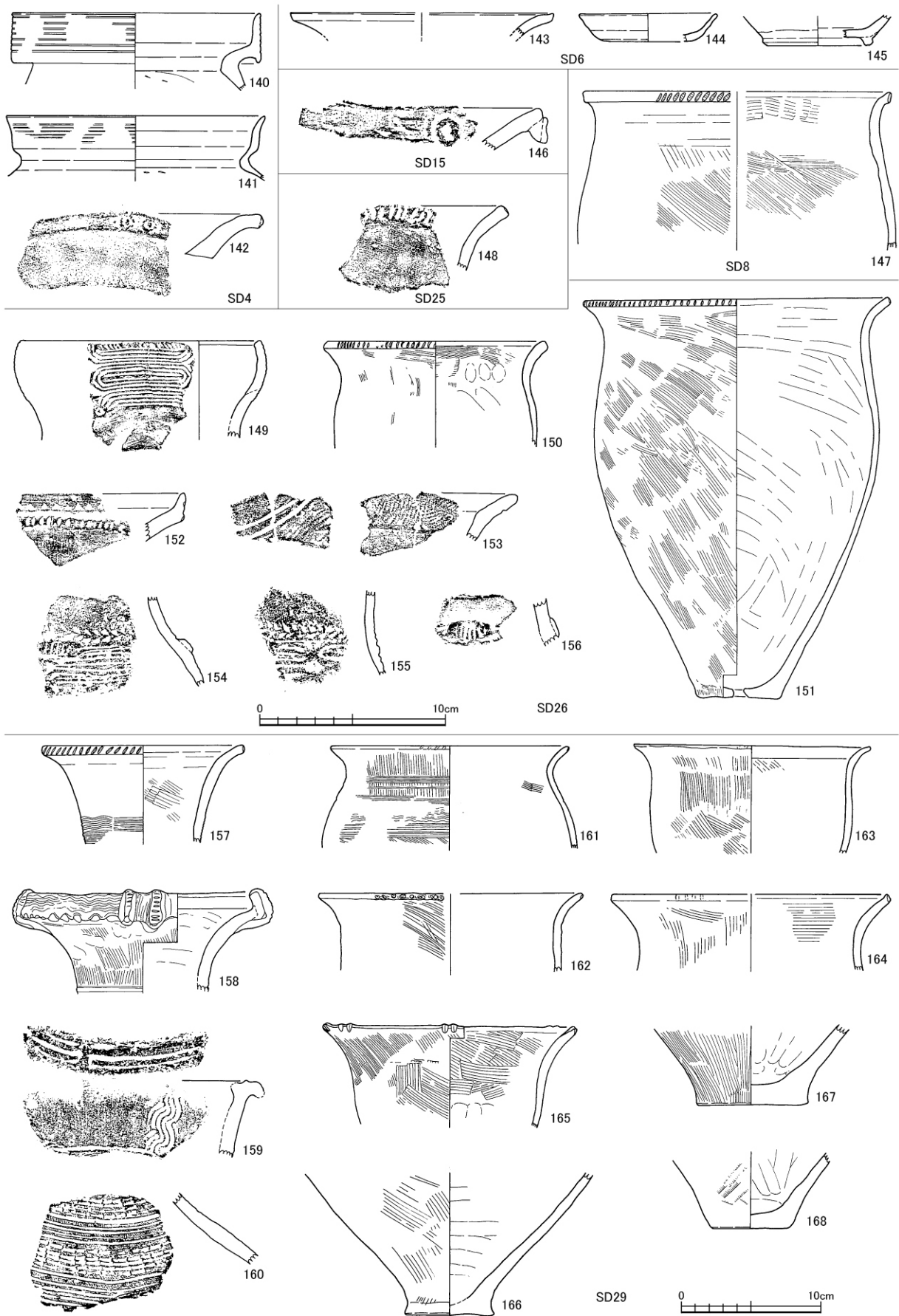
れ、肩部にはそれに波状文が加えられる。口縁内面には波状文を施文する。弥生中期中葉に位置づけられる。

SD4・6・8・15・25・26・29出土土器（第39図） 140～142はSD4出土である。140・141は有段口縁甕の口縁部である。142の壺口縁部には円形浮文を貼り付ける。140は弥生時代後期後葉に、141・142は弥生時代終末～古墳時代前期前葉に位置づけられる。143～145はSD6出土で須恵器を含む。143は破片のため明確ではないが、口縁部が「く」の字状に屈曲する長胴を呈する甕である。144は須恵器の無台坏である。145は須恵器の瓶と推定する。146はSD15出土の壺口縁部である。おそらく2個1組と考えられる円形浮文が1箇所残存する。147はSD8出土の甕である。口縁部はあまり伸長せず、わずかに屈曲するのみである。148はSD25出土の甕口縁部である。口縁端部に刻み目を有す。149～156はSD26出土である。150・151は無文の甕で、口縁端部を横方向にナデ調整を行い、刻み目を施している。151の底面は焼成後に穿孔されている。器形は87と似ており、外面の調整は斜め方向主体のハケ調整を施す。152は壺口縁部で、外面は強い横ナデ調整により凹線状を呈する。149は沈線文系の鉢、153～156は同じく沈線文系の壺である。149は口縁が袋状を呈する。接合はしないが、66と同一個体と推定する。153は突出部を有する壺の口縁部で、



第38図 SK33・34・37・38 出土土器 (縮尺 1/4, 131・138は1/3)

第1節 土器

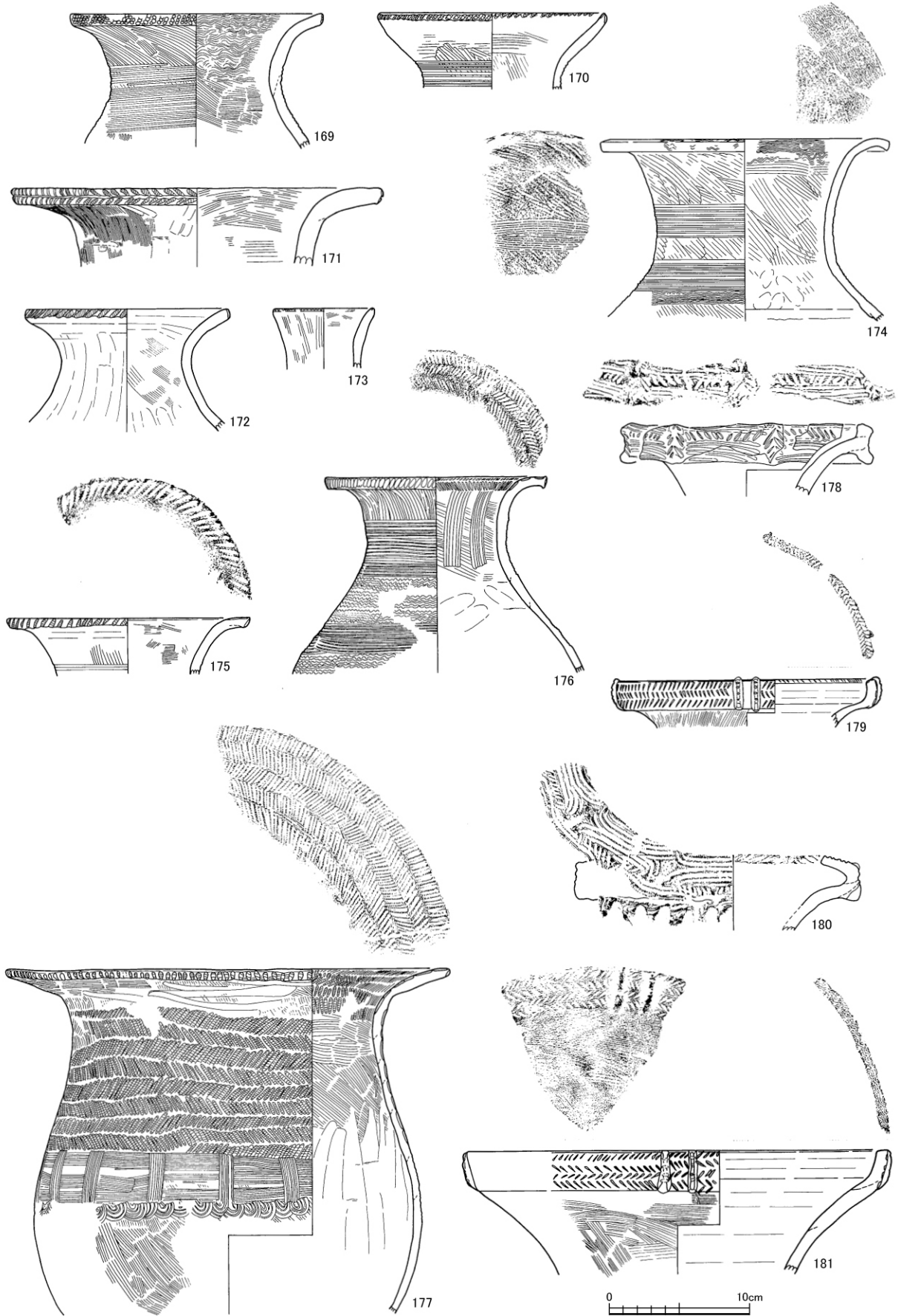


第39図 SD4・6・8・15・25・26・29 出土土器 (縮尺 1/4, 142・146・148・152~156・159・160は1/3)

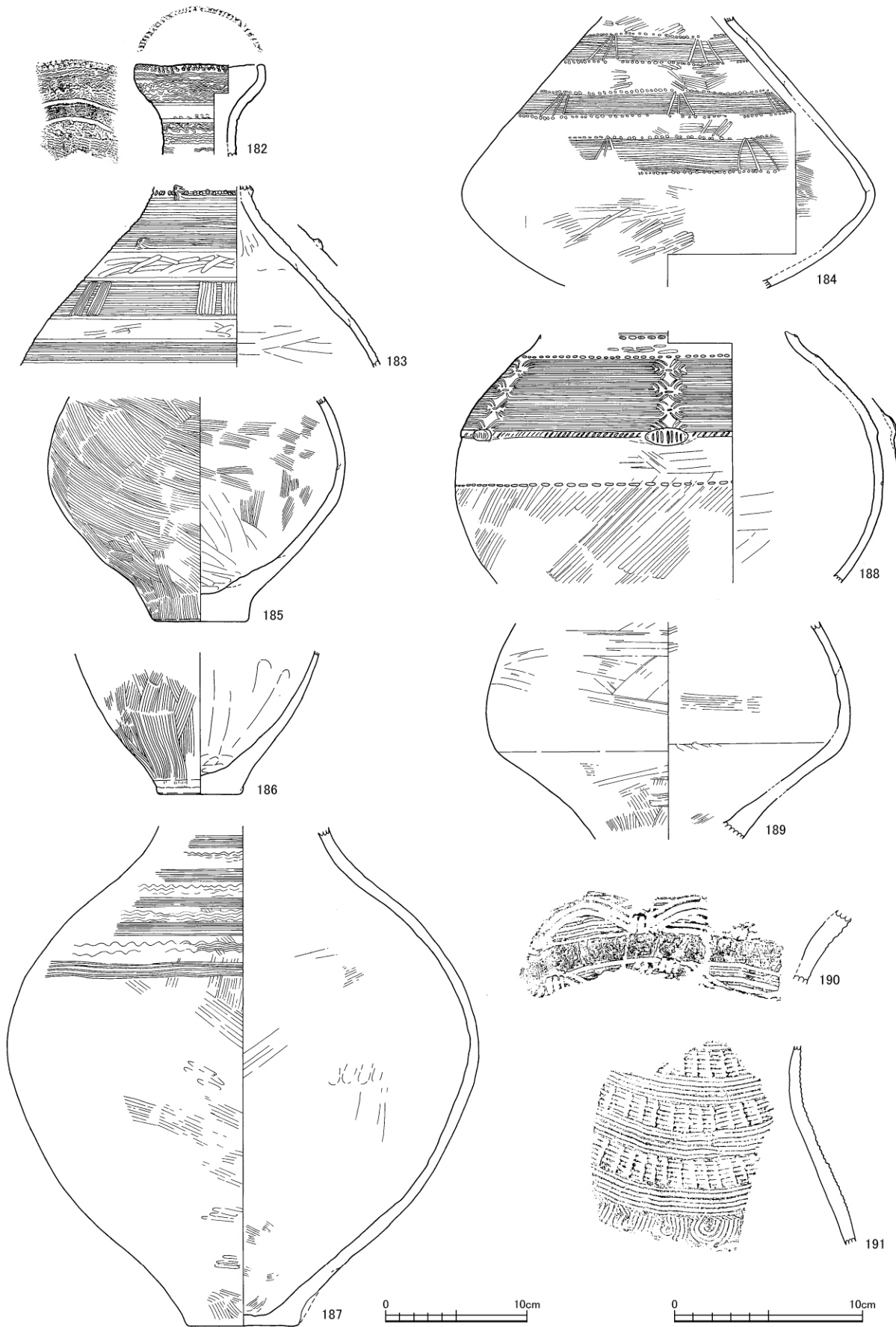
外面は沈線の内外および内面上部に縄文を施文する。154・155・156は同一個体の肩部または頸部片であり、154・155は沈線文系の壺に通有な浮文や菱状ないしレンズ状の区画が、156は楕円形状の浮文片があり、ヘラによる刻み目を有する。これらの破片は小片かつ出土量が少ないため、明確な器形は判断し難い。これらのSD26出土土器は弥生中期中葉でも新相だが、153～156は中期前葉に位置づけられよう。157～168はSD29出土である。157の口縁内面は無文である。159の外面の縦方向の櫛描波状文は、条痕文系の影響を指摘しうる。158の受口状を呈する壺は条痕文系の器形だが、ハケ調整および櫛状工具による施文がなされる。161は櫛描直線文・波状文が施文されるが、162～164は無文の甕で、162は斜め方向主体のハケ調整である。165は鉢器形を呈し、2個1組の押圧を施す。これらは弥生中期中葉に位置づけられよう。

SD30出土土器(第40～43図) 169～191は壺である。169・174は、頸部の斜め主体のハケ調整や櫛描直線文、口縁内面の波状文、口縁端面の加飾など共通した調整・文様構成である。175・176も、文様構成には共通性があるが、調整は縦方向のハケ調整で、176には条痕文系の加飾である垂線を内面に有す。170は口縁が緩く内湾し、斜め～横方向のハケ調整後、口縁内外面を横ナデ調整する。171は頸部以下の直線文の有無は不明だが、幅広い口縁内面には加飾されない。172は無文と推定する。173は細頸壺で、口縁端部に細かな刻み目を有する。177の口縁は大きく外反し、太い頸部には広範囲に施文されることから、ここでは広口壺として扱う。頸部から体部上半にかけてと、口縁内面にハケ工具による刺突をおそらく螺旋状に密に施し横羽状を構成する。文様の最下部には扇形文を配置するが、残存部分では1箇所のみ垂線から続けて扇形文を施文する箇所がある。このような器形は沈線文系の影響を受けたと推定するが、施文方法は櫛描文系の土器に使用される通有なものである。178～181は受口状を呈する口縁部で、178と180は粘土塊を貼付け小突起とする。180は破片を図上で復元したものだが、大きく内傾する口縁外面に、弧線およびヘラ刻み目が反転する文様構成で、沈線文系の影響が窺える。178は口縁端部形態が異なるものの同様の影響が窺え、文様構成は180が崩れた印象である。179と181は2本1組の刻み目を有す棒状浮文で区画する。179はハケ調整が縦方向主体、181は横～斜め方向主体となる。182～184・189の器形は東海地方の貝田町式に由来する。184は細かな櫛描直線文の上下を列点文で画し、列点文間をミガキ調整する典型的なものと言えよう。直線文上には三叉状のヘラ描きを加える。胎土は砂粒が細かく、色調もやや白色を呈しており、搬入品の可能性がある。182・183は同一個体である。184と比較すると櫛描直線文は粗く、直線文帯を区画する沈線は太めである。上部の直線文帯の上下には円形刺突を施す突起が上下各1箇所残存する。189は肩部以上の文様の有無は不明だが、外面は板状工具によるナデ調整がなされる。187は大型の壺で、櫛描直線文・波状文を単帯で交互に施文する。188・190は沈線文系の壺で、188の体部は球形を呈し肩部は張らない。刻み目を有す楕円形浮文を基準に櫛描直線文による長楕円形状の文様を施す。胴部下半は斜め方向の櫛条痕で、胴部中位はナデ消している。190は上下で位置をずらした弧線が施文される。192～206は甕である。192～197・201は体部に施文しない甕である。口縁内面をハケおよびナデ調整する192・195・201、ハケ調整のみの193、波状文を施す194・196・197がある。194は推定復元の箇所もあるが長胴化し、196は口縁部に粘土塊を貼付け、197は欠損にかかるため不明瞭だが押圧を加える。201には刻み目を有す楕円形状の押圧がある。破損のため明確ではないが、片口状に他所より窪む箇所がある。195・197は体部上半に横方向のハケ調整を行うが、これは櫛描直線文を意識、または近江地方の影響の可能性があり、厳密には無文とすべきではないかもしれない。198～200・203は肩部に櫛描による文様がある甕である。198は粗いハケ調整を施し、原体を変えて斜め方向のハケ条痕を加える。調整・文様構成は120と似る。近江地方の影響であろう。199は調整・文様構成に壺の169・174との共通性が指

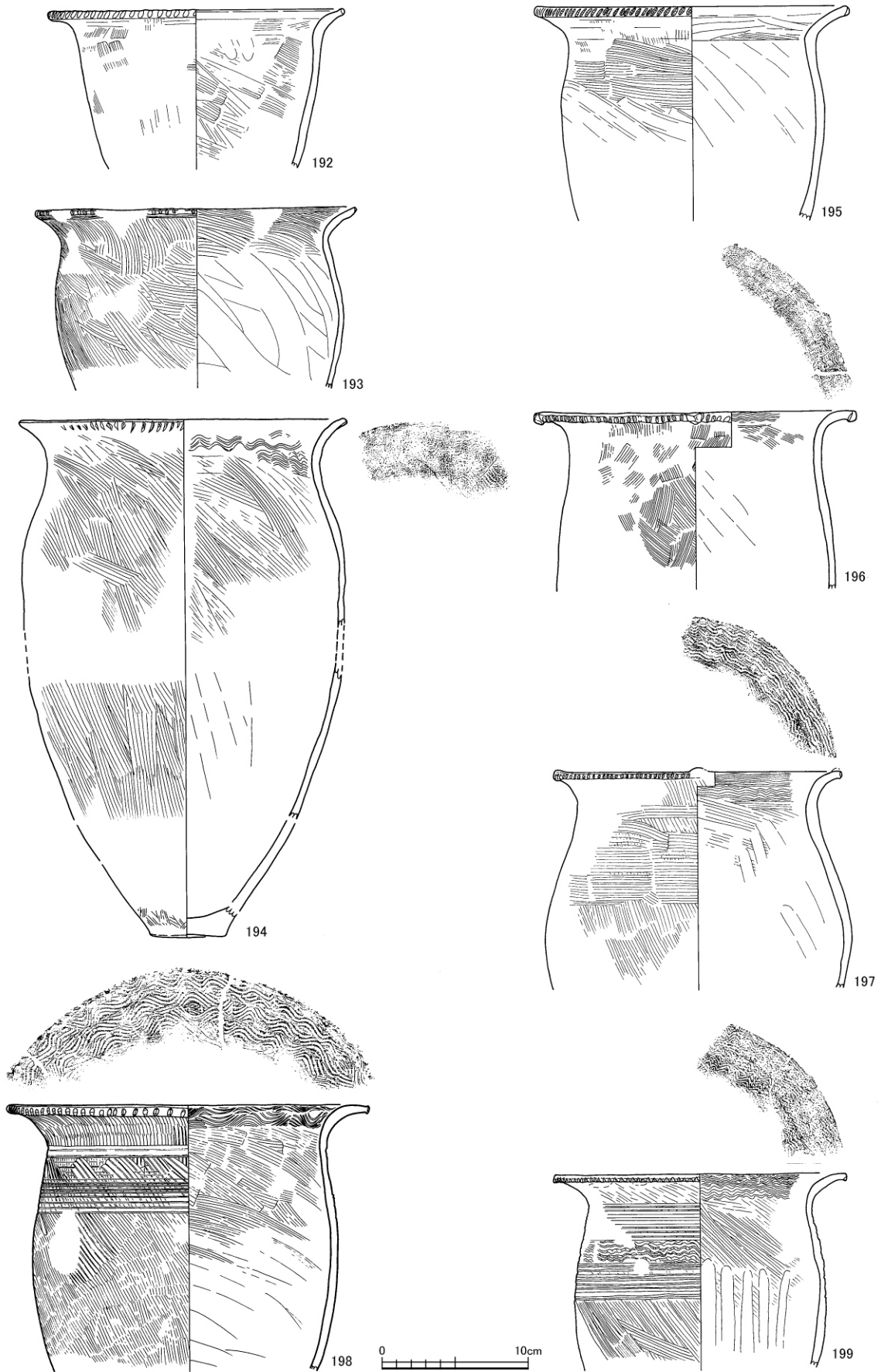
第1節 土器



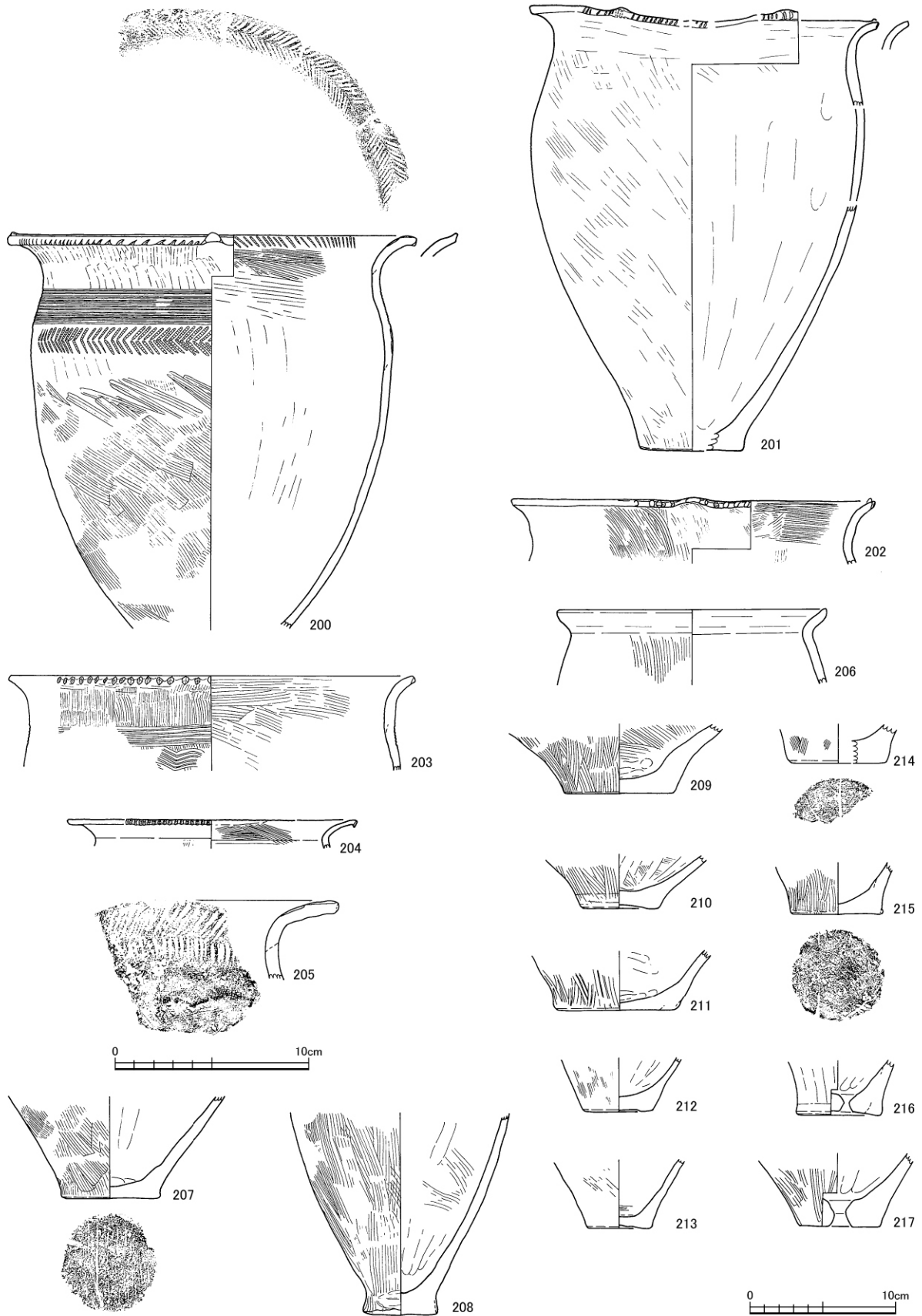
第40圖 SD30 出土土器 1 (縮尺 1/4)



第41図 SD30 出土土器2 (縮尺 1/4, 190・191は1/3)

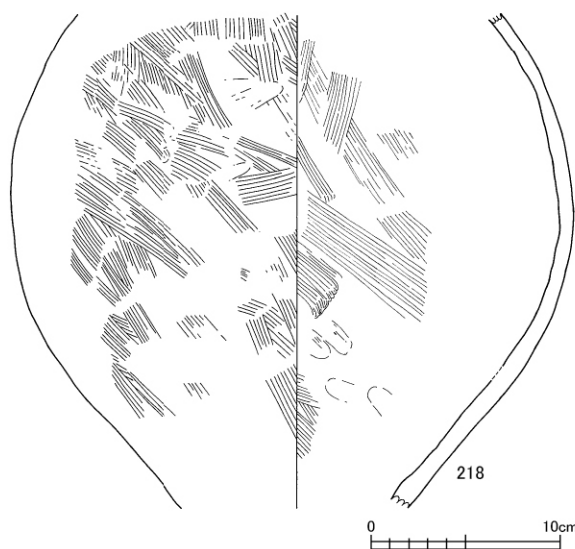


第42図 SD30 出土土器3 (縮尺1/4)



第43図 SD30 出土土器4 (縮尺 1/4, 205のみ1/3)

摘できる。200も198と同様、体部に粗いハケ調整を施すが、頸部から肩部にかけて縦方向の板ナデでハケ目を消した後、異なる原体で胴部中位のみを斜め方向にハケ調整し、櫛描直線文とハケ工具による横羽状文を巡らせる。口縁内面の羽状文は、押圧部分には施文されない。203は口縁の屈曲は弱く、204の口縁は薄手である。205は口縁内面に羽状刺突が施される。破片のため明確にしえないが壺の可能性もある。206は口頸部が「く」の字を呈し、横ナデ調整を施す。ハケ調整のみで、おそらく無文となる。207～217は壺ないし甕の体部下半部および底部片である。207には底面に板状の圧痕がある。214・215には木葉痕があり、216・217は焼成後に穿孔されている。これらSD30出土の土器は弥生中期中葉でも新相に位置づけられよう。



第44図 SP60出土土器 (縮尺 1/4)

SP60出土土器 (第44図) 218は壺の体部である。頸部以上および底部を欠いており、文様の有無は不明である。

1区遺構外出土土器 (第45図) 1区の遺構外出土土器には、遺構出土土器と比較して、復元および図化に適当な土器は思いのほか少ない。そのため、結果的に拓本で掲載可能な刻み目や文様のある壺の破片が中心となっているが、これは実際の出土状況を反映してはいない。

219・220は口縁端部に刻み目を有す壺で、口縁はわずかに外反する。221・222は口縁端部に刻み目を有す甕で、221の調整は頸部以下の横ハケが浅く雑な印象を受け、櫛描文系の甕の規範が崩れたものと考えられる。222は頸部の横ハケが直線的にならず、強く施文したためか口縁との境に段を生じている。口縁端部には2個1組のハケ工具による押圧を施す。223は口縁部が「く」の字を呈す甕だが、口縁部は在地の有段口縁を模したように口縁帯を有す。224～231は弥生時代中期中葉の壺および甕の口縁部である。226には赤彩痕がある。229の内面は櫛描波状文と直線文の組合せとなる。231は刻み目を有しない。232～238は壺および甕の体部片である。235には3条1組の縦方向の単線文が入る。238の頸部内面には刺突が残存する。239・240は底部および体部下半部である。241は高坏の脚部である。242は有孔円盤である。これらの内、241を弥生時代後期後葉に、223を古墳時代前期前葉に位置づける他は、弥生時代中期中葉に位置づけられる。

2 2区の土器

SI1出土土器 (第46図) 243・244は甕である。243は山陰地方に系譜を持ち、口縁下端に稜を有し、口縁部は中程から外反する。244は口縁帯に擬凹線を施す北陸西部地域特有の甕である。外傾する口縁内面の段は緩やかになっている。245は高坏である。246は台付鉢の可能性があり、これらは古墳時代前期前葉に位置づけられる。

SK41・44・47・48・55・56・59・64出土土器 (第47図) 247～249はSK41出土の甕である。247は長胴甕である。248・249は口縁部がく字を呈する。249は小型の甕となり、内面は強いケズリ調整によって段を形成する。248・249は古墳時代前期前葉のものである。247は近接する溝からの混入と考える。250～252はSK44出土である。250は口縁部に擬凹線を施す有段口縁の甕である。251は山陰系の甕で、肩部にハケ状工具

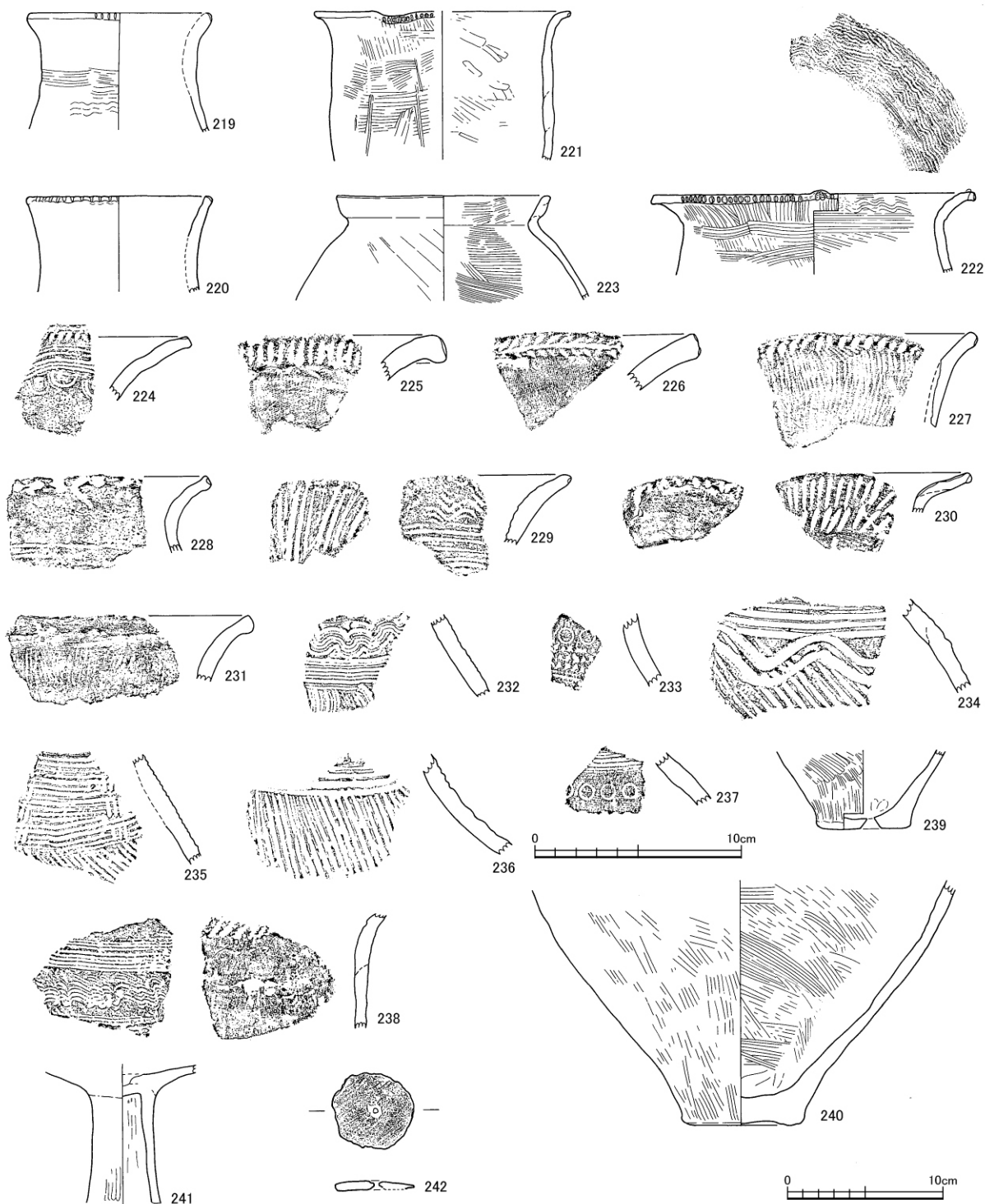
による羽状文を施すが、羽状の形状は崩れている。252は248と同様に口縁が屈曲する。251・252は古墳時代前期前葉に位置づけるが、250は弥生時代終末期のものである。253・254は SK47出土である。253は長頸壺の頸部で、他の土器とは胎土の色調・砂粒が異なるため搬入品と考える。254は甕口縁部片である。弥生時代後期後葉と考える。255は SK48出土である。弥生時代中期の広口となる壺の口縁部片である。256・257は SK55出土である。257は壺の頸部としたが現在のところ類例がない。斜め方向の櫛条痕の後、櫛描直線文とへら状工具による山形文を施す。施文から弥生時代中期と考える。口縁部の形状は不明で、突出部を有す。内面は丁寧なナデ調整を行う。256との時期差から257は混入と考える。258は SK56出土の弥生時代終末期の甕である。肩部にかけて器壁は薄くなる。259は SK59出土の鉢である。内外面にミガキ調整を施す。時期は弥生時代終末期と考える。260は SK64出土の小型壺である。口縁には在地の要素が認められず、体部は算盤玉状を呈する。

SD45出土土器(第48図) 261～267は甕である。261は口縁下端の稜の突出は弱い。262～267は口縁が「く」の字を呈する。基本的に口縁内外面を横方向にナデ調整するが、体部の調整には縦方向を指向するもの(262～264・267)と横方向を指向するもの(265・266)がある。また、262～264の体部は球胴を呈し、262は他より口縁の屈曲は弱い。268は口縁が「く」の字を呈する鉢である。小さな底面を有する。269は台付鉢である。270・272は高坏である。在地の有段口縁を呈すものだが、口縁帯との段はかなり退化している。271・273は器台であり、271は在地の、273は外来の要素を有する。これら SD45出土土器は弥生終末期から古墳時代前期前葉に位置づけられるが、球胴となる甕には在地の要素は認められないものの、高坏・器台には認められ、特に271には古い要素が残存する。

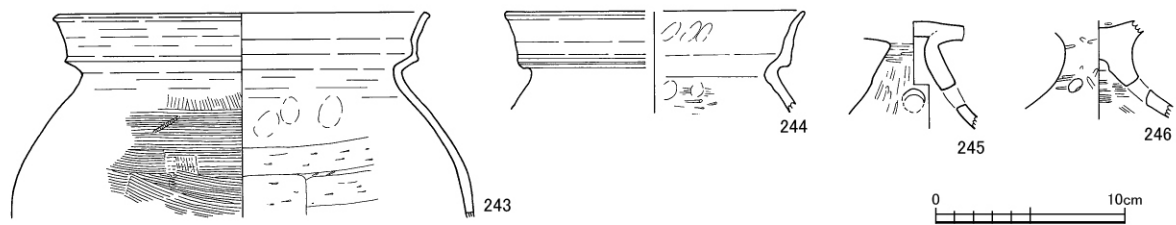
SD33・48・50・55出土土器(第49図) 274は SD33出土の甕口縁部である。端部を丸く収め、肩部は薄く削られる。弥生時代終末期と考える。275～289は SD48出土である。275～277は壺である。275は二重口縁となり、垂下した口縁下端に刻み目を有す。277の口縁の横ナデ調整は内面全体には及ばない。278～282は甕である。278・279は在地の有段口縁甕の要素を残すもので、279は内面の段がかなり緩くなったものである。280～283は口縁が「く」の字を呈する外来の要素を有するものである。281は外面にタタキ調整した後、体部下半はケズリ調整される。内面はハケ調整を施す。282は細かなハケ工具を使用し、胎土も細かく精製した印象をうける。283の口縁端部は内面がやや突出する。284は高坏の坏部、285は同じく高坏の脚部であり、東海地方の影響が窺われる。286～288は器台であり、286・287は北陸西部地方特有の形態を残している。289は手づくね土器である。SD48出土の土器には、弥生時代終末から古墳時代前期後葉までのものが含まれる。290～292は SD50出土である。290は細かなハケ調整を施す壺であり、球胴を呈すと考える。291・292は有段口縁の甕である。これらは古墳時代前期前葉に位置づけられると考える。293は SD55出土の脚台部である。上部は鉢形を呈すると考える。

2区川跡出土土器(第50図) 294～297は壺である。294の口縁は直口となり、頸部との接合痕を明瞭に残す。295の肩部には押圧があるが、意図的か否かは判断しがたい。296は内面の丁寧なナデ調整に対し、頸部には口縁の接合痕を残す。297は球胴を呈する体部だが、やはり頸部には接合痕を残している。他の遺構出土の「く」の字を呈す壺と整形を比較すると、276・290など胎土が浅黄色系の壺と、277・294・297など胎土がにぶい橙色系の壺では頸部処理に精粗がある。298・299は甕である。298の内面の段はかなり形骸化している。300は高坏の坏部、301～303は高坏の脚部である。301と300は同一個体ではないが、301の坏部の形状は300のように口縁部が大きく開く形状となる。303の内面には赤彩がわずかに残存する。304は東海地方に特有の甕の脚部である。これらは古墳時代前期前葉から中葉に位置づけられる。

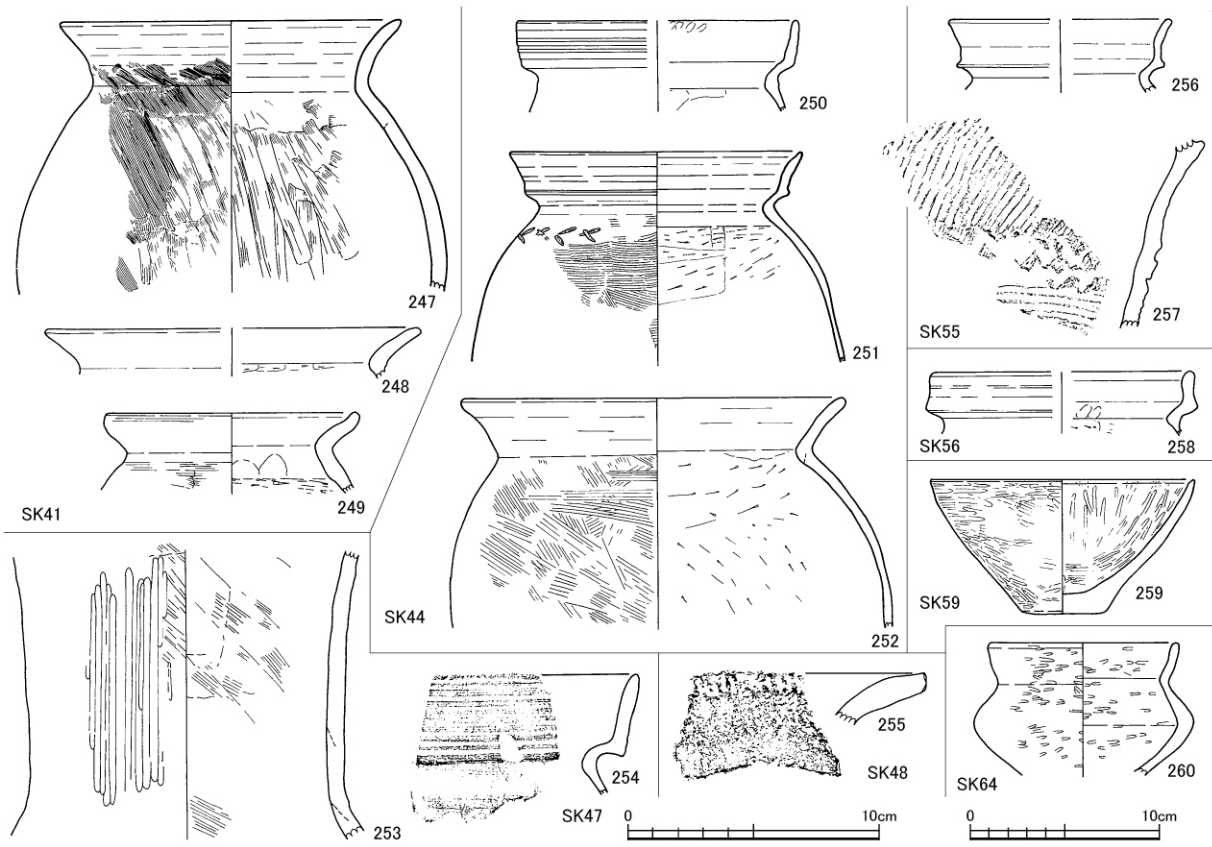
第1節 土器



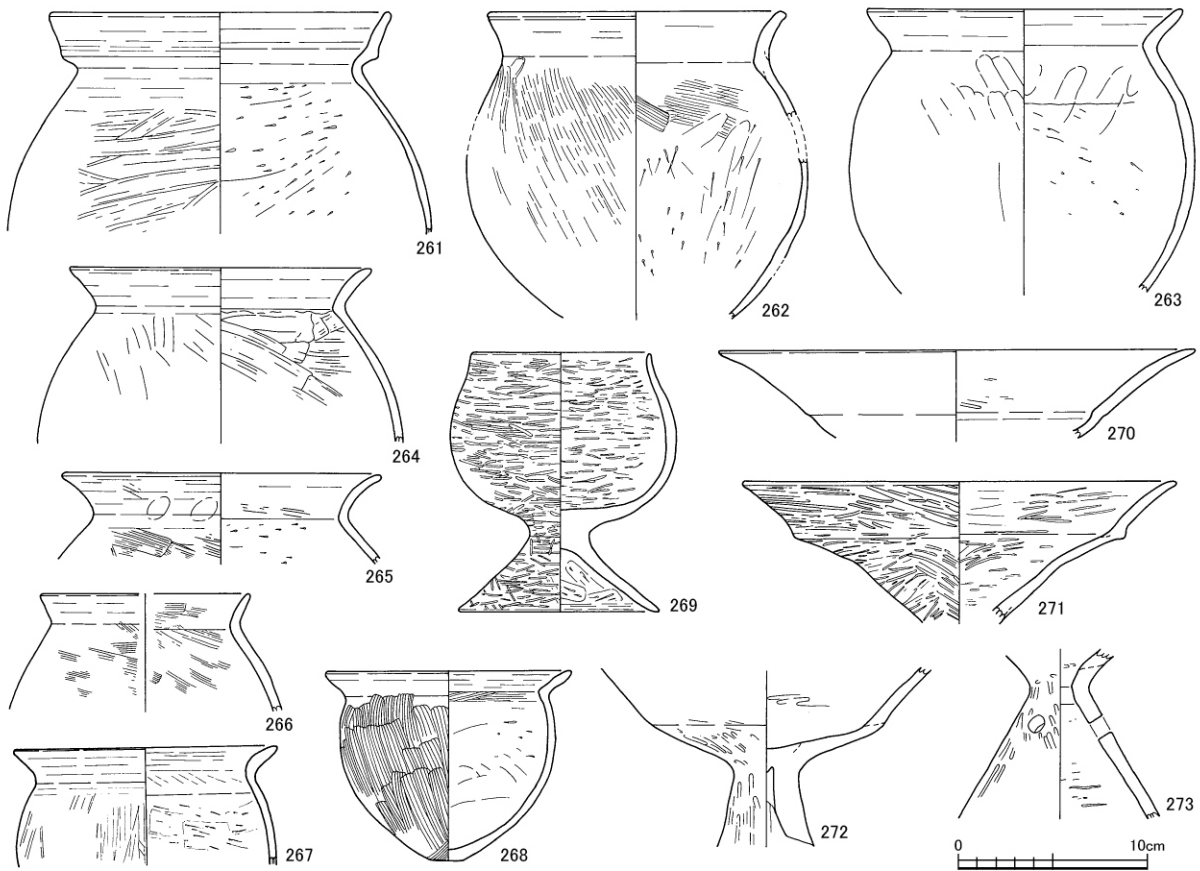
第45図 1区遺構外出土土器 (縮尺1/4, 224~238は1/3)



第46図 SII出土土器 (縮尺1/4)

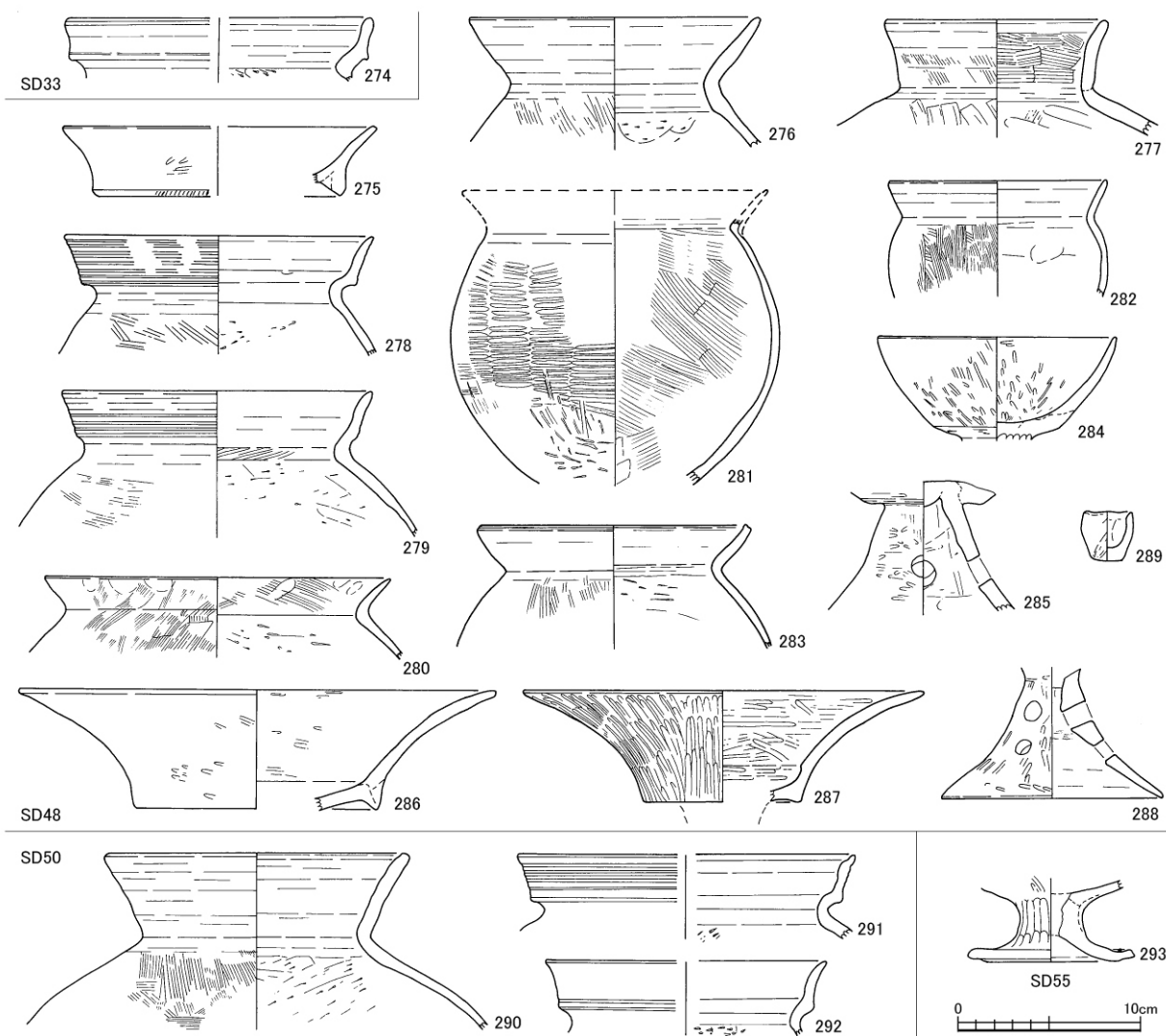


第47図 SK41・44・47・48・55・56・59・64 出土土器 (縮尺 1/4, 254・255は 1/3)

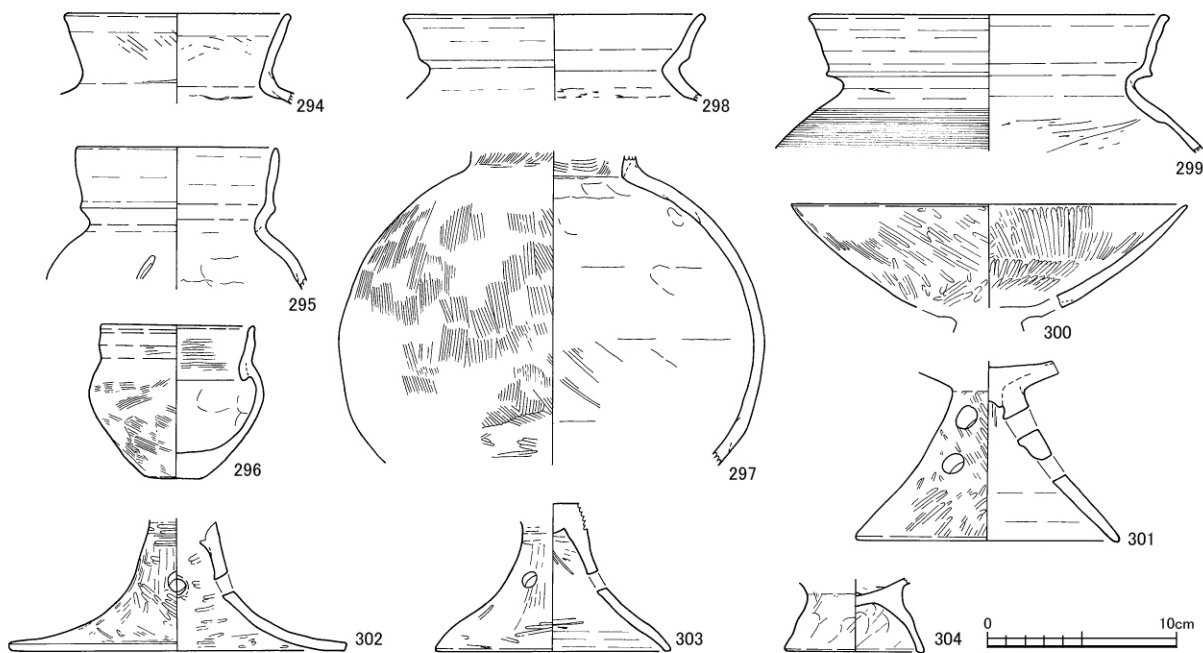


第48図 SD45 出土土器 (縮尺 1/4)

第1節 土器

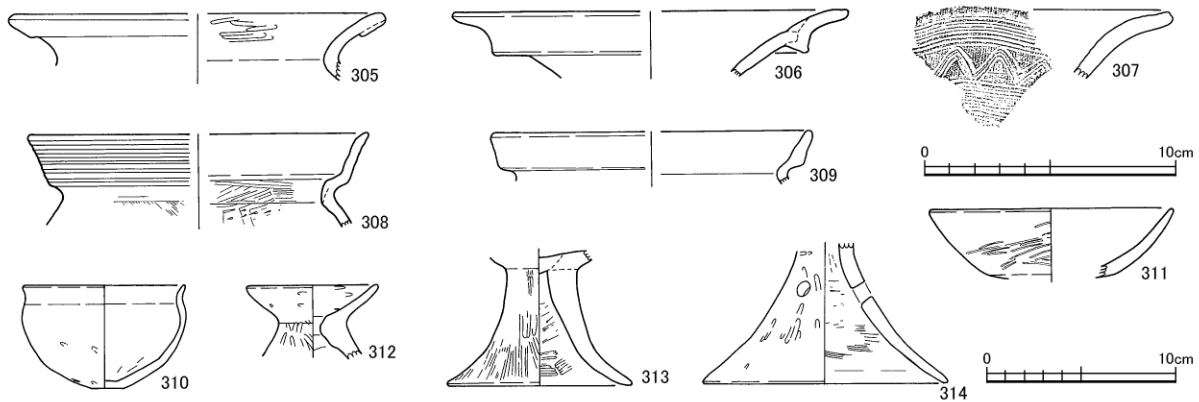


第49図 SD33・48・50・55出土土器 (縮尺1/4)



第50図 2区川跡出土土器 (縮尺1/4)

2区包含層他出土土器(第51図) 包含層および遺構外出土遺物を取り上げる。305~307は壺である。305は口縁に粘土帯を貼付け、内面をミガキ調整する。306は二重口縁となる。307は内面に櫛描直線文と波状文を交互に施文し、口縁端部には刻み目を施さない。弥生時代中期に属す可能性がある。308・309は甕である。310は鉢で口縁が僅かに外反する。311は高坏の坏部である。313は高坏の脚部だが、やや通常の脚部と違い裾部が大きく広がらない。また、調整では外面にハケ調整を残し、内面裾部をミガキ調整する。さらに内面全面が黒斑状になっており、意図的に黒色処理した可能性がある。312は器台の受部である。314は器台の脚部で、303と同様に内面にはわずかだが赤彩痕が残る。これら2区包含層・遺構外出土の土器は、前述した307が弥生時代中期に、308・309は弥生時代終末期に、その他は古墳時代前期前葉に位置づけられよう。



第51図 2区遺構外出土土器(縮尺1/4, 307は1/3)

3 3区の土器

3区出土土器(第52図) 3区出土土器は4点の高坏片を図示し得たのみのため、遺構出土および遺構外出土の土器をまとめて記述する。

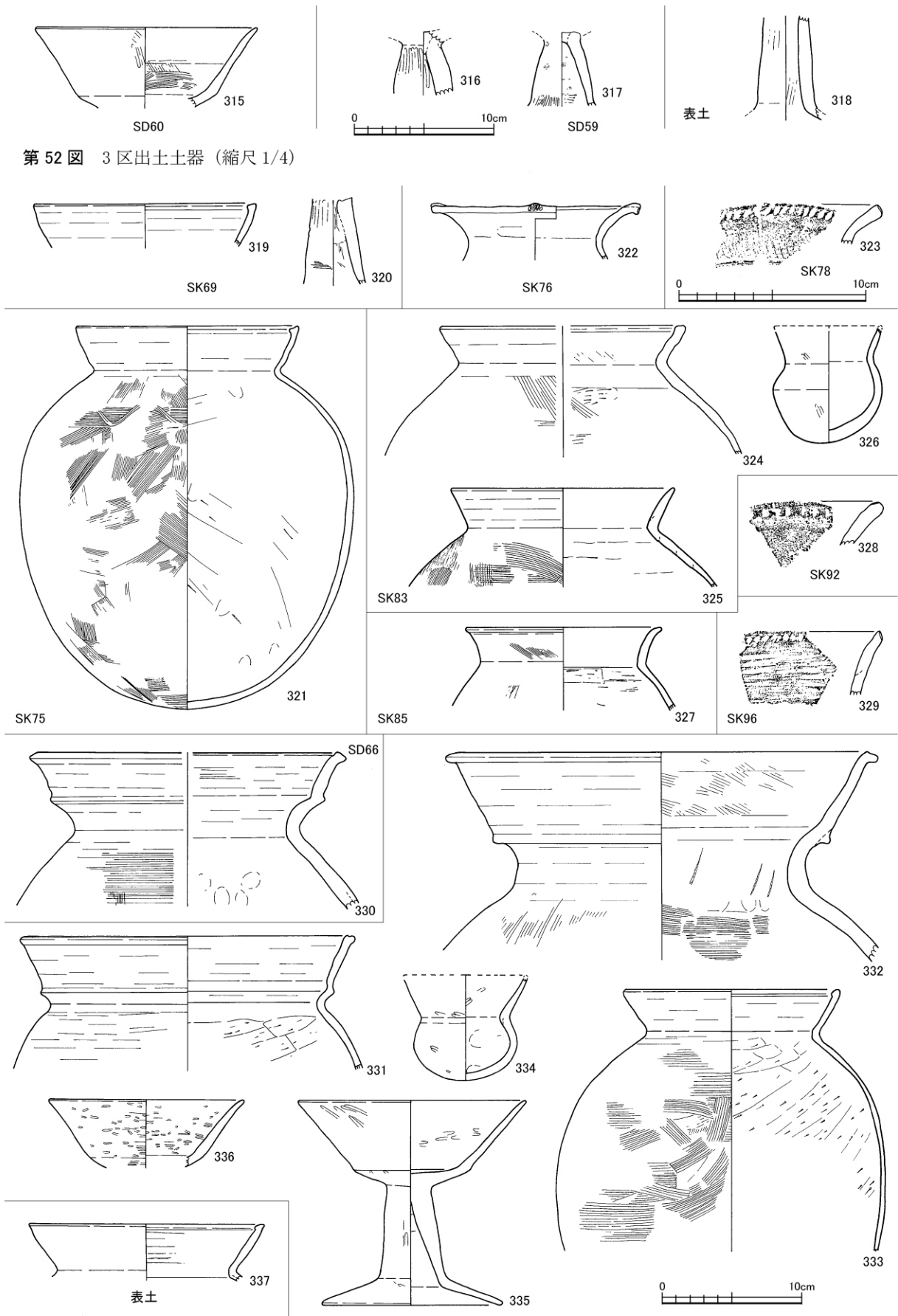
315はSD60出土の坏部である。内面の口縁立ち上がり付近にハケ調整痕を残す。316・317はSD59出土の脚部である。316の器壁は厚手となり、317の器壁は薄手となる。318は表土出土の脚部である。これら3区出土の高坏は古墳時代前期後葉のものである。

4 4区の土器

4区出土土器(第53図) 4区についても出土量が少ないため、まとめて記述を行う。

319・320はSK69出土である。319は口縁端部が肥厚するいわゆる布留式系の甕の口縁部である。320は高坏の脚部である。321はSK75出土である。319と同様に口縁端部が肥厚する甕で、肩部に施された波状文は全周しないようである。外面には煤が付着している。322はSK76出土である。弥生時代中期前葉と考える沈線文系の広口壺である。口縁端部はやや肥厚し内面に低い段を有する。段上には突起を貼付け、突起部に刻み目を加える。口縁から頸部にかけての外面は無文帯となる。323はSK78出土で、弥生時代中期の甕の口縁部である。324~326はSK83出土である。324の口縁端部はわずかに肥厚し、口縁から頸部の内外面までを横ナデ調整する。325の口縁は「く」の字に屈曲し、横ナデ調整する。326の小型壺は雑な作りである。327はSK85出土である。口縁がくの字を呈する甕である。体部内面には横方向のケズリ調整を施す。328はSK92出土の壺と考える口縁部で、三角形の浅い刻み目を有す。328は弥生時代中期に属すと考える。329はSK96出土の甕の口縁部である。横方向のハケ条痕を施し、端部には刻み目を施す。330はSD66出土である。山陰系の壺で口縁端部がやや外方へ張り出す。331~336は川跡出土であ

第1節 土器



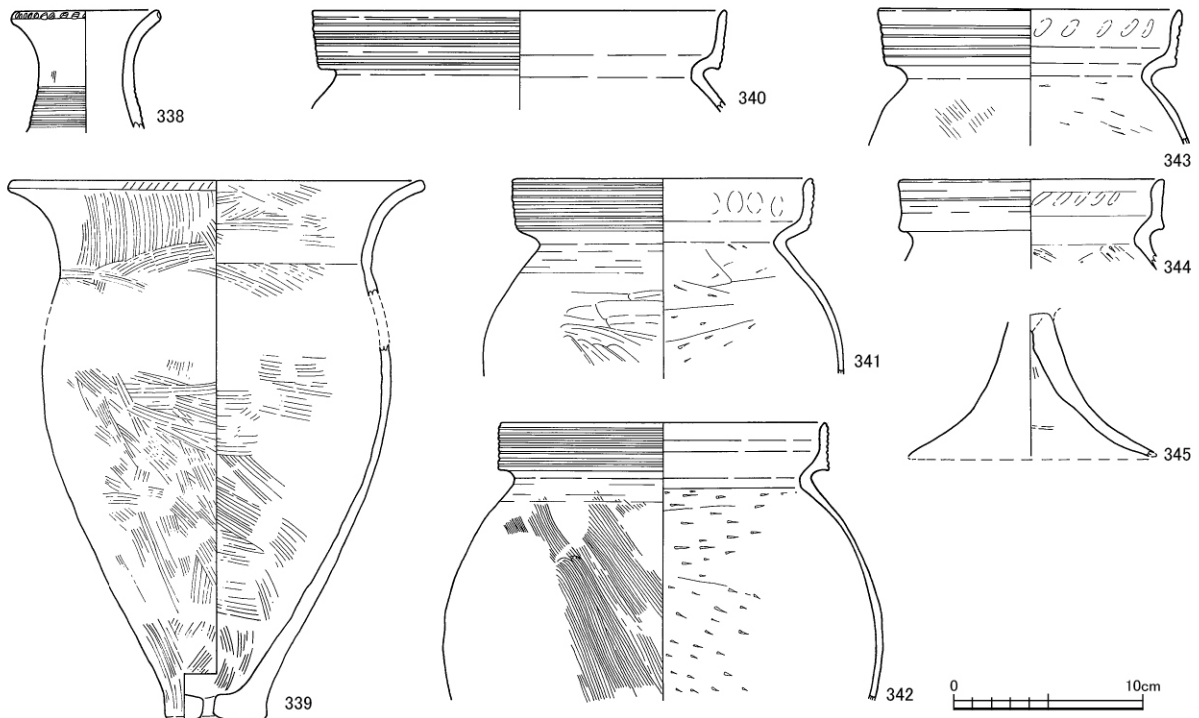
第52図 3区出土土器 (縮尺1/4)

第53図 4区出土土器 (縮尺1/4, 323・328・329は1/3)

る。331の甕、332の壺は口縁から頸部内外面を横ナデ調整し、口縁端部が外方に張り出す。333は布留式系の甕である。334は丸底を呈する小型の壺である。335・336は高坏である。共に精製された胎土だが、336には混和剤としての小砂礫を比較的多く含む。337は表土出土の甕の口縁部である。これら4区出土の土器は、古墳時代前期後葉に位置づけられるものの他に、322・323・328・329など弥生時代中期に属するものが少量混在している。

5 工事立会調査区の土器

立会調査区出土土器(第54図) 338・339・343は立会調査区の SD115出土である。338は櫛描文系の細頸壺である。口縁端部には三角形上の刺突を、頸部には直線文を複数帯施す。339は口縁端部にヘラ工具で刻み目を施す以外は無文の甕で、肩部に横方向のハケ調整をわずかに確認できる。底面には焼成後穿孔がなされる。櫛描文が形骸化したと考え、339は弥生時代中期中葉でも新相と考える。340～344は弥生時代後期後半から終末期に位置づけられる甕である。345は高坏の脚部であり、古墳時代前期前葉と推定する。



第54図 工事立会調査区出土土器 (縮尺 1/4)

6 縄文土器(第55図)

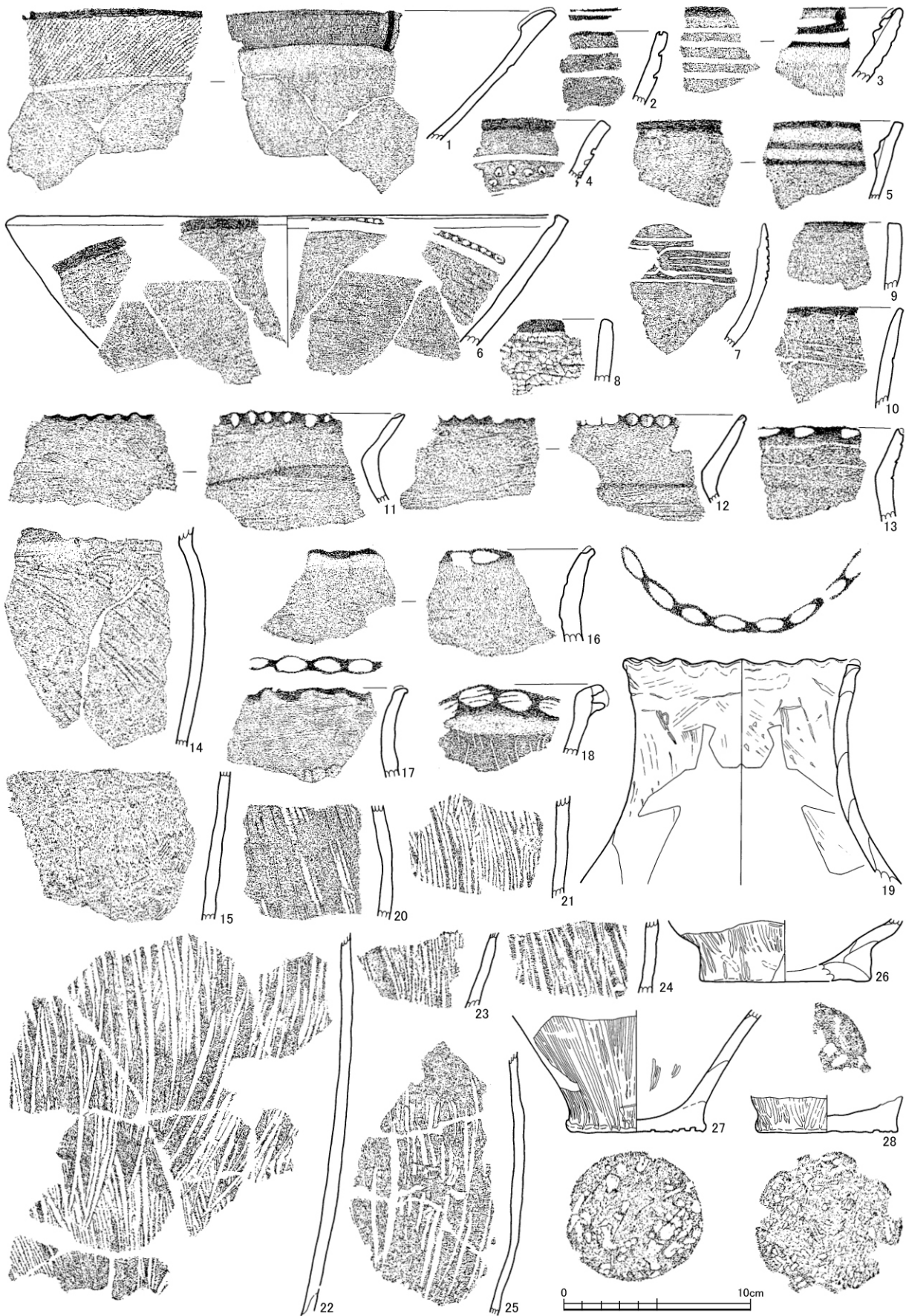
縄文土器は主に川跡から出土し、その近辺の遺構などからもわずかに出土した。破片を主体として、コンテナ1箱分の出土量がある。時期は晩期中葉から後葉に帰属する。以下、各個に説明する。

有文土器(1～7)の器種には浅鉢がある。直線的に開く器形を主体とし、ボウル状器形が1点(7)ある。1は口縁内面が肥厚して稜をもつ。口縁部に縄文帯を配し、縄文LRを施す。体部は無文部とする。縄文帯の直下には凹線状となる研磨を施す。内面肥厚部には複数が一単位となる棒状貼付文を配し、貼付文間に短沈線を施す。内外面ともに丁寧に研磨する。縄文帯および貼付文間の沈線内には赤彩痕が残り、体部外面には光沢のある黒色被膜が点状に残る。縄文帯全域に炭化物が厚く付着する。2は口縁部と端面にヘラ状工具による細く深い沈線を配す。外面にはナデを施すが、接合痕が残る。3・5は口縁内面に隆帯と沈線による文様を配す。3は口縁部に凹線を4条配す。内面には隆帯と沈線による三叉状文を配す。5は口縁端面をもつ。内面には指ナデ状の凹線を2条配す。外面には炭化物が付着する。4は口縁端面をもつ。口縁部下方に沈線区画帯を配し、内部には巻貝殻頂による「C」字形の刺突文を上下2列施す。6は口縁端面をもつ。内面側端面に浅いキザミを施し、直下に凹線を1条配す。内外面ともに研磨を施すが、内面は文様施文後に施す。7は体部上方に沈線区画帯を配し、内部には周回する平行沈線4条を横位対向弧文で区切ることで描出する楕円文を配す。楕円文の連結部と区画沈線は視覚上、上下対向三叉状文となる。文様施文後に外面全域を研磨する。内面には炭化物が厚く付着する。

無文土器(8～28)の器種には深鉢(8～17・25)、壺(18・19)があり、破片としての底部(26～28)がある。8は直立口縁で、端面をもつ。縄文RLを施す。9・10は直立口縁で、端面をもつ。外面にナデを施す。11～14は器体上半が「く」字状の器形を呈し、頸部内面に稜をもつ。11～13は口縁端面に板状工具による「D」字状の押し引きを施し、位置は11・12が内面側、13が外面側となる。外面には11・12が強い横位ナデ、13が弱いナデを施すが、3例とも接合痕が残る。13は頸部外面に炭化物が付着する。14は頸胴部で、頸部に横位ナデ、胴部に板状工具による左上がりの条痕を施す。15は胴部で、外面にナデを施すが、部分的に板状工具による条痕が残る。14・15は外面全域に炭化物が厚く付着する。16・17は外反口縁で、縦位条痕を横位ナデにより消すことで無文部とする。2例とも口縁端面内面側に指などによる楕円形の押圧を施す。17は口縁部に炭化物が付着する。18・19は口縁部が直立ぎみとなる。18は口唇部に粘土を楕円状に連続して貼付し、背の高い突帯状とする。内部には二枚貝もしくは板状工具による押し引きを施す。頸部には板状工具による縦位ナデを施す。19は口縁端面に上方から指による楕円形の押圧を施す。口縁部には粗い横位ナデ、頸胴部には縦位ナデを施す。頸胴部外面には炭化物や煤が付着する。20～24は深鉢または壺の胴部で、縦位条痕を施す。22は胴部下方と上方で条痕原体が異なり、調整順は下方から上方となる。25は頸部に縦位条痕のナデ消しによる無文部が認められる。

底部(26～28)は3例とも平底であり、底部側面下端まで縦位条痕を施す。すべての底面には多数の小穴状の圧痕が不規則に認められる。圧痕は不定形で、最大径1cm、深さ1～3mmを測る。圧痕の内部には平行する複数の線条痕が残る例がある。製作時に用いた単位性のない敷物痕の可能性もある。26は胴部が底部側面から屈折して立ち上がる。27は底部側面下端に粘土のはみ出しが認められる。この粘土が条痕を覆う場合があり、条痕施文後に底部を接地させた可能性がある。

これらの出土土器は編年的位置から、晩期中葉の中屋式後半から下野式前半に併行する土器群(1・2・4・6・8～15)および工字文系土器群(3・5・7)と晩期後葉の「糞置式」(16～28)に大別できる。土器編年上での大きな空白期はなく、おおむね時間的に連続する土器様相を示している。



第55図 繩文土器 (縮尺 1/3)

第1節 土器

第1表 鷲塚遺跡土器観察表

※流量はcm

No.	器種 部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色調	胎土	焼成	残存・備考
							外面	内面				
1	甕	A19	SK3	—	(2.3)	—	口2個1対の押圧 斜めハケ	口ナデ	外)10YR6/3にぶい黄橙 内)10YR7/2にぶい黄橙	2mm程度の砂粒を含む	良	口縁部片
2	壺	A18	SK13	(19.0) 程度	(9.2)	—	口横ナデ、刻み目 頸)ハケ後5条1単位の櫛描直線文 2帯以上	頸)横方向のハケ(磨滅)	外)10YR7/2にぶい黄橙 内)2.5Y6/1黄灰	1~2mm前後の砂粒を含む	やや不 良	口縁~頸部約3/5
			Ⅲ 畝状遺構									
3	甕	A18	SK13	(21.0)	(15.7)	—	口)刻み目 頸~体)斜め方向のハケ	ハケ後、体部をナデ	外)10YR4/3にぶい黄橙 内)10YR7/2にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁約1/4 外面煤付着
4	壺	A18	SK13	—	—	—	体)ハケ調整後上位から直線文、 波状文を交互に施す	体)ハケ	外)2.5Y6/2灰黄 内)10YR6/1褐灰	1m以下の砂粒を含む	良	体部片 直線文、波状文 は細く浅い
5	壺	A19	SK13	—	—	—	体)ハケ後櫛描波状文、櫛描直線 文を交互に2帯ずつ 下に扇型文	体)粗いハケ	外・内)10YR8/2灰白	1m大の砂粒を含む	良	体部片 櫛単位は5条1帯
6	壺	A19	SK14	—	—	—	体)櫛条痕の後、跳ね上げ文	体)ナデ	外)10YR7/3にぶい黄橙 内)10YR8/2灰白	1~2mmの砂粒を多く含む	良	体部片
7	壺	A19	SK14	—	—	—	体)ナデ後、2条1帯の波状文	体)ハケ後ナデ	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mmの砂粒を含む	やや良	体部片
8	壺	A19	SK14	—	(7.6)	9.6	体)縦方向の粗いハケ後底辺付近 を横方向のナデ 底)周縁を一部 ケズリ、中央未調整	ハケ後、ナデ 指頭痕	外)5YR7/4にぶい橙 内)2.5Y7/2灰黄	1~3mmの黒色・白色砂粒・ 小石を多量含む	良	底部片 外面・内面被熱痕あり
9	壺	A16	SD19	11.0	(8.8)	—	口)櫛描波状文・刺突 ミガキ 頸)刺突以下櫛描直線文複数帯	口)横ナデ 頸)不明	外)10YR7/3にぶい黄橙 内)2.5Y7/2灰黄	1mm以下の砂粒を多量含 む	良	口縁部約5/6 外面煤付 着 口縁部は内面のナ デにより凹線状となる
10	壺	A16	SD19	—	(2.5)	—	口)5条1組の櫛描波状文 口縁下 粘土帯貼付け1条の沈線後押圧 頸)斜め方向の櫛状条痕	口)横方向のナデ	外・内)10YR7/4にぶい黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石 を含む	良	口縁部片
11	壺	A16	SD19	—	(3.5)	—	口)斜め櫛条痕文(羽状となる) 端部に刻み目	口)横ナデ	外)2.5Y7/3浅黄 内)10YR7/3にぶい黄橙	2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
12	壺	A16	SD19	—	(3.8)	—	口)横方向のハケ後、端部を横 ナデ後端部に刻み目 頸)縦ハケ	口)横ナデ	外)2.5Y7/2灰黄 内)2.5Y7/3浅黄	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
13	壺	A15	SD21	—	—	—	口)端部横位櫛条痕後、下端を押 圧 頸)斜め~縦の櫛条痕	口)櫛描直線文後、縦位の沈線(2 条残存)	外)2.5Y7/1灰白 内)10YR6/2灰黄褐	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 受口状となる 外面と内面は別の原体を 使用
14	壺	A16	SD19	—	(2.4)	—	口)ハケ後、端部に刺突	口)ハケ工具による斜位刺突3帯 と三角形刺突3帯を交互に施す 以下ハケ	外・内)10YR3/1黒褐	1mm以下の砂粒を含む	良	口縁部片 刺突と重なり、明瞭な羽 状文とならない
15	壺	A15	SD21	—	(6.0)	—	口~頸)斜め~縦方向のハケ後、 端部に刻み目	口~頸)横方向のハケ 肩)指頭痕	外)10YR7/2にぶい黄橙 内)10YR7/3にぶい黄橙	1mm以下の砂粒を含む	良	口縁部片
16	壺か	A16	SD17	—	—	—	体)櫛条痕による縦羽状	体)横~斜め方向のナデ	外)10YR7/2にぶい黄橙 内)10YR7/3にぶい黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石 を含む	良	体部片
17	壺	A16	SD19	—	—	—	体)縦方向のハケの後、櫛描直線 文と波状文を交互に施す	体)ナデ 指頭痕	外)10YR7/2にぶい黄橙 内)10YR7/3にぶい黄橙	2mm前後の砂粒を含む	良	体部片 波状文は上下で 施文具、振幅を変える
18	壺	A16	SD19	—	—	—	体)流水文	体)斜め方向のハケ後ナデ	外)10YR6/1褐灰 内)10YR7/1灰白	1mm前後の砂粒を含む 炭母微量含む	良	体部片 煤付着痕
19	壺	A16	SD19	—	—	—	体)ナデ後、3条1単位の短線文を 弧状または方形区画状に施す	体)横ナデ	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR7/3にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	体部片
20	壺	A15	SD21	—	—	—	体)櫛条痕後、跳ね上げ文および ヘラで2条の山形文	体)横方向のナデ	外)7.5YR7/3にぶい橙 内)10YR8/2灰白	2~3mm前後の砂粒・小石 を含む	良	体部片 破片3点
21	壺	A15・16	ST2	—	—	—	体)斜め方向の櫛条痕後、櫛描直 線文(1単位の条数不明)に、縦の ヘラ描き直線文を重ねる 下に ヘラ描き波状文	体)ハケ後、ナデ	外)10YR7/2にぶい黄橙 内)10YR7/3にぶい黄橙	2~3mm前後の砂粒・小石 を含む	良	体部片 櫛描直線文は上下2段
			A15									
22	甕	A16	SD19	—	(3.6)	—	口)縦方向のハケ後、端部に刻み 目	口)横ナデ	外・内)2.5Y6/2灰黄	2mm前後の砂粒を少量含 む	良	口縁部片 押圧部分があ るが大きく欠損する
23	甕	A15	SD21	—	(6.4)	—	口~体)斜め~縦方向のハケ後、 口縁部部に刻み目	口~体)ハケ後、体部ナデ	外)10YR8/4浅黄橙 内)10YR8/3浅黄橙	2~3mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 頸部の屈曲弱 い 全体に磨滅する
24	壺	A16	SD19	—	(2.8)	8.8	体)ハケ後横ナデ 底)ナデ	底)ナデ	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	2mm前後の砂粒を含む	良	底部片
25	壺	A15	SD19	—	(2.4)	6.4	体)ハケ後ミガキ 底)ナデ	底)ナデ	外)2.5Y8/1灰白 内)2.5Y7/1灰白	1mm前後の砂粒を含む	良	底部片
26	甕	A15・16	ST2	—	—	—	口)横ナデ 体)斜めハケ	口)横ナデ 体)斜めハケ	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR8/4浅黄橙	2~3mmの赤色・白色砂粒 を含む	良	口縁部片 煤わずかに付着
27	壺	A15・16	ST2	—	—	—	体)斜め方向の櫛条痕後、櫛工具 による跳ね上げ文、直線文複数 帯、ヘラ状工具による山形文	体)横方向のナデ	外・内)10YR8/2灰白	1~2mm前後の砂粒含む	良	体部片 櫛条痕は縦方向 の羽状を呈するか?
28	壺	A15・16	ST2	—	—	—	体)斜め方向の櫛条痕後、櫛工具 による跳ね上げ文、直線文複数 帯、ヘラ状工具による山形文	体)横方向のナデ	外・内)10YR8/2灰白	1~2mm前後の砂粒含む	良	体部片 27と同一体
29	甕	A15	SK17	—	—	—	口)横方向の条痕後、端部横ナデ 2個1組の押圧 体)横方向の条痕	口~体)ナデ 指頭痕	外)10YR6/2灰黄褐 内)10YR7/2にぶい黄褐	1~2mmの砂粒を含む	良	内外面被熱痕
30	甕	A15	SK17	(21.4)	(9.2)	—	口~体)斜め方向のハケ後、口縁 部をナデ(不明瞭)	口~体)斜め方向のハケ後、口縁 部をナデ	外)2.5YR7/4淡赤橙 内)2.5YR6/4にぶい橙	1~2mm前後の砂粒をやや 多く含む	やや良	口縁部約1/6 内外面わ ずかに被熱痕あり
31	壺	A15	SK17	—	—	—	頸)7条1単位の櫛描直線文4帯と 櫛描波状文2帯	頸)ハケ後、ナデ	外)10YR8/2灰白 内)10YR7/2にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	やや良	頸部片
32	甕	A15	SD22	(16.0)	(2.8)	—	口)横ナデ	口)横ナデ	外)10YR4/1褐灰 内)10YR5/2灰黄褐	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 外面煤付着
33	壺	A15	SD22	—	—	—	体)縦ハケ後、櫛描直線文3帯と 櫛描波状文1帯	体)横~斜めのハケ	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	2mm前後の砂粒を含む	良	体部片 波状文から、櫛 単位は6条1帯
34	壺	A15	SD22	—	—	—	体)ハケ後、4条1組の櫛描直線文 2帯と櫛描波状文2帯 下に原体 を造る間隔の大きい波状文	体)斜めの板ナデ(工具痕残る)	外)10YR7/2にぶい黄橙 内)10YR4/1褐灰	1mm前後の砂粒を含む	良	体部片 最下段の波状文は上段と 比べ振り幅が大きい
35	壺	A17	SD20	—	(2.6)	—	体)斜め後、横方向の櫛状条痕 半截竹管状工具による垂線と上 下反転する弧線	体)横方向のナデ	外・内)10YR5/1褐灰	1~2mm前後の砂粒を含む	良	体部片 外面・内面被熱痕あり
36	壺	A14	SD24	(20.4)	(6.0)	—	口)刻み目 頸)ハケ後櫛描直線文9条残存	口)羽状文(3条1単位で上段から 下段へ) 頸)ハケ	外)10YR6/3にぶい黄橙 内)10YR6/1褐灰	1mm大の砂粒を少量含む	良	口縁1/6
			SD26									

第5章 遺物

No	器種部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色調	胎土	焼成	残存・備考
							外面	内面				
37	壺	A14	SD23	—	—	—	口)刻み目 口唇部に波状文(頭)横方向のハケ?	口~頸)ハケ後ナデ	外)10YR6/2灰黄褐色内)10YR7/2にぶい黄褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
38	壺	A14	SD23	—	—	—	体)ハケ後、(推定)半円文	体)ハケ後、ナデ	外・内)10YR7/2にぶい黄褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	体部片
39	壺	A14	SD23	—	—	—	体)流水文	体)斜め方向のハケ後ナデ	外)10YR5/2灰黄褐色内)10YR7/2にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を含む 雲母微量含む	良	体部片 煤付着痕
40	壺	A14	SD24	—	—	—	体)流水文	体)ナデ	外)10YR5/3にぶい黄褐色内)10YR6/2灰黄褐色	1mm以下の砂粒を含む 雲母微量含む	良	体部片 煤付着痕
41	壺	A14	SD24	—	—	—	体)流水文	体)ハケ後、ナデ	外)10YR5/3にぶい黄褐色内)10YR7/3にぶい黄褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	体部片 煤付着
42	壺	A14	SD24	—	—	—	体)ハケ	体~底)ハケ後、ナデ	外)10YR7/3にぶい黄褐色内)10YR8/2灰白	1~2mm前後の赤色砂粒を含む	良	底部片
43	甕	A14	SD24	—	—	—	口~頸)ハケ後、口縁端部に上下からハケ工具で刻み目	口~頸)横~斜めのハケ	外)10YR6/4にぶい黄褐色内)7.5YR7/3にぶい黄褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 煤付着
44	甕	A14	SD24	—	(3.8)	—	口)横ナデ後、端部に刻み目(頸)ハケ後、沈線わずかに残存	口~頸)ハケ後、口縁横ナデ	外)10YR5/2灰黄褐色内)10YR7/2にぶい黄褐色	2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 煤付着
45	甕	A14	SD24 SK18 IV	—	—	—	体)縦方向のハケ後、櫛描直線文、扇形文、直線文	体)横~斜めのナデ	外)10YR7/2にぶい黄褐色内)10YR7/3にぶい黄褐色	2~3mm前後の砂粒・小石を少量含む	良	体部上半部約1/4 外面煤付着
46	甕	A14-15	SD23	—	—	—	体)斜め方向の条痕	体)ナデ	外)10YR3/1黒褐色内)10YR5/1褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	体部片 煤付着
47	甕	A14	SD24	—	—	—	体)斜め方向の条痕	体)ナデ	外・内)10YR6/2灰黄褐色	2~3mmの砂粒を含む	良	体部片 煤付着 48と同一個体
48	甕	A14	SD24	—	—	—	体)斜め方向の条痕	体)ナデ	外・内)10YR6/2灰黄褐色	2~3mmの砂粒を含む	良	体部片 煤付着 47と同一個体
49	壺	A14	SD24	—	—	—	体)櫛条痕後、3条1組の櫛条痕で連弧状文と縦位の短線文 刺突	体)剥離のため不明	外・内)10YR8/3浅黄褐色	2mm前後の赤色砂粒を含む	やや良	体部片
50	壺	A14	SD24	—	—	—	体)櫛条痕後、3条1組の櫛条痕で連弧状文 刺突	体)ナデ? (磨滅)	外・内)10YR8/3浅黄褐色	2mm前後の赤色砂粒を含む	やや良	体部片
51	壺	A14	SD24	—	—	—	体)櫛条痕後、3条1組の櫛条痕で連弧状文と縦位直線文および波状文2帯	体)ナデ	外)2.5YR6/2灰黄褐色内)10YR5/2灰黄褐色	2mm前後の砂粒を含む 雲母微量	良	体部片
52	壺	A14	SD27	(7.0)	(5.5)	—	口~頸)縦~斜め方向のハケ後、口縁部に櫛描波状文と縦方向の櫛描文	口)横方向のナデ 頸)紋り痕	外)2.5Y6/1黄灰内)2.5Y3/1黒褐色	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/3 内外面煤付着 受口状口縁
53	壺	A13	SD28	(14.0)	(6.5)	—	口~頸)縦方向のハケ後、口縁端部に刻み目	口)横方向のナデ 頸)斜め~横方向のハケ	外)10YR6/3にぶい黄褐色内)10YR6/2灰黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良	口縁部約2/5
54	壺	A14 A13	SD28 SK26	—	(9.8)	—	体)ハケ後、7~8条1単位の櫛描直線文3帯の上に、2条1単位の垂線、円形刺突6個を重ね、ミガキ肩帯にも直線文	口)横方向のハケ後、体部下半と肩部をナデ	外)2.5Y5/1黄灰内)10YR7/3にぶい黄褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	体部約2/5 内外面一部わずかに被熱痕あり
55	甕	A14	SD27	(21.0)	(8.5)	—	口~体)縦方向のハケ後、口縁端部に刻み目	口)斜め~横ハケ後、端部を横ナデ 体)ハケ後ナデ	外)10YR7/2にぶい黄褐色内)10YR7/3にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒・小石を含む	良	口縁部約1/8 外面煤付着痕あり
56	鉢	A13	SD28	(12.2)	8.2	3.6	ハケ(不明瞭)	磨滅のため不明	外・内)10YR6/4にぶい黄褐色	微砂粒を多く含む	良	約1/3 外面底部被熱痕
57	底部	A13	SD27	—	(3.8)	(7.0)	体)ハケ痕の後、底部から底面縁までを回しナデ 底)ナデ	底)ナデ	外)10YR7/2にぶい黄褐色内)10YR7/3にぶい黄褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	底部片 底面中央部は薄い
58	壺	A13	SD27	—	(2.5)	—	口)縦~斜め方向のハケ後、ナデ端部に刻み目	口)ハケ後ナデ ハケ工具による波状文	外・内)10YR7/3にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良	口縁部片
59	壺	A13	SD28	—	—	—	体)4条1組の櫛描直線文2帯と櫛描波状文5帯分あり	体)縦方向のナデ 指頭痕	外)10YR7/3にぶい黄褐色内)10YR3/1黒褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	体部片
60	甕	A14	SD27	—	(3.9)	—	口)縦方向のハケ後、端部に刻み目	口)横方向のハケ	外)10YR7/2にぶい黄褐色内)10YR7/3にぶい黄褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
61	甕	A13	SD28	—	(4.1)	—	口)横方向のナデ後、端部に羽状文風に上下から刻み目	口)ハケ後、ナデ	外)10YR6/2灰黄褐色内)10YR7/2にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良	口縁部片 外面煤付着
62	甕	A13	SD28	—	(3.9)	—	口)斜め方向のハケ 端部は横ハケ後、刻み目	口)斜め~横方向のハケ	外・内)10YR7/3にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良	口縁部片
63	甕	A13	SD27	—	(4.3)	—	口)斜め方向の櫛条痕後、端部をナデ 2個1組の押圧	口)斜め方向の櫛条痕	外)10YR4/2灰黄褐色内)10YR6/2灰黄褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 煤付着
64	甕	A13	SD28	—	—	—	体)櫛状工具による羽状文	体)横ナデ	外)7.5YR4/2灰褐色内)7.5YR5/3にぶい黄褐色	1mm前後の砂粒を含む 雲母粒子微量含む	良	体部片 外面煤付着
65	壺	A14	SD27	—	—	—	口)端部2列の押し引き 櫛条痕で直線文後、弧線文を対に配置し、接近する部位に刺突	口)横方向のナデ	外)7.5YR4/1褐色内)7.5YR5/2灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 外・内面煤付着
66	鉢	A14	SD27	—	(5.0)	—	口)横方向のナデ後、端部に刻み目 流水文を巡らせ、結束する位置の上部に突起?	口)横方向のナデ	外)10YR6/2灰黄褐色内)2.5Y6/2灰黄褐色	1~2mm前後の砂粒、雲母粒子を含む	良	口縁部片 頸部に赤彩あり 煤付着 149と同一個体
67	壺	A13	SD28	—	—	—	体)斜め条痕後、櫛条痕の直線文複数帯 3条1組の櫛条痕で相対する弧線と縦方向の直線文	体)横ナデ 指頭痕	外・内)10YR7/3にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良	体部片
68	壺	A13	SK25	(10.2)	(9.8)	—	口)横方向のナデ 頸~体)縦~斜め方向のハケ	口)横方向のナデ 頸~体)横~斜め方向のハケ後、指ナデ	外・内)2.5Y5/6明赤褐色	2~3mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約3/5 外面赤彩痕 内外面被熱痕
69	底部	A13	SK25	—	(5.0)	8.5	体)ハケ後底部近くを横ナデ 底)ナデ	体)ハケ 底)ナデ	外)7.5YR7/3にぶい黄褐色内)7.5YR7/4にぶい黄褐色	2mm前後の砂粒を含む	良	底部片 煤付着痕あり 全体に磨滅
70	甕	A13	SK25	(17.8)	(5.1)	—	口)横方向のナデ後、端部に刻み目 体)縦方向のハケ	口)横方向のハケ後、端部を横ナデ 体)横方向のハケ、指頭痕	外・内)10YR6/2灰黄褐色	1~3mm前後の砂粒・小石を少量含む	良	口縁部約1/4 外面煤付着
71	把手付鉢	A13	SK25	(24.2)	(11.5)	—	口~体)縦方向のハケ 口縁端部を横ハケ後、X字状の刻み目	口~体)横~斜め方向のハケ後、体部をナデ、指頭痕	外)10YR5/4にぶい黄褐色内)10YR6/4にぶい黄褐色	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁~体部上半部約1/4 外面煤、内面無け付着
72	壺	A13	SK25 SK26	(11.0)	(2.2)	—	口)8条の沈線に菱形の区画を配置 口縁端部と唇部部にヘラ状工具による刺突	口)横方向のナデ、指頭痕	外・内)10YR8/2灰白	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁上部片約1/4
73	壺	A13	SK26	(16.0)	(10.5)	—	口)横方向のナデ後、ハケ工具によるX字状の刻み目(頸)縦方向のハケ	口~頸)横~斜め方向のハケ後、口縁部を横方向のナデ、頸部以下、指ナデ	外)10YR6/2灰黄褐色内)10YR7/2にぶい黄褐色	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁約1/4 外面煤、内面無け付着痕あり
74	壺	A13	SK26	—	(12.1)	5.3	体)櫛描直線文複数帯に3条1単位の櫛状工具による3帯1組の弧線を1対重ねる 直線文帯を沈線で区画し、沈線間と下半部にミガキ	体)上半は横方向、下半は縦方向、底部は横方向のナデ	外・内)10YR7/3にぶい黄褐色	微砂粒をやや多く含む	良	体部約3/4 底部焼成後穿孔径約1.5cm 内外面わずかに被熱痕あり
75	甕	A13	SK26	—	(6.2)	—	口)ナデ 頸)ハケ	口)ナデ 頸)ハケ	外)10YR7/2にぶい黄褐色内)10YR7/3にぶい黄褐色	2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 端部は折返す 外面煤付着

第1節 土器

No.	器種部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色調	胎土	焼成	残存・備考
							外面	内面				
76	壺	A13	SK26	—	(7.6)	5.7	体)ハケ後、ミガキ底)ミガキ	体)底)ミガキ	外)10YR6/2灰黄褐色内)10YR8/3浅黄褐色	微砂粒をやや多く含む	良	底部片 底部ほぼ黒斑内外面被熱痕
77	底部	A13	SK26	—	(3.0)	7.1	体)縦方向のハケ後、横方向の細かいハケ底)ハケ	底)ナデ	外)10YR6/3にぶい黄褐色内)10YR7/2にぶい黄褐色	1~3mm前後の砂粒を含む	良	底部片 外面煤・内面焦げ痕付着
78	甕	A13	SK26	—	(3.5)	5.2	体)ハケ底)木炭痕	体)底)ナデ	外)10YR7/3にぶい黄褐色内)10YR7/2にぶい黄褐色	1~3mmの砂粒・小石を少量含む	良	底部片 外面被熱痕、内面焦げ付着
79	甕	A13	SK26	—	(3.6)	4.5	体)ハケ後、底面付近横方向のナデ底)木炭痕	体)底)ハケ後、ナデ	外・内)2.5Y6/3にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒を少量含む	良	底部片 外面、内面被熱痕あり
80	壺	A20	SK2	—	(6.4)	—	口)ハケ後、端面にX字状に刻み目	口)不定方向のハケ後、端部を横方向のナデ	外)10YR7/2にぶい黄褐色内)7.5YR7/4にぶい黄褐色	1~2mm前後の砂粒を少量含む	良	口縁部片
81	甕	A20	SK2	—	(3.4)	—	口)ハケ後、端面に刻み目	口)ナデ	外・内)10YR7/2にぶい黄褐色	2mm程度の砂粒を含む	良	口縁部片
82	壺	A20	SK2	—	—	—	体)ナデ後、刺突? 櫛描直線文4条1帯 櫛描波状文4条1帯	体)ハケ	外)10YR6/2灰黄褐色内)7.5YR8/2浅黄褐色	2mm程度の砂粒を含む	良	体部片
83	壺	A19	SK4	(14.0)	(7.1)	—	口)斜め方向の粗いハケ	口)頭)ナデ 指頭痕	外)2.5Y7/2灰黄褐色内)2.5YR8/2灰白	1~2mmの砂粒を多量含む	良	口縁約1/5 口縁端部・内面磨滅する
84	壺	A19	SK4	(15.6)	(5.3)	—	不明	不明	外・内)7.5YR8/6浅黄褐色	2~3mmの小石を多量含む	やや不良	磨滅する
85	鉢	A19	SK4	(12.8)	(8.3)	—	口)横方向のナデ、指頭痕体)縦~横方向のハケ	口)体)ハケ後、ナデ	外)10YR7/3にぶい黄褐色内)2.5Y7/2灰黄褐色	1~2mm前後の砂粒をやや多く含む	良	口縁部約1/4 外面煤付着
86	壺	A20	SK5	—	—	—	口)1条の沈線を有す棒状浮文を貼付け 斜め方向の櫛条痕後、1条の弧状沈線 下端に粘土帯を貼付け刺突 頭)縦~斜め方向の櫛条痕	口)横方向のナデ 端部に刻み目	外)2.5YR7/3淡赤褐色内)2.5YR6/2灰赤	1~2mmの砂粒を含む	やや良	口縁部片 受口状口縁
87	甕	A20	SK5	(24.0)	(29.5)	—	口)体)ハケ後、板状工具によるナデ 底)ハケ後、ナデ	口)体)横~斜め方向のハケ後、斜め方向のナデ 指頭痕	外)10YR7/3にぶい黄褐色内)7.5YR7/6褐色	1~2mm前後の砂粒を含む	良	約1/4 外面煤付着、内面焦げ付着
88	甕	A20	SK5	—	(5.2)	6.0	体)縦方向のハケ	底)斜め方向のハケ後、ナデ	外)10YR8/3浅黄褐色内)7.5Y7/3にぶい黄褐色	1~3mm前後の赤色砂粒をやや多く含む	良	底部片 外面煤付着痕あり 内外面で工具異なる
89	壺	A20	SK5	—	(2.6)	7.2	不明	不明	外)10YR7/3にぶい黄褐色内)7.5YR8/4浅黄褐色	1~3mmの砂粒を多量含む	やや良	底部片 全体に磨滅
90	壺	A17	SK8	—	(19.7)	(6.3)	体)肩部縦方向、以下斜め方向のハケ 底)ナデ	体)斜め方向のハケ後、下半部を丁寧なナデ	外)2.5Y7/1灰白内)10YR7/2にぶい黄褐色	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁~頸部に欠く約5/6 底部に径約1.5cmの焼成後穿孔
91	壺	A17	SK9	—	(5.5)	—	口)羽状刺突 ハケ 貼付け突帯	口)ハケ?	外)2.5Y6/3にぶい黄褐色内)2.5Y7/2灰黄褐色	1~2mmの白色砂粒を多量含む	やや良	口縁部片 煤付着 内面磨滅する
92	甕	A17	SK9	—	(3.5)	—	口)刻み目 ハケ	口)ハケ	外)2.5Y8/2灰白内)7.5Y7/4にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒を多量含む	良	口縁部片
93	甕	A17	SK9	—	—	—	体)条痕	体)ナデ	外)10YR8/2灰白内)焦げのため不明	1~2mmの砂粒を少量含む	良	体部片 内面焦げ付着
94	甕	A17	SK9	—	—	—	体)条痕	体)ナデ	外)10YR8/2灰白内)7.5YR7/4にぶい黄褐色	3mm大の小石を含む	良	体部片
95	壺	A17	SK11	(6.5)	(10.5)	—	口)不明ハケ 体)不明	口)頭)不明 体)不明ナデ	外)2.5Y8/2灰白内)5YR6/6褐色	1~4mm前後の砂粒・小石を少量含む	良	口縁約1/6
96	壺底部	A17	SK11	—	(4.3)	5.2	体)ハケ後、底付近ナデ 底)ナデ	体)ハケ後ナデ 底)ナデ	外)10YR7/2にぶい黄褐色内)10YR6/2灰黄褐色	1mm程度の砂粒を少量含む	良	底部のみ
97	甕	A17	SK11	—	(6.7)	—	口)頭)ハケ後、口縁端部刻み目	口)頭)ハケ後頭部以下ナデ	外)10YR7/4にぶい黄褐色内)10Y7/3にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良	口縁部片 口縁端部の押圧は大部分が欠損
98	壺	A17	SK11	—	—	—	体)ハケ後、5条2帯の櫛描直線文と三角刺突	体)ハケ後ナデ	外・内)5YR7/4にぶい黄褐色	2~3mm大の小石を含む	良	体部片
99	壺	A15	SK16	—	—	—	体)ハケ条痕の後、櫛条痕の波状文と直線文	体)ナデ	外・内)10YR8/2灰白	1~2mmの砂粒を少量含む	良	体部片
100	壺	A17	SK18 SD24	(14.1)	(11.9)	—	口)斜め方向のハケ後、端部に刻み目 頭)櫛描直線文複数帯以下刺突を2段 刺突間は無文 下段の刺突下に櫛描直線文	不明	外)10YR8/2灰白内)10YR8/1灰白	2mm前後の砂粒を多く含む	やや良	口縁~頸部約1/3
101	甕	A14	SK18	(23.0)	(12.1)	—	口)頭)横方向のナデ後、口縁端部に刻み目 体)縦~斜め方向のハケ	口)体)横~斜め方向のハケ後、ナデ	外)10YR7/3にぶい黄褐色内)7.5YR6/3にぶい黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	良	口縁約2/5 口縁内面焦げ付着痕あり
102	壺	A14	SK18	—	(3.7)	—	口)縦方向のハケ 端部を横方向のナデ後、X字状の刻み目	口)横方向のハケ後、長さを違えて羽状を意識した刺突を3帯	外)10YR7/2にぶい黄褐色内)10YR8/2灰白	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
103	甕	A14	SK18	—	(3.7)	—	口)縦方向のハケ後、横方向のナデ 端部にハケ工具で刻み目	口)横方向のハケ	外・内)10YR7/3にぶい黄褐色	1~4mmの砂粒・小石を少量含む	良	口縁部片
104	鉢	A14	SK18 SD24	(15.2)	(8.6)	—	口)刻み目 体)縦方向のハケ後、5条1帯の櫛描直線文2帯と櫛描波状文 中位にも直線文 貼付け突帯1箇所残存	口)体)横~斜め方向のハケ後、口縁部に縦位の櫛描直線文	外)2.5Y6/3にぶい黄褐色内)10YR6/3にぶい黄褐色	2~3mmの砂粒・小石を少量含む	良	口縁部約1/4 体部上半3/4 被熱し、体部の器表面は荒れる 口縁内面に煤付着痕あり
105	壺	A11	SK22 IV	—	(16.2)	—	体)横方向に刻み、縦方向に1条の沈線と凹形刺突3か所を施す突帯で区画した中に、沈線文を充填 最大径付近に幅約1.5cmの凹線状の無文帯	体)指ナデ	外)10YR8/2灰白内)10YR8/3浅黄褐色	2~3mm前後の赤色砂粒・小石を含む	良	体部上半約1/5 外面煤付着痕、内面焦げあり
106	甕	A11	SK23	—	(8.2)	—	口)刻み目 体)横方向の条痕	口)体)横方向のナデ	外)10YR5/2にぶい灰黄褐色内)10Y6/3にぶい黄褐色	2mm大の砂粒を含む	良	口縁部片
107	甕	A11	SK23	—	(4.9)	—	口)刻み目 体)粗い縦~斜め方向のハケ	口)体)横方向のナデ	外)10YR6/2灰黄褐色内)10Y5/2灰黄褐色	1mm大の砂粒を含む	良	口縁部片
108	甕	A11	SK23	—	(4.3)	—	口)刻み目 頭)ハケ(磨滅)	口)頭)横方向のナデ	外)7.5YR6/6褐色内)7.5YR6/4にぶい黄褐色	1mm大の砂粒を含む	良	口縁部片 外面磨滅する
109	壺	A11	SK23	—	(2.4)	—	口)ハケ後、横方向のナデ 端部に沈線1条の後、上下に刻み目	口)横方向のナデ	外・内)10YR7/2にぶい黄褐色	1mm大の砂粒を含む	良	口縁部片
110	壺	A11	SK23	—	—	—	体)縦方向のハケの後、4条1帯の櫛描直線文と波状文を交互に配置	体)ナデ	外)7.5YR7/4にぶい黄褐色内)10YR7/2にぶい黄褐色	2mm前後の砂粒を含む	良	体部片
111	甕	A10	SK27	(23.6)	(8.8)	—	口)頭)横~斜めハケ後、口縁下横ナデし端部に刻み目	口)ハケ後ナデ 体)ハケ	外・内)10YR7/3にぶい黄褐色	4mm前後の小石をやや多く含む	良	口縁約2/5
112	甕	A10	SK28	(21.4)	(4.8)	—	口)横方向のナデ後、刻み目 頭)縦方向のハケ 指頭痕	口)ハケ後、刻み目 頭)ハケ	外)10YR7/3にぶい黄褐色内)10YR6/2灰黄褐色	1~2mm前後の砂粒を少量含む	良	口縁約1/6 横と上の2方向から刻み目
113	甕	A10	SK28	(24.7)	(17.5)	—	口)横方向のナデ後、刻み目 体)縦方向のハケ	口)体)ハケ後、ナデ	外)7.5YR6/4にぶい黄褐色内)2.5YR7/4淡赤褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良	口縁~体部1/4 体部煤付着
114	壺	A10	SK28	—	(9.8)	7.9	体)縦~横方向のハケ 底)ナデ	体)ハケ 底)ナデ	外・内)10YR4/1褐灰	1mm前後の砂粒を含む	良	底部

第5章 遺物

No	器種 部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色調	胎土	焼成	残存・備考
							外面	内面				
115	壺	A10	SK30	—	(2.2)	—	口)縦方向のハケ 端部を横方向のナデ 沈線後、上下に刻み目	口)ハケ後、3条1帯の波状文	外)10YR7/2にぶい黄橙内)10YR6/2灰黄褐	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 外面磨滅する
116	壺	A7	SK30	—	—	—	口)羽状となる刻み目 沈線	口)ナデ	外・内)10YR6/2灰黄褐	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
117	甕/壺	A10	SK30	—	—	—	体)横方向のハケ後、体部上半はナデでハケを消し、上から下にヘラ状工具による羽状文 反転部あり	体)横方向のハケ後、ナデ(不明瞭)	外)10YR5/2灰黄褐内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	体部約1/5 外面煤、内面焦げ付着痕あり
118	壺	A9	SK32	17.2	(8.2)	—	口)端面に棒状工具で刺突 下端を押し 頭)縦方向のハケ後、推定4条1帯位の櫛描直線文複数帯	口)ハケ工具による2段の羽状文 頭)斜め方向のハケ後、ナデ	外)10YR6/2灰黄褐内)10YR5/2灰黄褐	1~2mm大の砂粒をやや多量含む	良	口縁部約2/3 外面煤付着痕あり
119	壺	A9	SK32	—	(3.9)	—	口)横方向の直線文の後、連弧文を上下に反転 下端に浅い刻み目 頭)粗いハケ	口)ナデ(不明瞭)	外・内)2.5Y8/2淡黄	1mm前後の砂粒を含む	やや良	口縁部片 受口状口縁
120	甕	A9	SK32	24.8	(23.7)	—	口)縦方向のハケ後、端部を横方向のナデ 凹形刺突を1~2段 頭~体)横~斜め方向のハケ後、頭~体部上半にかけて4~5条1帯位の櫛描直線文4帯	口)横方向のハケ後、櫛描波状文3~4帯 体)ハケ後、縦方向主体のナデ	外)10YR6/3にぶい黄橙内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の赤色砂粒を含む	良	口縁~胴部にかけて約2/3 外面煤付着、内面焦げ付着痕あり 口縁の刺突1~2段に規則性は無い
		A8	SD30									
121	甕	A9	SK32	17.4	(20.3)	—	口)横方向のナデ後、端部に刻み目 縦~斜め方向のハケ	口)ハケ 体)ハケ後、縦方向主体のナデ	外)10YR7/3にぶい黄橙内)2.5Y7/4浅黄	2~4mm前後の砂粒・小石を含む	良	口縁~体部4/5 外面煤・内面焦げ付着
122	甕	A9	SK32	(20.0)	(4.5)	—	口)斜め方向のハケの後、端部にハケ工具による刻み目 頭)櫛描直線文(4条1帯位)1帯残存	口)ハケ後、櫛描波状文複数帯	外)10YR5/2灰黄褐色内)10YR5/3にぶい黄褐	1~3mm前後の砂粒・小石を少量含む	良	口縁部約1/4 外面煤付着、内面被熱により黒色化
		A9	SK33									
123	甕	A9	SK32	—	(4.4)	—	口)ハケ後、端部に刻み目	口)横~斜め方向のハケ	外・内)10YR4/1褐灰	2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
124	甕	A9	SK32	—	(2.4)	—	口)ハケ後、ナデ 端部に刻み目	口)横方向のナデ後 櫛状工具による縦の直線文	外)10YR5/3にぶい黄褐内)10YR6/2灰黄褐	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 外面煤付着
125	壺	A9	SK32	—	(6.3)	6.6	体)ハケ後、底面付近横方向のナデ 底)ナデ?	体~底)ナデ	外・内)10YR7/2にぶい黄橙	微砂粒を多量含む	良	底部片
126	壺	A9	SK32	—	(4.2)	5.8	体)ハケ後、底面付近横方向のナデ 底)ナデ?	体~底)ハケ 指頭痕	外)10YR5/2灰黄褐内)10YR7/4にぶい黄橙	1~3mm前後の赤色砂粒・小石を含む	良	底部片 外面被熱痕あり
127	壺	A9	SK32	—	(4.0)	4.7	体)ハケ 底)ナデ	体~底)ハケ後、ナデ	外)2.5Y6/1黄灰内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の赤色砂粒を少量含む	良	底部片 外面被熱痕あり
128	壺	A9	SK33	—	(32.8)	(6.0)	体)ハケ条痕の後、下から交互に櫛描直線文と櫛描波状文 底)不明	体)ナデ(刺突・磨滅で不明瞭) 底)ハケ	外)7.5Y7/3にぶい橙内)7.5Y6/3にぶい褐	1~2mm前後の砂粒を含む	良	体部上半1/3・底部片 波状文に特徴あり 原体は10~11条か?
129	甕	A9	SK33	(27.0)	(18.0)	—	口)刻み目 体)縦方向の条痕の後、中位に横方向の条痕	口~頭)ハケ後、ナデ 体)不明	外)10YR6/1褐灰内)10YR7/2にぶい黄橙	1~2mmの砂粒を多く含む	良	口縁約1/3を含む体部上半 被熱し、器面荒れる
130	甕	A9	SK33	(15.8)	(15.0)	—	口)横方向のナデ後、端部ハケ工具による刻み目 体)縦~斜め方向のハケ後	口)横方向のナデ 体)横~斜め方向のハケ 指頭痕	外)10YR6/2灰黄褐内)10YR6/3にぶい黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石を含む	良	口縁~体部上半約1/4 外面煤付着
131	甕	A9	SK33	—	—	—	体)縦方向のハケ後、5条1組の櫛描直線文と櫛描波状文	体)横~斜め方向のハケ	外)10YR4/1褐灰内)10YR5/2灰黄褐	2~3mmの砂粒・小石を少量含む	良	体部片 外面煤付着
132	有孔円盤	A9	SK33	長さ3.2 幅3.2 厚0.5 孔径0.7 重量(4.4g) 側面研磨なし					外)2.5YR7/1灰白内)10YR8/2灰白	1~3mm前後の砂粒を含む	良	両面穿孔 ほぼ正形 未通過痕あり
133	壺	A7	SK34	—	(15.4)	13.1	口)指で内外から抜き波状とする 体)不明	口)指で内外から抜き波状とする 体)不明	外)2.5YR6/8橙内)10YR5/1褐灰	2mm大の白~灰色砂粒をやや多く含む	やや良	口縁部約1/5
134	甕	A7	SK34	(23.5)	(7.5)	—	口)横方向のナデ後、端部に刻み目 頭~体)縦~斜め方向のハケ	口)不明 頭~体)ハケ(不明瞭)	外・内)10YR7/2にぶい黄橙	1~3mmの砂粒・赤色砂粒を含む	良	口縁部約1/2 外面煤付着 厚手
		A7	IV トレンチ									
135	壺	A7	SK34	—	(17.4)	(7.7)	体)縦方向のハケ後、底面付近を横方向のナデ 底)ナデ	体)ハケ後ナデ 指頭痕	外)10YR6/3にぶい黄橙内)10YR7/2にぶい黄橙	1mm前後の微砂粒、3~4mmの小石を少量含む	良	体部下半~底部約1/4
136	壺	A8	SK38	(18.4)	(12.5)	—	口)横方向のナデ後、端部に1条の沈線 頭~体)縦~斜め方向のハケ	口)端部は横方向のナデ 頭~体)斜め方向のハケ	外)2.5Y6/2灰黄内)2.5Y7/2灰黄	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約2/5 外面かすかに被熱痕あり
137	壺	A8	SK38	23.8	(4.8)	—	口)縦方向のハケ 端部を横方向のナデ ハケ工具による刻み目の後、同様の工具で、端面中央を横方向に連続して刻み、沈線状とする	口)横~斜め方向のハケ後、端部を横方向のナデ	外・内)2.5Y7/2灰黄	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部のみ ハケ原体幅約4cm
		A7	SK37									
138	壺	A8	SK38	—	(2.8)	—	口)縦~横方向のハケ 端面に上から順に刻み目、沈線、刻み目	口)ハケ(不明瞭)	外・内)2.5Y8/3淡黄	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
139	壺	A7	SK37	—	—	—	頭)上から櫛描直線文(7条1組)、5~6条1組の直線文2帯、4~5条1組の櫛描波状文、同直線文、同波状文、6条1組の直線文、6条1組の半同心円文5条1組の波状文以下、ハケ後ミガキ	口)横方向のハケ後、櫛描波状文 頭)ハケ 体)ハケ後ナデ	外)10YR7/2にぶい黄橙内)5Y3/1オリーブ黒	1mm前後の砂粒(赤色・白色)を多く含む	やや良	頭~体部片 原体は複数使用 破片を図上復元
140	甕	A20	SD4	(18.0)	(5.4)	—	口)擬凹線7条 頭)不明	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外)10YR8/3浅黄橙内)10YR7/2にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を多量含む	良	口縁約1/4 外面磨滅 被熱痕あり
141	甕	A20	SD4	(18.7)	(5.7)	—	口)擬凹線5~6条 頭)横方向のナデ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外)10YR7/6明黄褐内)10YR8/4浅黄橙	1mm以下の砂粒を含む	やや良	口縁部約1/4 全体に磨滅する
142	壺	A20	SD4	—	(2.4)	—	口)不明 端部に円形浮文貼付け	口)不明	外)10YR4/1にぶい褐灰内)10YR8/3浅黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 円形浮文は2 個残存 内外面磨滅
143	甕	A20	SD6	(19.0)	(1.6)	—	口)横方向のナデ	口)不明	外)10YR6/3にぶい黄橙内)5YR6/4にぶい橙	微砂粒を含む	良	口縁部片 内外面磨滅
144	須恵器 無台杯	A20	SD6	(10.0)	(2.0)	(7.1)	口~体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り後ナデ	口~体)回転ナデ	外・内)N6/灰	白色微砂粒を含む	良	底部約1/8
145	須恵器 瓶	A20	SD6	—	(2.1)	(8.0)	体)回転ナデ 底)ナデ	体)回転ナデ	外)2.5Y6/1黄灰内)5Y7/1灰白	1mm大の砂粒を少量含む	良	底部約1/4
146	壺	A16-17	SD15	—	(2.2)	—	口)横方向のナデ後、円形浮文貼付け 以下ミガキ	口)横方向のナデ	外)2.5Y7/3浅黄内)10YR7/2にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 円形浮文は1個残存
147	甕	A20	SD8	(22.0)	(11.0)	—	口~頭)横方向のナデ 口縁部にハケ工具による刻み目 体)斜め方向のハケ	口)横方向のナデ 頭~体)斜め方向のハケ	外)10YR7/3にぶい黄橙内)10YR8/3浅黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石を含む	良	口縁部約1/8 外面煤付着
148	甕	A14	SD25	—	(3.4)	—	口)ハケ後、端部に刻み目	口)横方向のナデ	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片

第1節 土器

No.	器種 部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色調	胎土	焼成	残存・備考
							外面	内面				
149	鉢	A14	SD26	(19.0)	(7.2)	—	口) 横方向のナデ後、端部に刻み目 流水文を巡らせ、結束する位置の上部に突起? 下部に凹形刺突 体) 横方向のナデ	口) 横方向のハケ後ナデ 体) ナデ	外) 10YR6/2灰黄褐 内) 2.5Y6/2灰黄	1~2mm前後の砂粒、雲母粒子を含む	良	頸部に赤彩痕あり 煤付着 口縁部約1/8 66と同一個体
150	甕	A14	SD26	(15.6)	(7.6)	—	口) 端部に刻み目 体) 横~縦方向のハケ(不明瞭)	口) 横方向のナデ 頸~体) 横~縦方向のハケ後、ナデ 指頭痕	外・内) 10YR7/4にぶい黄橙	2mm大の砂粒を多量含む	良	口縁部2/5
151	甕	A14	SD26	22.0	28.6	6.0	口) 端部に刻み目 頸~体) 斜め方向のハケ	口~体) 横~斜め方向のナデ	外) 5YR6/3にぶい橙 内) 5YR6/4にぶい橙	2~3mm前後の砂粒・小石を含む	良	2/3 全体に被熱し、外面煤付着、器面荒れる 内面黒け付着痕
152	壺	A14	SD26	—	(2.6)	—	口) 縦方向のハケ後、口縁帯を強く横方向にナデ、凹線状とする 三角形刺突と下端に刻み目	口) 横方向のナデ	外) 10YR7/2にぶい黄橙 内) 10YR6/2灰黄褐	3mm前後の小石・砂粒を少量含む	良	口縁部片
153	壺	A14	SD26	—	(2.5)	—	口) 連弧文 縄文	口) 縄文以下、横方向のナデ	外) 5YR7/6橙 内) 10YR3/1黒褐	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 口縁は波状となる
154	壺	A14	SD26	—	—	—	体) 羽状刺突 刻み目を有す楕円形浮文 レンズ状の沈線	体) ナデ? (磨滅)	外) 10YR4/2灰黄褐 内) 10YR6/2灰黄褐	1~2mmの砂粒(石英・長石)を含む	良	頸~体部片
155	壺	A14	SD26	—	—	—	体) 沈線をレンズ状に配置し、反転部を有す 突起部あり 羽状刺突を施す	体) 不明	外) 10YR3/1黒褐 内) 10YR5/3にぶい黄褐	1~2mmの砂粒(石英・長石)を多く含む	良	頸部片
156	壺	A14	SD26	—	—	—	体) 突帯と刻み目を有す浮文貼付後、横方向のナデ	体) ナデ	外) 10YR5/3にぶい黄褐 内) 10YR7/4にぶい黄橙	2mm前後の砂粒を含む 雲母微量含む	良	体部片 煤付着
157	壺	A15	SD29	(14.2)	(7.0)	—	口) 端部にハケ工具による刻み目 頸) ハケ後、ナデで消し、6条1単位の縞直線文(2帯残)	口) 横方向のナデ 頸) 横~斜め方向のハケ	外) 10YR7/2にぶい黄橙 内) 10YR6/4にぶい黄橙	1mm大の砂粒を含む	やや良	口縁部約1/4
158	壺	A15	SD29	(16.4)	(7.4)	—	口) 2本1組の刻み目を有す棒状浮文貼付後、縞直線文の下端を指押圧 頸) ハケ後、指ナデ 縞直線文残存	口) 横方向のナデ 頸) 板状工具によるナデ	外) 7.5YR6/4にぶい橙 内) 7.5YR7/4にぶい橙	1~2mm前後の赤色・白色砂粒を含む	良	口縁部約1/3 浮文は推定4箇所 被熱し頸部劣化 煤付着 受口状口縁
159	壺	A15	SD29	—	—	—	口) 口唇部沈線3条? 縦方向のハケ 縞直線文の後、6条1組の縦方向の縞直線文	口) 横方向のナデ(磨滅)	外) 10YR8/3淺黄橙 内) 10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 波状文はコンパス状に施文
160	壺	A15	SD29	—	—	—	体) 斜め方向のハケ後、交互に5条1組の縞直線文と直線文	体) 不定方向ハケ後、ナデ	外) 10YR8/2灰白 内) 10YR8/1灰白	1~2mm前後の砂粒を含む	良	体部片 上3段と下1段は原体が異なる
161	甕	A15	SD29	(16.8)	(7.4)	—	口) 端部に刻み目(不明瞭) 頸~体) 縦方向のハケ後、縞直線文と縞直線文	口) 不明 頸) ハケ(不明瞭) 体) 不明	外) 5YR7/6橙 内) 10YR7/3にぶい黄橙	2~3mm前後の砂粒・小石を含む	やや良	口縁約1/6 被熱痕あり 全体に磨滅し、縞直線の単位不明
162	甕	A15	SD29	(19.0)	(5.6)	—	口) 端部に刻み目 体) 斜め方向のハケ	口~体) ハケ後、ナデ	外) 10YR5/2灰黄褐 内) 10YR4/1褐灰	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/8 外面煤付着痕あり
163	甕	A15	SD29	(17.0)	(7.7)	—	口) 端部に刻み目(不明瞭) 頸~体) 縦~斜め方向のハケ	口~体) 斜め方向のハケ	外) 5YR6/4にぶい橙 内) 2.5YR6/6橙	2~3mmの砂粒を含む	良	約1/4 被熱痕あり 全体に磨滅
164	甕	A15	SD29	(20.0)	(5.5)	—	口) 端部に刻み目 体) ハケ	口) 横方向のナデ 体) ハケ	外) 10R6/4にぶい赤橙 内) 10R6/6赤橙	2mm前後の砂粒を多量含む	やや不良	口縁約1/8 被熱し、器表面荒れる 調整不明瞭
165	甕	A15	SD29	(7.5)	(7.6)	—	口) 2個1単位の刻み目 体) 斜め~縦方向のハケ	口) 横方向のナデ 体) 横方向のハケ後、体部下半をナデ	外) 10YR5/1褐灰 内) 10YR7/2にぶい黄橙	微砂粒をやや多く含む	良	口縁部約1/7 外面煤付着 刻み目は推定8箇所 内外でハケ原体異なる
166	壺	A15	SD29	—	(10.2)	(6.0)	体) ハケ後、底付近を横方向のナデ 底) ナデ	体~底) ナデ	外) 2.5YR6/4にぶい橙 内) 10YR7/2にぶい黄橙	2mm前後の砂粒を多量含む	やや不良	底面約1/2 被熱し、器表面荒れる 調整不明瞭
167	壺	A15	SD29	—	(5.8)	8.0	体) 縦方向のハケ 底) 未調整か	体~底) ナデ 指頭痕	外) 2.5Y6/3にぶい黄 内) 10YR7/4にぶい黄橙	1~2mm大の黒色砂粒を多く含む	良	底面片 底面被熱
168	甕	A15	SD29	—	(5.5)	(5.8)	体) ハケ後、ナデ 底) 不明	体~底) ハケ後、ナデ	外) 7.5YR7/3にぶい橙 内) 7.5YR7/4にぶい橙	2~3mm前後の砂粒・小石を含む	良	底面片 被熱痕あり 器表面荒れる
169	壺	A8	SD30	(18.0)	(9.6)	—	口) 端部に縞文 頸) 斜め方向のハケ後、推定5条1単位の縞直線文複数帯と扇形文?	口) ハケ工具による波状文複数帯 頸) 横~斜め方向のハケ	外・内) 10YR6/4にぶい黄橙	1~2mm大の砂粒を含む	良	口縁部約1/4
170	壺	A8	SD30	(16.4)	(5.4)	—	口) 横方向のハケ後、横方向のナデ 端部にハケ工具による刻み目 頸) 異なる原体による斜め方向のハケ後、縞直線文複数帯	口~頸) 横~斜め方向のハケ後、口縁部を横方向のナデ 端部に刻み目	外・内) 10YR6/2灰黄褐	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/6
171	壺	A8	SD30	(26.4)	(5.6)	—	口) 横~縦方向のハケ後、一部ナデ 端部に沈線1条後、上下から羽状に刻み目	口) 横~斜め方向のハケ	外・内) 10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm大の白色砂粒をやや多量含む	良	口縁部約1/4
172	壺	A9	SD30	(18.7)	(3.6)	—	口) 縦方向のハケ後、横方向のナデ 端部にハケ工具による刻み目 頸) 縦方向の板ナデ	口) 横方向のナデ 頸) 斜め方向のハケ後、指ナデ	外・内) 10YR6/4にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/2
173	壺	A8	SD30	(7.0)	(4.3)	—	口) 縦方向のハケ後、端部に刻み目	口) ハケ後、ナデ(不明瞭)	外・内) 5YR6/4にぶい橙	1~2mm前後の赤色砂粒を含む	やや良	口縁部約1/4
174	壺	A8 A9	SD30 SP61	(20.6)	(12.9)	—	口) 端部に波状文(不明瞭) 頸) 斜め方向の粗いハケ後、8条1単位の縞直線文2帯を2段と縞直線文1帯	口) 縞直線文複数帯 頸) 横~斜め方向のハケ後、肩部に板状工具によるナデと指頭痕	外) 7.5YR7/4にぶい橙 内) 7.5YR6/6橙	1~2mm大の砂粒をやや多く含む	良	口縁~肩部約1/3 内面シミ付着
175	壺	A8	SD30	(16.8)	(4.0)	—	口) 縦方向のハケ後、横方向のナデ 端部にハケ工具による刻み目 頸) 縞直線文	口) ハケ工具による刺突 頸) 横~斜め方向のハケ	外・内) 10YR8/2灰白	1~2mm前後の赤色砂粒を少量含む	良	口縁部約1/3
176	壺	A8	SD30	(15.6)	(14.0)	—	口) 端部に刻み目 頸) ハケ後、6条1組の縞直線文3帯、波状文3帯、直線文2帯、波状文2帯以上	口) 刺突3帯 頸) 斜め方向のハケ後、縦位の縞直線文 体) ナデ	外・内) 2.5Y7/2灰黄	2~3mm前後の砂粒を多く含む	良	口縁~体部上半約1/4 内面の縦位縞直線文は2帯1組で推定4~5カ所
177	壺	A8	SD30	31.6	(24.7)	—	口) 横方向のナデ後、端部に刻み目 頸~体) ハケ後、上からハケ工具による刺突を8~9帯施し羽状文を構成 5条1単位の縞直線文を3帯施文し、直線文部分に垂線を重ねる 直線文下に扇形文	口) ハケ工具による刺突を5~6帯施し羽状文を構成 頸~体) ハケ後、胴部下半を縦方向のナデ	外・内) 10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁~体部上半約1/2 外面・口縁内面端部に煤付着
178	壺	A8	SD30	(18.0)	(5.1)	—	口) 上端部にわずかな突起部を設け、下端にかけて縦方向の羽状刺突 突起間に縞直線文後、直線文間にハケ工具による斜行する刻みを中間で反転させる	口) 横方向のナデ	外) 10YR6/4にぶい黄橙 内) 10YR7/4にぶい黄橙	1~5mm前後の砂粒・小石を含む	良	口縁部約1/2 受口状口縁

第5章 遺物

No	器種 部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色調	胎土	焼成	残存・備考
							外面	内面				
179	壺	A8	SD30	(18.6)	(3.5)	—	口) 刻みを有す2本1組の棒状浮文貼付後、刺突文3列で羽状文を構成。口唇部に羽状刺突文(頭)縦方向のハケ	口) 横方向のナデ	外・内) 10YR8/3浅黄	1~3mm前後の赤色砂粒・小石を含む	良	口縁部約1/5
180	壺	A8	SD30	(14.8)	(5.4)	—	口) 2個1組の突起より上部に4~5条1単位の弧線を2段、下部に1段を上部と位置をずらして配置し、突起間をヘラ状工具で刺突口縁下端に指押圧(頭)板状工具による縦方向のナデ	口) 唇部にハケ工具による刺突(波状を意識か)頭)ナデ	外) 10YR7/3にぶい黄橙内) 10YR6/3にぶい黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石をやや多量含む	良	受口状口縁口縁部約1/3
181	壺	A8	SD30	(30.0)	(8.8)	—	口) 刻みを有す2本1組の棒状浮文貼付後、ハケ工具による刺突4列で羽状文を構成。口唇部にハケ工具による波状文(頭)横~斜め方向のハケ	口~頭) 横方向のナデ	外) 10YR8/1灰白内) 10YR7/2にぶい黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石を含む	良	口縁部約1/8ハケ工具複数使用内面被熱痕あり
182	壺	A8	SD30	(9.0)	(6.4)	—	口) 櫛描直線文を複数帯。端部の空間を充填するように円形刺突文2帯。口唇部に刻み目(頭)櫛描波状文を複数帯施し、口縁と頸部間を2条の沈線で区画。沈線間をナデで無文帯とする	口~頭) 横方向のナデ	外) 10YR6/4にぶい黄橙内) 10YR4/1褐灰	1~3mm前後の白色砂粒・小石を含む	良	口縁~頸部上半約1/2口縁は波状の可能性あり
183	壺	A8	SD30	—	(12.6)	—	体) 条数不明瞭の櫛描直線文複数帯を上・中・下の3段施文。上段には推定3方向に円形刺突を有す突起を上下に貼付。頭~頸部間に円形刺突を巡らす。中段には6条1組の縦方向の櫛描直線文を2帯1組として推定5方向に施文。直線文帯を沈線で区画し、沈線間にミガキ	体) 指ナデ 指頭痕	外) 10YR6/4にぶい黄橙内) 10YR4/1褐灰	1~3mm前後の白色砂粒・小石を含む	良	頸部下端~体部上半約1/3付加沈線研磨手法
184	壺	A8	SD30	—	(19.2)	—	体) 最大径以上は、9~10条1単位の櫛描直線文2帯を2段、3帯を1段施し、各々へらによる三又状沈線を重ね、刺突列で区画。刺突間にはミガキ。最大径以下はハケ後ミガキ	体) 横方向のハケ、肩部に指ナデ	外) 10YR6/2灰黄褐内) 10YR5/1褐灰	微砂粒を含む	良	体部約1/3外面煤付着赤彩痕が沈線にかすかに残存搬入品か
185	壺	A8	SD30	—	(15.8)	6.9	体) 斜め~縦方向のハケ底) ハケ後、ナデ	体) 横~縦方向のハケ後、下半をナデ	外・内) 10YR6/2灰黄褐	2mm大の砂粒をやや多く含む	良	体部約2/5外面煤付着
186	壺底部	A8	SD30	—	(10.0)	5.8	体) 縦方向のハケ後、底部付近を横方向のナデ 底) ナデ	体~底) 縦~横方向のナデ 指頭痕	外・内) 10YR7/3にぶい黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石を含む	良	底部片外面煤、内面黒け付着
187	壺	A8	SD30	—	(35.4)	(8.0)	体) ハケ後、上半は交互に5条1単位の櫛条痕の弧線文と波状文下半はミガキ底) ナデ	体) 横~斜め方向のハケ 肩部は指ナデ	外) 10YR7/3にぶい黄橙内) 10YR8/3浅黄橙	2~3mm前後の砂粒・小石を含む	良	底部含む体部約1/2 外面煤付着、内面被熱・黒色化 底部付近の粘土剥離下にもハケ調整痕あり
188	壺	A8 A9	SD30 SK32	—	(17.8)	—	体) 刻み目を有す楕円形浮文を基準に複数状の沈線による長楕円形を施文。上下の刺突により文様帯を区画し、刺突間は無文帯(上部ミガキ・下部ナデ?) 胴部下半は斜めの櫛条痕	体) 横~斜め方向のナデ	外) 10YR7/3にぶい黄橙内) 10YR8/2灰白	1~2mm前後の砂粒をやや多く含む	良	胴部約1/3外面煤付着
189	壺	A8	SD30	—	(15.7)	—	体) ハケ後、上半を板状工具によるナデ	体) ハケ後、ナデ	外) 10YR6/3にぶい黄橙内) 10YR6/2灰黄褐	1~2mm前後の砂粒を含む	良	体部約2/5
190	壺	A8	SD30	—	—	—	頭) ナデ後、櫛条痕で直線文と連弧文 連弧文が接する面所に短線文	頭) ナデ(ほとんど剥離)	外) 7.5YR4/1にぶい褐灰内) 7.5YR7/4にぶい黄橙	2~3mm前後の砂粒・小石を少量含む	良	頸部片
191	壺	A9	SD30	—	—	—	体) 6条1単位の櫛描直線文4帯と塵状文3帯を交互に施文し、下段に半同心円文	体) 横方向のハケ	外・内) 10YR6/2灰黄褐	1~2mm大の砂粒を含む	良	肩部片 被熱により、外面煤付着、内面黒色化
192	甕	A8	SD30	20.3	(10.9)	—	口) 縦方向のハケ後、横方向のナデ 端部に刻み目(不明瞭) 体) 縦方向のハケ	口~体) 横~斜め方向のハケ後、口縁を横方向のナデ	外) 10YR5/2にぶい黄褐内) 10YR6/3にぶい黄橙	1~2mm大の赤色・白色砂粒を多量含む	良	口縁部約5/6外面煤付着
193	甕	A8	SD30	22.0	(12.2)	—	口) 横方向のハケ後、端部刻み目(体) 横~斜め方向のハケ	口) ハケ体) 横ナデ	外・内) 10YR7/2にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を多量含む	良	口縁部約1/3外面煤付着
194	甕	A8	SD30	22.5	(35.0程度)	5.1	口) 端部にハケ工具による刻み目(体) 斜め~縦方向のハケ底) ナデ	口~頭) 横~斜め方向のハケ後、下半部をナデ	外) 10YR6/3にぶい黄橙内) 10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒をやや多量含む	良	口縁~体部約1/2 底部片 外面煤付着外形歪みあり
195	甕	A8	SD30	(21.6)	(14.7)	—	口~頭) 横方向のナデ後、端部にハケ工具による刻み目(体) 縦方向のハケ後、肩部に横方向のハケと斜め方向の板状工具によるナデ	口) 斜め~横方向のハケ後、横方向のナデ(体) 板状工具による斜め方向のナデ	外) 10YR7/1灰白内) 10YR7/2にぶい黄橙	1~2mm大の砂粒を含む	良	口縁~体部上半部約1/3外面煤付着、内面黒け付着痕あり
196	甕	A8	SD30	(21.4)	(12.2)	—	口) 粘土塊の突起を貼付 端部に刻み目(体) 横~斜め方向のハケ(体) 縦~斜め方向のハケ	口) ハケ工具による波状文2帯頭~体) 横~斜め方向のハケ後、体部は板状工具によるナデ	外・内) 10YR8/3浅黄橙	2~3mm前後の赤色砂粒を多く含む	良	口縁部約1/3 粘土塊貼付突起は推定4箇所 煤付着
197	甕	A8	SD30	(19.6)	(15.0)	—	口) 刻み目後、押圧(体) 縦方向のハケ後、上半に横方向のハケ	口) 櫛描波状文頭~体) ハケ後、ナデ	外) 7.5YR7/4にぶい黄橙内) 10Y7/4にぶい黄橙	1~2mmの砂粒を少量含む	良	指押圧部大きく欠損 刻み目はハケ工具使用
198	甕	A8	SD30	24.5	(18.3)	—	口) 端部に刻み目頭~体) 横~斜め方向の粗いハケ後、各々異なる原形で肩部に斜めハケ、肩部に直線文	口) 櫛描波状文3帯 頭~体) 上半は異なる原形で横~斜め方向のハケ 下半にかけて板ナデ	外) 10YR7/3にぶい黄橙内) 10YR7/2にぶい黄橙	2~3mmの砂粒・小石を少量含む	良	約2/3 外面胴部に煤付着 内面黒け痕、変色などの被熱痕あり
199	甕	A8	SD30	20.0	(13.3)	—	口) 斜め方向のハケ後、端部にへらによる刻み目(体) 上半に5条1単位の櫛描直線文2帯、櫛描波状文1帯、櫛描直線文2帯	口) 櫛描波状文(体) 横~斜め方向のハケ後、体部下半は指ナデ	外) 10YR6/3にぶい黄橙内) 2.5Y6/3にぶい黄	1mm大の砂粒を含む	良	口縁~体部上半約2/3煤付着 施文順序は上から下へ
200	甕	A8	SD30	(28.5)	(27.2)	—	口) 端部に刻み目と推定4箇所指押圧 頭~体) 横~斜め方向のハケ調整の後、肩部のナデを消し、6条1単位の櫛描直線文2帯とハケ工具による羽状文 中心に太めの斜め方向の粗いハケ	口) 外面と異なるハケ原形で羽状文 頭~体) 原体の異なるハケを施した後、体部は縦方向主体のナデ	外) 5YR7/4にぶい黄橙内) 10YR7/2にぶい黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石を含む	良	口縁~体部上半約1/3
201	甕	A8	SD30	(24.0)	30.5	(7.0)	口) 横方向のナデ後、端部に刻み目と2個1組の押圧(体) ハケ 底) 未調整	口) ハケ後、横方向のナデ(体) ハケ後、縦方向のナデ(指)	外・内) 10YR6/2灰黄褐	1~3mm前後の砂粒・小石を含む	良	約3/4 口縁の一部がおそらく片口状か? 押圧は残存不良、推定6箇所か 外面煤付着、内面黒け付着痕

第1節 土器

No.	器種 部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色調	胎土	焼成	残存・備考
							外面	内面				
202	甕	A8	SD30	(25.0)	(4.5)	—	口)刻み目 指押圧 頭)ハケ	口~頭)ハケ	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	2~3mmの砂粒を多量含む	良	指押圧1箇所残存 刻み 目はハケ工具使用
203	甕	A8	SD30	(28.0)	(5.3)	—	口)横方向のハケ後、端部に内面 のハケ工具による刻み目 頭~肩)縦方向のハケ 6条1単位 の櫛描直線文、波状文	口~肩)斜め~横方向のハケ	外)10YR8/2灰白 内)10YR8/1灰白	1mm大の赤色砂粒をやや 多量含む	良	口縁部約1/6 内外面でハケ原体異なる
204	甕	A8	SD30	(20.0)	(1.9)	—	口)縦方向のハケ後、横方向のナ デ 端部をハケ工具による刻み目	口)ハケ後、上端を横方向のナ デ	外)10YR6/2灰黄褐 内)5YR7/4にぶい橙	1mm大の砂粒を含む	良	口縁部約1/8以下 外面煤付着
205	甕?	A8	SD30	—	(4.1)	—	口)ナデ? (磨滅する)	口)斜め方向のハケ後、ナデ ハ ケ工具による羽状文	外・内)10YR8/3浅黄橙	2~3mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
206	甕	A8	SD30	(18.4)	(5.2)	—	口)横方向のナデ	口~体)ハケ後、ナデ	外)2.5Y8/2灰白 内)10YR8/2灰白	1~2mm前後の砂粒を含む 雲母(?)粒子含む	良	口縁部約1/8以下 外面ほぼ黒斑
207	甕	A8	SD30	—	(6.5)	6.9	体)縦~斜め方向のハケ調整 底)板状圧痕	体~底)ナデ	外)5YR7/4にぶい橙 内)10YR7/2にぶい黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石 を含む	良	底部片 底面板状痕
208	壺	A9	SD30	—	(13.9)	5.1	体)縦方向のハケ 底付近はハケ 調整後、約1cm幅の粘土をナデで 貼付ける 底)ナデ	体~底)斜め方向のハケ後、ナデ	外)10YR5/2灰黄褐 内)10YR7/2にぶい黄橙	1~2mm大の砂粒を少量含 む	良	底部完形を含む胴下半 約2/3 外面煤付着
209	壺底部	A8	SD30	—	(4.7)	7.6	体)縦方向のハケ 底)ナデ	体)斜め方向のハケ 底)指ナデ	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒をやや 多く含む	良	底部片 外面煤付着 外 面かすかに赤影痕あり
210	壺底部	A8	SD30	—	(3.6)	5.2	体)縦方向のハケ後、底付近を横 方向のナデ 底)不明	体~底)斜め方向のハケ後、ナデ	外)10YR4/6にぶい黄橙 内)2.5YR3/2黒褐	1~2mm前後の砂粒・雲母 粒子を含む	良	底部片 底面被熱痕あり
211	壺底部	A8	SD30	—	(4.2)	7.6	体)縦方向のハケ 底)ナデか?(不明瞭)	体~底)ナデ	外・内)10YR8/2灰白	1~2mm前後の赤色・白色 砂粒を含む	良	底部片
212	底部	A8	SD30	—	(3.6)	4.6	体)縦方向のハケ 底)ナデ(不明瞭)	体~底)ナデ	外)2.5Y8/3淡黄 内)10YR6/2灰黄褐	1~2mm大の砂粒を含む	良	底部片 外面被熱し煤付着、内面 被熱により黒色化
213	甕?	A8	SD30	—	(4.5)	4.5	体)ハケ 底)ナデ	体~底)ハケ後、ナデ	外)10YR6/3にぶい黄橙 内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	底部片 煤付着
214	壺底部	A8	SD30	—	(2.7)	(6.2)	体)縦方向のハケ 底)木葉痕	体)ナデ	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	底部片
215	壺底部	A9	SD30	—	(3.6)	5.7	体)縦方向のハケ 底)木葉痕をナデ消す	体~底)ナデ	外・内)10YR4/1褐灰	2mm大の砂粒をやや多く 含む 雲母粒子含む	良	底部片 外面煤付着
216	壺底部	A8	SD30	—	(2.7)	6.2	体)縦方向のナデ後、底付近横方 向のナデ 底)ナデ	体~底)ナデ	外)2.5Y5/2暗灰黄 内)2.5Y7/6明黄褐	1~2mm前後の砂粒を含む	良	底部片 焼成後穿孔径 0.3~0.9cm
217	壺底部	A8	SD30	—	(5.1)	5.6	体)ナデ後、縦方向のハケ(2次的 に)	体~底)ナデ	外・内)7.5Y7/4浅黄	1~2mm前後の砂粒を含む	良	底部片 底部被熱痕あり 焼成後穿孔径0.7~1.5cm
218	壺	A9	SP60	—	(26.2)	—	体)ハケ	体)横~斜め方向のハケ	外)10YR7/3にぶい黄橙 内)7.5YR7/3にぶい橙	1~3mm前後の赤色砂粒・ 小石を含む	良	体部のみ約1/3
219	壺	A19	包IV	(12.0)	(7.5)	—	口)端部に刻み目(不明瞭) 頭)ナデ後、櫛描直線文(単位不 明)複数帯と櫛描波状文	不明	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	2~3mm前後の砂粒・小石 を含む	良	口縁部約1/4
220	壺	A18	攪乱	(12.0)	(6.1)	—	口)端部に刻み目 頭)不明	不明	外)10YR8/4浅黄橙 内)10YR8/3浅黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	やや不 良	口縁部約1/6
221	甕	A17	畝状 遺構	(16.1)	(9.6)	—	口)端部に刻み目 体)縦方向のハケ後、頭部下に横 方向のハケ、幅の細いハケ工具 による縦方向の粗いハケ	口~体)斜め方向のハケ後、体部 上半に幅の狭いハケ工具による ナデ	外)10YR6/2灰黄褐 内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	体部上半約1/4 口縁重みあり
222	甕	A21	包V	(20.6)	(5.0)	—	口)端部にハケ工具による刻み目 と押圧 頭~肩)縦方向のハケ 後、横方向のハケ	口~肩)横~斜め方向のハケ後、 口縁部にハケ工具による波状文	外・内)10YR7/4にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/4 外面煤付着痕
223	甕	A20	包IV	(13.8)	(6.6)	—	口)横方向のナデ 体)板状工具 による斜め方向のナデ	口)横方向のハケ 体)横から斜め方向のハケ	外)7.5YR7/4にぶい橙 内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/8 外面煤付着痕あり
224	壺	A7	包IV	—	(3.0)	—	口)縦方向のハケ後、横方向のナ デ	口)端部に刻み目 櫛描直線文と 半円文	外)10YR7/3にぶい黄橙 内)10YR7/4にぶい黄橙	微砂粒を含む	良	口縁部片
225	壺	A20	包IV	—	(2.1)	—	口)端部刻み目 縦方向のハケ	口)不明	外・内)10YR8/2灰白	微砂粒を含む	良	口縁部片
226	壺	A15	包IV	—	(2.6)	—	口)横方向のナデ 端面上から 刻み目、沈線、刻み目	口)横方向のナデ	外)10YR8/3浅黄橙 内)5YR7/3にぶい橙	1~2mm前後の砂粒を含む	やや不 良	口縁部片 内外面赤影される
227	甕	A14	包IV	—	(4.6)	—	口)縁部にハケ工具による刻み目 体)縦方向のハケ	口~体)横方向のハケ後、口縁端 部横方向のナデ	外)2.5Y7/3浅黄 内)2.5Y7/2灰黄	2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 内面剥離
228	甕	A15	包III	—	(3.6)	—	口)横方向のハケ後、横方向のナ デ 端部に円形刺突 頭)櫛描直線文	口)横~斜め方向のハケ後、上部 横方向のナデ	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR8/2灰白	1~2mm前後の砂粒を含む 雲母粒子少量含む	良	口縁部片 端部の内外に煤付着痕
229	甕	A9	包IV	—	—	—	口)縦方向の櫛条痕の後、端部に 刻み目(磨滅する)	口)櫛描波状文と櫛描直線文	外・内)10YR8/3浅黄橙	2mm前後の砂粒を含む	やや不 良	口縁部片 外面と内面の施文原体は 同一の可能性あり
230	甕?	A14	畝状遺構	—	—	—	口)縦方向のハケ後、横方向のナ デ 端部に刻み目	口)横方向のハケ後、ナデ ハ ケ工具による羽状文	外・内)7.5YR7/4にぶい橙	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
231	甕	A15	包III	—	(3.1)	—	口)縦方向のハケ後、端部を横方 向のナデ	口)横方向のハケ後、端部を横方 向のナデ	外)10YR6/2灰黄褐 内)2.5Y7/2灰黄	2~3mm前後の砂粒・小石 を少量含む	良	口縁部片
232	壺	A10	包IV	—	—	—	体)櫛描波状文、櫛描直線文、 (推定)扇形文	体)斜め方向のハケ	外)10YR7/3にぶい黄橙 内)10YR7/2にぶい黄橙	1~3mm前後の砂粒・小石 を含む	良	口縁部片 櫛原体は9条1単位か
233	壺	A15	包III	—	—	—	体)ハケ後、ナデ消す 円形刺 突、三角形刺突3段、(櫛描)直線 文	体)横方向のナデ	外)10YR8/2灰白 内)10YR7/2にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	体部片
234	壺	A10	トレンチ	—	—	—	体)斜め方向の櫛条痕の後、櫛条 痕の直線文と半蔵竹管状工具に よる波状文	体)横方向のナデ	外)2.5Y7/1灰白 内)10YR5/2灰黄褐	2mm前後の砂粒を含む	良	体部片 櫛条痕と直線文は同じ原 体の可能性あり
235	壺	A13	包III	—	—	—	体)斜め方向の櫛条痕 6条1単位 の櫛条痕の直線文複数帯の上に3 条1単位の短線文	体)不明	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	体部片
236	壺	A13	トレンチ	—	—	—	体)縦方向の櫛条痕後、櫛条痕の 直線文	体)ナデ	外・内)10YR8/3浅黄橙	1~2mm前後の砂粒を含む	良	体部片
237	壺	A15	包III	—	—	—	体)ハケ後、ナデで消す 櫛描直 線文、円形刺突(複数段)	体)ナデ	外)10YR8/2灰白 内)2.5Y7/2灰黄	1mm前後の砂粒を含む	良	体部片
238	壺	A13	包III	—	—	—	体)櫛描直線文と櫛描波状文を交 互に施文	体)横方向のハケ後、ナデ ハ ケ工具による刺突	外)10YR6/3にぶい黄橙 内)10YR5/1褐灰	2mm前後の砂粒を含む	良	体部片 櫛状工具の1帯 分は8条確認

第5章 遺物

No	器種 部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色 調	胎 土	焼成	残存・備考
							外 面	内 面				
239	底部	A15	トレンチ	—	(5.0)	6.1	体)縦～斜め方向のハケ底)未調整	体)底)ナデ(摩滅)	外)10YR7/2にぶい黄橙内)10YR8/2灰白	2～3mm前後の砂粒・小石を含む	良	底部片 焼成前穿孔? 外面煤付着痕
240	壺	A20		—	(15.8)	7.8	体)ハケ底)不明	体)ハケ底)ナデ	外)7.5YR6/3にぶい掲内)7.5Y7/4にぶい橙	3mm程度の小石を多量含む	良	底部を含む体部下半1/4 外面磨滅
241	高坏	A20	IV	—	(8.8)	—	坏)不明 脚)ミガキ	坏)不明 脚)絞り痕	外・内)2.5Y8/2灰白	微砂粒を含む	やや良	脚部片
242	有孔円盤	A13	トレンチ	長さ4.9 幅5.3 厚0.6 孔径0.7～0.8 重量(14.0g)				側面研磨なし	外)5YR7/3にぶい橙内)10YR7/2にぶい黄橙	1～2mm前後の砂粒を含む	良	両面穿孔 剥離あり
243	甕	A26	SI 1 SD45	(19.6)	(10.8)	—	口)横方向のナデ 体)縦後、横方向のハケ 刺突1箇所残存	口)横方向のナデ 体)ケズリ 指頭痕	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	1mm大の砂粒を少量含む	良	口縁部約1/3 外面煤付着、内面焦げ付着痕あり
244	甕		SI 1	(16.0)	(5.5)	—	口)縦回線5条以上 頭)不明	口)横方向のナデ 指頭痕	外)7.5YR7/4にぶい黄橙内)10YR7/3にぶい黄橙	1～2mmの砂粒を含む	良	口縁部約1/8 全体に磨滅
245	高坏	A26	SI 1 貼床内	—	(5.6)	—	坏)ミガキ 脚)ミガキ	坏)ミガキ 脚)ナデ	外・内)7.5YR7/6橙	微砂粒を少量含む	良	透孔4ヶ所 脚部片
246	台付鉢	A27	SI 1 貼床内	—	(5.1)	—	台)ミガキ	台)ハケ	外)7.5YR7/4にぶい橙内)10YR7/2にぶい黄橙	1～2mm大の砂粒を多量含む	良	脚部片 透孔3方向
247	甕	A22	SK41	(18.0)	(14.4)	—	口)横方向のナデ 体)縦～斜め方向の細かいハケ	口)横方向のナデ 体)ハケ後、板状工具による縦方向のナデ	外)7.5YR6/4にぶい橙内)2.5Y7/2灰黄	1～2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/4 外面煤付着
248	甕	A22	SK41	(20.0)	(2.8)	—	口)横方向のナデ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外・内)10YR7/4にぶい黄橙	1～3mm前後の砂粒を含む	やや良	口縁部約1/4 外面煤付着 全体に磨滅する
249	甕	A22	SK41	(13.2)	(4.4)	—	口)横方向のナデ 体)ハケ後、横方向のナデ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外・内)7.5YR6/4にぶい橙	1～2mmの砂粒を含む	良	口縁部約1/3 外面煤付着
250	甕	A22	SK44	(15.0)	(4.8)	—	口)縦回線4～5条 頭)横方向のナデ 体)ハケ(不明瞭)	口)横方向のナデ 指頭痕	外)5YR7/3にぶい橙内)7.5YR7/4にぶい橙	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁約1/6
251	甕	A22	SK44	(15.4)	(11.1)	—	口)横方向のナデ 体)斜め後、横方向のハケ 肩部にハケ工具による羽状の刺突(全周しない)	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外)2.5Y7/2灰黄内)2.5Y8/2灰白	微砂粒をやや多く含む	良	口縁部約5/6 外面煤付着
252	甕	A22-23	SK44	20.4	(12.2)	—	口)横方向のナデ 体)斜め～横方向のハケ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外・内)10YR8/3浅黄橙	微砂粒、2～3mm大の赤色砂粒・小石を含む	良	口縁～肩部約2/3 外面煤、内面焦げ付着痕
253	壺	A23	SK47	—	—	—	頭)斜め方向のハケ後、縦方向のミガキ	頭)斜め方向のハケ後、ナデ	外)10YR5/3にぶい黄橙内)10YR6/4にぶい黄橙	微細～4mm大の黒褐色砂粒・小石を多く含む	良	頸部片 在地の胎土ではなく、搬入土器である
254	甕	A23	SK47	—	(4.8)	—	口)縦回線6条 頭)横方向のナデ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外)10YR7/2にぶい黄橙内)10YR7/3にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
255	壺	A23	SK48	—	(2.0)	—	口)不明 端部刻み目	口)横方向のハケ	外・内)10YR8/3浅黄橙	2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 全体に磨滅
256	壺	A26	SK55	(11.7)	(3.8)	—	口)横方向のナデ	口)横方向のナデ	外・内)10YR7/2にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片 口縁煤付着
257	壺?	A26	SK55	—	—	—	頭)斜め方向の節条痕 節条痕の直線文とへら状工具による波状(山形)文2帯	頭)横方向のナデ	外)2.5YR5/4にぶい赤褐内)10YR7/3にぶい黄橙	2mm前後の砂粒を少量含む	良	頸～肩部片? 破片の端部に沈痕あり
		A22	SK41									
258	甕	A26	SK56	(14.0)	(3.2)	—	口)縦回線2条? 頭)横方向のナデ	口)横方向のナデ 指頭痕 体)ケズリ	外)2.5Y7/2灰黄内)2.5Y7/3浅黄	1mm以下の砂粒を含む	良	口縁部約1/8
259	鉢	A27	SK59	(13.8)	7.1	4.4	口)体)ハケ後、ミガキ 体)ケズリ	口)底)ハケ後、ミガキ	外)7.5YR5/4にぶい掲内)7.5YR6/4にぶい橙	1～2mm前後の砂粒を含む	良	約1/2 外面煤付着、内面被熱痕
260	壺	A26	SK64	(10.0)	(7.0)	—	口)ミガキ 体)ミガキ	口)ミガキ 体)ミガキ	外)10YR6/4にぶい黄橙内)10YR7/3にぶい黄橙	1～2mm大の砂粒を多量含む	良	口縁部約1/8以下 体部約1/3
261	甕	A26	SD45	(18.1)	(11.7)	—	口)横方向のナデ 体)板状工具によるナデ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外・内)7.5YR7/6橙	1～2mm大の砂粒を多量含む	良	口縁部約1/3 外面煤付着
262	甕	A26	SD45	15.8	(16.3)	—	口)横方向のナデ 体)縦～斜め方向のハケ	口)横方向のナデ 体)横～斜め方向のハケ後、中位までケズリ	外・内)10YR7/4にぶい黄橙	1～2mm大の砂粒を多量含む	良	口縁～体部約3/4 外面煤付着 器面荒れる
263	甕	A26	SD45	(16.8)	(15.0)	—	口)横方向のナデ 体)板状工具によるナデ	口)横方向のナデ 体)ケズリ 後、板状工具によるナデ	外)10YR7/3にぶい黄橙内)10YR7/2にぶい黄橙	1mm大の砂粒を多量含む	良	口縁部約1/2、体部約1/8 外面煤付着
264	甕	A26	SD45	(16.0)	(9.3)	—	口)横方向のナデ 体)ハケ後、板状工具によるナデ	口)横方向のナデ 体)板状工具によるナデ	外・内)7.5YR6/4にぶい橙	1～2mm大の砂粒を含む	良	口縁部約1/4 内・外面一部被熱痕
265	甕	A26	SD45	(16.7)	(4.8)	—	口)横方向のナデ 体)横～斜め方向のハケ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外)7.5YR6/4にぶい橙内)7.5YR7/4にぶい橙	1～2mm大の砂粒を多量含む	良	口縁部約1/5 外面煤付着痕
266	甕	A26	SD45	(11.0程度)	(6.3)	—	口)横方向のナデ 体)横～斜め方向のハケ	口)横方向のナデ 体)斜め方向のハケ	外)7.5YR7/3にぶい橙内)10YR7/3にぶい黄橙	1mm大の砂粒を多量含む	良	口縁部約1/8以下 外面煤付着
267	甕	A26	SD45	(13.8)	(6.3)	—	口)横方向のナデ 体)ハケ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	1～2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/2 外面煤付着
268	鉢	A26	SD45	12.8	10.0	1.3	口)横方向のナデ 体)縦方向のハケ 底)ケズリ	口)横方向のナデ 体)ケズリ後、ナデ	外)7.5YR7/3にぶい橙内)10YR8/3浅黄橙	2mm大の砂粒を少量含む	良	約4/5
269	台付鉢	A26	SD45	(9.4)	13.7	10.4	口)体)ミガキ 台)ハケ後ミガキ	口)底)ミガキ 台)ケズリ 台)横方向のナデ	外)7.5YR7/6橙内)10YR8/3浅黄橙	2～3mm大の砂粒・小石を含む	良	鉢部約3/5 脚部約4/5
270	高坏	A26	SD45	(25.2)	(4.6)	—	口)不明	口)ミガキ	外)5YR7/8橙内)5YR6/6橙	微砂粒を少量含む	良	磨滅する
271	器台	A26	SD45	(22.8)	(7.5)	—	受)ミガキ	受)ハケ後、ミガキ	外・内)7.5YR6/6橙	微砂粒を含む	良	受部約5/8
272	高坏	A26	SD45	—	(9.5)	—	坏)ミガキ 脚)ミガキ	坏)ミガキ 脚)絞り痕	外)7.5YR7/4にぶい橙内)10YR7/3にぶい黄橙	微砂粒を含む	良	坏部底面、脚部上半
273	器台	A26	SD45	—	(9.0)	—	脚)ハケ後ミガキ	受)ミガキ 脚)絞り痕 ケズリ	外)7.5YR7/3にぶい橙内)10YR6/1掲灰	1mm大の砂粒を含む	良	脚部約1/3 透孔3方向
274	甕	A23	SD33	(17.0)	(3.4)	—	口)横方向のナデ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外・内)10YR8/2灰白	1mm以下の砂粒を含む	良	口縁部約1/8
275	壺	A27	SD48	(17.0程度)	(3.8)	—	口)ミガキ(不明瞭) 下端にへら状工具による刻み目	口)ミガキ(不明瞭)	外)7.5YR7/4にぶい橙内)7.5YR7/2明掲灰	微砂粒をやや多量含む	良	口縁部1/8以下
276	壺	A27	SD48	(15.8)	(7.2)	—	口)横方向のナデ 体)ハケ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外・内)10YR7/2にぶい黄橙	1mm大の砂粒を多量含む	良	口縁部約1/3
277	壺	A27	SD48	(12.0)	(6.4)	—	口)横方向のナデ 体)ハケ後、板状工具によるナデ	口)横方向のナデ 体)横～斜め方向のハケ後、口縁部を横方向のナデ 体)ナデ	外・内)7.5YR7/4にぶい橙	1～2mm大の砂粒を含む	良	口縁部約1/3
278	甕	A27	SD48	(16.9)	(6.6)	—	口)縦回線9条 頭)横方向のナデ 体)ハケ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外)10YR7/3にぶい黄橙内)7.5YR6/2灰褐	1～2mmの砂粒をやや多量含む	良	口縁部約1/6
279	甕	A27	SD48	(16.8)	(8.0)	—	口)縦回線8条(上半部浅い) 頭)横方向のナデ 体)ハケ	口)横方向のナデ 体)斜め～横方向のナデ 体)ケズリ	外)7.5YR6/4にぶい橙	微砂粒を多量含む	良	口縁部約1/6 外面煤付着
280	甕	A27	SD48	(18.8)	(4.4)	—	口)肩)縦～横方向のハケ 口縁指頭痕あり	口)横方向のハケ 体)ケズリ	外)7.5YR7/3にぶい橙内)7.5YR7/2明掲灰	2～3mmの砂粒・小石をやや少量含む	良	口縁部約1/6 口縁の一部に被熱痕あり

第1節 土器

No.	器種 部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色調	胎土	焼成	残存・備考
							外面	内面				
281	甕	A27	SD48	—	(14.7)	—	口)タタキ後、下半をケズリ	頸)横方向のナデ 体)ハケ工具によるナデ	外・内)10YR5/3にぶい黄褐	2mm大の砂粒を少量含む	良	体部約1/6 外面煤付着、内面焦げ付着痕あり
282	甕	A27	SD48	(11.9)	(6.4)	—	口～頸)横方向のナデ 体)ハケ	口～頸)横方向のナデ 体)ハケ	外)10YR6/2灰黄褐 内)10YR5/2灰黄褐	微砂粒を含む	良	口縁部約1/8
283	甕	A27	SD48	(14.5)	(6.8)	—	口～頸)横方向のナデ 体)ハケ	口)横方向のハケ後、横方向のナデ 体)ケズリ	外・内)7.5YR7/4にぶい橙	1～2mmの砂粒を含む	良	口縁部約1/4
284	高坏	A27	SD48	(12.8)	(5.7)	—	口～体)ミガキ	口～底)ミガキ	外)10YR7/2にぶい黄褐 内)7.5YR6/4にぶい橙	微砂粒・雲母を少量含む	良	坏部約1/3 内外面部分的に被熱痕あり
285	高坏	A27	SD48	—	(7.1)	—	体～脚)ハケ後、ミガキ	坏底)ミガキ 脚)紋り痕 ケズリ 下部は横方向のナデ	外・内)7.5YR6/4にぶい橙	1mm大の砂粒を少量含む	良	脚部約2/5 透孔4方向
286	器台	A27	SD48	(25.8)	(6.6)	—	口)ミガキ(不明瞭)	口)ミガキ(不明瞭)	外)10YR5/1褐灰 内)10YR7/3にぶい黄褐	微砂粒を含む	やや不良	受部1/8以下
287	器台	A28	SD48	(21.9)	(6.1)	—	口)ミガキ	口)ミガキ	外・内)7.5YR6/6橙	微砂粒を含む	やや不良	受部約1/4
288	器台	A27	SD48	—	(7.1)	(12.0)	脚)ミガキ	脚)ハケ後、横方向のナデ	外)7.5YR8/4浅黄褐 内)10YR8/3浅黄褐	微砂粒を含む	良	脚部約1/3 透孔3方向から2段
289	ミニチュ ア土器	A27	SD48	(3.6)	2.7	1.6	ナデ	指頭痕	外・内)7.5YR7/3にぶい橙	1mm大の砂粒を少量含む	良	約3/5
290	壺	A27	SD50	(16.2)	(9.6)	—	口～頸)横方向のナデ 体)縦～横方向のハケ	口～頸)横方向のナデ 体)ケズリ	外)2.5Y7/3浅黄 内)10YR8/2灰白	微砂粒を含む	良	口縁約1/2
291	甕	A27	SD50	(18.5)	(4.6)	—	口)掘凹線9～10条 頸)横方向のナデ	口)横方向のナデ ナデ ケズリ	外)10YR6/3にぶい黄褐 内)10YR7/3にぶい黄褐	1～2mmの砂粒を含む	良	口縁部片 外面煤付着
292	甕	A27	SD50	(15.4)	(4.3)	—	口)掘凹線 頸)横方向のナデ	口)横方向のナデ ナデ ケズリ	外)10YR7/2にぶい黄褐 内)2.5Y8/3にぶい淡黄	1～2mmの砂粒を含む	良	口縁部片 外面煤付着
293	台付鉢?	A26	SD55	—	(3.4)	(9.0)	底～台)ミガキ 台裾～端部)横方向のナデ	底)ミガキ 台)横方向のナデ	外)5YR6/6橙 内)7.5YR7/4にぶい橙	微砂粒を含む	良	台部約1/2 磨滅する
294	壺	A28	川	(11.8)	(4.7)	—	口～頸)ハケ後、横方向のナデ	口～頸)ハケ後、横方向のナデ	外・内)10YR7/4にぶい黄褐	2～3mm前後の砂粒・小石を少量含む	良	口縁部約1/4 口縁歪み有り
295	壺	A28	川	(10.5)	(7.4)	—	口～頸)横方向のナデ 体)不明 押圧1箇所残存	口～頸)横方向のナデ 体)指ナデ	外)7.5YR6/3にぶい褐 内)10YR6/3にぶい黄褐	1～2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/2 外面煤付着
296	壺	A28	川	(8.0)	8.1	2.6	口～頸)横方向のナデ 体)ハケ 底)ナデ	口)ハケ後、横方向のナデ 体)ナデ	外・内)7.5YR6/4にぶい橙	1mm大の砂粒を含む	良	口縁部約1/5 体部約3/5
297	壺	A28	川	—	(16.3)	—	頸～体)縦方向のハケ後、肩部はナデ消す 体部下半はミガキ	頸～体)ハケ後、体部上半をナデ指頭痕	外・内)7.5YR6/4にぶい橙	1mm大の砂粒を含む	良	体部上半3/5
298	甕	A28	川	(15.7)	(4.6)	—	口～頸)横方向のナデ	口～頸)横方向のナデ 体)ケズリ	外)7.5YR6/4にぶい橙 内)10YR7/2にぶい黄褐	1～2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/4 外面煤付着
299	甕	A28	川	(18.2)	(7.4)	—	口～頸)横方向のナデ 体)横方向のハケ	口～頸)横方向のナデ 体)ケズリ	外)7.5YR7/4にぶい黄褐 内)10YR7/2にぶい黄褐	微砂粒を多量含む	良	口縁部約1/3 外面煤付着
300	高坏	A28	川	(20.9)	(5.5)	—	口～体)ミガキ	口～体)ミガキ	外・内)7.5YR6/4にぶい橙	微砂粒を含む	良	口縁部約1/4
301	高坏	A28	川	—	(9.5)	(13.8)	脚)ミガキ(不明瞭)	脚)紋り痕 横方向のナデ	外・内)7.5YR6/4にぶい橙	微砂粒・雲母を含む	良	脚部約1/4 透孔は2段で3方向
302	高坏	A28	川	—	(6.9)	(17.8)	脚)ミガキ	脚)ケズリ後、ミガキ	外・内)7.5YR6/4にぶい橙	1mm大の砂粒を含む	良	脚部約2/3 透孔4方向
303	高坏	A28	川	—	(7.7)	(12.4)	脚)ミガキ(不明瞭)	脚)ケズリ 体)横方向のナデ	外・内)2.5YR6/4にぶい橙	1～2mm大の砂粒を含む	良	脚部約2/3 透孔3方向 内面赤彩痕あり
304	脚台部	A28	川	—	(3.9)	7.4	底)ハケ 台)ハケ後、ナデ	底)ハケ 台)ハケ後、ナデ	外)7.5YR6/1褐灰 内)7.5YR7/4にぶい橙	2～3mmの砂粒・小石を少量、雲母粒子含む	良	脚台部のみ 外面煤付着
305	壺	A22	包 I	(20.0)	(3.7)	—	口)不明 頸)横方向のナデ	口)ミガキ 頸)ナデ	外・内)10YR7/4にぶい黄褐	1～3mm前後の砂粒を含む	やや良	口縁部約1/8
306	壺	A26	包IV (21.0 程度)	(3.5)	—	—	口)横方向のナデ	口)横方向のナデ	外)7.5YR8/6浅黄褐 内)10YR7/3にぶい黄褐	1～2mm前後の砂粒を含む 雲母粒子含む	良	口縁部約1/8以下
307	壺	A23	包 I	—	(2.6)	—	口)縦方向のハケ後、横方向のナデ	口)ナデ後、8条1単位の縞描直線 文2段と4条1単位の山形文	外)10YR8/3浅黄褐 内)10YR7/3にぶい黄褐	1～2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
308	甕	A26	包IV (18.0 程度)	(4.7)	—	—	口)掘凹線11条 頸)横方向のナデ ハケ	口)横方向のナデ 頸)横方向のハケ ケズリ	外)10YR7/3にぶい黄褐 内)10YR7/2にぶい黄褐	1～2mm前後の砂粒を含む	やや良	口縁部約1/8 外面煤付着痕
309	甕	A24	包IV (17.0 程度)	(2.8)	—	—	口)横方向のナデ	口)横方向のナデ	外)7.5YR6/3にぶい褐 内)7.5YR7/4にぶい橙	1～2mm前後の砂粒を含む 雲母粒子含む	良	口縁部約1/8以下 外面煤付着
310	小型鉢	A26	包 I	(8.5)	5.5	(1.5)	口～体)ミガキ(不明瞭) 底)不明	口)不明 体)ケズリ	外・内)10YR7/3にぶい黄褐	1mm大の砂粒をやや多量含む	やや良	約1/4
311	高坏	A26	包 I・IV	(13.0)	(3.7)	—	口～体)ミガキ	口～体)ミガキ(不明瞭)	外)5YR6/6橙 内)10YR7/4にぶい黄褐	微砂粒を含む	やや良	口縁部約1/4
312	器台	A26	包 I	(6.7)	(4.1)	—	受)ミガキ 脚)ミガキ	受)ミガキ 脚)ナデ	外・内)7.5YR7/4にぶい橙	微砂粒を含む	良	口縁約1/4
313	高坏	A24	敵状遺構 表土	—	(7.1)	9.9	脚)縦方向のハケ後、裾部以外をミガキ(不明瞭)	坏底)ハケ後、ミガキ(不明瞭) 脚)ケズリ後、裾部をミガキ	外)2.5Y8/2灰白 内)2.5Y3/1黒褐	1mm前後の砂粒を含む	やや良	脚部約3/4 内面全面黒斑
314	器台	A26	調査区壁	—	(7.4)	(12.8)	脚)ミガキ	脚)ケズリ後、下半を横方向のハケ	外・内)7.5YR7/4にぶい橙	微砂粒を含む	良	脚台部約2/5 透孔3方向
315	高坏	A39	SD60	(16.0)	(5.7)	—	口～体)ハケ後、ミガキ	口)ハケ後、横方向のナデ 体)ナデ	外・内)7.5YR7/6橙	キメ細かく、砂粒が目立たない	やや不良	口縁部約1/8
316	高坏	A39	SD59	—	(4.8)	—	脚)ミガキ	脚)棒状工具による当て具痕	外)10YR7/3にぶい黄褐 内)7.5YR7/4にぶい橙	微砂粒を含む	良	脚部片
317	高坏	A39	SD59	—	(5.4)	—	脚)横方向のハケ後、ミガキ 下部を縦方向のハケ	脚)横方向のナデ、下半をケズリ	外)2.5Y7/2灰黄 内)10YR7/2にぶい黄褐	微砂粒を含む	良	裾部を欠く脚部片
318	高坏	A40	表土	—	(7.7)	—	脚)ミガキ	脚)ナデ(不明瞭)	外)7.5YR7/3にぶい橙 内)10YR7/4にぶい黄褐	キメ細かく、砂粒目立たず	やや良	脚部片
319	甕	C42	SK69	(16.0)	(3.1)	—	口)横方向のナデ	口)横方向のナデ	外)10YR6/3にぶい黄褐 内)10YR5/3にぶい黄褐	1～3mm前後の砂粒・小石を少量含む	良	口縁部約1/6 外面煤付着
320	高坏	C42	SK69	—	(6.2)	—	脚)ハケ後、ミガキ	脚)紋り痕、横方向のナデ	外)10YR6/3にぶい黄褐 内)5Y3/1オリープ黒	微砂粒を含む 雲母粒子 微量含む	良	脚部片 器表面傷多い
321	甕	F42	SK75	(15.8)	27.4	—	口～頸)横方向のナデ ハケ後、波状文(全周しない)	口～頸)横方向のナデ 体～底)ケズリ 指頭痕	外・内)10YR6/3にぶい黄褐	1～2mm前後の砂粒を多く含む	良	約1/3 外面煤付着・内面黒色化
322	壺	K43	SK76	(15.0)	(4.0)	—	口～頸)横方向のナデ 押圧3点	口～頸)横方向のナデ 外面の押 圧部に粘土貼付突起	外)10YR5/2灰黄褐 内)10YR6/3にぶい黄褐	1～3mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/3 外面・内面 口縁に煤付着
323	甕	L43	SK78	—	(2.0)	—	口)横方向のナデ後、縦方向のハケ 端部に刻み目 頸)縞描直線2条分残存	口～頸)ハケ後、横方向のナデ	外)10YR7/3にぶい黄褐 内)7.5YR7/4にぶい橙	1～3mm前後の砂粒・小石を含む	良	口縁部片 外面煤付着痕あり

第5章 遺物

No.	器種 部位	区	遺構/層	口径	器高	底径	調整		色調	胎土	焼成	残存・備考
							外面	内面				
324	甕	L42	SK83	(17.7)	(9.4)	—	口～頸)横方向のナデ 体)縦～横方向のハケ	口～頸)横方向のナデ 体)横方向のケズリ	外・内)10YR7/2にぶい黄橙	1～4mm前後の砂粒・小石 を含む 雲母を微量含む	良	口縁部約1/8 外面煤付着
325	甕	L42	SK83	(16.0)	(7.1)	—	口)横方向のナデ 体)ハケ	口)横方向のナデ 体)ナデ(摩滅)	外)2.5Y5/2暗灰黄 内)2.5Y6/4にぶい黄	1～2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/5 外面煤付着
326	壺	L42	SK83	—	(8.2)	—	口)ミガキ 体)ミガキ(不明瞭)	不明	外・内)2.5Y7/2灰黄	1～2mm前後の砂粒を含む	良	体部約4/5
327	甕	L42 L42	SK85 遺構面	(13.8)	(6.0)	—	口)端部横方向のナデ 頭～体)斜め方向のハケ	口)不明 体)ケズリ	外)10YR7/4にぶい黄橙 内)2.5Y6/3にぶい黄	微砂粒を含む	良	口縁部1/4
328	壺か?	J42	SK92	—	(2.3)	—	口)ナデ(不明瞭)	口)横方向のナデ後、端部に刻み 目	外・内)10YR7/2にぶい黄橙	1～3mm前後の砂粒・小石 を含む	良	口縁部片 外面煤付着痕
329	甕	K43	SK96	—	(3.4)	—	口)横方向の条痕 端部に刻み目	口)横～斜め方向のナデ	外)10YR7/3にぶい黄橙 内)10YR7/2にぶい黄橙	2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部片
330	壺	E・F 42・43	SD66	(21.4 程度)	(11.3)	—	口～頸)横方向のナデ 体)縦方向後、横方向のハケ	口～頸)ハケ後、横方向のナデ 体)ケズリ 指頭痕	外・内)10YR7/3にぶい黄橙	1mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/8以下
331	甕	G42	川	(22.9)	(9.6)	—	口～頸)横方向のナデ 体)ハケ工具による横ナデ	口～頸)横方向のナデ 体)ケズリ	外)10YR6/3にぶい黄橙 内)10YR5/3にぶい黄褐	微砂粒を多量含む	良	口縁部約1/4
332	壺	H42	川 上層黒	(29.4)	(15.0)	—	口～頸)横方向のナデ 体)ハケ	口～頸)横～斜め方向のハケ後、 横方向のナデ 体)横方向のハケ 指頭痕	外・内)7.5YR7/4にぶい橙	1～2mm大の砂粒を少量含 む	良	口縁部約1/6
333	甕	H43	川 上層黒	15.5	(18.7)	—	口～頸)横方向のナデ 体)ハケ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外)10YR7/4にぶい黄橙 内)10YR7/3にぶい黄橙	微砂粒を多量含む	良	口縁略完形体部上半約 1/2 外面煤付着
334	壺	I42	川 上層	(9.0 程度)	(7.4)	—	口)ミガキ 体)ミガキ	口)ミガキ(不明瞭) 体)ナデ	外・内)10YR6/3にぶい黄橙	1mm大の砂粒を多量含む	良	口縁部約1/3・体部完形
335	高坏	H42	川 上層黒	(16.2)	(14.7)	(12.6)	坏)ハケ後、ミガキ 脚)ミガキ	坏)ミガキ 脚)不明	外)10YR6/4にぶい黄橙 内)10YR6/3にぶい黄橙	キメ細かく砂粒目立たず	良	口縁部約1/4 脚部約2/3
336	高坏	H43	川	(13.8)	(4.8)	—	口～体)ミガキ	口～体)ミガキ	外・内)7.5YR7/4にぶい橙	1～2mm大の赤色・白色砂 粒を含む	良	口縁部約1/2 器形やや歪み有
337	甕	表土		(17.0)	(4.0)	—	口)不明	口)横方向のナデ	外)2.5Y7/4浅黄 内)10YR7/3にぶい黄橙	1～2mm前後の砂粒を含む	良	口縁部約1/8
338	壺	A22	SD115	(8.0)	(6.4)	—	口)端部に三角形の刺突 頸) ハケ後、ナデ 4～5条1単位の掃 描直線文複数帯(不明瞭)	口～頸)ナデ	外)2.5Y7/3浅黄 内)2.5Y4/1黄灰	1～2mm大の白色砂粒をや や多く含む	やや良	口縁部約1/2 被熱のため器表面荒れる
339	甕	A22	SD115	(22.0)	(28.5 程度)	5.2	口～頸)縦方向のハケ 口縁端部 にヘラ状工具による刻み目 肩)弧状にハケ 体)斜め～縦方 向のハケ 底)ハケ後、ナデ	口)横～斜め方向のハケ 体)横～斜め方向のハケ	外)10YR5/2灰黄褐 内)10YR7/3にぶい黄橙	1～2mm前後の砂粒を含む	良	約1/4 底面焼成後穿孔 外面煤付着、内面被熱に より黒色化
340	甕	A22	包	(14.1)	(5.1)	—	口)擬凹線9条 頸)横方向のナデ	口)不明 頸)不明	外・内)10YR8/4浅黄橙	1～2mm前後の砂粒を含む	やや良	口縁部約1/8
341	甕	A22 立会	包	15.6	(10.5)	—	口)擬凹線7条 頸)横方向のナデ 体)ハケ後、板ナデ	口)横方向のナデ 指頭圧痕 体)ケズリ	外)10YR7/3にぶい黄橙 内)10YR8/3浅黄橙	微砂粒を多量に含む	良	通常のハケ調整の後板状 工具でナデ調整する
342	甕	A22	包	17.5	(14.8)	—	口)擬凹線7～8条 頸)横方向の ナデ 体)斜め方向のハケ	口)横方向のナデ 体)ケズリ	外)10YR8/4浅黄橙 内)10YR7/4にぶい黄橙	1mm以下の赤色砂粒をや や多量含む	良	口縁部約3/4 外面わずかに煤付着
343	甕	A22	SD115	(15.8)	(7.1)	—	口)擬凹線4条 頸)横方向のナデ 体)ハケ	口～頸)横方向のナデ 指頭痕 体)ケズリ	外・内)10YR8/3浅黄橙	1mm大の赤色砂粒を含む	良	口縁部約1/3 外面煤付着
344	甕	A22	包	(14.0)	(5.0)	—	口)擬凹線4条以上 頸)横方向のナデ	口)横方向のナデ 指頭痕 体)ケズリ	外・内)10YR8/3浅黄橙	1mm前後の砂粒を多量含 む	やや良	口縁部約1/2
345	高坏	A22	表土	—	(7.6)	—	脚)ミガキ(不明瞭)	脚)ハケ	外・内)7.5YR8/6浅黄橙	微砂粒を含む	やや良	脚部約1/3

第2表 縄文土器出土地点一覧表

No.	出土地点		No.	出土地点		No.	出土地点		No.	出土地点	
第55図 1	I43	川 最下層	第55図 8	K43	SD72	第55図15	H・I43	川 下層	第55図22	H・I42	川 下層
第55図 2	J42	遺構面直上	第55図 9	K43	SD72	第55図16	H・I43	川 下層	第55図23	J42	SK93
第55図 3	J42	遺構面直上	第55図10	I43	川 最下層	第55図17	H・I43	川 下層	第55図24	J42	SK93
第55図 4	I43	川 最下層	第55図11	H・I43	川 下層	第55図18	K43	SD72	第55図25	H・I42	川 下層
第55図 5	I42	川 下層	第55図12	I43	川 下層	第55図19	H・I42	川 下層	第55図26	J42	SK93
第55図 6	K42	遺構面直上	第55図13	H・I42	川 下層	第55図20	J42	SK92	第55図27	H・I42	川 下層
第55図 7	K42	SD71	第55図14	I43	川 最下層	第55図21	J42	SK93	第55図28	H・I42	川 下層

第2節 石器・石製品(図版第29・30、第56～60図、第3・4表)

1 概要

本遺跡で出土した石器・石製品は総数136点である。器種・出土場所の内訳は第3表に示した。主な器種には打製石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨製・打製の石庖丁、磨石類、玉製作関連資料がある。出土分布をみると、1区で総数の約7割を占め、構成器種のほぼ全てを網羅している。残る2～4区では出土量が少ないことに加え、欠落する器種も多い。1区は弥生時代中期、2～4区は古墳時代前期が出土土器および遺構の主体となることから、出土量や器種構成の差は時期差を多少なり反映したものとする。

2 器種各説

1) 打製石鏃(第56図1～8)

未成品(失敗品)とみられるものも含め8点を認め、全て図示した。8点の内、7点(1～6・8)が1区、1点(7)が4区の遺構内外から出土している。石質は全て無斑晶質安山岩である。

1は凹基式。二次加工は周縁調整のみで、両面に素材面を広く残す。全体的に著しく風化・摩耗している。2～6は概ね平基式とみる。2は先端が著しく摩耗しており、斜方向の線状痕も認められる。3は細身・厚手で、両面とも中軸におよぶ調整剥離を施す。4は周縁調整のみで成形するが、調整剥離は全周せず、基部側縁に自然面を残す。5の基部もほとんど二次加工を施さず、素材剥片の薄い末端をそのまま残している。6も周縁調整のみで、両面に素材面を残す。7は未成品とした。剥片の側端部を尖頭状に調整加工している。8は有茎式。両面調整を施すが、先端の成形があまく、側縁の微調整も施していない。これも未成品とすべきかもしれない。

2) 打製石錐(第56図9)

図示した1点のみを認めた。1区 SP5で出土している。錐部と頭部の境が比較的明瞭な形態で、錐部先端は摩耗している。石質は無斑晶質安山岩である。

3) 打製石斧(第56図10・11)

総数13点を認めた。1区で5点、2・3区で5点、4区で3点出土している。刃部や基部のみといった破損品が多く、全形の明らかなものは図示した2点のみである。

10・11は板状の角礫を素材とし、厚さはそのままにほぼ周縁調整のみで撥形に成形している。10の基部両側辺には浅い抉り加工がある。両者とも刃部は摩耗しており、11では刃縁に直交ないしやや斜交する線状痕を認める。また、10正面の剥離面は摩耗痕を切っており、刃部再生を施したことがわかる。石質は10・11ともデイサイト。他にはデイサイト5点、流紋岩3点、凝灰岩、安山岩、砂岩各1点がある。

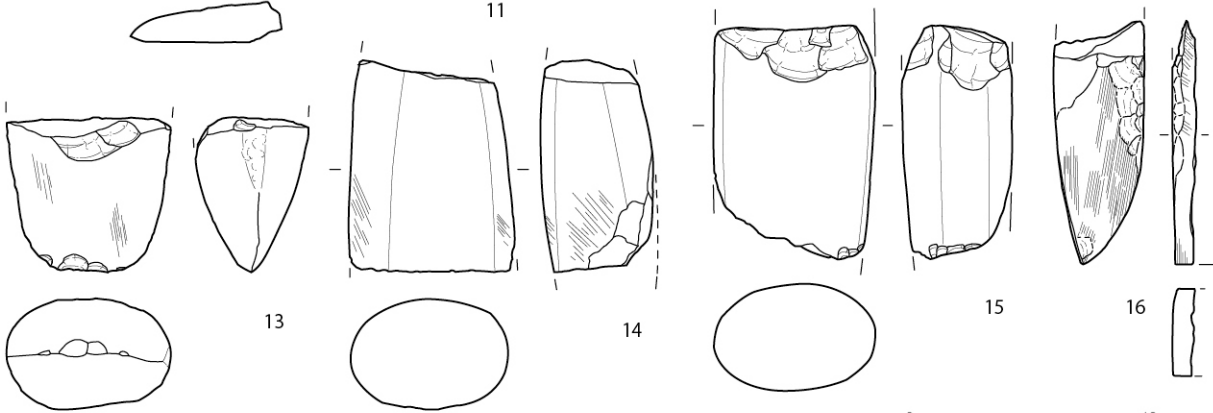
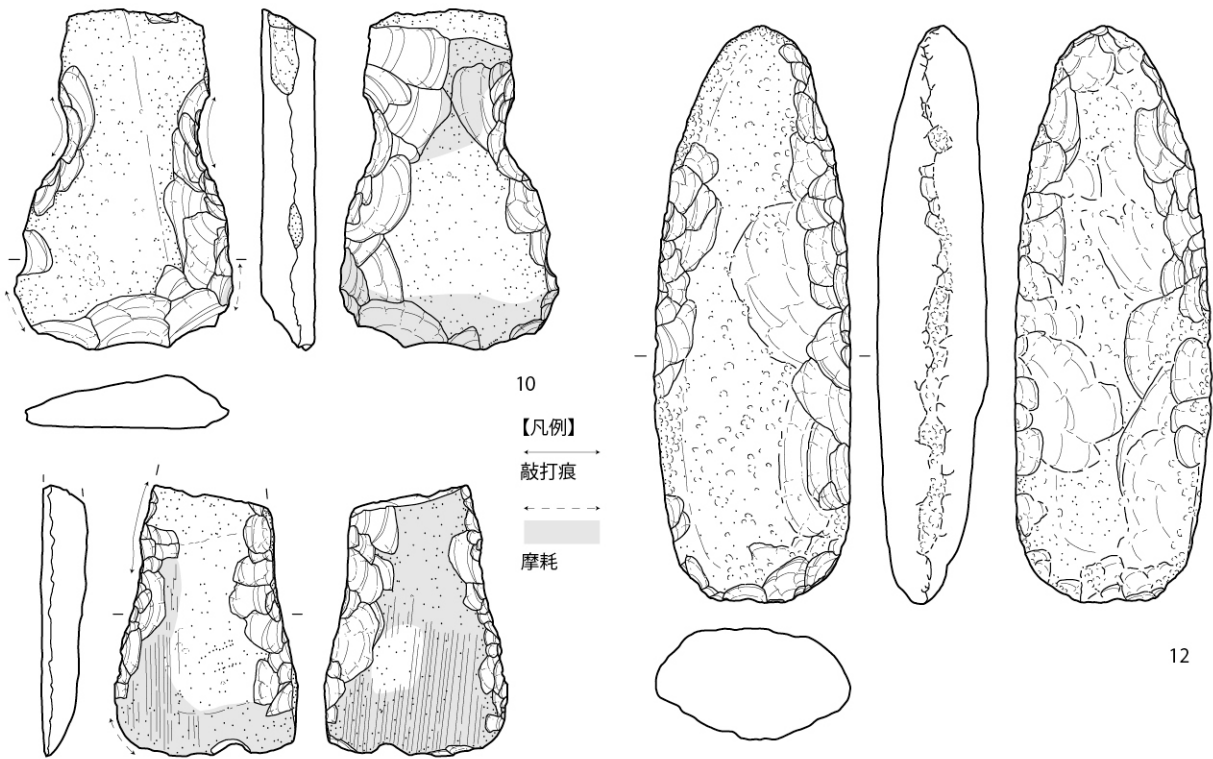
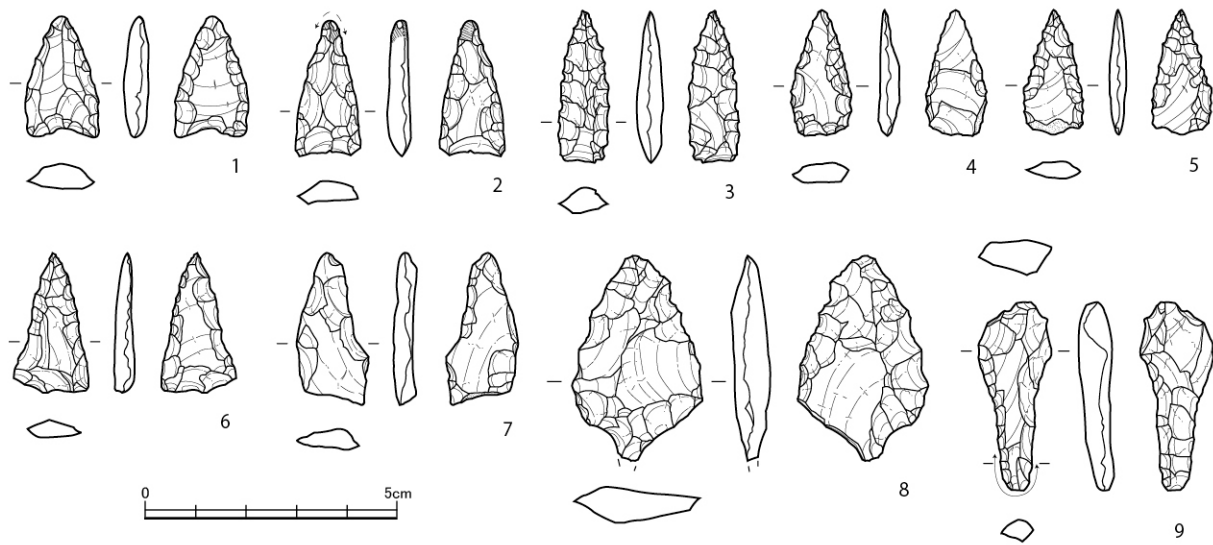
4) 磨製石斧(第56図12～16、第57図1)

未成品も含め総数9点を認めた。内訳は大型蛤刃石斧6点、同未成品1点、柱状片刃石斧1点、偏平両刃石斧1点である。大型蛤刃石斧は1区で1点、2区で4点、4区で1点、同未成品と柱状片刃石斧は1区、偏平両刃石斧は4区で出土している。

12は大型蛤刃石斧の未成品である。棒状の円礫を素材に剥離と敲打で成形している。石質は玢岩。13～15は大型蛤刃石斧で、いずれも大きく欠損している。石質は13・14が玢岩、15が閃緑岩。図示しなかった3点も破片資料であり、石質は安山岩2点、砂岩1点である。16は柱状片刃石斧で、刃部側面の破片である。石質は凝灰岩。第57図1は小形の偏平両刃石斧である。石質は流紋岩。

5) 磨製石庖丁(第57図2～4)

総数6点を認めた。1区で5点、2区で1点出土している。欠損により全形の不明なものがほとんど



第56図 石器1 (縮尺1~9:2/3 10~16:1/3)

で、紐孔も確認できない。板状の自然礫もしくは分割礫を素材とし、厚さはそのままに周縁の剥離調整と研磨で成形している。研磨は刃部付近では両面とも丁寧に施すが、体部中央から背部にかけては程度が弱い。石質は全てデイサイトである。

6) 打製石庖丁(第57図6・7)

総数3点を認めた。1区で1点、4区で2点出土している。いずれも板状の自然礫を素材とする。全形を窺うことのできる2点を図示した。

6は両長辺が刃部様を呈す。7はやや厚手で、端部の片側に抉り加工を施している。いずれも石質はデイサイト。図示しなかった1点は直線的な刃縁をもつ刃部破片で、石質は安山岩である。

7) 篋状石器(第57図5)

打製石斧に似た形状であるが、石質および製作方法が異なる。図示した1点のみ認めた。1区SK17から出土。石質は無斑晶質安山岩で、剥片を素材とする。両面調整で器厚を整えた後、側縁の細部調整を施す。刃部は素材剥片の末端を残している。

8) 大形剥片石器(第57図8)

円礫表面から剥離した貝殻状の大形剥片を素材とする刃器様の石器。図示した1点のみ認めた。1区SK1から出土。伴出した土器から弥生時代後期に属す可能性がある。素材剥片の末端から片側辺にかけて背面側を剥離して刃部を作出する。背面の自然面には剥離に先行する磨痕が認められることから、磨石類または石皿を素材としたのかもしれない。なお、腹面側には研磨を施している。石質は安山岩。

9) 打欠石錘(第57図9)

1点を認めた。4区SK90出土。伴出した土器から縄文時代晩期に属す可能性がある。片面が大きく剥離した楕円形の円礫を用い、短軸両端を小さく打ち欠いて紐掛け部を作出している。石質は閃緑岩。

10) 磨石類(第57図10～12)

総数20点を認めた。1区と2・3区で各7点、4区で6点と、各地区で安定して出土している。使用痕の組み合わせによる内訳は、磨痕のみ8点(11)、磨痕+敲打痕6点(10)、敲打痕のみ4点、敲打痕+凹部1点(12)、磨痕+敲打痕+凹部1点となる。石質ではデイサイト、凝灰岩各4点、砂岩、閃緑岩各3点、安山岩2点、流紋岩、花崗岩類、花崗斑岩、溶結凝灰岩各1点となる。

11) 台石・石皿類(第57図13・14、第58図1・2)

敲打痕や凹部、磨痕をもち、重量や形状などから据え置いて使用したと想定できるもので、総数4点を認めた。1区で3点、2区で1点出土している。

第57図13・14、第58図1は、正面に敲打痕の集中による凹部をもつ。敲打で平坦に整えた裏面は摩耗している。第58図2は、約3kgをはかる大形品である。片面と側辺に磨痕をもつ。

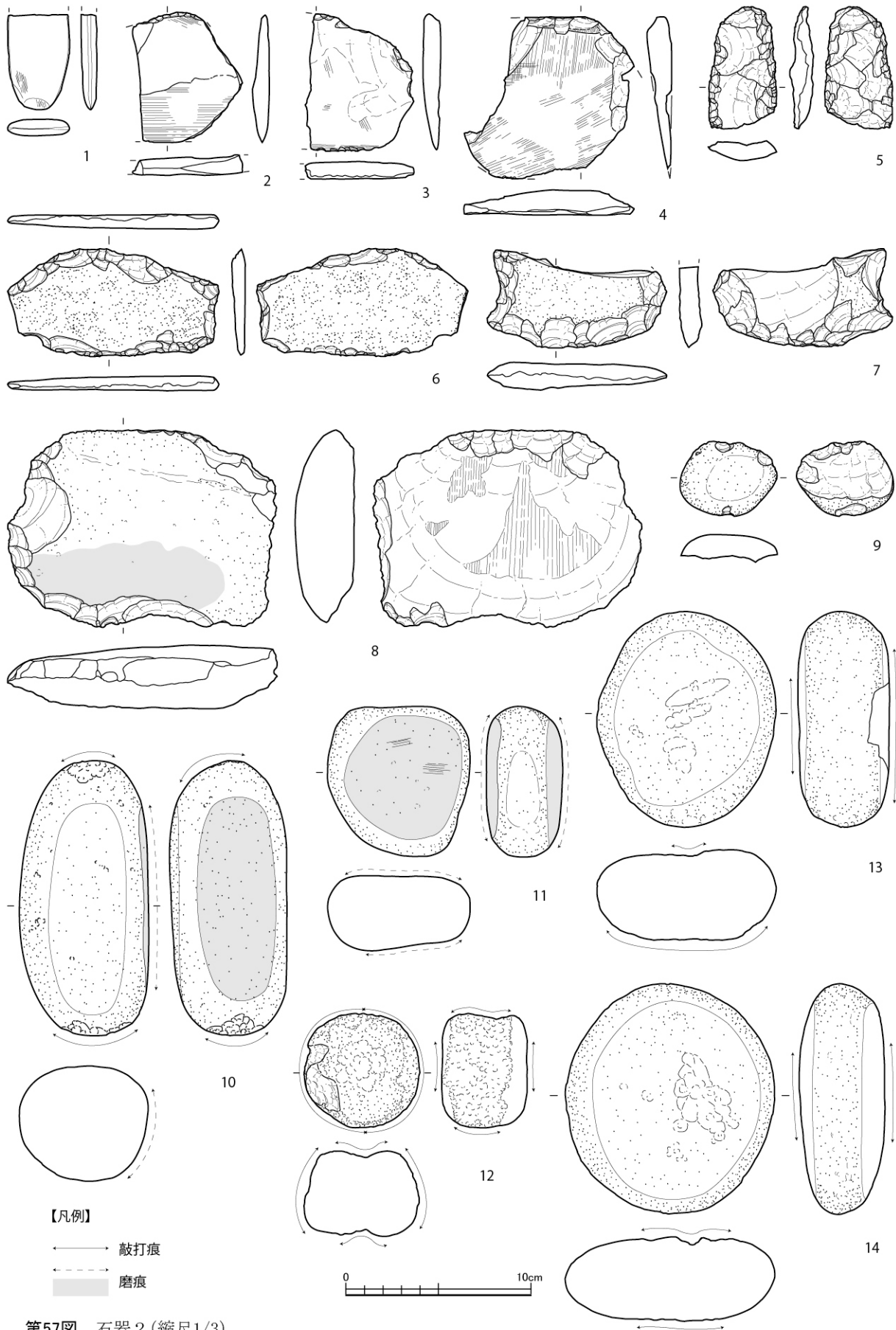
12) 砥石(第58図3～5)

総数4点を認めた。全て1区で出土している。平砥石(3)と筋砥石(4・5)が各2点ある。石質は砂岩2点、閃緑岩と凝灰岩が各1点である。

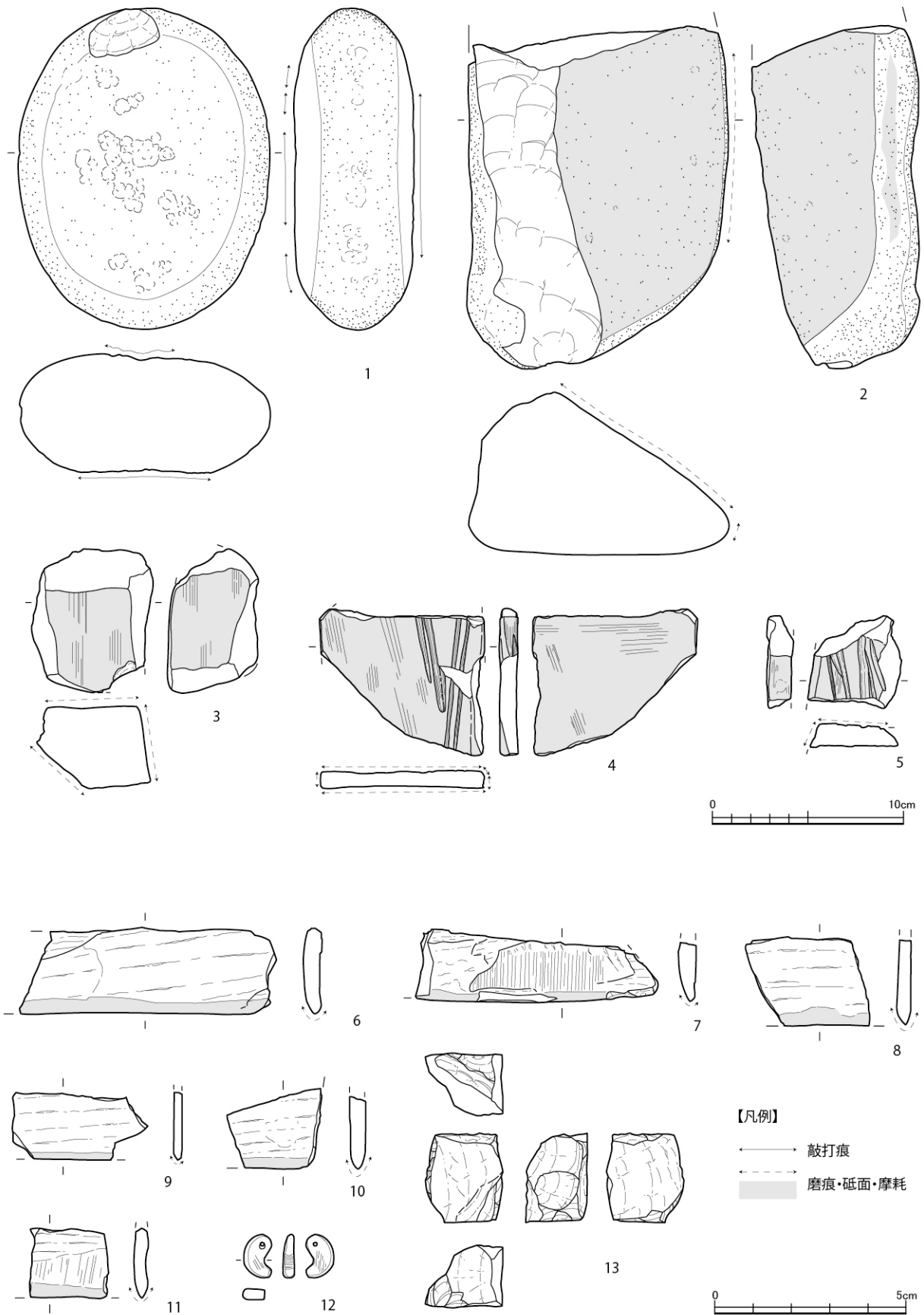
13) 玉鋸(第58図6～11)

玉製作の施溝分割に用いたと考えられる擦り切り工具で、石質は紅簾片岩などの結晶片岩である。総数9点を認めた。全て1区で出土している。刃部を残す比較的遺存状態の良い6点を図示した。

6は唯一背部が遺存しているとみられる例で、未調整の切断面が摩耗しており、手擦れと考える。7・11は体部正面を刃縁と直交方向に研磨している。



第57图 石器2 (縮尺1/3)



第58図 石器3・石製品(縮尺1~4:1/3 5~12:2/3)

14) 勾玉(第58図12)

平形勾玉1点を認めた。2区出土。穿孔は片側から施す。部分的に研磨痕を残す。石質は蛇紋岩。

15) ヒスイ片(第58図13)

1点を認めた。1区出土。サイコロ状を呈す。緑色部より白色部の方が多く、良質とはいえない。いずれの面も概ね平坦な分割面をなしているが、人為的なものかどうかは判断できない。

16) 管玉製作工程品(第59・60図)

緑色凝灰岩製の遺物を一括する。碎片なども含め50点を認めた。総重量は465.230gある。1区で41点、2区で8点、4区で1点出土している。

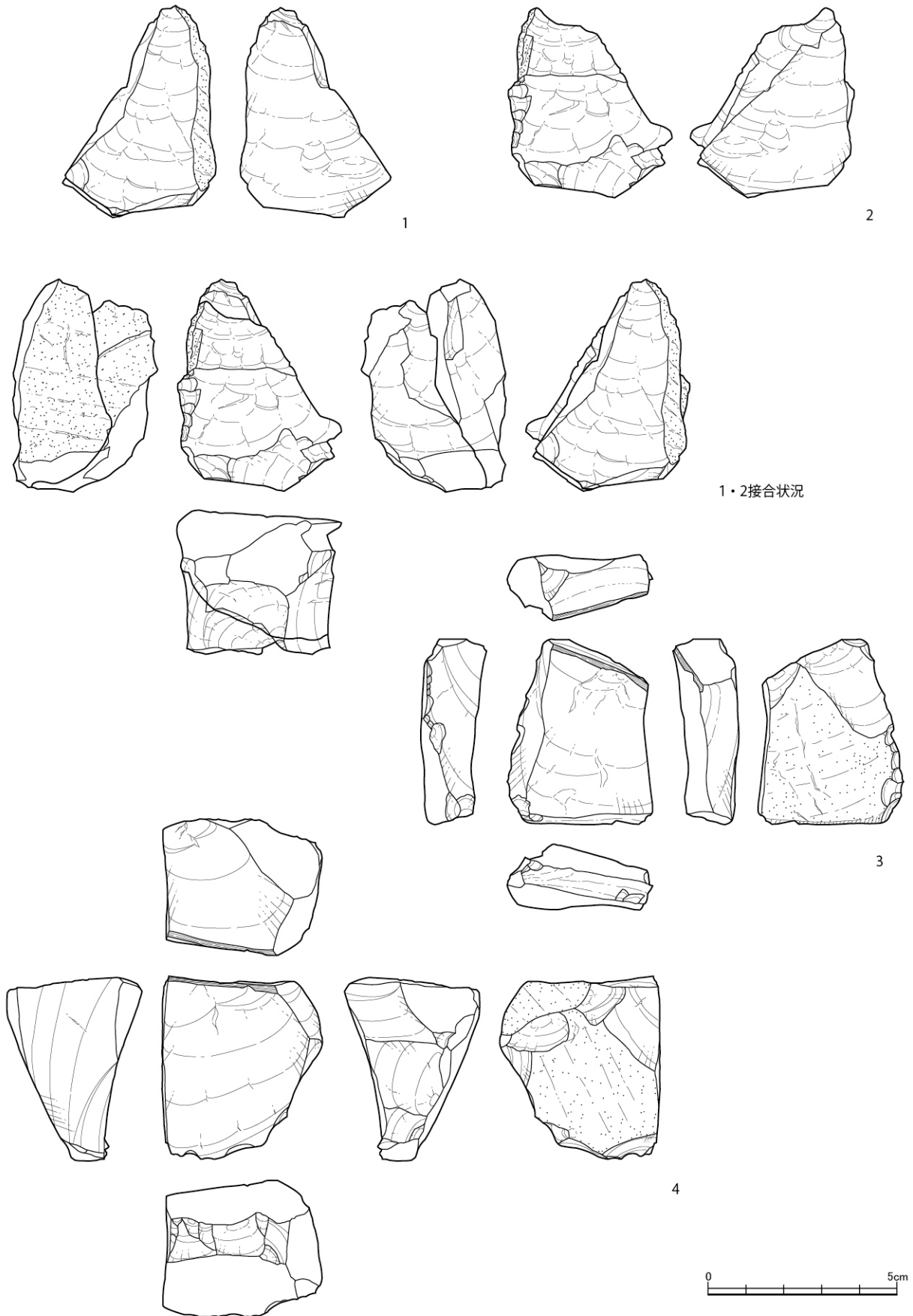
第59図は荒割工程に位置づけられる。1・2は厚手の剥片で、接合資料である。角礫の母岩を節理と直交する方向に打割している。3・4は施溝痕をもつ石核様のもので、片面に自然面を広く残す。3は上下面→両側面→正面の順に作出しており、正面は施溝分割による。施溝分割は他面でも行われた可能性があるが、打面部が割り取られているため不明である。4は両側面→上面→正面→下面の順に作出する。正面は施溝分割によっており、左側面もその可能性がある。

第60図1～13は概ね形割工程に位置づけられる。1・2は比較的整った直方体を呈するもの。1は左側面→上下面→右側面→正面の順に作出する。上面と正面は施溝分割によるもので、下面もその可能性がある。2は左側面→上面→正面の順に作出しており、上面と正面は施溝分割による。左側面の一部と右側面、裏面には研磨を施しており、もとは自然面のようなものである。下面については人工的な分割面なのか自然面なのか判断し難い。なお、本例には管玉の素材に適した緑色・珪質の部分が一部にしか認められず、良質な部分を割り取った残りと考えられる。3～9・11は不整形な一群。3は下面→正面→両側面の順に作出しており、正面と両側面は施溝分割による。裏面の自然面には研磨痕がある。4は正裏面→左面→右面の順に作出している。施溝痕は認められないが、正面に研磨を施す。5は正面→右側面の順に作出しており、右側面は施溝分割による。6は左側面→上面→裏面の順に作出しており、上面と裏面が施溝分割による。7は裏面→右側面の順に作出しており、裏面が施溝分割による。荒割工程で生じた剥片を利用したものと推測する。裏面の打瘤が発達しており、施溝の意図にそぐわない割れ方をしたものだだろう。8は正面→左面の順に施溝分割している。管玉に供用できそうな緑色・珪質の部分は上部1/3程度である。9は三角柱状を呈すもので、上下面は自然面である。10は板状を呈するもので、正裏面→両側面→下面の順に作出している。施溝痕は認められない。12～15は角柱状の未成品である。12は左側面→正面→右側面→上面→裏面の順に作出しており、上面と裏面は施溝分割による。13は上面→正裏面→両側面の順に作出している。施溝痕は認められない。14は裏面→両側面→正面→上面の順に作出しており、正面は施溝分割による。15は正面→両側面→裏面の順に作出しており、右側面と裏面は施溝分割による。また、両側面には研磨を施している。

第60図16は研磨工程の未成品である。研磨により多角柱形をなす。研磨痕は長軸に対してやや右上がりに斜交する。小口面の研磨は上端にのみ施している。

3 小結

今回の調査で検出した石器・石製品の大半は、出土遺構・地区から弥生時代中期に位置づけられる。なかでも1区に偏在する打製石鏃などの剥片石器や石庖丁、砥石・玉鋸・管玉製作工程品はほとんどが該期の所産であろう。管玉の製作に施溝分割が認められることも、当地域における該期の特徴を良くあらわしている。



第59図 管玉製作関連遺物1 (縮尺2/3)



第60図 管玉製作関連遺物 2 (縮尺2/3)

第3表 石器・石製品遺構別出土数量表

	石鏃		打製石錐	打製石斧	磨製石斧				石庖丁		スクレイパー	籠状石器	大形剥片石器	打欠石錘	磨石類				台石・石皿類	砥石	玉鋸	管玉製作工程品	勾玉	ヒスイ片	その他剥片					
	打製石鏃	同未成品			大型蛤刃	同未成品	柱状片刃	偏平両刃	磨製	打製					磨	磨+敲	敲	敲+凹								磨+敲+凹				
SI1														2	1											1				
SD6				1																										
SD15										1																				
SD19				1																										
SD24																										1				
SD26																	1		1											
SD27											1																			
SD28																		1	1	1										
SD29				1																										
SD30																										6				
SD33																										1				
SD48				1																						1				
SD50														1	1															
SD62				1																										
SD115					2																									
SK1													1																	
SK8	1																													
SK11																												2		
SK13																		1												
SK17										1	1			1								1								
SK18					1		1									1														
SK23																										1				
SK24																										2				
SK25														1																
SK27																										1				
SK30																			1	1						15				
SK32																									1		1			
SK33	1																													
SK41																										1				
SK48					1											1														
SK76					1																									
SK78																										1				
SK82		1																												
SK90													1																	
SP5				1																										
SP24																														
SP36																														
SP49																														
SP58										1																				
SP104					1																									
川									1	2						2	1	1	1											
包含層Ⅲ1区									2																	1	2	3		
包含層Ⅳ	1区	4							1					1											1	4	4			
	2区			2																										
	3区																													
	4区				1																									
遺構外	1区	1		2		1			1																		3	1		
	2区																													
	3区				1																									
	4区				2					1																				
その他																														
合計	7	1	1	13	6	1	1	1	6	3	2	1	1	1	8	6	4	1	1	4	4	9	50	1	1	1	2			

第4表 石器・石製品観察表

挿図No.	器種	グリッド	遺構	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石質	遺存	備考
56-1	打製石鏃	A14	IV層	2.4	1.5	0.5	1.8	無斑晶質安山岩	完形	凹基式。風化・摩耗著しい。
56-2	打製石鏃	A13	IV上層	2.7	1.3	0.5	1.7	無斑晶質安山岩	完形	平基式。先端摩耗。
56-3	打製石鏃	A9・10	SK33上層	3.0	1.0	0.5	1.5	無斑晶質安山岩	完形	平基式。埋土洗浄により採取。
56-4	打製石鏃	A12	確認面上	2.5	1.2	0.4	1.4	無斑晶質安山岩	完形	平基式。
56-5	打製石鏃	A17	SK8	2.5	1.2	0.4	0.9	無斑晶質安山岩	完形	平基式。
56-6	打製石鏃	A12	IV層	2.8	1.5	0.4	1.4	無斑晶質安山岩	完形	平基式。
56-7	石鏃未成品	L42	SK82	3.0	1.4	0.5	1.9	無斑晶質安山岩	完形	
56-8	打製石鏃	A13	IV上層	4.1	2.6	0.8	7.1	無斑晶質安山岩	基部欠	有茎式。未成品か。
56-9	打製石鏃	A20	SP5	3.8	1.5	0.7	3.0	無斑晶質安山岩	完形	鏃部摩耗。
56-10	打製石斧	A11	トレンチ	13.5	8.7	2.2	325	デイサイト	完形	撥形。板状角礫素材。刃部再生。
56-11	打製石斧	A6	トレンチ	10.7	7.3	1.9	156.6	流紋岩	基部欠	撥形。板状角礫素材。
56-12	磨製石斧未成品	A8		22.8	7.8	4.4	1021	玢岩	完形	棒状円礫を剥離と敲打で成形。
56-13	磨製石斧	K43	SK76	6.2	6.5	4.5	235	玢岩	刃部のみ	大型蛤刃石斧。
56-14	磨製石斧	A14	SK18	8.4	6.6	4.5	410	玢岩	中央部のみ	大型蛤刃石斧。
56-15	磨製石斧	A22	SD115	9.3	6.5	4.4	419	閃緑岩	中央部のみ	大型蛤刃石斧。
56-16	磨製石斧	A14	SK18	9.6	1.1	3.6	46.3	凝灰岩	刃部のみ	柱状片刃石斧。
57-1	磨製石斧	O42	遺構面	5.2	3.4	0.9	24.2	流紋岩	基部欠	偏平両刃石斧。小形。
57-2	磨製石庖丁	A13	トレンチ	5.9	7.0	1.1	46.3	凝灰岩	両端欠	被熱赤化。
57-3	磨製石庖丁	A16	III層	5.8	7.4	1.0	52.3	凝灰岩	片側端欠	
57-4	磨製石庖丁	A10	SP58	9.7	8.5	1.4	90.9	凝灰岩	両端欠	被熱?
57-5	筥状石器	A15	SK17上層	6.5	3.6	1.3	28.9	無斑晶質安山岩	完形	両面調整。
57-6	打製石庖丁	A17	SD15	11.4	5.8	0.8	63.4	デイサイト	完形	板礫素材。刃部を中心に摩耗。
57-7	打製石庖丁	H・I43	川下層	9.7	5.3	1.5	76.2	デイサイト	背部欠	板礫素材。片側辺に挟り。
57-8	大形剥片石器		SK1下層	14.5	10.6	3.4	780	安山岩	完形	腹面研磨。
57-9	打欠石錘	J40	SK90	5.2	4.0	1.8	42.9	閃緑岩	完形	分割礫の短軸方向に打欠。
57-10	磨石類	A27	SD50	14.8	7.0	6.4	1080	安山岩	完形	磨+敲。棒状。
57-11	磨石類	I43	川最下層	8.1	7.7	4.1	400	花崗斑岩	完形	磨痕のみ。
57-12	磨石類	I43	川下層	6.2	6.3	4.6	265	凝灰岩	略完形	敲+凹。
57-13	台石・石皿類	A18	SK13	11.7	9.6	5.0	704	凝灰岩	完形	正面に凹部。裏面は平坦・摩耗。
57-14	台石・石皿類	A13	SD28最下層	12.3	11.3	4.6	931	凝灰岩	完形	正面に凹部。裏面は平坦・摩耗。
58-1	台石・石皿類	A14	SD26	16.7	13.1	6.3	1855	安山岩	完形	正面に凹部。裏面は平坦・摩耗。
58-2	台石・石皿類	A28	IV上層	17.9	13.7	8.7	2910	安山岩	残欠	正面と側辺に磨痕。
58-3	砥石	A9	SK30下層	7.5	6.4	4.7	274	砂岩	残欠	平砥石。被熱黒化。
58-4	砥石	A19	III層	7.7	8.6	1.0	82.2	閃緑岩	残欠	筋砥石。
58-5	砥石	A13	SD28上層	4.8	4.8	1.4	30.7	砂岩	残欠	筋砥石。
58-6	玉鋸	A15	SK17下層	6.7	2.3	0.5	11.5	片岩	片端欠	背部摩耗。
58-7	玉鋸	A18	III層	6.3	1.9	0.5	8.3	片岩	背部・片端欠	正面中央部を研磨。
58-8	玉鋸	A10	IV層	3.2	2.3	0.4	5.3	片岩	背部・両端欠	
58-9	玉鋸	A11	IV層	3.5	1.8	0.2	2.4	片岩	背部・両端欠	
58-10	玉鋸	A8	III層トレンチ	2.5	2.1	0.4	3.9	片岩	背部・片端欠	
58-11	玉鋸	A20	IV層	2.0	1.8	0.4	2.9	片岩	背部・両端欠	
58-12	勾玉	A25		1.12	0.72	0.29	0.329	蛇紋岩	完形	平形。片側穿孔。
58-13	ヒスイ片	A9	SK32	2.3	2.0	1.6	12.399	ヒスイ	完形	原石か。
59-1	管玉製作工程品	A8	SD30上層	5.1	4.4	3.3	41.336	緑色凝灰岩	完形	2と接合。
59-2	管玉製作工程品	A8	SD30上層	5.5	4.0	2.6	41.401	緑色凝灰岩	完形	1と接合。
59-3	管玉製作工程品	A12	SP36	4.9	3.9	1.7	35.880	緑色凝灰岩	完形	亜円礫素材。施溝痕あり。
59-4	管玉製作工程品	A11	SP49	4.8	4.3	3.6	84.159	緑色凝灰岩	完形	角礫素材。施溝痕あり。
60-1	管玉製作工程品	A12	SP36	2.9	2.4	1.7	16.561	緑色凝灰岩	完形	施溝痕あり。
60-2	管玉製作工程品	A10	SK27	2.1	2.2	1.6	8.767	緑色凝灰岩	完形	施溝痕あり。
60-3	管玉製作工程品	A8	IV層	2.1	2.1	1.0	3.845	緑色凝灰岩	完形	施溝痕・研磨痕あり。
60-4	管玉製作工程品	A19	IV層	2.9	2.1	1.3	7.915	緑色凝灰岩	完形	研磨痕あり。
60-5	管玉製作工程品	A8	SD30下層	3.1	2.7	1.8	16.182	緑色凝灰岩	完形	施溝痕あり。
60-6	管玉製作工程品	A22	SK41	3.0	2.3	1.2	6.708	緑色凝灰岩	完形	施溝痕あり。
60-7	管玉製作工程品	A13	トレンチ	1.9	1.6	0.8	1.840	緑色凝灰岩	完形	施溝痕あり。
60-8	管玉製作工程品	A14	SD24	2.8	2.2	1.8	8.137	緑色凝灰岩	完形	施溝痕あり。
60-9	管玉製作工程品	A18	III層	2.9	2.2	1.8	8.340	緑色凝灰岩	完形	
60-10	管玉製作工程品	A8	SD30下層	4.2	2.7	0.8	11.692	緑色凝灰岩	完形	
60-11	管玉製作工程品	A26	IV層	3.2	2.1	1.7	7.621	緑色凝灰岩	完形	
60-12	管玉製作工程品	A12	トレンチ	2.3	1.5	1.1	5.468	緑色凝灰岩	完形	施溝痕あり。
60-13	管玉製作工程品	A27	SD48	1.6	1.2	1.0	1.986	緑色凝灰岩	完形	
60-14	管玉製作工程品	A23	SD33	1.6	0.7	1.1	0.770	緑色凝灰岩	完形	施溝痕あり。
60-15	管玉製作工程品	A11	SK23	1.6	0.7	0.6	0.771	緑色凝灰岩	完形	施溝痕・研磨痕あり。
60-16	管玉製作工程品	A9	SK32	0.58	0.22	0.22	0.055	緑色凝灰岩	完形	研磨工程。多角柱状。

第6章 まとめ

第1節 各調査区のまとめ

1区では4基の方形周溝墓を確認した。県内において当地と同様に、平地における弥生時代中期の方形周溝墓を確認した例は、近接して位置する福井市中角遺跡や同別所遺跡^{べつしょ}、越前市瓜生助道遺跡^{うりゅうすけどう}などがあり、類例は増えつつある。これまでの九頭竜川北側における調査では面的な調査が少なく、当遺跡のようにトレンチ状の調査が多かったため、方形周溝墓を1基または一部を確認したのみの例もある。今回の調査も限られた範囲であったが、方形周溝墓に埋葬施設が伴う例、および方形周溝墓と土坑墓が混在している状況を確認し、弥生時代中期の短期間に形成された墓域と言える。方形周溝墓の展開の在り方については、不明な点が多いが、ST3とST4は規模を違えつつも軸を同じくし、計画的な築造・配置を示唆しよう。また、これまで確認された平地における弥生時代の方形周溝墓の在り方には、墓域と居住域が分かれて位置することが知られている。墓域と集落域を確認し得た例を見ると、瓜生助道遺跡や越前市(旧今立町)^{いまだて よこまくら}横枕遺跡では、自然流路が居住域との境界として存在しており、小浜市府中石田遺跡^{ふちゅういしだ}では溝がその役割を果たしているようである。今回の調査では、SD30がその可能性を有するが、これより以北は遺構密度が低くなることもあり、居住域とを分かつかは不明である。また、埋葬施設は通常は盛土と共に削平される例が多いのだが、ST4において確認した2基からは直行する位置関係を把握できた。当遺跡の1区における弥生時代中期の墓域は南北の遺構分布から、東西方向に展開すると推定し、玉作り関係遺物をはじめとする出土遺物からは、近接して居住域が存在することを示そう。

また、土坑墓として平面・断面形状、覆土中の炭化物層などにその可能性を考えたが、SK5・23・30などは長軸方向が共通する例である。その他、大・小の壺を破砕し面的に配置したSK38は、周溝墓より時期は降ると考えるがSD30に近接する位置も踏まえ、集落縁辺での儀礼的な状況を窺える^㉒。

また、弥生時代中期以降の遺構・遺物については、中期末から後期前半の空白期があり、後期後半から終末期にかけては主に南側に分布する傾向があるものの、明確にはし得なかった。

2区は、掘立柱建物、柱穴列、竪穴建物を確認し、出土土器から古墳時代初頭の居住域と判断できる。立会地調査区を含む北側には弥生時代中期から終末の遺構・遺物が混在するが、南側にかけて次第に様相が変化している。当該期の集落は遺構・遺物の分布範囲から、前時代同様に東西方向に広がると判断する。出土土器には東海地方の要素が加わり、在地の要素と共存する様子を確認できた。甕では、「く」の字口縁という大きなまとまりの中でも、多様な口縁部形態が存在する時期である。また、器台については在地に由来する古い要素が残るようである。2区において主体となる古墳時代初頭の土器は、石川県における編年の白江式に、福井県における長泉寺Ⅰ～Ⅱ期に相当する。

3区は、遺構では並行する溝が主体であった。遺物自体も少なく、畿内系の高坏が出土したのみであり、2区で出土していた東海系の要素もなく、遺構・遺物ともに古墳時代前期後葉のみと言え、当該時期の集落域に該当すると考える。高坏の脚部の形態から石川県における編年の高島2式に相当する。

4区は、古墳時代前期が主体となり、その西半部は3区と同様に遺構密度も散漫且つ遺物も少ないが、古墳時代の甕1個体分が出土したSK75があり、また底面が平坦なSD66は遺物も少なく、これは管理・運営が為されていたためと考える。東側においても建物などの存在は確認し得ず、土地利用については明確にはできないが、古墳時代前期には南西方向に位置する中角遺跡の範囲に隣接し、中角の地に首長墓

を築いた勢力の範囲に含まれていたのではないかと推定する。1区・2区では当該期の遺物は出土していないことから、3区・4区の辺りが集落の北端域と考える。また、4区では、縄文時代晩期の土器、およびその時期の可能性のある遺構が中央付近の川跡を中心に存在し、近辺での集落の存在を示唆する。続く弥生時代は中期と考える遺構・遺物が少量だが存在するものの、その後、4区においては古墳時代前期まで空白期となる。

第2節 弥生時代中期の土器について

今回の調査で、1・2区からは一定量の土器が出土した。特に弥生時代中期の墓域である1区からは当該時期の土器が多く出土しており、簡単にその概要について述べる。

越前地域における弥生時代中期の土器は、西日本からの影響を受けた櫛描文系土器、縄文時代以来の影響を引き継ぐ条痕文系土器、条痕文系土器と分布を同じくする沈線文系土器の影響を受けたものである。まず甕についてみると、そのほとんどを櫛描文系のものが占めており、条痕文系甕の割合は極めて少ない。櫛描文系の甕の文様には頸部から体部上半に直線文のみを施すもの(120・198など)、直線文と波状文を施すもの(199・203など)、直線文と羽状文を施すもの(200)があるが、甕全体では外面に文様を施すものは少なく、主体となるのはいわゆる「ハケ甕」といわれる無文のものである。また、口縁内面の文様の有無について見ると、波状文(196～199など)や羽状文(200)があるが、これも内面無文のものが主体となる。これは敦賀市吉河遺跡における口縁の内面に波状文を施す、および口縁部形状が山形を呈する甕が卓越する遺跡と様相を異にする。内面の波状文は近江地方の影響が指摘されており、当遺跡との地理的な位置関係が影響しているといえようが、当地における甕への近江地方の影響には、肩部から体部上半の直線文主体の施文があり、内面の波状文と併せ、少ないながらも近江地方の影響を確認でき、時期が下り195・197におけるハケ工具による横方向の調整に推移したと考える。なお、後述する条痕文系の甕(129)にも近江地方の影響と考える横方向の調整が施されている。また、甕の口縁端部には刻み目を有するものが多く、横ナデ調整のみ、または2個1組の押圧を施すものは極めて少ない。特に新相を示すと考えるものには口縁が「く」の字状を呈す206があり、近畿地方以西の影響と考える。

条痕文系および沈線文系の甕は絶対量が少なく、器形を窺えるものは限られる。条痕文系は鉢器形と推定するものが多く、横～斜め方向に原体不明の条痕、またはハケ条痕が施される。129は櫛描文系の器形・文様を取り入れたもの、165は条痕文系の器形にハケ調整を施したもので、櫛描文系と条痕文系が相互に影響を与え合う様子を示すものと言える。当該期は次第に条痕文系の要素が櫛描文系に変換していく時期であり、甕においては条痕文系の出土量の少なさに表れている。また、沈線文系については104の体部の瘤状突起にその影響の可能性があるのである。

壺には、甕と違い櫛描文系の他、一定量の条痕文系、沈線文系のものがある。櫛描文系の壺は広口壺を主体とし、頸部や口縁内面を直線文・波状文などで加飾するものと、口縁端部の刻み目の有無はあるものの、体部が無文のものがある。加飾される壺で外来の要素を見出すと、頸部に直線文を複数帯施す文様構成は伊勢湾岸地域で多く確認できる(118・169など)。177のような極端な太頸を呈するものには、直線文施文後に縦方向の直線文を重ねて施文する、貝田町式の細頸壺の文様構成が採用されている。また、文様の最下段に扇形文を配置するのは北陸地方に通有の文様構成であり、頸部から体部上半の過剰な羽状刺突は祖型に横方向の羽状条痕を、太い頸部から口縁が広がる器形は沈線文系の影響を推定すると、外来の各要素を吸収し在地化した壺といえる。また、口縁端部に刻み目や沈線を有する、または横ナデ

だけの無文の壺には広口壺(172など)以外に短頸壺(73)があり、口縁を横ナデする68から新しい要素である「く」の字を呈す73への推移が窺われる。なお、櫛描文系の壺における外来の要素としては貝田町式の細頸壺の影響があり、搬入の可能性がある184の他、在地化する中で条痕文系の縦方向の垂線を有すもの(52)、瘤状突起を有すもの(183)、文様構成を取り入れたもの(100)、器形のみ取り入れたもの(189)などがある。貝田町式の細頸壺は近接する中角遺跡に出土例があるが、九頭竜川以北の越前で確認例は少ない。その他、東海地方の条痕文系に祖型を求めることができる158は、頸部にハケ工具による調整と櫛描直線文が施文され、受部の屈曲が弱く緩やかな179・181へ推移すると考える。

条痕文系の壺は、口縁部が受口状を呈するもの(10・178など)を主体とする。受口状口縁の口縁部形態には口縁部が直立に近いもの(11・12)があり、11は羽状に櫛条痕を施すが、12はハケ工具を使用している。内傾・内湾するもの(10・86など)や強く内側に屈曲するもの(180)は櫛条痕を施し、口縁下端には指押圧を加え、波状文(10)や直線文(119)の他、連弧状文などに櫛描文手法を採用している。櫛描文系の158と祖形は共通となろう。条痕文系の体部片には直線文と波状文(山形文)を組み合わせた櫛描文系の文様構成を持つもの(128)、櫛状条痕で「し」状の跳ね上げ文を肩部に施すもの(20・27・28など)、体部は櫛工具による縦の羽状文と推定できるものがあり、大型となるこれらの口縁部は確認できていないが受口状を呈すると考える。

沈線文系の壺には、大型で下膨れ状を呈するもの(105)、球胴を呈するもの(188)の他には器形を把握することが困難な破片があるのみだが、4区から内面に瘤状突起を有する口縁部(322)が出土している。322の様な口縁部は福井市糞置遺跡においても確認できるが、322には沈線文系に通有な文様が施されていない。他の破片は沈線文系に独特の文様要素・構成により判別することが可能で、文様の要素として当遺跡に多いのは、連弧文の組合せ、および弧線を上下反転させて形成するレンズ状文や刻み目を有する楕円形状の浮文である。また、その文様要素は条痕文系の壺に忠実に、または変容して口縁外面や体部の文様として取り入れられており、119のような受口状口縁の壺にある上下に反転させた連弧文は吉河遺跡でも確認でき、178のように時期が下り文様が弛緩したものは中角遺跡をはじめ越前地域において多く出土する。この文様が変化したものには、体部片に弧線と直線文を組み合わせたもの(35・67)、短線で弧を描いたもの(19)などがある。

以上、簡単に1区の弥生時代中期の土器を概観したが、全体として、甕は櫛描文系の無文の甕が主体となり、加飾のあるものは総じて少なく、かつ条痕文系は僅かである。壺には条痕文系が一定量存在する。外来の影響として、甕は近江地方の影響があるものの、吉河遺跡とは口縁部の形態・施文の受容の仕方が異なる。一方、壺は伊勢湾岸地域の影響が強く、条痕文系には沈線文系の要素を持つものが多いと言える。甕・壺ともに外来の要素には本来の在り方から変容を経て在地化が進み、頸部の屈曲や口縁のナデ調整などに新しい要素を見るが、凹線文系土器は確認していない。これらのことから当遺跡の弥生時代中期の土器は中葉でも新相に属するものが多いと考える。周辺地域との対比では、豊富な土器量から遺跡における時間軸を設定した石川県小松市八日市地方遺跡の成果に当てはめると、7～8期を中心とする時期に相当しよう。

注

- 1 越前市瓜生助道遺跡は、日野川右岸に位置し、平成11年度の瓜生助道遺跡、14～16年度の瓜生助道A遺跡、21年度の瓜生助道B遺跡の3度に亘り計約30,000㎡以上の面積が調査され、弥生時代中期から後期の方形周溝墓28基をはじめ、堅穴・平地式住居、

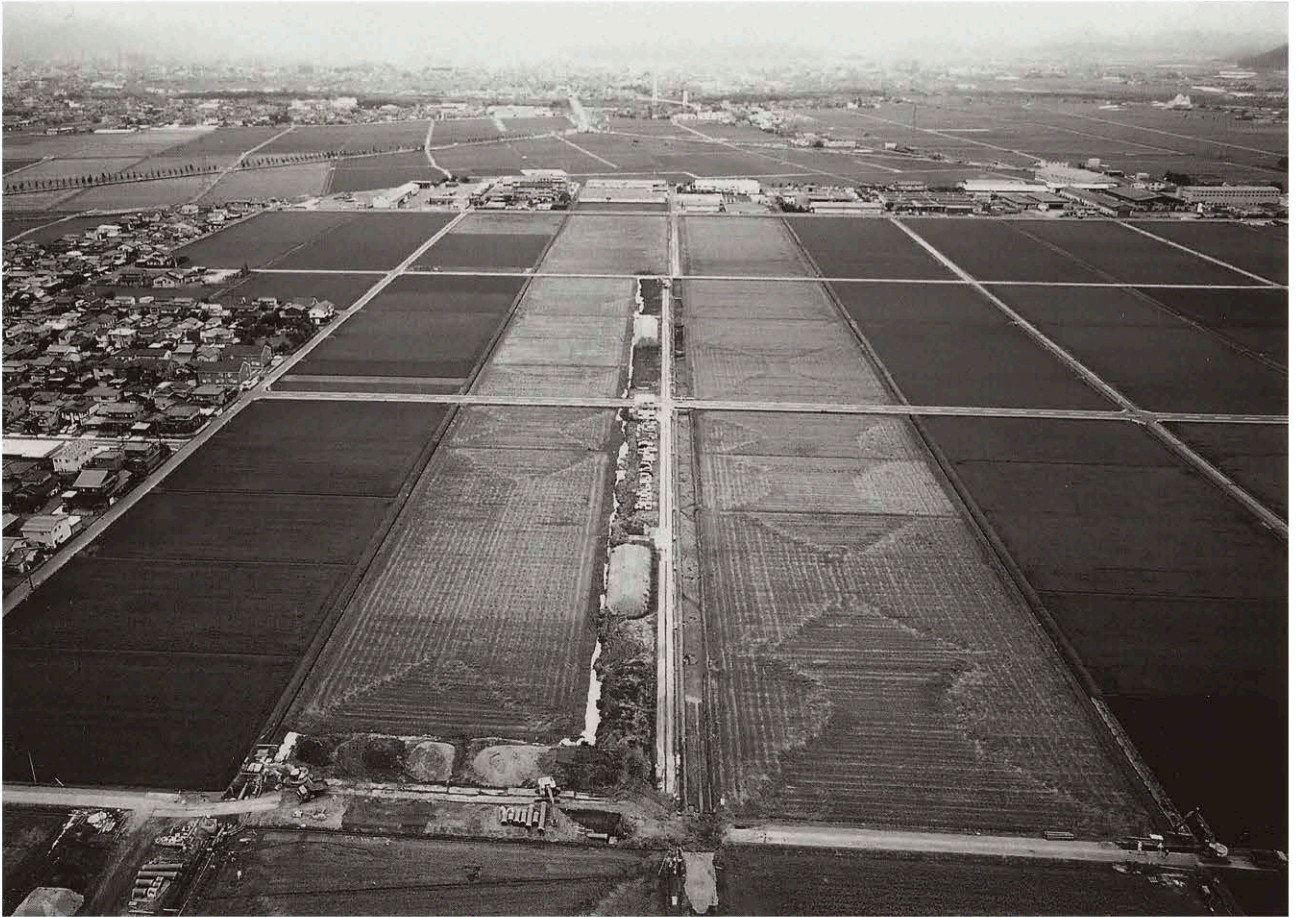
溝、自然流路などが確認された。特筆すべき遺物では、弥生時代中期の小銅鐸が出土している。

2 県内の類例には、敦賀市吉河遺跡の土坑306と土坑346において、破碎された土器が意図的に敷かれていることが報告されている。

参考文献

- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1988 『下屋敷遺跡 堀江十楽遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第14集
- 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター 1994 『朝日遺跡 V』 愛知県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第34集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1995 『長泉寺遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第29集
- 弥生土器を語る会 1996 『Y A Y !』 弥生土器を語る会20回到達記念論文集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001 『第16回 福井県発掘調査報告会資料 - 平成12年度に発掘調査された遺跡 - 』
- 加納俊介・石黒立人 編 2002 『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社
- 福井県清水町教育委員会 2002 『甕谷』 清水町埋蔵文化財発掘調査報告書VI
- 石川県小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡 I』 一小松駅東土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2004 『小松市 八日市地方遺跡』 北陸本線小松駅付近連続立体交差事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『第18回 福井県発掘調査報告会資料 - 平成14年度に発掘調査された遺跡 - 』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『第19回 福井県発掘調査報告会資料 - 平成15年度に発掘調査された遺跡 - 』
- 今立町教育委員会 2005 『盆山古墳群』 今立町埋蔵文化財報告 第5集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005 『坂井兵庫地区遺跡群 I (遺構編)』 福井県埋蔵文化財調査報告 第73集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005 『坂井兵庫地区遺跡群 II (遺物編)』 福井県埋蔵文化財調査報告 第81集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『糞置遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第90集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『今市岩畑遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第34集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『吉河遺跡』 一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書第2集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『中角遺跡 2 - I 区下層編 - 』 福井県埋蔵文化財調査報告 第105集
- 越前市教育委員会 2011 『瓜生助道B遺跡』 越前市埋蔵文化財調査報告 02
- 福井県鯖江市教育委員会 2011 『日本海側の弥生墓制』 考古学フォーラム記録集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『中角遺跡 4 - II・III区下層編 - 』 福井県埋蔵文化財調査報告 第117集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『府中石田遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第121集
- 福井市教育委員会 2011 『別所遺跡 - 一般県道徳光・福井線改良工事に伴う発掘調査報告書』

写 真 图 版



(1) 遺跡近景 (北から)



(2) 遺跡近景 (南から)



(1) 1区全景 (南から)



(2) 1区全景 (北から)



3



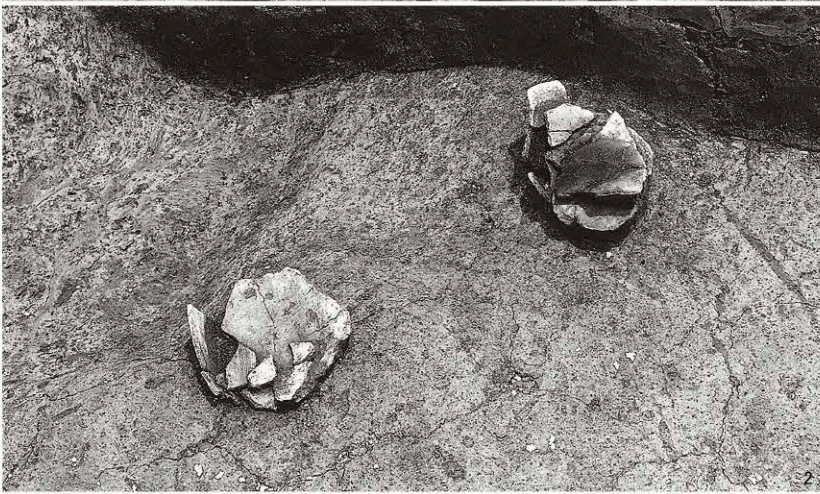
(3) ST1 (北東から)



5

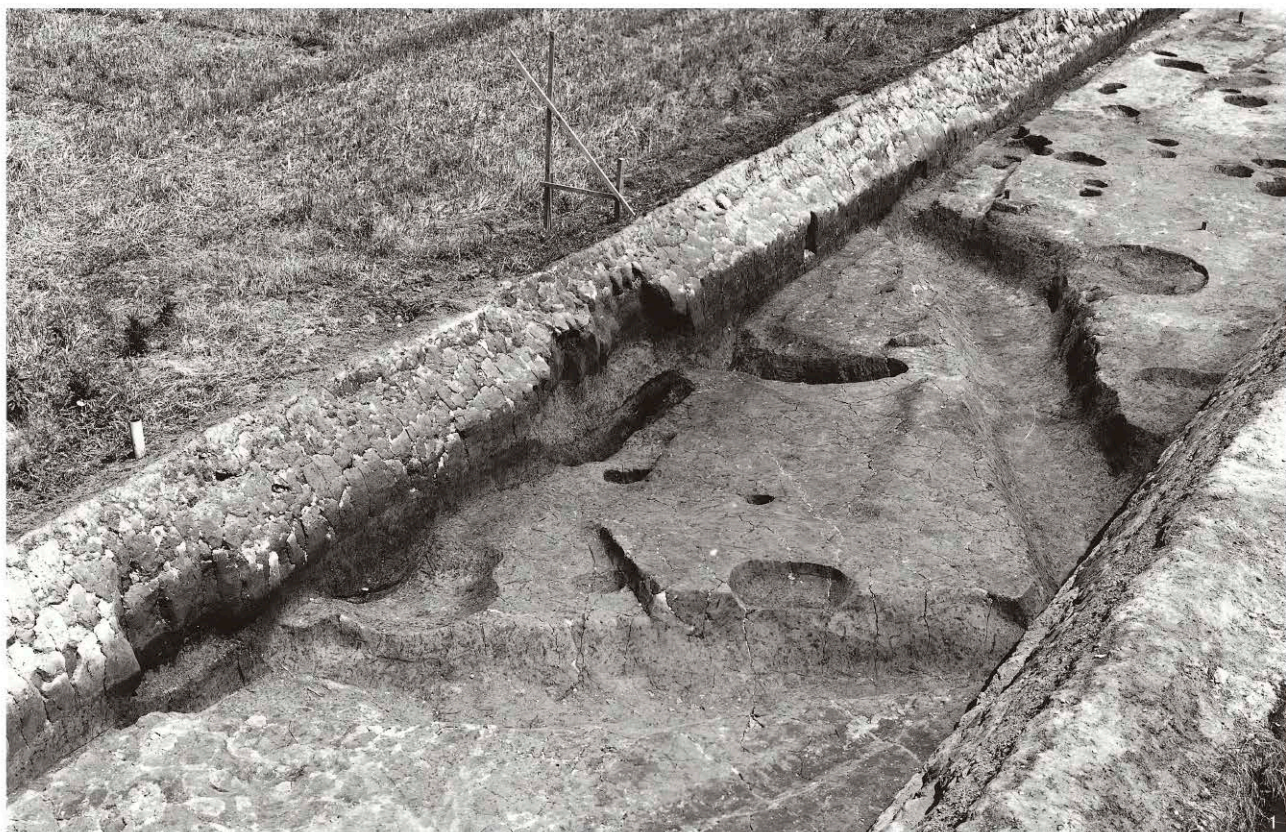
(4) SK13 土器出土状況 (北西から)

(5) SK14 (北から)



(1) ST2 (北から) (2) 土器出土状況 (西から) (3) SD22 (南から)
(4) ST3 (南東から) (5) SD23 出土土器 (東から)

図版第四
遺構



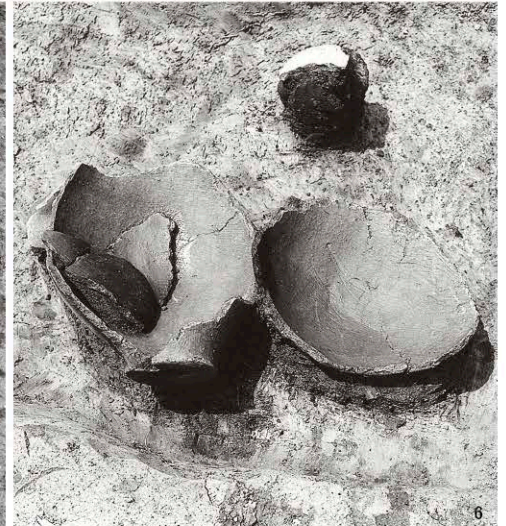
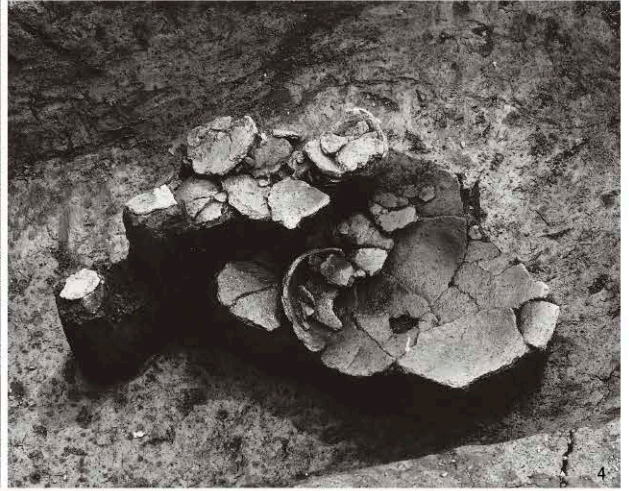
(1) ST4 (南から)

(2) SK26 (南東から)

(3) SK26 土器出土状況 (南東から)

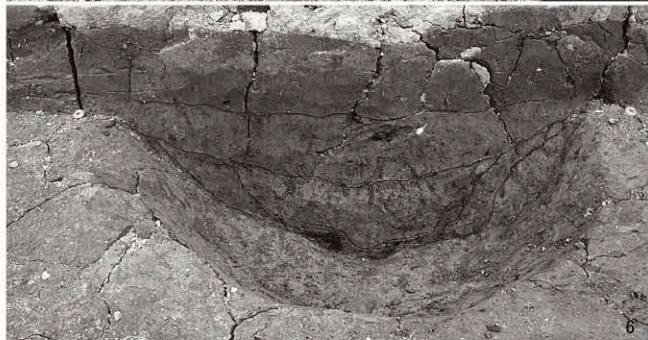
(4) SK25 (南西から)

(5) SK29 (南東から)



(1) SK1 (南から) (2) SK2 (北西から) (3) SK5 (北から)
(4) SK5 出土土器 (北西から) (5) SK8 (東から) (6) SK8 出土土器 (東から)

図版第六 遺構



(1) SK4 (北西から) (2) SK18・SD24 土器出土状況 (南西から) (3) SK11 (北西から)
(4) SK11 出土土器 (西から) (5) SK9 (東から) (6) SK20 (北西から) (7) SK23 (南から)



(1) SK30 (北から) (2) SK38 (南東から) (3) SK38 完掘状況 (南東から) (4) SK32・33 (北東から)
(5) SK32 土器出土状況 (北西から) (6) SK33 土器出土状況 (北から) (7) SK37 (南から)



(1) SD4 (東から) (2) SD26 (南から) (3) SD26 土器出土状況 (北から)
(4) SD29 (南から) (5) SD29 土器出土状況 (南から) (6) SD29 土器出土状況 (南から)



(1) SD30 (南から) (2) SD30 土器出土状況 (東から) (3) SD30 出土土器 (南西から)
(4) SD30 出土土器 (南西から) (5) SD30 出土土器 (南西から) (6) SP60 (東から)



(1) 2区全景 (北から)



(2) SB2 (北から)



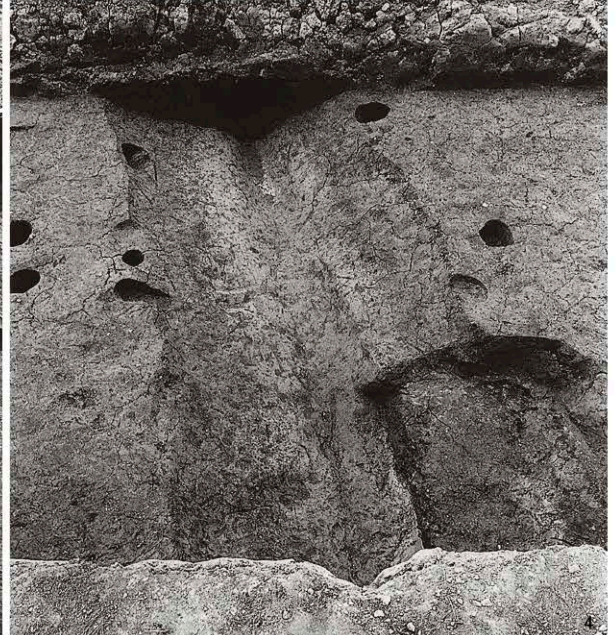
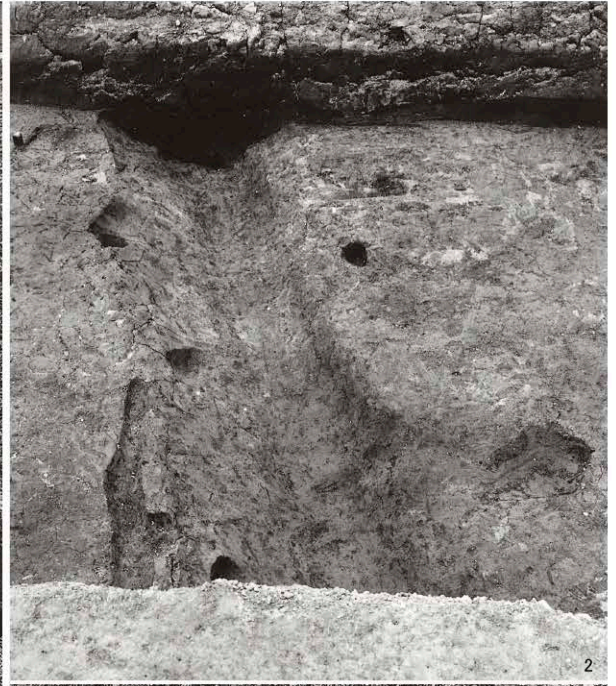
(3) SII (北から)



(1) SB1 (北から) (2) SK41・42 (南東から) (3) SK46 (東から)
(4) SK44 (東から) (5) SK47 (東から)



(1) SK48 (東から) (2) SK55 (西から) (3) SD45 (北から) (4) SD45 出土土器 (北西から)
(5) SD45 出土土器 (北西から) (6) SD45 出土土器 (北西から) (7) SD48 (東から)

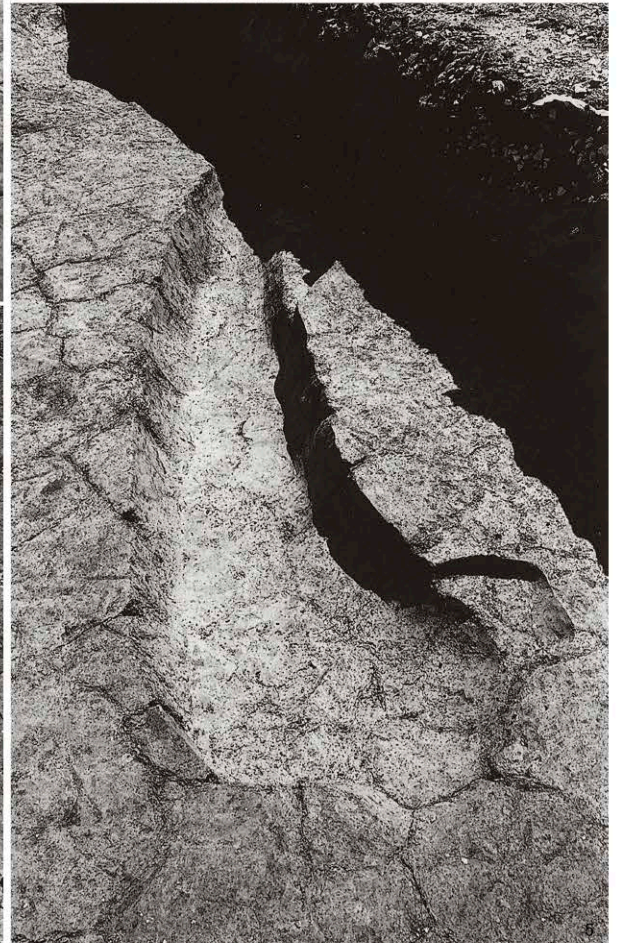


(1) 3区全景 (北東から) (2) SD57 (東から) (3) SD62・63 (東から)
(4) SD60 (東から) (5) SD58・59 (東から) (6) SD64 (東から)

図版第一四 遺構



(1) 4区全景 (東から) (2) SD66 (北から) (3) SK75 (北から)
(4) SK75 出土土器 (東から) (5) SK83 (南東から)



(1) SK78 (東から) (2) SK79・SP114 (東から) (3) SK84 (南から)
(4) SK76 (東から) (5) SD72 (北西から)

図版第一六 遺構



(1) SK87・88 (南から) (2) SD109・110・111 (北から) (3) SP115 (南東から)
(4) SK91・92 (西から) (5) SK94 (東から) (6) 川跡 (北東から)

図版第一七 遺物 土器



2



9



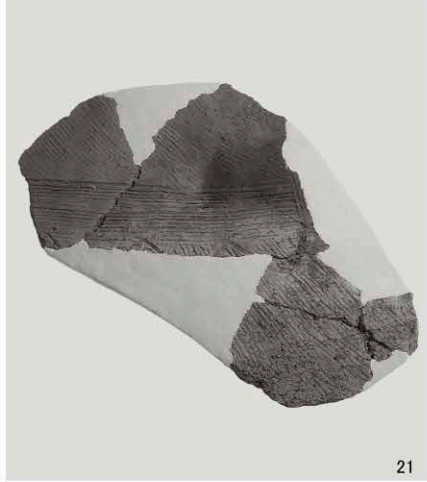
10



3



20



21



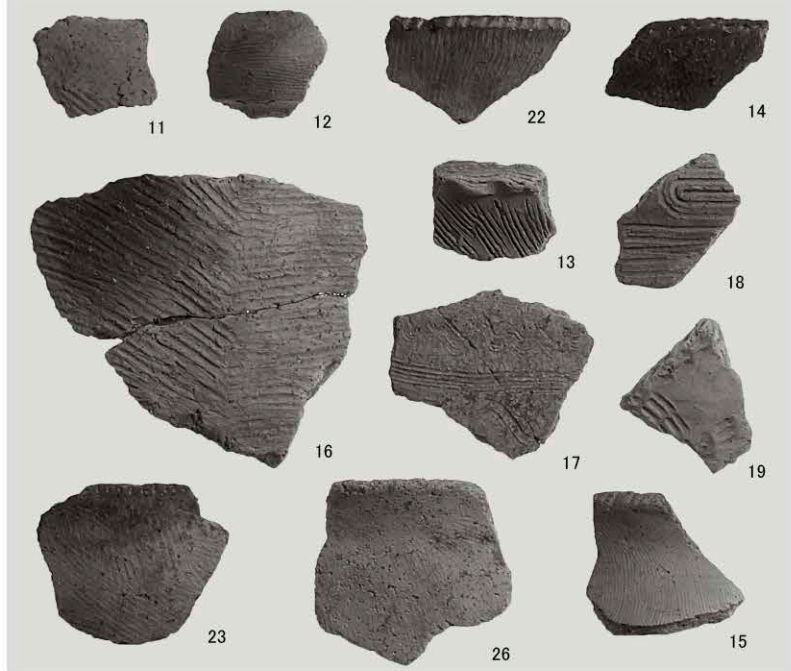
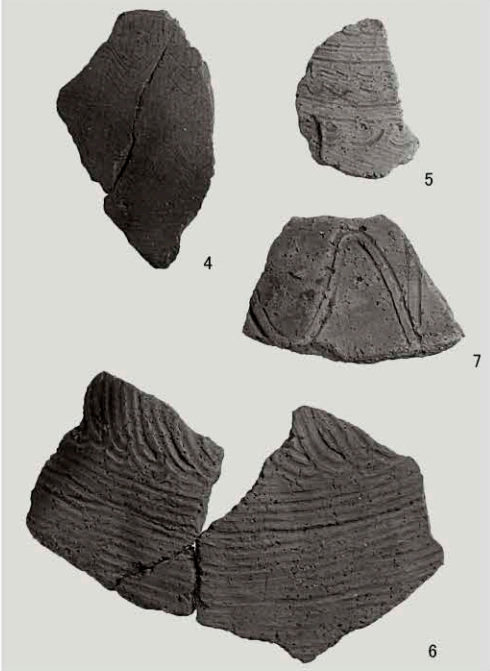
28



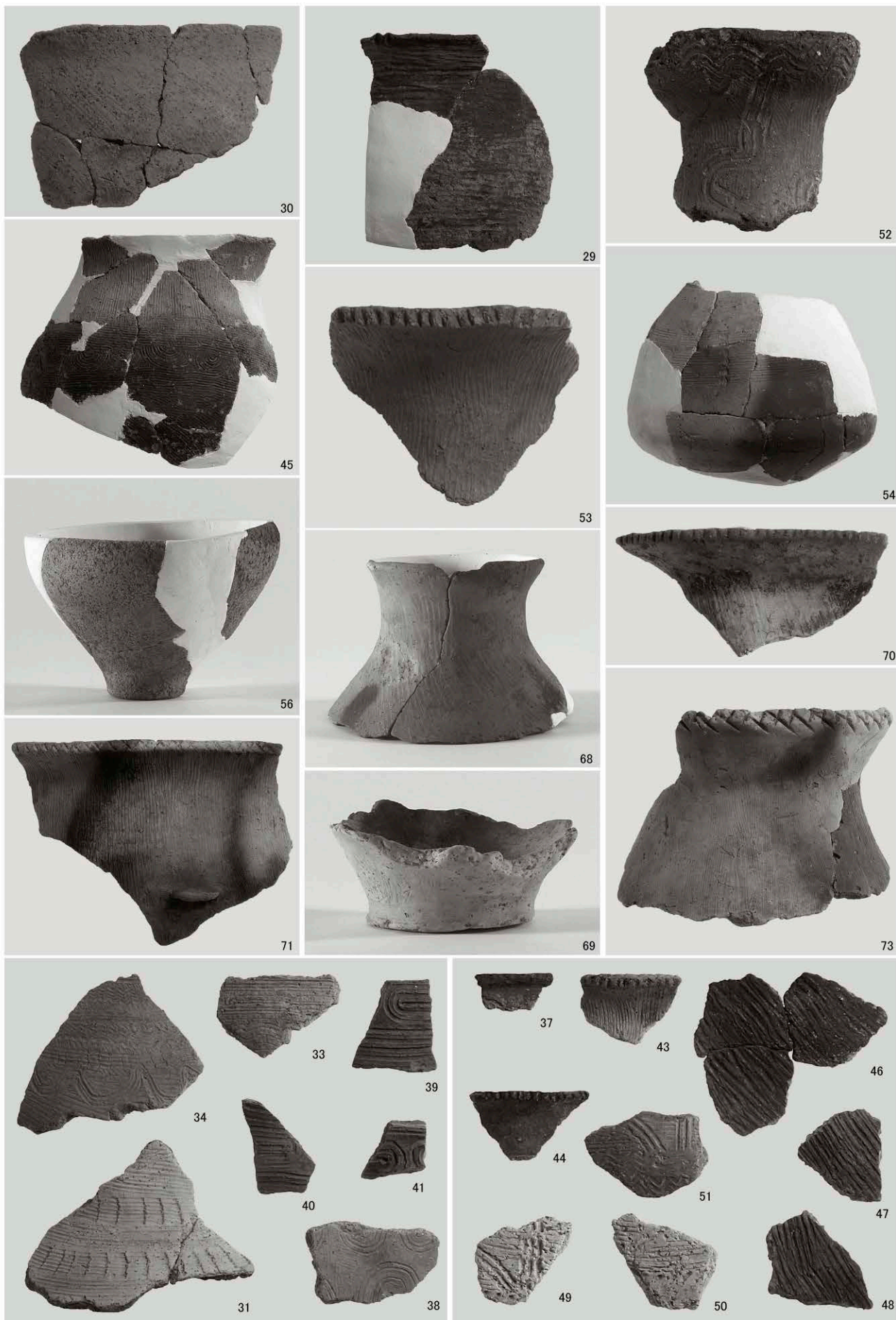
27



35



図版第一八 遺物 土器





74



78



79



76



78 底面



79 底面



72



86



95



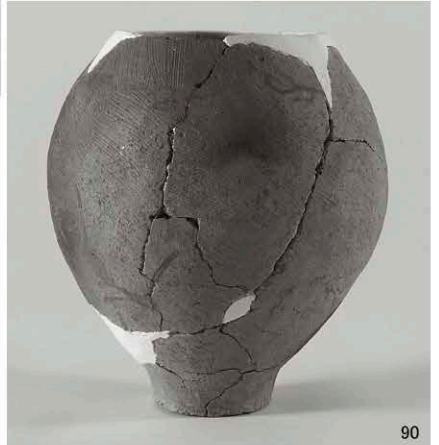
87



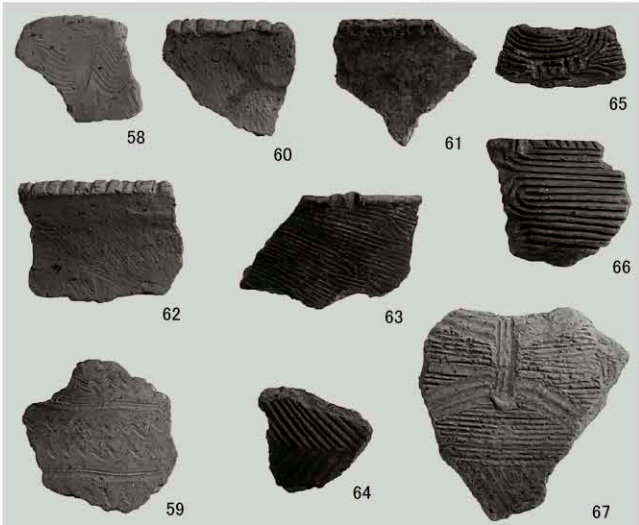
86 下面



100



90



58

60

61

65



62



63



66



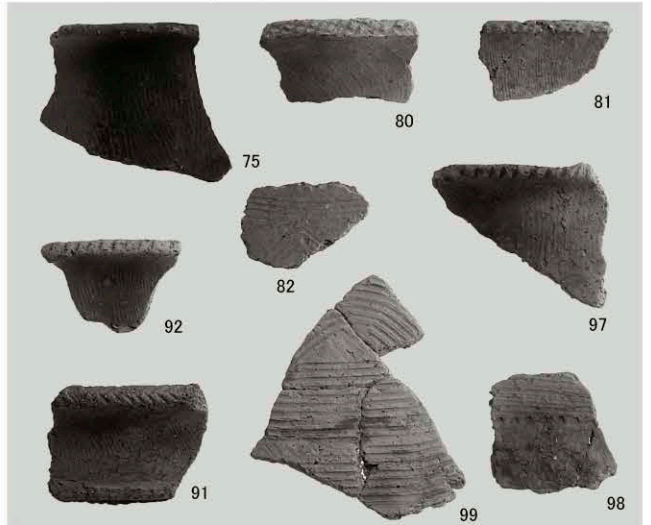
59



64



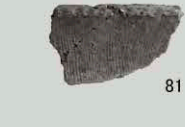
67



75



80



81



92



82



97



91

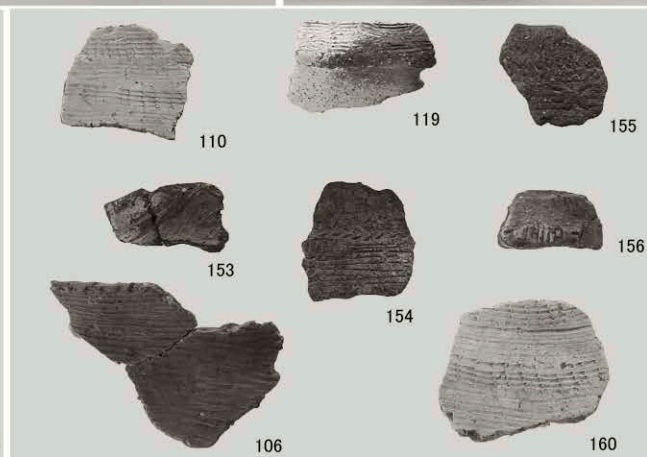


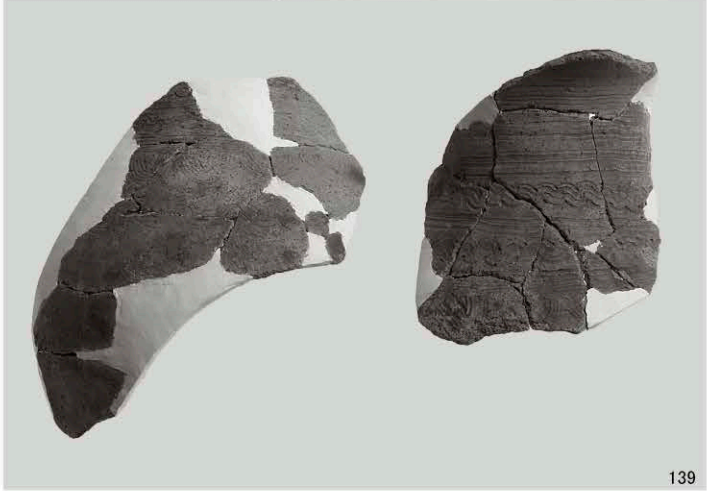
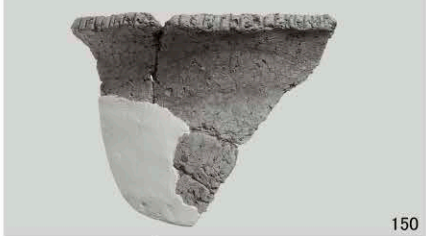
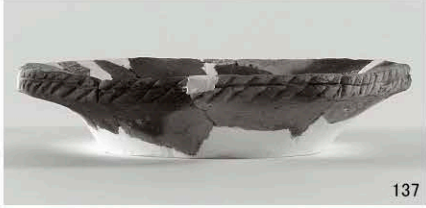
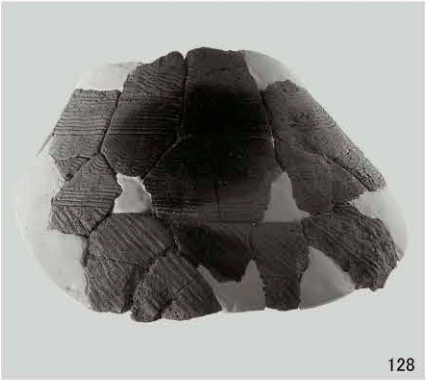
99



98

図版第二〇 遺物 土器



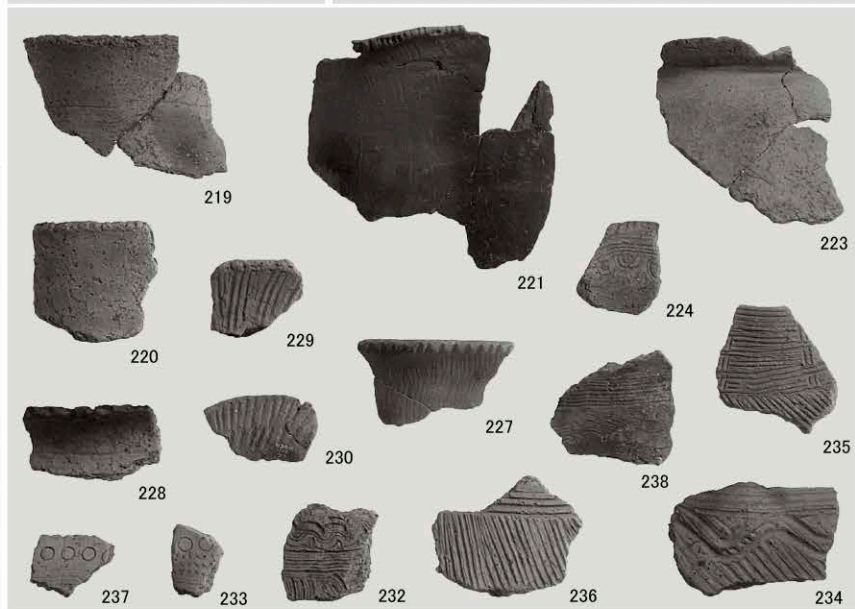


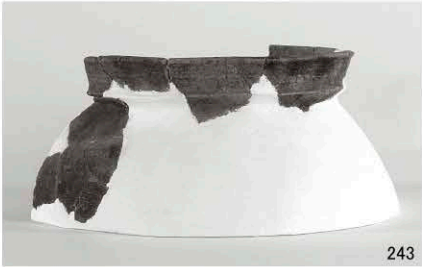
図版第三二 遺物 土器





図版第二四 遺物 土器

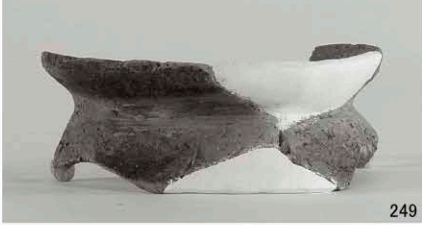




243



247



249



252



251



259



253



257



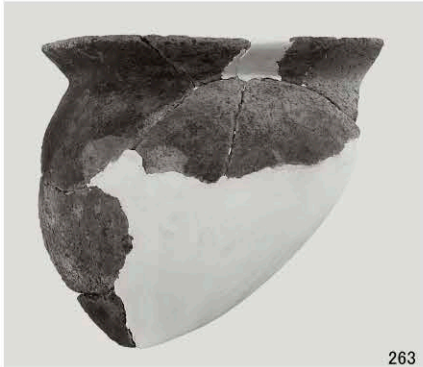
261



262



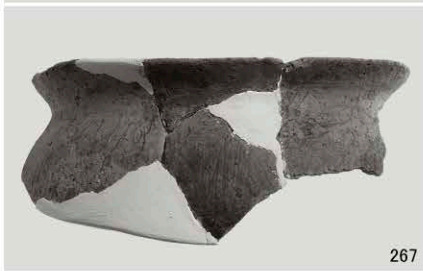
264



263



265



267



268

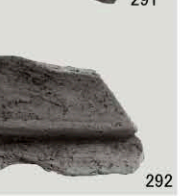
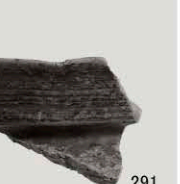
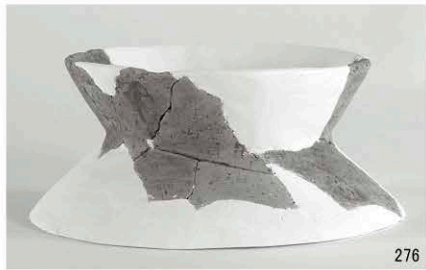


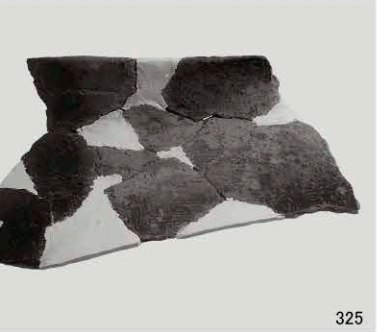
269



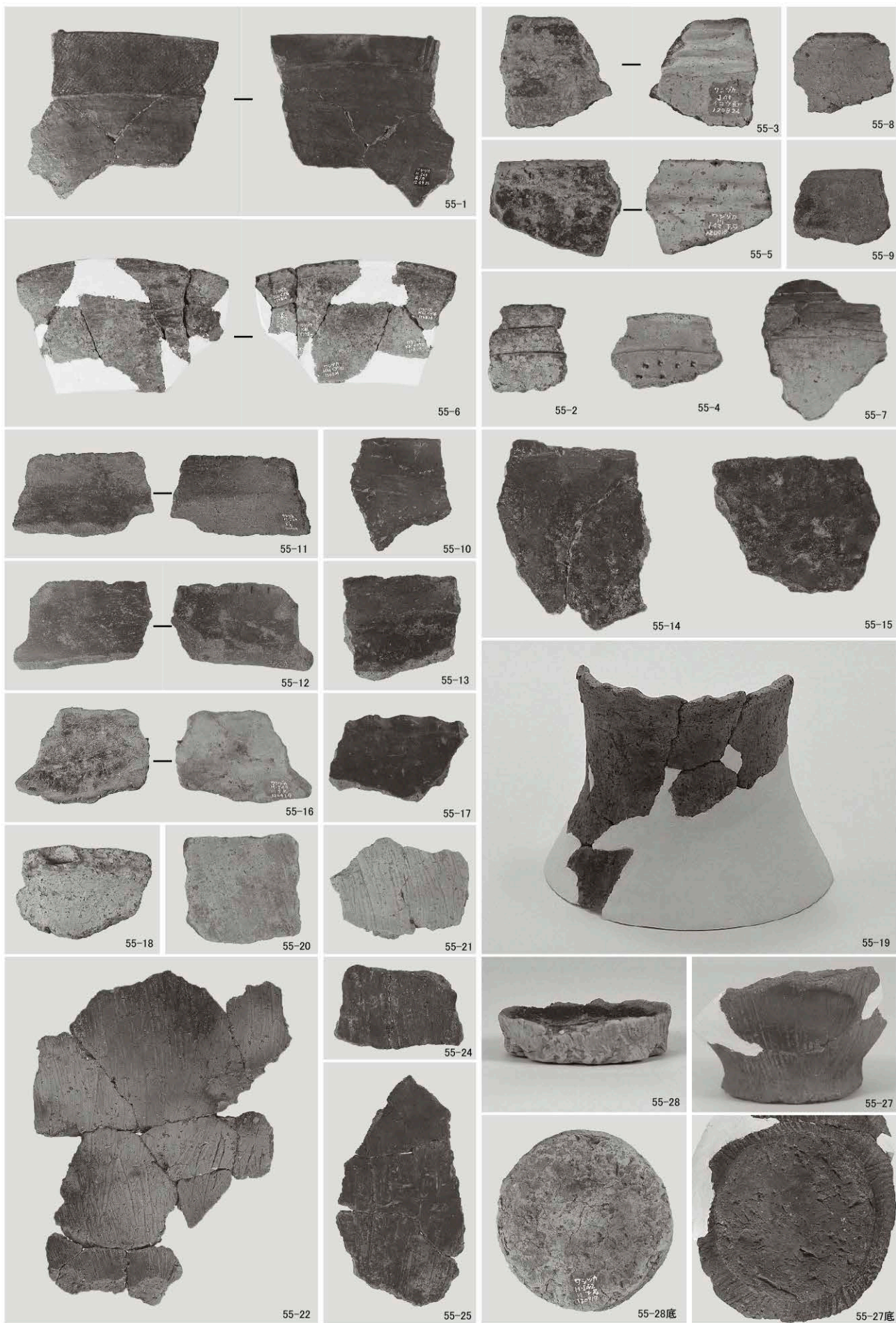
271

図版第二六 遺物 土器

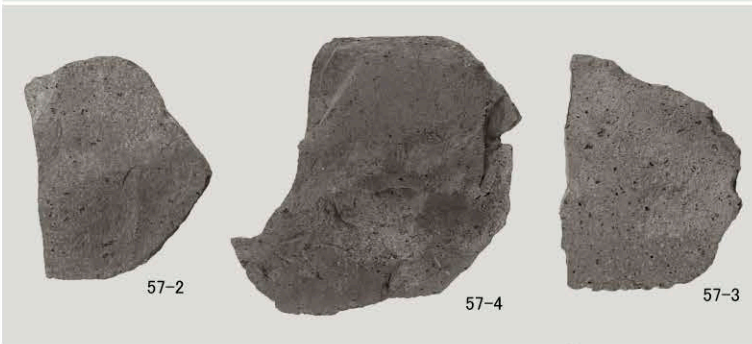
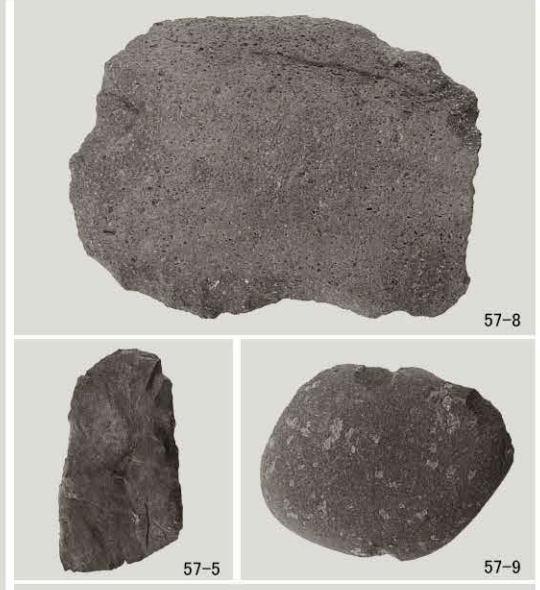
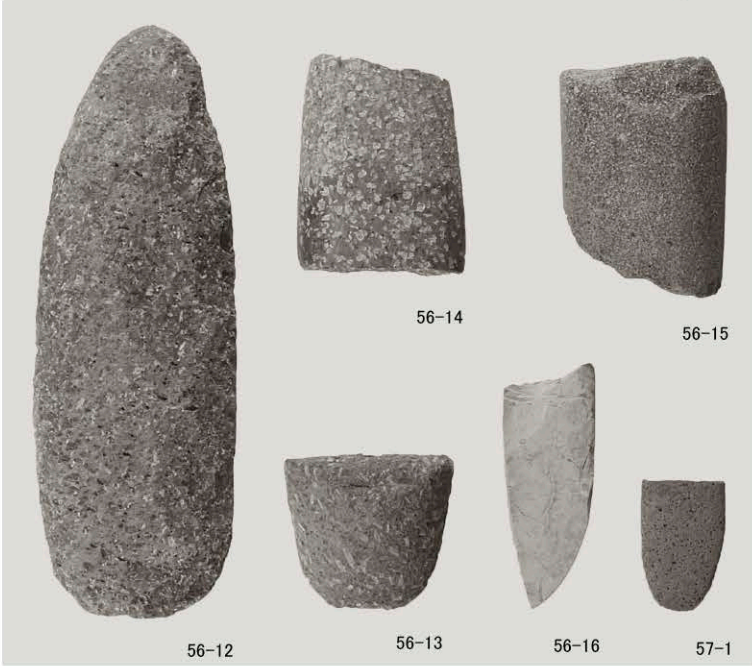
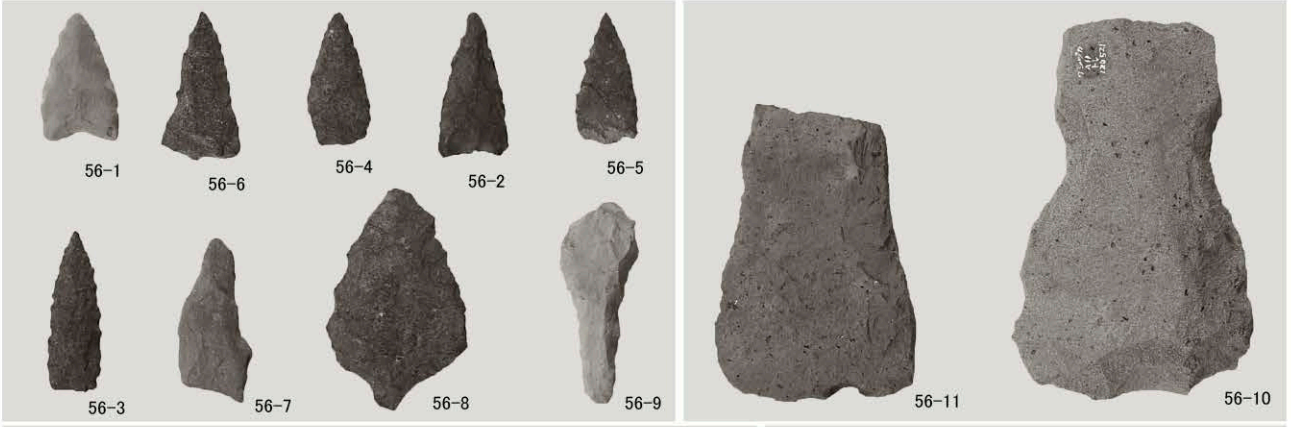




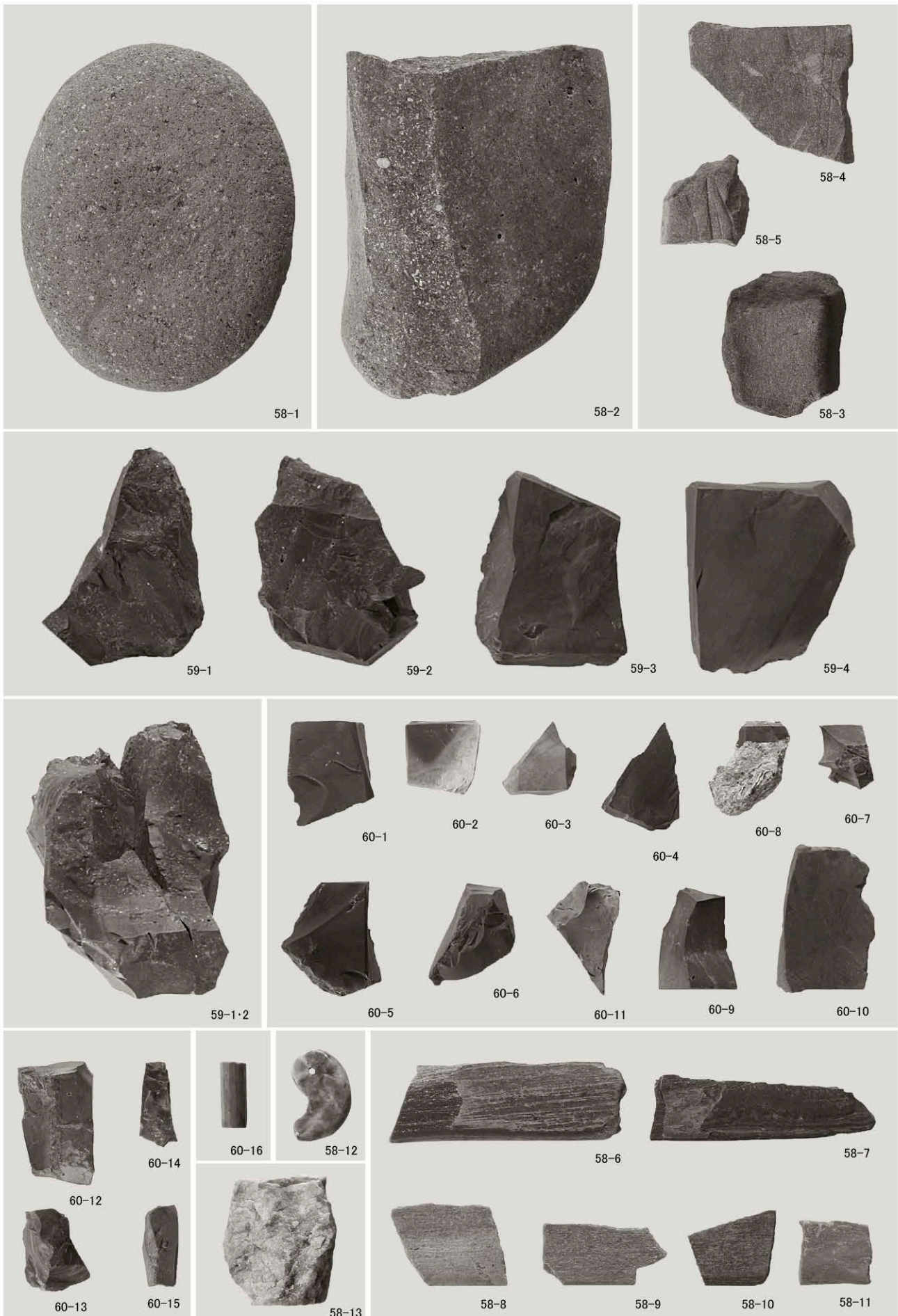
図版第二八 遺物 縄文土器



図版第二九 遺物 石器



図版第三〇 遺物 石器・玉製作関連遺物



報 告 書 抄 録

ふりがな	わしづかいせき							
書名	鷺塚遺跡							
副書名	県営かんがい排水事業河合春近用水東地区に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第160集							
編著者名	野路昌嗣 山本孝一 田中祐二							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2016年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わしづかいせき 鷺塚遺跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 かわいわしづかちよ 川合鷺塚町	18201	10750	36°	136°	20110515	2,690	記録保存 調査
				07′	12′	～		
				12″	43″	20110928		
				～	～			
				36°	136°			
				06′	12′			
				59″	48″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鷺塚遺跡	集落	縄文 弥生 古墳	河川跡 方形周溝墓 土坑墓・土坑・溝 竪穴建物・掘立柱 建物・柱穴列・ 土坑・溝	縄文土器 弥生土器・石器・ 玉作り関連遺物 土師器		弥生時代中期の方形 周溝墓と土坑墓の混 在する墓域と、分布 域を異にする古墳時 代初頭および前期の 集落跡を確認した。		
要 約	<p>鷺塚遺跡は、九頭竜川以北の福井平野に位置し、福井市の北端にあたる。幅の狭い調査区のため限定的であるが、1区は弥生時代中期の墓域であり、方形周溝墓4基の内1基からは直行して配置された埋葬施設2基を確認した。遺物は、溝・土坑から櫛描文系が主体となる土器が比較的多く出土し、条痕文系土器との混在～転換する過程に当たると考える。2区は古墳時代初頭を中心とし、竪穴・掘立柱建物各1棟と建物を構成する柱穴列を確認した。3区・4区は古墳時代前期を中心とする集落だが、建物は確認できず遺構密度も低いため、集落の縁辺と考える。4区の川跡およびその近辺からは、縄文土器が出土し、当該時期の集落の存在も推定できる。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第160集

鷺塚遺跡

— 県営かんがい排水事業河合春近用水東地区に伴う調査 —

平成28年3月16日 印刷

平成28年3月22日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 (株)ワタナベ印刷
〒919-0464 坂井市春江町江留上錦65
